

[もくじ]

はじめに…2	9・協議の日…233
1・正夢の日…3	10・誓約の日…263
2・復讐の日…31	11・包囲の日…293
3・糾弾の日…59	12・潜入の日…323
4・暴挙の日…89	13・奪還の日…351
5・酔狂の日…117	14・忘却の日…397
6・暴露の日…145	エピローグ・再出発の日…427
7・告白の日…175	『ミコロボ』シリーズ一覧…433
8・業火の日…203	

★無断転載・無断掲載・複製・複写・転用・アップロード・フリマ出店はお断りします。

★《共闘》ルートではかなり控えめですが、シリーズを通して残虐行為・性的描写（年齢制限をかける程ではないですが、匂わせがあります）があります。ご注意下さい。

★この作品は、フィクションです。

☆はじめに☆

こちらは『白井未衣子とロボットの日常（ミコロボ）』の《共闘》ルートをまとめあげた本となっております。

《反転》ルートには行きませんのでご注意ください。

今回は『あとがき』を入れません。ページ数が多すぎなので…。

なのでこの『はじめに』にて、ご挨拶とさせていただきます。

いよいよ、コンパクトにまとめられる時が来ました…！

《共闘》ルートも2冊で限界だろうかとヒヤヒヤしましたが、微調整してなんとかいけました…！

正直、レイアウトが多少ガタガタしているのは気がかりですが…。

まあ、また修正入れるとは思いますが…。

挨拶はここまでにして。

次のページから、《共闘》ルート、どうぞ。

この本を手にとっていただき、ありがとうございます。

1・正夢の日



それは運命だった。

家族ぐるみで遊園地に出かけた時、災害レベルの事件が発生した。

みんなが悲鳴をあげて逃げ回るなか、私は母の腕に抱えられながら、後ろを覗いた。

黒くてでかいものが、戦っている…。

その記憶は、時間がたってもずっとこびりついた。

あれから10年の月日がたった。

言葉も行動もおぼつかなかった私は、今は中学生になった。

それでも…いつも似たような夢を見る。

黒い巨大の正体はロボットで、黒髪の男の人が変身して…私達を守ってくれている。

私はずっと、夢の中の男の人を信じている。

夢の話を2人の兄達や祖父母にする。

すると祖母がやめるように言ってきた。怖い顔をして。

「いい加減にしろさい！」と。

私は何度も祖母に怒られているけど、憧れの男の人の夢を見るのがそんなにいけないの？

怒られる理由がわからないよ。

「お前さあ、婆ちゃんに何でも言うなよ…。」

「何で？」

「婆ちゃん困ってたんだからな。」

「うん…でも、他の夢なんか、見たことないし。」

「そうなんだよなあ…。」

通学途中、私が下の兄で同じ中学生の勇希兄ちゃんと話した内容だった。

勇希兄ちゃんにはいつも忠告されているけど、私は全く気にならない。

自分の見る夢で友達が出来なくなっても、やる事が勉強と読書と家事手伝いしかなくても、気にならない。

しつこいようだけど、私は夢の中の男の人を信じている。

いつの日か、私と出会うのを。

☆☆☆

天海山ユートピアとは、愛嬌市西部に存在するレジャー施設である。

だが辺りに広がるのは、雑草が生い茂った広大な更地のみ。

このレジャー施設は、今や別の場所に移転した。

移転の理由は2つある。10年前の事件と地下に存在する基地だ。

外宇宙対策本部『ラストコア』は、地上の空港の3倍以上の規模を有する基地である。

滑走路のような広大な演習場では、訓練が行われていた。

訓練内容は、奥に配置されている3機の戦闘機に搭乗し、合体を行うシミュレーションだ。

1人の男が建物内から訓練を退屈そうに眺めていた。

黒川武人は『ラストコア』の特別隊員である。

彼は一見、どこにでもいる眼鏡男子のようだが、独特の強力な戦闘力を有していることから、特別隊員として任用されている。

それが原因なのかもしれないが…彼はどうも正規の軍隊が好ましく思えなかった。

整然な陣形を取っているようにみえるが、訓練兵一人一人に意欲がみられないと武人は肌で感じ取っていた。

訓練は何度も実施するから、お馴染みの取り繕った既製品を眺めているよう

で、飽きてしまう。

（こんなもんで、地球を守る気かいな…パターン一緒や。）

武人は『ラストコア』のトップである総司令官・西条宗太郎に変えてくれと何度も依頼していた。

しかし、他国の軍隊も世界情勢の影響により、そちらを優先させられると宗太郎は言って、武人に我慢させていた。

初めは耐えていた武人だったが、それも限界に近づいてきた。

「悪いんやけど、俺に委ねてくれへんか？」

「既に決定権は君に託しているが。」

「訂正するわ。選択範囲を広めてもええか？」

「どういう事だ？」

「一般人に声をかける。」

「！？」

宗太郎は武人の発言に驚いた。

「アレックスに一般人用の試作機を開発させているんや。それに乗せる。」

「だがテストは不十分だろう。」

「最悪、実戦で投入し、不具合な点を徐々に解消していくしかあれへん。時間がないんや…。」

「衛星データか…。」

宗太郎は以前の報告会の様子を思い出していた。

報告会によると、衛星データで撮れた宇宙の情勢が深刻化しているとの事で。もうすぐ地球に被害を及ぼすようになるという事態まで可能性が広がっているらしい。

武人も宗太郎も、この侵略危機の問題を抱えていたが…協力してくれる人材がいなかった。

「だが戦力候補は大量に送り込んでいるようだが。」

「アレックスらの調査データでもわかる。軍の奴らは成績の低いのんしか送ってこうへん。見た目だけ取り繕って、肝心のやる気が感じられへん。」

「それ程にか…。」

「俺が責任持って監督する。この通りや。」

武人は頭を下げた。

★★★

「てなわけや。空の案内、よろしく頼むで。」

「何がよろしく頼むだ。開発に忙しいってのに。」

輸送機の操縦士こと、『ラストコア』の技術局長であるアレックス・ヘイリーは武人に不満をこぼした。

ブロンドヘアの眼鏡をかけた童顔だが、立派な成人男子である。

「はあ…。俺的には鍛えられた人間を使えば楽なんだがな。」

「お前のデータから見ても、年々落ちとんのはわかるで。今回は見飽きて途中で退出したわ。」

「何を考えているんだ…いや、軍には保身だけか。」

アレックスは話を聞きながら、ハンドルを軽く握っていた。

「予測はつくけど、条件はどうや？」

「男が望ましいな。女は身体上負荷をかけてしまう可能性がある。あとは…一般人だと厳しいが、鍛えられている奴だ。」

「スポーツやってるアスリート、がええんやな？」

「そうだな。他に成人している奴。子供は論外だぞ。保障問題が絡むからな。」

ふうん、と武人の返事は鈍かった。

アレックスは何も反論せず、目の前の操縦に集中する。

「のどかな街やなあ…。」

「愛嬌市南部は自然豊かな住宅街だ。

北部と比べて公園や寺院が多い。」

「北部行ったらええんちゃう？」

「北部は商業地で建物の密集地だ。被害損額は大きい。」

「政治屋もうるさいもんなあ。庶民を守る度胸もないくせに、金にはケチつけてな…。ん、どうした？」

武人は横目でアレックスを見ていた。

アレックスの両目が大きく開いた変化に気づき、様子を伺った。

「何だ…あの光。猛スピードだが…。」

「！？」

武人はだらけた姿勢を戻した。

「レーダー反応がなかったぞ…！」

「アイツ、さらに開発進めたんやな。こんなスピードを出すロボットはそうそうおらん。」

切迫した状況でも、武人は冷静に推測していた。

「好き勝手されると落とされてしまう！バリア展開とA1射出するぞ！」

「俺も待機するわ。」

☆☆☆

私達白井家では、数年前から作られたきまりがあった。

それは、『私を一人で外に歩かせない』。

数年前、私は同級生や上級生にいじめを受けていた。

私の身を守る為、家や学校以外は家族の誰かと一緒に行く事が決められていた。

「なあ未衣子（みいこ）。来月に合宿あるんだろ。大丈夫か？」

「適度にあしらう術は身に付いてるから、大丈夫かな。」

「…お前さあ。1人でもいいから友達作ろうとか、思わねえの？」

「全然ないよ。」

「クラスでも女の子いるだろ？女の子だったら何とかできるんじゃないの？」

「いいよ。どうせ煙たがられるだけだから。」

「隠すように努力してるだろ？あんまり卑屈になるなよ…。」

「私が選んだの。卑屈になってないわ。」

「お前、それで…！？」

勇希兄ちゃんは突然、話を止めた。

それも当然。

私も上空からの騒音が聞こえたのだから。

「今の、何だ？」

「ヘリコプター？飛行機？でもおかしいなあ…。エンジンの音が聞こえなくなるの。」

私は違和感を感じていた。

私が挙げた乗り物は知っての通り、上空で稼働する限りは通り過ぎるまで音が聞こえる。

しかし、今聞こえたのは、断続的に途切れた音だった。

勇希兄ちゃんと私は、上空を見た。

天気は曇り時々晴れという予報。

多く漂う白い雲の上には、シャトルと…。

「黒っぼいのは何だよ!？」

勇希兄ちゃんが吠えた。

黒っぼいのとシャトルの間に、爆発した時に見られる炎や煙が発生していた。

愛嬌市南部・吉川区にサイレンが鳴った。

☆☆☆

「本部が避難命令を出したぞ!」

「そうか、俺も降りるわ。」

武人は操縦席を降りて、後ろのドアを開いた。

「補聴器はつけているな?」

「お前の放送は逃せへんから、大丈夫や。」

アレックスは持ち物の確認をした。

補聴器は2人の通信に必要な機器だ。

格納庫に固定されているマシンは、各階によって異なるマシンだった。

白ボディの、空飛ぶ戦闘機。

だがデザインのラインの色は、水色・黄色・ピンクと異なっていた。

マシンの側に、数人のメカニックが整備に追われていた。

辺りが上空のため、各々背中にジェット噴射器を背負っている。

「黒川! 行けるのか!？」

「今出るわ! 開けるで!」

マシン用の巨大なハッチのすぐ側に、人が出入りできる分の小さな脱出口がある。

武人が開ける前、メカニックが彼に叫んだ。

引くタイプの扉は開くと、強風が格納庫に入り込む。

武人もメカニックも、歯を食いしばって張り付いた。

脱出口の縁を掴んだ武人は、外を見た。

2、3体の巨大ロボットが飛んでいる。

銃口を輸送機に向けて。

武人はニヤリと笑う。

（これくらいなら、生身で楽勝やな。）

「行くで！」

武人は手を離し、上空の外へ飛び込んだ。

☆☆☆

「勇希、未衣子！」

「和希兄ちゃん！」

「兄貴！」

多くの人々が安全な地下に避難しようとしていた時、私と勇希兄ちゃんは白井家の一番上の兄と会った。

私の上の方の兄の、和希兄ちゃん。

高校生で、自転車通学をしている。

和希兄ちゃんは自転車のハンドルを握ったまま言った。

「お婆ちゃん達は先に避難したそうだ。俺達も急ごう。」

乗るか？と自転車の後ろを見た。勇希兄ちゃんが答えた。

「未衣子だけ乗せてやってくれ！」

「勇希はいいのか？」

「俺は走って着いていくよ。」

勇希兄ちゃんの計らいで、私が自転車の後ろに乗ろうとした時だった。

黒いロボットが落ちてきた。

数は1体だけ。

公園の大木ぐらいのサイズだから、近くで見るとデカく感じる。

あのシャトルに攻撃仕掛けてきたのは、このロボットではと私は疑った。

『フン。あの男に必死で相手するなんざ、馬鹿らしいぜ。』

声が聞こえた。

黒いロボの方から、私達の耳に届いた。

このロボは喋る事ができるのだろう。

だとしたら、攻撃を中止するよう、お願いできるのではないか？

私の望みは、次のロボの発言で虚しく消えた。

『周りのもんを散々壊して、奴への土産にしようぜ！』

次の瞬間、ロボは自分の腕で木を思いっきり倒した。

既に叫び声をあげて逃げる人達の行方を閉ざす。

中には体にダメージを受けて、横たわる人も。

勇希兄ちゃんは私の名前を強く呼ぶ。

固まる私の手も握って。

☆☆☆

敵のロボットは全部で6体と、輸送機のレーダー反応にあった。

外に出た武人が、輸送機の周りの敵を全て瞬殺。

武人はジェット噴射機を使用せず、ロボの肩と輸送機を踏み台にして行き来し、手持ちの銃でロボの中心部を打ち抜いた。

武人は確実に《心臓》部分をぶち抜いていた。

高い命中率を誇る彼のおかげで、ぶち抜かれたロボは次々と爆発し、残骸は燃

えて地上に落ちていく。

残ったAⅠが残骸を回収し、地上落下の被害を最小限に努めた。

武人は輸送機の真上。

アレックスのいる操縦席を覗いた。

「よお。終わったで。」

「無茶をするな！そのまま落下したらどうするんだ！」

「むしろ変身してデカくなるより、身体はマシやろ？」

「確かに負担は大きいけど…。お前はうまくかわせるとは思ったが、万が一の場合を考えると心臓に悪いぞ。」

「アレックスは心配症やもんな。」

武人は今にも不安定な足場にいるのにも関わらず、アレックスと他愛ない会話を交わした。

「敵はまだ残ってないな？」

「輸送機の周りもういないが…！？」

アレックスの表情が一変した。

「どうした？」

「くそ…逃げたな、1匹。」

「何！？」

輸送機のレーダー反応によると、敵のロボは全部で6体発見されている。

武人が倒したロボの数は全部で5体だった。

アレックスの推測では…残り1体は逃亡、という状況になる。

上空周りを見渡す武人だが、ロボらしき影は何一つなかった。ならば…。

「下に降りたな。」

「そんな…被害状況を…」

「俺が降りる。耳は付けてるから指示あるんやったら怒鳴ってくれ。」

「ま、待て！先に場所を…」

アレックスが言い切る前に、武人は輸送機から降りて…地上へ落下した。

武人の身体構造を知るアレックスは死にやしないと思いつつ、消えた男を心配した。

☆☆☆

敵のロボに対抗する術がなかった私達は、逃げている間に攻撃を受けた。

幾多の爆発が、私達を吹き飛ばす。

愛嬌市一の広さを誇る吉川公園は、残骸と穴が広がるばかり。

避難所の指定がされている地下鉄の入口は、すぐそこなのに…。

「未衣子…大丈夫か？」

「私は大丈夫…。」

「怪我をしているぞ！」

和希兄ちゃんは私の腕にかすり傷があるのを見つけたようだ。

でも、手当をするのは、あの敵から逃げ切ってから…。

『ガキの癖に、しぶといなあ？』

敵のロボは元気が有り余っていて、私達をからかう。

『3人仲良く、あっちへ行きな！』

敵のロボは吠えると、手持ちの大きなライフルを私達に向けた。

人間とロボ。ロボに比べたら小柄な私達は、ライフルの火力を浴びれば一発だ。

今でも生きただけで奇跡だ。

兄妹3人固まって耐えると、別の爆発音が聞こえた。

『うおっ！？』

敵のロボが思わず声をあげ、少し身体のバランスを崩した。

ロボの右の肩部に火の弾が当たったらしい。

ロボは肩部を左手でおさえた。

その際に移動したのか、一人の男が私達の目の前に現れた。

男は両手を広げ、私達を迎えた。私は男を見た。

助けてくれる人物を見ただけなのに。

何年も似たような内容しか見れない夢を、思い出していた。

目の前の救助者と、夢の中で戦う男の人に、親近感を覚えた。私は証拠のない確信をしていた。

（そうだ、この人だ。）

「大丈夫か？」

男の人の声で、私は彼のお腹に抱きついた。2人の兄も腕を掴んでいる。

「未衣子？」

勇希兄ちゃんは不思議に思ったかもしれない。

初めて出会った男の人に抱きつくなど、普通はあり得ないのだから。

『クソっ！ 奴に出会ったら考えが台無しになるじゃねえか！』

男の人の背後で、敵のロボが嘆いていた。

だけど、ライフルの銃口はまだこちらに向けられている。

まだやる気はあるらしい。

『丁度いい、今のうちにまとめて落としてやるよ！』

「おおっと、それはちょっと待ちな。」

『ヒッ！？』

男の人がそれだけ言ったのに、敵のロボは大げさに反応した。

やけにビビりすぎる。

夢の中の通りだと、やっぱり彼は強いんだ。

私は男の人から離れないまま、そう思っていた。

「ここより西にな？ 青い海が広がってるとこあんねんけどな？」

西の青い海…愛嬌湾の事かしら？

『海！？』

「先に行ってくれへんかなあ？ 30分経っても来えへんかったら、お前の好きに
してええから。」

決着はそこでつけようや。

男の人はロボ相手に余裕を見せていた。

『チィ、わかったよ！ テメエ覚えとけよ！』

敵のロボはジャンプしてそのまま愛嬌湾の方角へ飛行した。

「さてと。」

男の人は一時逸らしていた視線を私達に向けた。

周りに集う私達にこう言ったのだ。

「お前ら、一緒にくるか？」

☆☆☆

アレックスは焦りを感じていた。

操縦席のレーダー反応には、敵機を示す赤い光が点滅を繰り返すだけである。

もちろん、仲間の武人を示す青い光も点滅しているが…問題はその距離だ。

2点の光は近接した途端、赤い光が青い光から遠ざかるではないか。赤い光が
向かう方角は愛嬌湾。

(湾上だったら、被害は最小限に抑えられる。本部からのA I 射出も可能だが…。)

アレックスはレーダー上の青い光が気になっていた。

だが時間は止まらない。青い光もようやく動きを見せた。

「！？」

青い光も愛嬌湾へ向かっていた。

しばらく経つと、アレックスのヘッドホンに通信が入った。

『よお！』

「遅かったじゃないか！」

『悪いなあ、逃げ遅れた人らを助けてたんや。ほら。』

操縦席のモニターが切り替わる。

映るのは…黒いボディに赤のラインが入った人型ロボと、両手に乗る3人の子供達だった。

☆☆☆

男の人が差し伸べた手を、私達は自然と掴んでいた。

兄妹3人、しかも和希兄ちゃんは大人の仲間入りとも言える身長はある。

それをもろともせず、彼は全員背負って、一気に飛んだ。

上空へ出た瞬間、男の人の身体が光り出した！

わからない内に、私達はロボの両手の上にいた。

全身真っ黒な、さっきの敵のロボと同じ高さのロボ。

でも所々に赤のラインが引かれていて、さらにラインは光っている。

ロボの両手は黒ではなくグレーの色だが、関節部分と似たような色味をしているので、違和感を感じない。

雲が漂う上空を、私達はただ眺めていた。

雲の隙間から、濃い青色が見えた。愛嬌湾の波は穏やかだった。

先に敵のロボが向かっていた筈だけど。

男の人…黒いロボがしゃべりだした。

『今から、すごいもん見せたるな？』

黒いロボは私達からある方へ視線を向けた。

S Fに出てきそうな、大きなシャトルが飛んでいた。

☆☆☆

「その子供…まさか。」

『頼みがあるんやけど、ジェット機を3つ、ここまで飛ばしてくれへん？』

「子供は論外って言っただろう！？話を聞いてないのか！」

アレックスは怒った。

襲撃前の会話で彼はジェット機のパイロットの条件をあげていた。隣で武人は聞いていた。

武人の行動を見るに、自分の条件を適当に聞いていたんでは、とアレックスは思った。

『敵は1匹だけや。最初はオートでええ。この子らに体験してやろうかなあって…』

「遊んでるんじゃないんだこっちは！子供達を輸送機に降ろしてお前がやれ！」

仲間の提案に彼はイライラしていた。

しかし、武人の考えは曲げなかった。代わりに、約束というお願いを請うた。

『時間はあれへん。あと10分したら、敵は攻撃しよる。そう俺が塩を撒いたからな。』

「…公園でも、市内でドンパチは原則禁止だからな…。」

誘導自体は間違っていない、とアレックスは認めた。

「だがそれとこれは話は別だ！許可しないからな！」

『指揮は俺がとる。どっちにしろ、単独でも攻撃しよる。この子らの初陣には今がチャンスや。』

モニター越しの黒いロボの視線は真正面に向けられている。

武人の真剣さがひしひしと伝わってくる。

『責任は俺が取る、って宗太郎にも言った。適任者はこの子らしかおれへん。

この通りや。』

アレックスは静かに、操縦席のあるスイッチを押す。

すると、水・黄・ピンクの三色の四角いスイッチが、アレックスの右手に現れた。

「どうなっても、知らないからな！」

☆☆☆

シュウウと轟音がした。目の前のトリコロール。

理容店の様な赤・青・白ではなく、水・黄・ピンクのパステルカラーだけど。

3機のジェット機が、ご丁寧にロボの両手、近くギリギリに接触した。

さらに自動的に操縦席のハッチも開けてくれた。

これに乗るのかなあ？

『落ちゃん様にしたる。コックピットに座ったら自動的にシートベルトしてくれるから。』

「このまま乗ればいいのか？」

「大丈夫かよ…。」

勇希兄ちゃんは弱音を漏らしたけど、ゆっくり黄色のジェット機に乗った。和希兄ちゃんは水色のジェット機。

私はピンク色のジェット機に乗った。

コックピットのシートに座った私達。シートベルトは自動的に装着された。

『高速移動するわな。喋ると舌噛むで？』

「は？何だって…」

勇希兄ちゃんが言い終わる前に、ジェット機の加速が始まった。

「うわぁ！？」

『両方のレバーを握るとき！そしたら大丈夫や！』

男の人に言われて私達は、左右のレバーを握ろうとした。

無事握る事はできたけど、その手を離そうとする程に、後ろに引っ張られる。

誰も引っ張ってないのだけど。

ジェットコースターは小学生の頃1度経験したけど、その勢いに比べてもこのスピードは速い。

スピードに気をとられ過ぎて、別の問題には全く気がつかなかった。

気づいたのは和希兄ちゃん。

真正面のモニターの右下に、和希兄ちゃんが映る。

声を上げる勇希兄ちゃんと比べて、歯を噛み締めて抑えてるけど、やっぱりスピードに飲まれて変顔している。

和希兄ちゃんが気づいた問題。

私も勇希兄ちゃんもようやく気づいた。

モニター右に黄色が映る。妙に近づいてきている。

これは、もしかして。

「ぶ、ぶつかる！？」

『大丈夫や！ジェット機はそんなんでも壊れへん！』

『近すぎるぞ！こっちは下から勇希と未衣子の分が来ている！』

和希兄ちゃんが叫んでも、ジェット機は緊急停止などしなかった。

まずい、潰れてしまう。

私も兄ちゃん達も限界を感じて、目を瞑った。

すると、モニターが強く光った。

目に入れると痛くて失明してしまう程の、強力な光。

光のおかげで、周りは何も見えなかった。

やがて、強力な光は消えていき、私達は顔をあげることができた。

というより、ジェット機がぶつかって押し潰されるのでは…と怯えていたのに。

私達は生きていて、しかも無傷だった。

『しまったわ。ヘルメットだけでも持ってきたらよかったわ。』

少し距離を離して男の人が言った。

見上げても、モニター画面に変化はなかった。

いや、なかったように見えた。

上部に《Docking Mode》と青く点滅され、その右側にはロボットの全体図が。

『のっぽの兄ちゃんがメインで乗ってるのが、【バスティユ・スカイ】という素早さ重視の機体や。』

男の人の説明だ。

『敵さんは湾上におるからな。急ぐで？』

男の人が先陣を切ると、合体した私達のロボットも動き出した。

ジェット機同様、スピードが速い。

『攻撃もオートでやるから、君らは見とくだけでええで。ベルトとレバーだけ

しっかりな？』

とりあえず私達はその忠告だけは守ろうとした。

☆☆☆

愛嬌湾。愛嬌市西部に広がる大きな青い海とも呼べるもの。その湾上で漂うロボットがいた。

未衣子達を公園で襲うつもりだった、敵のロボットだった。

彼は武人の約束を守り、ここまでやってきた。

同時に、30分経っても来ない場合は、襲撃をしてもいいとも言われた。

時間の概念は、短く感じる時もあれば、長く感じる時もある。

今の敵のロボットは、「30分」が長く感じた。

いや、そもそもこのロボットは地球の時間の概念がわかるのか？

このロボットと武人に倒された残りの5体は、宇宙から降りてきた。

おそらく、時間も気候も環境も、地球とは異なるだろう。

『本当に来るのか？あの男は。』

湾上についてから、ずっと宙に浮いていた敵のロボット。

何も起こらないので、暇で退屈していた。

…約束を忘れたのか？

そう思った彼は武器を手にした。アニメでよく見るライフル銃だ。

『ま、いっか。そろそろ攻撃しかけても…うおっ！？』

敵のロボットが、機体のバランスを崩した。

鋭く光る何かが、飛んできたからだ。

それは刀か剣の部類だと、彼は把握していた。

刀か剣のような武器は一定の距離で方向を変え、戻ってきた。

刺しにかかったと思えば、標的の彼から外れて…何者かが棹をキャッチした。

刀剣の動きが止まった所で、敵のロボはすぐに周りを見た。

愛嬌市内方面の上空に、2体のロボットが。

『2体…？』

（1体は奴だろう。黒い方はそうだ。だが、もう片方の白い方は何なんだ…？）

敵のロボは困惑した。

だって白いロボットとは、彼は初めて出会ったのだから。

『悪いんやけど。』

黒いロボである武人の声。

『お前には俺やなくて、この子らと戦ってくれへん？』

この子“ら”…？

敵のロボの目の前には、2体のロボしかいない。

武人が紹介したのは1体。

“ら”が付くのはおかしい…と疑問に抱いたが、考える余地はなかった。

謎の白いロボ、いわゆる「この子ら」が突進してきたからだ。

先程投げられた鋭い刃物は、細長い刀である事がわかった。

何回も、刀の先で刺しにかかってきたのだ。

敵のロボは声を漏らしながらも、うまくかわしていった。

距離を取るよう、後ろへ引き下がった。

『ふーん。基礎は難なくいけるようやな。』

『基礎とは何だ基礎とは！』

武人の発言を挑発と捉えた敵のロボ。

今度は彼から謎のロボに仕掛けようとした。

しかし。謎のロボの全身が光った。

目を腕で覆ってしまう敵のロボ。その光が強烈に眩しかったのだ。

光はすぐに消えた。敵のロボは腕をどけた。

謎のロボは白いまま。

だが所々、最初の時と違っていた。

水色のラインは薄ピンクに変わり、腰の周りにはスカートみたいなじゃばらのカバーがついていた。

最初の時の謎のロボは、人間に例えると細身の男性。

こちらは女性を彷彿させた。

謎のロボの右手には、白い杖なのかロッドなのか。

どうやら背丈と同じくらいの棒を持っていた。

先端部分には丸い物体があり、中にはピンクの花が凝縮されていた。

紙細工をした事あるならば、あれはくす玉の一種だと思う人もいるかもしれない。

そんな形をした球が入っていた。

『女型…？【HR（ヒューマニティー・ロボティクス）の略】】でも珍しいというのに…！』

敵のロボは呟いた。

謎のロボはロッドを持ち上げた。

機体の周りに数個の光の球が引き寄せられた。

今度はロッドを前に一振り。

光の球は全部、敵のロボに向かっていった。

もちろん敵のロボは難なく回避した。

刀裁きに比べればスピードは緩やかだからだ。

ところが、この球には特殊な力を秘めていた。

球が分裂し、倍に、倍に増えていく。

さらに球の左右から、針金のような細長い線が出てきた。

線は球と球とを繋ぐ役割を担っていた。

やがて多くの球が丸い網をつくり、敵のロボを逃がさないようにする。

他方、敵のロボは必死に逃げ回るが、1本の線に引っかかり、そのまま他の線と絡まってしまった。

結果、球と糸が敵のロボを縛り付け、動きを封じたのだった。

『く、クソっ！』

敵のロボは悔しかった。

もがき苦しむ敵のロボの姿を、武人はやや離れた所で眺めていた。

『俺はこの子らが倒されるまでは手出しせえへんからな。』

ついでに精神的に追い打ちをかけた。

『このロボットにはな、3人の子供達が乗ってるんや。お前が消そうとした子らや。』

『何、だと…！？あのがき共が！？』

『下に逃げんとおとなしく輸送機を攻撃してたら、他の仲間と一緒に俺が相手してやったのになぁ…。それでも力出せへんけど。』

『舐めやがったな！貴様！うっ！？』

謎のロボがまた光り出した。

全身が縛られている為に、光を遮る腕が使えない。

頭を下げて凌ぐしか、方法はなかった。

光の消滅後、現れたのはまた別のロボットだった。

白い機体色は変わってないが、機体のラインと体型が違う。

ピンクから黄色へ。美しい女性型からガッチリした男性型へ。

光の影響もあってか、そのロボットはまるで黄金の輝きを放っているかのように見えていた。

黄色くなった謎のロボは、空手で見かける構えのポーズを取り、「気合い」を入れた。

「気合い」に見えるのは、ロボの周囲に風の渦と火柱が起こっていたからだ。

「気合い」を溜めたロボは勢いよく、敵のロボに突撃した。

右手はグーの形で、炎が右手を包む。

狙うは左の頬の部分だ。身動き取れない敵のロボ。

ジタバタしても、線が途切れない限りは自由にできない。

結果、右手のパンチがストレートに入る。

パンチは強烈で、ロボの顔をぐちゃぐちゃにするのは容易い事だった。

グエッと無意識に吐いた敵のロボ。

容赦なく、次の一撃をくらってしまう。

次は左手が繰り出された。

下から顎に強烈なパンチ。

敵のロボは上に飛んだ。

顔面のみで簡単に崩れるはずはないのだが…このロボは全身麻痺を起こしてしまった。

たった2度の衝撃で、全身痺れを起こし、放電まで起きて…。

『ああああ！？』

断末魔をあげて、爆発していった。

☆☆☆

敵のロボは見事に自爆のような爆発を起こした。

私達のロボはあのロボにはそんなに手を加えた、感触がない。

おまけに、私達のロボは現在、男の人が言う「自動操縦」のおかげで、私達自

身は何もしていない。

ただ、両脇のレバーを握っていただけである。

ずっとレバーを握っていたから、レバーが汗で濡れた。

ずっとロボに振り回されてたから、心臓バクバクしたし、息も荒い。

でも敵が爆発したら、ロボは落ち着いた。

『破片が落ちそうやけど、拾ってくれるから心配せんでええ。一旦戻ろうな。』

後ろに俺がついとると、男の人が言った。

男の人の言う通り、爆発で出てきた破片はやってきた小型ロボが回収していた。

それはモニターで確認したからいいけど。

『いろいろ出てきたよなあ。敵を縛りつけた上でパンチかよ…。』

勇希兄ちゃんの声だった。

コクピット内で終始、1番うるさかったのは彼である。

『球で縛りつけたのが【パスティユ・フラワー】。鉄拳制裁したのが【パスティユ・サニー】や。』

『パ、パス…？』

『機体名や。今は頭の片隅に置いといたらええ。飛んでる輸送機があるから、そこで降ろしたる。』

モニター画面に飛行機を太らせた輸送機があった。

再び私達の乗った【パスティユ】？が光った。

やっぱり眩しいので目をつぶって下を向いた。

今度は何に変形するのかな、と思ったら「分離」を試みたいで。

画面上部も《Separate Mode》に変わっていた。

『輸送機にはジェット機状態で入ってもらうからな。』

あ、そうそう。俺の名前言うとかわ。黒川武人でええで。君らは？」

『俺は白井和希です。』

『俺は勇希。』

「未衣子です。」

『3兄妹なんで、名字は全員白井です。』

『へえ…兄妹かあ。仲良いなあ。』

未だジェット機に乗ったままだけど、名前の紹介までできた。慣れたかなあ。

☆☆☆

「【ホルプレス】の軍団なんざ、こんなもんよ。HRの下級品なんだからな。」

「送ったのは黒種で、【ホルプレス】でも最高クラスを誇ってるそうだが？」

「無理無理。奴らは偵察か兵の傘増ししか役に立たんよ。言えるとしたら、情けねえ星だって事よ。」

「地球か…。」

「ラルクがいなかったらボロボロになっちまってるだろうなあ…。」

「…自慢の息子か？」

「アイツは最高傑作だ。下級HRを大量に送り込んでへばりはしねえよ。」

へへへ、と笑う髪の長い中年男。

聞いていたのは、和装の格好をした少年だった。

2人の距離は5メートル程離れている。

地球の隣に位置する惑星・火星。

火星の周辺には2つの衛星の他に沢山の星が散らばっていた。

その中の1つ、タレス星に属する「レッド研究所」。

所長室の灯りは消えていて、部屋全体は暗かった。

所長のクーラン・レッドの眺めるコンピュータだけが、唯一の灯りだった。

「【ホルブレス】の派遣は続けるんだな。」

「報酬安いからな。地球人は雑魚だが、秘密兵器の類いはこしらえてるようだ。」

「一応、我々の祖だぞ？」

「ルーツが何だ。何の能力も持ちえない生物の癖によ。」

その後、少年はゆっくりと所長室を去った。

長話を聞きたくなかったからだ。

コンピュータの画面には、多くのデータが再生されていた。

撃墜された【ホルブレス】の軍団。

3機のジェット機が合体した白いロボット。

そして、3人の子供を抱えた《自慢の息子》。

クーランはニヤリと笑った。

「絶対捕らえてやるぞ、愛しの息子よ…。」

2・復讐の日



太陽系。多くの星々が太陽の周りに散らばった宇宙。

1隻の宇宙船が、地球を目指してまっすぐに移動していた。

特殊な文字で〔フレアランス5〕と船の側面に描かれていた。

船内の最上階・ブリッジには船を操縦する乗組員達以外にも存在した。

藍色の髪の方が立っていた。

戦闘などの緊急事態ではないので、何も指揮するものはないのだが。

星々の光だけが照らす静かな宇宙を眺めていた。

緑色の髪の方が、2人分の飲料を持って彼に近づいた。

「まだ時間はかかるから、席についた方がいいよ？」

女は飲料を渡した。

「いや、なかなか落ち着かなくてな…。」

「焦りは禁物よ？土星圏から地球までは早くて2週間（地球時間換算）だから、休める時に休まないと。」

「…。」

「悩んでるの？」

「サレンのせいではない。どのみち、私は決着をつけなくてはならないんだ。」

男は飲料を一口飲んだ。

再び船の窓から、宇宙を眺めた。

「父が洩るのはよくわかる。私はこれから悪の血に染まるだろう。」

「リユートにはあの人と因縁関係があるんでしょ？利害関係がはっきりしてるなら、悪の血に染まったと言えないわ。」

「だが星の民が納得するのか…。」

「今更何言ってるの？王の力もあるし、あなたはやり返す側よ。みんなも納得してくれると思うわ。」

「…。」

「第一、あなたに拾われた私が納得しているんだから。リュート、あなたの味方はいるわ。」

「すまない、余計な事を考えてしまった。」

男・リュートに笑みが戻った。

「やっぱり、少し休む。」

「わかったわ。地球に降下する時に呼ぶね。」

「ああ。」

リュートは自動ドアを開き、ブリッジを後にした。

出入り口とエレベーターは直結している構造だった。

（奴はこの手で…失われた同郷達が報われない。）

リュートは飲料を強く握った。

☆☆☆

敵のロボを倒してからは、物事がスムーズに進んでいった。

私達は男の人・武人兄ちゃんに連れられて、[ラストコア]の本部にやって来た。

愛嬌湾の中に潜んでいるって言われたけど、詳しい場所はよくわからない。

本部の人でも所在地を知る人が少ないから当然だって言われた。

時間的に結構縛られた。

まず[ラストコア]の最高責任者である西条宗太郎総司令官と話をした。

西条司令とは地球が近々侵略される危機、この基地の設立経緯、さらに期間限定の契約についての説明がされた。

「3ヶ月は辛抱してほしい。」

西条司令からそう頼まれた。

高校生で頭のいい和希兄ちゃんは沢山質問した。

侵略危機について武人兄ちゃんの様な口ボがやってくる事。

設立経緯は10年前のレジュー施設襲撃事件がきっかけ。

契約は…多額の報酬を支払うなどの特典をつける事。

これらの内容が理解できた。

終始、西条司令と隣にいたおじさんは苦い顔をしていた。

子供に説明するのが難しいのかな？

おじさんは「ラストコア」の事務局長、ジェームズ・フェリーと言った。

ジェームズさんは私達の祖父母にも説明しに行く様で、困るなぁと唸っていた。

営業マンかな、と私は軽くとらえていた。

その後、私達はパイロットの資質があるかどうかの検査を行った。

身体検査や精神検査など。全身をくまなく調べたようで、司令の話よりも時間がかった。

身体は私達全員、異常なし。

精神は…私が同じ夢しか見れない状態について、お医者さんは驚いたみたいだった。

もちろん、武人兄ちゃんと輸送機に乗っていた「ラストコア」の技術局長、アレックス・ヘイリーさんもお医者さん同様驚いた。

大した事ないですよ、と私は言ったけど。

「パイロットには心の変化も診るのは必要なんだ。黒川には報告しておく。」

アレックスさんは返答した。

今度はこれからのタイムスケジュールについての説明だった。

とりあえず最初の1週間は全員参加で訓練を行うとの事で、学校は強制休暇に

なった。

その後は各自の計画に合わせて調整を入れるとの取り決めになった。

和希兄ちゃんは部活あるし、勇希兄ちゃんは空手の稽古をやってるから。

でも、私は2人の兄のように、取り立ててやってる部活や習い事はない。

勉強は学校通うと自然にするし、読書も隙間時間でできる。

家事手伝いも祖母に言われてやっているわけじゃない。

だから私は、毎日訓練を受けたい。

外出については勇希兄ちゃんに連れてもらおうと考えている。

公園で助けてくれた武人兄ちゃんと一緒に戦いたい。

私の決意は固まっている。

たとえ今が弱くても、強くなって武人兄ちゃんの隣に立ちたい。むしろ、彼を守りたい。

毎晩夢の中で見る彼に出会えたから。

ずっと側にいられたらいいな。

☆☆☆

〔フレアランス5〕の宇宙船は、ようやく地球圏まで辿り着いた。

何事も無く静かに。

「奇跡みたいね。」

「そうだな…。」

休息を取っていたリュートは、サレンから到達の知らせを聞いてブリッジに来ていた。

彼自身の体調は、休む前より良くなった。

青く澄んだ星は目の前に広がる。

大気圏に突入し、降下すればリュート達の旅は終わりだ。

しかし、地球へ降りるには手続きが必要だった。

宇宙からの使者がする手続きは、役所届のような事務仕事ではなく、科学を利用した技術であった。

電波による発信作業。

これを怠ってはいけない。

ただ電波を発信するだけではない。

地球人に知ってもらう為の情報が必要である。

それは言葉。

言葉を拾って聞いてもらう仕組みだ。

言葉のみならず、言語にも気をつけなくてはならない。

地球の言葉で話さか、翻訳機械を使用するか選択しなくてはならない。

「共通語は勉強した。うまく伝えればいいが…。」

「構文がしっかり固めていたら理解はしてくれるわ。」

「問題は電波をキャッチできる基地が地球にあればですね。反応が無ければ…
引き返すしかありません。」

「武力行使は緊急時以外ご法度だからな…考えても無駄だ。やるしかない。」

ブリッジの操縦士はある装置を起動させた。

四角い機械の箱。

スピーカーかマイクみたく、上部に網状の穴が開けられていた。

下部には左右に動く針を使用した測定器だ。

音量を測るものだった。

「王子、こちらは準備完了です。いつでもどうぞ。」

「わかった。」

リュートは装置の前に出た。

自身の懐から、小さな板を用意した。

小さな板には、小さな文字が綴られていた。

地球の共通語で使われるアルファベットではなく…象形文字のような文字が刻まれていた。

彼は深呼吸をする。

そして文字を読み上げた。

☆☆☆

訓練開始から1週間が経った。

3人合同の必修訓練は、私個人の感想だと、辛かったけど楽しかった。

初めの1日2日は、訓練が終わった後にすぐ眠ってしまった。

勇希兄ちゃんが「ご飯食べろよ」と言って起こしに来てくれた。

栄養は大事なんだな…って改めて思ったよ。

つらい経験もあれば、楽しい経験もあったよ。

私達の乗る【パスティーユ】の仕組みや乗りこなしの技術とか…。

外宇宙の知識や教養など、学校や読書で味わえない体験がたくさんあった。

今までに取り組んだ中では、私の目を1番光らせた体験かもしれない。

2人の兄も同じ事言うかも。

訓練終了時、時刻は夕方5時を過ぎていた。

武人兄ちゃんとサポート役の人に「案内したい所がある」と言われ、やってきたのは【ラストコア】の統制制御室。

ここで情報収集したり命令を出したりしているらしい。

この日は西条司令とアレックスさんがいた。

もう1人、計器と格闘しているのか。

つまみを回し続けているお兄さんがいた。

この人はオペレーターさんだった。

「情報が拾えました。宇宙からですね。」

「可能性としたら、宇宙船が近くに佇んでいるな…。」

「解析できるか？」

「大丈夫です。読み上げます。」

『敬愛なる地球人よ。

我々は土星圏二コンの王家・フレアランスの遣いの者である。

貴殿らとは話し合いの場を持ちたくて、ここにやってきた。

貴殿らに危害を加える事はない。

この電波を拾える者、どうか我々を導いてくださらないか。』

以上、オペレーターさんが読み上げた。

「土星圏か…どう見る黒川。」

アレックスさんが武人兄ちゃんに声をかけた。

「[ホルブレス]のような軍団はいそうにないと思うんやけど、一応確認した方がええなあ。」

[ホルブレス]。実は私達を襲った敵のロボだって、武人兄ちゃんから教わった。

宇宙ではそこまで強くないらしい。

でも武人兄ちゃんは、

『よう耐えた。乗られへん奴もおるからな。』

と褒めてくれた。

それはさておき、西条司令らは武人兄ちゃんに判断をさせた。

この中で1番宇宙に詳しいのは武人兄ちゃんだからで。

側で私達も、探りを入れるのかな、と考えていた。

「まずは〔ホルプレス〕共々、HRの奴等と関わってないかチェックや。それを先に電波に乗せや。」

「ああ。そうしよう。確認次第、許可してもいいな。」

「人型やったら余程のことやない限りは、地球を敵視せえへん。もししても防衛線は張れるから大丈夫や。」

私達を見る武人兄ちゃん。

きっと、私達を頼りにしてくれているんだ。

期待に応えなきゃ。

「気に入ったみたいだな。」

「めっちゃめっちゃ頑張ってくれてる。今までの兵隊さんとは大違いや。」

「…最下限には抑えないとな。期間限定とはいえ、一般人で子供だから。」

アレックスさんは哀しげに言った。

☆☆☆

〔フレアランス5〕のブリッジで、地球からの電波をキャッチした。

複数の操縦士達が電波の解析に勤しんだ。

サレンの計らいで再度休息を取っていたリユートも、電波を拾った事でルームに戻ってきた。

「状況は？」

「もうすぐ終わるわ。言語化してるの。」

ピピピ、と音が鳴る。目の前のモニターは、様々な情報が散らばっている。

これらが何の意味かは専門家である操縦士しか、全てを理解できない。

「言語化、終了しました。データを…表示しました。」

「読めるか？」

「此方の言語に翻訳しました。大丈夫です。読み上げます。」

『フレアランス家の諸君。我々は外宇宙対策本部【ラストコア】である。

貴殿らの受入れに条件がある。

【ホルプレス】等、宇宙犯罪者指定HRは存在しているか？

貴殿らの返信によっては、受入れを拒否する可能性がある。』

「HR、いや犯罪者の存在を知っている？」

リュートは疑問に感じた。

「地球の施設だけで電波を受信できる。地球でも相当機能を備えていると見て取れるわ。」

「地球は各国で言論統制等の規制があり、それが技術の進歩も阻害されているようでして…。」

サレンと操縦士が解説した。

「地球上では戦争が絶えないとは聞いたが…。」

「私達ほど脅威的な能力は持ってないわ。もちろん技術力もね。」

「そうだな…。決断なのだが、そのようなHRとは結びつきはない。だから受け入れてほしいと。」

「書き留めなくてもいいの？」

「答えるなら手短でいい。忘れないうちに発信する。」

リュートは再度装置の前に立った。

☆☆☆

宇宙からの電波を受信してから数日後。

強制参加後も、私は毎日【ラストコア】に通っていた。

学校がある時は放課後に。

勇希兄ちゃんの空手を観に行くと、嘘をついて。

便利な機能がある。

首にぶら下がっている六角箱のペンダント。

〔ラストコア〕まで飛ぶ《転送装置》だって。

ついでに通信機能もあるんだって。

流石に変身機能はないけど。

この日も〔ラストコア〕に通い、訓練や勉強をした。

勇希兄ちゃんは空手の稽古があり、和希兄ちゃんは高校生の勉強で忙しい。

自分も用事ないの？と聞かれたけど、私には兄みたく決まった用事はない。だから毎日行ける。

勉強に付き添ってくれたお姉さんが言った。

「今回もまた、宇宙からの贈り物が届いてるんだって。」

お姉さんの同行で、私はまた統制制御室へやって来た。

案の定、武人兄ちゃんと西条司令、アレックスさんが奥に立っていた。

今回はジェームズさんも来ていたみたい。

ジェームズさんは私達をパイロットにする為に頭を下げた人。

祖父母に細かい契約内容を説明したらしい。

それはさておき。今回も聞けるんだから聞きたいなあ。

「大した内容じゃないけどな。」

「まあいいだろう。子供のうちに興味を持つのは。」

ジェームズさんと西条司令が言った。

アレックスさんに見せられた贈り物がこちら。

『返答頂き感謝する。』

こちらはHRは所属していない。

我が王家の人型機体を10機程。

全て手動操作である。

よって、着陸許可を頂きたい。』

以前と同じく土星圏ニコンからの返信だって言われた。

着陸…この人達来るのかな？

「もうええやん。許可しようや。」

「私は構わんが…場所を知られると困る。入場制限をしよう。」

入場制限？どうやってするんだろう。

「巨大な宇宙船が来ているのだろう。まずそれは降りてもらおう。海上ポイントを指示し、我々が誘導という形を取ろう。」

アレックスさんの提案だ。

「派遣者の代表と外数人、案内すればいい。郷に入れば郷に従えだ。彼らには俺達の言う事を聞いて頂こう。」

「もし聞かなかったらどうする？」

「やりたくはないが、武力でねじ伏せるしかない。黒川は連れて行くが…。」

アレックスさんが私を見た。困惑した表情だった。

アレックスさんの表情を察したのか、武人兄ちゃんが言った。

「いや、子供らはかめへん。来客を連れてくるだけやから。」

「そうだな。では発進準備を進めます。もう一度電波の発信をお願いします。」

「頼む。」

アレックスさんは立ち上がり、武人兄ちゃんと統制制御室を出た。

2人の男性が出るのを見ていた私は、付き添いのお姉さんに聞かれた。

「未衣子ちゃんどうする？今日は帰る？」

私はまだ興味が薄れていなかったから。

「いいえ、明日は学校休みなのでここに泊まります。兄達に連絡入れていいですか？」

そう言って、ペンダントの通信機能を使用した。

☆☆☆

『許可する。その代わり我々の指示に従ってもらいたい。

まず太平洋という巨大な海へ向かってくれ、指定ポイントは…』

この電波受信後、〔フレアランス5〕は太平洋の指定ポイントで固定した。

既にヘリが5機程、待ち構えていた。

ようやく通信回線が復帰した。

「私はフレアランス家の5代目後継者、リュート・フレアランス5thだ。受入許可感謝する。」

『私は〔ラストコア〕技術局長、アレックス・ヘイリーだ。電波情報通り、我々が本部の意向に従ってもらう。』

4機のヘリが〔フレアランス5〕の周りを囲んだ。

宇宙船は大きくて運びづらい。

そこで飛んでるだけのヘリを操縦しているアレックスは、次の指定をした。

『輸送機があれば、そちらを使用して頂きたい。案内するにはサイズが大きすぎる。』

「わかった。サレン、小型宇宙船に私の機体を。」

「了解！」

「本部には私とサレンで行く。皆の者は待機。船だけ隠せ。」

〔フレアランス5〕から小型宇宙船が出てきた。

地球の飛行船の風船部分と似たつくりになっている。

上空で止まっているヘリの乗組員、アレックスと武人の感想だった。

武人は他にも、

（一星の王子様がわざわざここまで来るなんてなあ…大層やなあ。）

とも思っていた。

アレックスの指示の元、4機のヘリは黒いフィルムを出して、ぐるぐると小型宇宙船の周りを回った。

基地を特定されない為の措置だった。

「厳重警戒をしいてるよね？」

「よほどHRの襲撃に苛まれているのだろう。」

操縦席の窓がフィルムに覆われて、席内は暗くなった。

そこからの移動には、時間は掛からなかった。

先導する、アレックス達の乗る有人ヘリ。

すぐ後ろに対角線の交点に小型宇宙船を据えるようにして移動する無人ヘリ4機。

襲撃や事故もなく、全機高度を徐々に下げていき、着水を開始した。

「ラストコア」は海底内にあるからだ。

小型宇宙船を“目隠し”されたリュートとサレンには、あっという間に移動した感覚だった。

「それでもHR襲撃には手こずるのか…。」

「レーダーは追えないけど、大雑把な点は特定できたかな？私。」

サレンはなるほど、という顔をしていた。

ここは閉鎖しているが船着場になっていた。

4機の無人ヘリは、周りにいなくなっていた。

着場は幾つもあるので、別々の場所に仕舞われたのだ。

先導ヘリのアレックスが小型無線機でリュート達に降りよう指示した。

小型宇宙船の操縦席は、すぐ横の非常扉で外に出られる。

あとは階段さえつければ、簡単に降りられる。

移動式の階段は〔ラストコア〕側で用意した。

おかげで、リュート達は基地内に降りられた。

アレックスとリュートは握手を交わした。

ここまでは…何事もなかったのだが。

アレックスの背後に男がやって来た。

彼をご存知の同乗者だったが、リュートは表情を一変してしまった。

「奴は…！」

リュートは自然と後ろに背負った物体を掴んでいた。

布に包まれていたので、それを外した。

すると、典型的な槍がリュートの手にあった。

サレンは咄嗟に驚いた。

アレックスに至っては後ろに滑ってしまって尻もちついた。

だが、大して動揺しない者もいた。

ロボットとの戦いに慣れている武人にとって、リュートの突撃なんて十分かわせた。

だが無我夢中に、リュートは槍で刺そうとする。

矛先に血が付着しなかった。

サレンはやめて！と叫ぶ。

アレックスは壁に隠された小型AⅠを射出し、警報を鳴らせと連絡した。

「HRの不在確認をした癖に、貴様らは犯罪者を匿っているのか！」

「犯罪者…な。」

リュートの怒鳴り声と武人の呟きである。

アレックスの命令したAⅠは2人を威嚇する。

所詮小型なので落とされた。

警報も鼓膜が破れそうな程に鳴り響く。

アレックスは壊す気かと強く叫んだ。

「リュート、落ち着いて！」

きゃあと喚いたサレンは、A Iの威嚇をなんとか避けていた。

技術屋と側近が騒ぐ中、戦い慣れしている武人に焦りはなかった。

むしろ冷静にリュートと対峙していた。

「土星人の割には、細身の生物やな…アンタら。」

「黒川！それ以上挑発するな！」

戦闘員と王子の対決に、飛び交うA I。

危険が多すぎてアレックスは不意に近づけなかった。

代わりに怒声で制止しようとしても、効果はない。

場内が壊れて水が侵入する、という危険を感じた彼だったが。ようやく対決が終わった。

宗太郎による艦内放送だった。

『リュート・フレアランス5 t h！』

リュートの身体がビクッとなった。

館内放送は大きい。煩わしい戦闘中でも耳に届く。

『我々の指示に従うとこちらは申した！これ以上、勝手な真似をされると、大型宇宙船もろとも貴殿らを追放する！』

「言われとんで？お前。」

「くっ…！」

『話は別室で聞こう！今は暴走するのはやめてくれ！』

リュートは槍を下ろす。

鎮静化した彼にサレンは近づいた。

「いくら地球でも、こう技術が進歩してる基地なら私達がやられるわ。」

「サレン、私の過去は知っているだろう。」

「機会をうかがいましょ？まずはここのトップに…。」

リウト達はアレックスの後について、着場を離れた。

武人もジェームズの通信で、未衣子達の側に居てやれと指示があった。

2人は正反対の方角で去って行った。

（王子と女の子、どうも同じ星の民です、って姿に見えへんなぁ…。裏になんかあるなぁコレは。）

武人は疑問に感じた。

☆☆☆

「未衣子に呼ばれたら基地に警報鳴って戦闘があつて…朝起きたら武人兄ちゃんが知らない人と戦闘かよ！」

「怒鳴るなガキ…両者折れねえから仕方ねえだろ。」

勇希兄ちゃんとジェームズさんの声だ。

2人とも機嫌が悪そうであった。

対して和希兄ちゃんはここでも冷静だった。

「あの青いロボットは初めて見たなぁ…。というか、自己紹介されてませんか？」

「事件があつてよ。相手方は後で紹介するさ。」

和希兄ちゃんとジェームズさんの会話だ。

今私達は訓練所の閲覧室のある建物の中に入っている。

ここは頑丈だからとジェームズさんが言った。

アレックスさんは向かいの、青いロボの後ろの建物に入ってるらしい。

「武人兄ちゃん、大丈夫なの？」

「あんまり暴れてほしくないけどなぁ。どうやら相手さん、黒川に因縁があるらしい。」

ジェームズさんが説明した。

「決着をつけさせないと納得できないとな。条件をつけたのさ。」

条件？何だろう？

「[ラストコア]に協力する代わりに、黒川を倒したいとな。」

倒す？って事はもしかして…。

「武人兄ちゃんが…？」

「あり得ないとは思うがな。アイツはHR、相手さんは生粋の宇宙人だ。力量では黒川が勝る。」

ジェームズさんは言ったけど、何だかモヤモヤした。

「黒川は[ラストコア]の重要人物だ。もし奴が倒されそうになったら、こちらで救済措置を取るさ。」

祖父母への説得でも尽力を尽くしてくれたジェームズさん。

初対面の時は苦い表情をしていたが、段々私達を気にかけるよう、言い方を変えてくれた。

そうだよね。兄ちゃんは生きるよ。

☆☆☆

武人とリュートの戦闘は、宗太郎とリュートの応接室での話し合いで決定した。

未衣子達の元へ行った筈の武人が、応接室にやって来た。

戦闘の標的である本人が、承諾したらええやんと言った。

後は普通に事を運んで行った。

武人とリュート、1対1の模擬戦という名目で始まる。

「リュート、私も援護しようか？」

「いや君はいい。これは私の問題だ。」

サレンは未衣子達の建物と向かいの場所にいた。

だが彼女は仕える王子が気掛かりだった。

（HR相手じゃあ…大丈夫かしら。）

彼女は技術仕官としてリュートの側にいた。

HRの力量は理解していた。

「流石に命の危険性があれば止める。君達も王子がいなくなったら大変だろう。」

「ええ…。彼が納得するか…。」

「そこは難しいな…。」

サレンの隣にアレックスがいた。

彼は複数のPCを自身の前に配置し、戦闘を全方位で捉えようとした。

メガホン代わりの無線機も所持している。

無線機は戦闘の合図でもあった。

『これより、【ブラッドガンナー】対【ホーンフレア5th】の戦闘を開始する。急なスケジュール調整の為、1本取れば勝ちという一発勝負とする。』

『な…倒したら勝利ではないのか！？』

『それもよしとするが…他の方法で制しても勝敗を決める。』

機体【ホーンフレア5th】に搭乗したリュートはアレックスからのルールについて落胆した。

『ふーん。タマ取るつもりやったんか？まあ、独力で挑む勇氣には讃えとくわ。』

『結構だ。ルールはまだ良い。貴様の後ろにいるのは何だ？どうみても子供ではないのか？』

リュートはモニターから未衣子達を捉えていた。

『期待の新人や。俺達の戦闘観てもらおう。』

『静かにしろ！さっさと始めるぞ。時間がない。』

アレックスは戦闘を開始して、とっとと終わらせかった。

『合図はこちらです。準備はいいな？お二方。』

当のお二方は肯定の返事した。

アレックスは左手で赤いボタンに触れた。

まだ押していない、サイレン音のスイッチ。

彼の合図が、ボタンを押す事を促すサインになった。

『戦闘、開始！』

ブウウウウ、と基地内にサイレンが鳴った。

2機のロボットは接近するため、地面を蹴って加速をつけた。

☆☆☆

速い、速すぎる。

訓練の時に付き添ってくれた武人兄ちゃんとは、動きが違う。

私達がロボの操作に慣れるよう、訓練時に武人兄ちゃん的是になってくれたけど…今は全然違う。

お互い激突するのかと思ったら、兄ちゃんは飛んで、両手の銃で弾を乱射し始めた。

対するリュート王子？のロボは素早くかわす。

周りに火花が飛び散ったけど、弾の威力は弱かった。燃えていないから。

武人兄ちゃんが着地した後、今度は王子のロボが飛び上がった。

槍の特性を活かして、真上から兄ちゃんを刺しにかかった。でも兄ちゃんは後ろに下がって避けた。

王子のロボは槍を二回左右に振って、今度は叩こうとした。

危ない！と一瞬思ったけど、武人兄ちゃんは右腕でダメージを軽減した。

受け止めた槍を退けて、左手で再び乱射。

頭部に向かったのだけど、王子のロボはうまく首を振って、弾を避けた。

『中々やるな。』

兄ちゃんが言った。

「すげえ…空手より動きが速え…。」

「かなり乱射しているけど、弾切れが無いのが不思議だなあ…。」

先に勇希兄ちゃんが、次に和希兄ちゃんが言った。

元軍人のジェームズさんは、

「王子とくれば大体お飾りなんだが…コイツは本物だ。かなり鍛えてきたな。」

相手方を褒めていた。

『【ホルブレス】の連中とやったら、お前は勝てたやろうな？』

『あんな奴らを相手にはしない！私の標的は貴様だけだ！』

『ほう…せやったら、コレはどうや？』

武人兄ちゃんは左手の銃を変えた。

さっきの銃よりも大型の銃。

それを王子のロボ、真正面に放とうとした。

真っ赤で大きな火の球がボン！と炸裂した。

王子のロボは読み取っていたのか、真っ先に銃口から離れていた。なので火の球に焼かれていない。

しかし、着地をすると。

右脚の関節部分から、電気の光が見えた。

『くっ…！？』

王子のロボは立っていたが、右脚だけ立ち方が変だった。

『ほー。さっきの球は感電効果もあって立たれへん奴おるけど、よう立てたなあ。』

『何を…』

『お前にはミスもあるわ。今いる演習場の地面は浸水対策でな、硬めにしてるんや。』

『しまった！』

王子は武人兄ちゃんの指摘で、自分の失態に気づいた。

地面が硬いのは私も知ってる。

王子のロボの右脚から、バチバチと火花も出ていた。

動きにくそう。

でも王子は諦めなかった。

『これくらいでは止めないぞ！』

『ほう。強いなお前。』

武人兄ちゃんは未だピンピンしている。

銃を小型に切り替えて弾を乱射した。

王子のロボも必死にかわした。

武人兄ちゃんは行動も素早かった。

負傷気味の王子のロボに接近戦を仕掛けようとする。

『遠くから狙う方が勝ちやすいけどなあ。近接戦しか無理そうやし。』

すると、兄ちゃんの一言で癪に障ったのだろうか。

王子のロボは腰に付けた小さな矢をたくさん、兄ちゃんに投げつけた！

矢は自動的に加速をつけて目標に向かっていった。

武人兄ちゃんが動くと矢も目標へまっしぐら。

かわしきれないと見た兄ちゃんは今持っている銃で矢を壊していった。

『くっ…飛ぶしかないのか…。だが…。』

王子のロボは上を見た。

演習場は基地内であって、天井があった。

武人兄ちゃんから教わった知識として、

『槍使いはジャンプして刺してくるのが得意』

と聞かされていた。

この敷地内では、王子のロボの方が不利だった。

それでもロボは必死に逃げ回りながらもがく。

今度は反対側に付けていた矢を投げたが、それも兄ちゃんに撃ち落とされた。

王子のロボの動きは、段々鈍くなっていった。

関節部分を放置すると、全体の動作に支障が出てくると、私達は兄ちゃんから聞いていた。

「もう槍を丸投げするしかねえだろ…。」

「だが相手さんは手薄になっちゃう…。奴が勝利するには、一か八かの賭けに出るしかねえな。」

「武人さんが接近した所で突くとか…どのみちリスクが高そうですね。」

勇希兄ちゃん、ジェームズさん、和希兄ちゃんと会話が進んだ。

私は黙って戦闘を観ていた。

鈍足になった王子のロボに、武人兄ちゃんの打った弾が被弾！

キィィと滑る音を立てて、ロボは停止してしまった。

武人兄ちゃんも接近する速度を落とした。

ほとんど兄ちゃんの勝利は確実。

でも、何でこんなにモヤモヤするんだろう。

私達が不安な目で覷てる中、武人兄ちゃんが近づくと、王子の口ボは槍で胸元を刺そうとした！

それもパワーが足りず、兄ちゃんに槍を掴まれてしまった。

『もう俺の勝ちや。もう降参し？ルールでは1本取ったら勝負が決まんねんから。』

武人兄ちゃんは小型銃を向けたまま降参を促した。

でも王子は諦めが悪かった。

『恥晒しなどいらん！だったら私を撃て！』

その後、空気が重くなった感じがした。

兄ちゃんが放った一言で。

『…可愛い娘もおって、民からも慕われとるのに…。ええわ。お前の思い通りにさしたる。』

撃たれるのは王子である。

だけど、私達もジェームズさんも息をのんだ。

最悪の場面に出くわしてしまったと。

兄ちゃんが銃のレバーを引こうとすると…敵襲のサイレンが鳴った。

☆☆☆

『緊急事態！緊急事態！地球に多数のロボット降下予定！

種別はHR【ホルブレス】！』

警告は繰り返し流された。

【ホーンフレア5 t h】の胸元をぶち抜こうとした【ブラッドガンナー】は、銃を下ろした。

『命拾いしたな。今後は言葉に気をつけや。』

武人は後ろを向いた。

『子供達とジェット機を乗せとき！後で俺も向かうわ！』

「子供を戦わせるのか貴様！？」

『今は急用や。それに、あの子らは地球の希望なんや。』

武人は【ブラッドガンナー】の状態で去っていった。

【ホーンフレア5 t h】は動けないまだ。

『お前は彼女と一緒に戦闘観ときや！』

去り際に武人は叫んだ。

代わりに、演習場の建物内にいたサレンが泣いた。

彼女は戦闘中、ずっとリュートを応援し続けた。

『リュート！』

「サレン、私はなんて惨めな戦を…。」

『助かってよかったよ…。私、ヒヤヒヤしていたから。』

「…君と民には、迷惑をかけた…。」

リュートが後悔するも、今は緊急事態。

アレックスが運搬用のA Iを用意した。

『ロボを回収する。ハッチは開くか？』

「被害は脚部のみ。脱出機能は作動する。」

リュートは【ホーンフレア5 t h】の胸部のハッチを開いた。

ロボの運搬が終わるまで、リュートはじっとしていた。

【ホーンフレア5 t h】は無事、建物内に収容された。

リュートは自力で降りた。

サレンとアレックスが彼を迎えてくれた。

「リュート！」と呼んだサレンはすぐに抱きついて、泣いた。

アレックスは負傷した機体を確認していた。

「こちらの部品で補修できるなら、こちらでも出そう。」

サレンはアレックスの方へ振り向いた。

「ええ。できればそれがありがたいです。」

「黒川は穏やかそうに見えるが…琴線に触れると静かにキレル事もあるんだ。」

「アレックスさん、手の震えがすごかったですよ？」

「よくないパターンだが、どちらも失わずにすんだのは幸いだ。」

アレックスはリュートの前に近づいた。

同時に頭を下げた。

「再戦を望むなら、今度は王子が有利な環境で戦闘できるよう、調整する。今回はこんな環境で申し訳ない。」

「私も気が立っていた。今でも納得いかない点があるが…。」

「黒川も30だ。奴も今の戦闘で水に流すだろう。」

アレックスは目の前の複数のPCを操作した。

「理解頂けるかどうか分からないが、我々【ラストコア】の戦闘を見て欲しい。」

リュートとサレンはPCを覗いた。

赤種と青種の【ホルプレス】に囲まれながらも、1機で挑む【パスティユ】。

【フラワー】が光の弾を多数繰り出す所だ。

「これって、戦えるの？」

「今回は初陣だろう。」

「何だと!？」

リュートが声を上げた。

だがアレックスは話を続けた。

「実戦でだ。訓練は実施しているし、オート操縦だが【ホルプレス】と出会っているんだ。あの子達は。」

「確かに、攻撃の仕掛け方は知ってるみたいね？」

「【ホルプレス】の青種が全て潰された…？」

「【フラワー】は広範囲型の戦闘形態だからな。大多数の敵を蹴散らすにはもってこいなんだ。」

P Cの映像では、【ホルプレス】の赤種しか残っていない。

これも【バステュー・スカイ】に変わり、素早い剣術で大多数を倒した。

締めの一機。リーダー格の【ホルプレス】は【バステュー・サニー】の格闘技で一気に潰した。

【ラストコア】の勝利。

武人は参加していない。

「これが…希望…」

乗ったのはあの子供達のはずなのに。

それからリユートには、後悔と疑念が残されたままだった。

3・糾弾の日



暗い、暗い。

僕はずっと闇の中。

怖い、怖い。

僕はずっと罵られる。

辛い、辛い。

僕はずっと耐えてきた。

だから、僕は泣き叫ぶんだ。

そうすれば、他のみんなが消えてしまうんだ…。

そうして…僕は負のループを自ら繰り返してしまうのだ…。

☆☆☆

「貴様に、任務を与えてやろう。」

【レッド研究所】の主人であるクーラン・レッドは、1人の宇宙人にそう言った。

彼の名はエスト・フレスラー。

クーランが引き入れたHRであり、全宇宙で広まる【7大犯罪者】の1人でもあった。

しかし、見た目は地球人でも通用する男性だ。

「任務…ですか？」

「難しい問題じゃねえなあ。わかりやすいモンだよ。」

クーランは顎を指で触っていた。

ニヤリと笑うクーランに対し、エストはオロオロしていた。

エストは落ち着きがない。

些細なことでも慌てだす。

だからクーランは彼に任務を与えなかった。

ところが今回、クーランはエストに任務を与えた。

「簡単に言えば、ラルクを持って帰ってほしいんだわ。」

「ラルクって…あの!？」

「奴は地球にいる。奴だけ引っ張ってやったら、地球はもうもぬけの殻さ。」

ラルクとは、クーランが愛した『息子』。

HRだったが反抗して地球にいた。

その実力はエストも知っていた。

11の星を潰した、最大の犯罪者との噂。

エストが潰した星の数はたった4。

ラルクはエストにとって脅威なる存在だった。

「倒すより楽だろう?心配すんな。運び屋も用意してやるよ。」

さらに褒美もやる、実力も認める。

クーランは響きのいい言葉を並べた。

「僕を認める…?」

「そうさ。お前を俺の軍の一員として、認めてやる。今までは半人前だと思っ
てたがな。」

「わかりました!今すぐにでも僕は行きます!」

エストは180度回転し、準備しようとした。

「まあ待て。俺の言う事聞いてからだ。地球のどこか攻撃宣言しろ。そしたら
奴はくる。」

クーランは忠告した。

エストは気持ちのいい声で、彼に返した。

「いいのか、行かせて。」

エストが部屋を出てすぐに、銀髪の少年が入ってきた。

「要は使いようだ。この機会ぐらいしか、奴は使い道が無いんだよ。」

お前さんの部下にしたら？とクーランは言うが…。

少年は首を横に振った。

「ギャーギャー喚く猿なんぞ、こっちからごめんだ。」

「手厳しいねえ…。」

「その代わり、運び屋をうちの部隊から引っ張るんだろう。報酬はあるよな？」

「お猿君の活躍に関わらず、お前さんには一定の報酬はやるよ。」

ククク、と笑うクーラン。

少年は用はないと悟り、部屋を出ていった。

「お前を捕まえるのは絶対だからな…。俺の手でやりたいもんだがな。出番は与えてやらんとな。」

競争は基本。勝てぬ者はいらん。」

クーランは暗い部屋の中、唯一の灯りでもあるモニターを眺めていた。

そこには…黒髪ロングの眼鏡をした男性が映っていた…。

☆☆☆

【ホルブレス】の襲撃、すなわち私達の初陣は、私達の勝利に終わった。

武人兄ちゃん達から訓練を受けているので、教わった通りにやってみようとした。

だけど、実戦となればやっぱり戸惑う。

まず、ロボ形態になるまでに時間がかかった気がする。

勇希兄ちゃんなんて終始騒いでたな。

でも、【ホルブレス】が大量出現していたら、1体ずつ倒すのではなく、一気

に殲滅する方法を考えろと、武人兄ちゃんから教わった。

私が提案し、【パスティユ・フラワー】として、たくさんの敵を蹴散らした。

魔法のようにロッドを振れば、光の球が飛び出した。

【ホルプレス】達は受けた。

青色の【ホルプレス】はそれだけで弾かれたように、爆発を起こした。

残りは赤色の【ホルプレス】だらけ。

【フラワー】のエネルギーが消費したので、形態チェンジやと武人兄ちゃんが叫んだ。

『スピードで回避し続ければ、ダメージは少ないだろう。』

和希兄ちゃんが乗り出した。

【パスティユ・スカイ】にチェンジした。

【スカイ】は両手に剣を持って、多数の敵に斬りかかった。

素早い動きで【ホルプレス】達は手も足も出なかった。

『地球に…こんな奴が…！？』

驚きの声も出てきた。

ほとんどのロボは、【フラワー】と【スカイ】で全滅した。

残りは隊長格だけ。

『俺にやらせてくれ！』

勇希兄ちゃんが叫んだ。

武人兄ちゃんの下承も受けて、【パスティユ・サニー】にチェンジ。

隊長格は動かなくなり、回避動作ができなくなった。

【サニー】は容赦なくパンチをお見舞いした。

隊長格は装甲が碎けてボロボロになり、後から爆発した。

私達の勝利だった。

戦闘後は無事に帰還して、私達は【ラストコア】内で泊まる…まではいいのだ

けど。

私は、今朝の模擬戦闘の件でモヤモヤしていた。

警報が鳴る前、武人兄ちゃんは王子を…本気で撃とうとしていた。

兄ちゃんの言葉と、構え方に嘘偽りが無いように見えた。

私は武人兄ちゃんが好きだけど…。

★★★

時間は夜になった。

今日も[ラストコア]内で泊まる予定で、私は基地内を歩いていた。

すると、私は外を眺めている武人兄ちゃんを見つけた。

外と言っても…実際は海底の映像であるが。

「兄ちゃん？」

私は声をかけてみた。兄ちゃんは気づいて、私の方へ向いた。

沈んでる様な表情だった。

「未衣子か…？」

「どうしたの？」

「大した事ないで？未衣子はどうしたんや？」

「今から閲覧室に行って…勉強しようかなって。」

「未衣子は熱心やなあ…。」

それからは、中々言葉が続かない。

武人兄ちゃんも、あの戦闘が気掛かりなのかもしれない。

当事者だもの、気になるのは当然だよ。

なんとか…気まずい雰囲気を開き直さなきゃ…。

「あの…。」

「なあ未衣子。」

私は名前を呼ばれた。

この時、自分の体を震わせた。

「お前にとっては、俺はどう映るんや…？」

それって…私からの客観的視点が欲しいの？

私は正直に答えた。

「兄ちゃんは優しい人だよ。命の恩人だよ。」

「そうか…。」

武人兄ちゃんの返答はそれだけだった。

再びの沈黙。会話が続かない。

下手に話題を探しても、不穏な空気を打開するのは難しい。

私が内心焦っていた時。

「なあ、未衣子。」

また兄ちゃんが呼んだ。

「もし、俺が地球を苦しめる敵に回ったとしたら、お前は…どうする？」

敵…？私達を助けてくれた武人兄ちゃんが敵に？

【ラストコア】の人達も信頼する兄ちゃんが敵に？

私は、兄ちゃんの言葉が飲み込めなかった。

ただ固まっている私の頬に、武人兄ちゃんの手が伸びた。

手から伝わる、兄ちゃんの熱。

私は答えを出さないといけないのかな、と本気で思った。

でも、私の考えすぎでもあった。

武人兄ちゃんの熱が無くなっていく。

兄ちゃんの手は、私の頬から離れていた。

「いや、気にせんでええ。君らはまだ子供や。もしもの時は宗太郎らに任せる

から。」

兄ちゃんはちょっとだけ笑った。

私は答えを出さなくてよかった、と少し安心した。

離れたのは手だけじゃなく、距離もそうだった。

「明日も訓練あるからな、勉強も程々にしい？」

武人兄ちゃんが手を振って、去っていく。

何事もなく。

私は期待に応えられてないのかな…。

だってあの時、何も言えなかったから。

敵になるって聞いて、怖かったから…。

一体、どうすればいいのだろう。

武人兄ちゃんの隣に立つには。

ずっと兄ちゃんの味方でいるの？

でも、敵になったら？

地球を滅ぼす事態になっても味方をするの？

自分の住んでる星なのに？

私の思考はぐちゃぐちゃになっていた。

勉強はしたけど、身についたのかはわからなかった…。

☆☆☆

【ホーンフレア5 t h】の修理は無事に済んだ。

関節部分の材質について調べた所、ロボの装甲開発の研究もしているアレックスは、類似品で賄えるのではと考えた。

演習場、オート操縦による実験を試みた結果、3度目の挑戦で類似品で関節部

分は耐えた。

サレンは再びお礼を述べた。

「ここまでご協力、ありがとうございました。」

「いやいいんだ。俺もHR以外の地球外ロボを観察できてよかった。」

「《神経チューブ》、やっぱり切れていたんですね…。」

「ロボの骨格は基本、合成金属なんだが…すぐに傷む。」

「柔らかい素材は必要なんですがね…。」

会話は続いた。

「関節部分のみならず、足裏のゴム素材も替えておいた。…狭い演習場で戦闘を実施したのがいけないが。」

「十分尽くしてくれましたよ。部品が無ければ宇宙船まで取り寄せないといけませんから。」

「実戦は不安だがこればかりは致し方ない。…それより王子は大丈夫なのか？」

アレックスは聞いた。

サレンはうん、と苦い表情をしていた。

「あの戦闘から落ち込んでるかも…仕掛けたのはこちらからだけど、本当は怖かったのかもしれないですね。」

「HRの戦闘経験は…。」

「武人さんが初めてですね。もしもの時は帰るつもりだけど…。」

残って欲しいのよね、とサレンは言わずとも示していた。

「協力が難しいようならば司令には伝える。王子の御身を優先してくれても構わない。…ネックなのは君達と戦争に発展しないか…。」

「それはないですね。王子の希望で地球に来たので、王や民は関与してませんので。」

サレンの反応を見たアレックスはホッとした。

彼女の前には見せないが。

☆☆☆

マニュアル操縦時での初陣後も、私は毎日「ラストコア」に通っていた。

武人兄ちゃんの問いには答えられなかったけど、だからと言って、サボる理由にはならない。

せめて、私にできる精一杯の努力をしなければ。

次の学校休日。朝から来ていた私は、昼食を食堂で取るようにした。

正午だとやはり人は多い。

でも、座席は確保しやすいので、この多さは苦じゃなかった。

栄養満点なメニューを注文して、席を決めようとする、ある人物を見つけた。

端の座席で1人座る男性。食事は飲み物とパンだけ。

私はこの人を知っていた。

武人兄ちゃんに挑んだリユート王子だった。

「あの…向かい、いいですか？」

私は先に聞いた。

黙って座るのは相手側が不愉快になるかもしれないから。

王子の返事は。

「ああ…構わない。」

OKらしいけど、どこか元気がない。

やっぱりこの前の戦闘を引きずっているんだ。

私は悩みを聞いてあげようと、向かいの席についた。

「それだけで、足りるんですか？」

「ああ…。随分量が多いようだが、君は食べられるのか？」

「朝はたくさん動いたから食べられるよ。」

訓練を通して、鍛えられてきたから。と私は続けて言った。

そうか、と王子が反応した後は、2人の間に沈黙が続いた。私もどう話したらいいか難しくて…。

でも、このままでは何も始まらない。

私は勇気を出して、王子に話しかけた。

「あの、」

「君は…奴についてどう思っている？」

王子が喋り出した。奴…？

「武人兄ちゃん？」

「そうだ。純粋な少女である君は、奴を慕っているのか？」

「助けてくれたんだよ？兄ちゃんは私達を。」

「奴は犯罪者なんだぞ。」

「犯罪者…？私にはそうには…。」

と言いかけた私は、思い出したのだ。

兄ちゃんが言った、『敵になったらどうする』という問い。

私はまだ答えていないのだ。お箸の動きが遅くなった。

「…何か、奴が言ったか？」

王子が私の食べる動作を見て言った。

私は黙り込んだ。王子にはお見通しなのかな、と思ったから。

「もういい。質問を変えよう。」

王子は話さない私を見て、話を切り替えた。

「君は何故、毎日この基地に来ている？学校などあるだろう？」

「学校は行ってるわ。その時は終わってから来ているよ。」

「しんどくないのか？」

「むしろ楽しいよ。新しい事に挑戦できて。」

「それが何を意味するのか、わかってやっているのか！？」

王子の声のトーンが大きくなった。

これは多分、私達子供を心配しているサインなのは、理解できた。

「…教えてもらってる。危険なのは。でも私、学校が嫌いなの。無理して通ってるの。」

「学校が嫌い…？」

王子は驚いた。彼からしたら、学び舎を嫌うなんて考えられないだろう。

「いじめられてるの私。だから外では私1人にしない決まりができて…。」

「君は1人でも来ているだろう？」

「勇希兄ちゃんの空手について行く、って言って出て来たから。帰りは迎えにくるよ。」

もちろん本当の事。嘘はついてないよ。

王子は質問を繰り返した。

「君はなぜ、いじめられているのだ？」

学校が嫌って答えたら、そう聞いてくる人がほとんど。

慣れているので、正直に答えた。

「私のみる夢がおかしい、って口を揃えて言うんだ。同じ夢しか見れないのに。」

「夢？」

「いつも同じ男の人が戦っている夢しか見れなくて…でもみんなはいろんな夢を見るからおかしい、って言うんだ。」

「…待て。同一の夢しか見れないとは…！」

王子が言い終わる前に、大きなサイレンが響き渡った。

もちろん、警報アナウンス付き。

1週間も経たぬうちに、敵がやってきた…。

☆☆☆

時は少し遡る。青い星・地球の近くの宇宙で、白い大型船が進んでいた。

船内の操縦室では、揉め事が起きていた。

「落ち着いて下さい！もう地球ですよ！」

「早く手柄を取りたいんだ！」

「我々が先に出来ます！貴方は標的が現れたタイミングで指示しますから！」

「うるさい！」

大の大人を小人達が囲むような構図。しかし微笑ましい光景ではない。

エストは自分を囲む小人達を押し返けて、操縦室を出ようとした。与えられた任務をこなす為に。

「ラルクは目の前だ！」

「今行ったら失敗します！」

「【ホルブレス】だからだ！僕は違う！強いHRだぞ！」

うおりゃあ！と大きな掛け声。エストが小人達を弾き飛ばした。

大声をあげたまま、彼は走っていった。

「待って下さい！」

入れ替わりで映像の通信が入った。

『行かせてやれ。』

「しかし隊長…。」

『奴は罔として、他のロボと戦ってもらおう。捕獲は我々で行おう。』

「わかりました。」

小人の1人が通信回線で隊長格の小人とやり取りしている頃。

猛ダッシュしたエストは船の格納庫まで来ていた。

HR形態に変身してまで、外の宇宙に出たがっていた。

『ここを開ける！扉を壊すぞ！』

脅しをかけたエストだが、隊長格の指示を仰いだ小人達は潔く後方の巨大な扉を開けた。

エストは宇宙へ出た。

しかし、問題はある。大気圏突入についてだ。

考えなしに突発的な行動を取ったエストだが、HR【ティア・ルーチン】には両腕にシールドが備わっていた。

これが自身を守る盾となった。

やがて空の色は明るくなり、エストの目にも緑色と茶色を視認するようになった。

HR【ティア・ルーチン】はドォン！と両足をつけて着地した。

動物が逃げ回る程の轟音。

着地点にはロボの足跡が深く刻まれた。

着地点から1歩前へ、動いただけ。

エストは高らかに叫んだ。

『出てこいラルク！お前をクーラン様に献上する！』

そこは荒地で、地球人はいなかった。

☆☆☆

ジェット機状態の【バステューク】に、私と2人の兄は乗っていた。

ジェット機は動いてない。

収容している輸送機内でじっとしていた。

でも、進路は確認できた。

モニター画面にカーナビのような地図が表示され、私達と敵の位置も把握されていた。

敵は海外の荒地にいるらしい。

『発進したら戦場や。何度も言うけど、生き残りたいんやったら勝つんや。それがどんな強敵でもや。』

武人兄ちゃんの、暴論に聞こえる発言。

でも、2度も経験したらそれはまさに教訓だと気付かされた。

今もまだ怖い。でも逃げてたら私達がやられるし、地球までもが…。

考えるとゾツとしてる。

武人兄ちゃんは小さい脱出口の前にいた。

補聴器を付けているので、私達や【ラストコア】の人達と連絡が取れる。

『敵を確認しました。拡大します。』

輸送機の操縦士さんが言った。モニターでも、敵の姿が見えたけど。

「あれ…？【ホルブレス】じゃ、ない？」

『本当だ！全然違うぞ！』

『敵は1体だけ？』

反応はそれぞれだけど、私達は【ホルブレス】じゃない敵に戸惑った。

でも、武人兄ちゃんは私達を落ち着かせた。

『【ホルブレス】と違ってちょっと手強いかもしれへん。でも、君らの乗ってるロボは最強や。これはお世辞やないで。』

そうだ。私達のロボは最新鋭だって言ってた。

『本当は俺もついて行きたいとこやけど。様子がおかしい。先陣は君らが切つて、後ろは俺が取る。』

まずはこれで行こう。と武人兄ちゃんは言った。

その後、操縦士さんから発進準備はいけるのか、確認があった。

私達はすでに、ベルトもしてるし、両手にレバーを握っていた。準備は万全だった。

『繰り返すけど、レバーはちゃんと握ってね？合体は状況判断してやってね？』

「はい！」

私達全員、返事した。

『じゃあ、飛ばすからね！発進！』

ブーン！と音立てて、格納庫の床を滑らせた。

すでに開いていた輸送機後方から、私達のジェット機が飛ばされた。

ジェット機は水平に飛んだ。

☆☆☆

「王子を連れてきました。」

「…大丈夫か？」

「ああ…。」

リュートの返事は鈍かった。

アレックスには[ラストコア]内に専用の研究室を設けてもらっている。

ただ研究・開発の為の作業場ではなく、休息が取れる寝室も用意されていた。

リュート達を2人掛けのソファに座らせた。

「また、嫌な場面を見せてしまうが…。」

「構わない。私とて、何もしないわけにはいかない。」

「本来ならば、同行させたかったが…その調子だと足手纏いだろう。」

アレックスの気持ちに、リュートは歯がゆい感情を持った。

すでに武人との戦闘以来、複雑な心境になっていたのだが。

備え付けのモニターには、現在の戦闘状況が映る。

3機のジェット機が合体し、【パステージュ・スカイ】で敵に近づいていた。

「奴は…」

「輸送機にいるようだ。考えがあるらしいと。」

「まさか！」

「不味い状況になればすぐに飛ぶと言った。敵の動きを読みたいそうでな。」

【パステージュ・スカイ】は持ち前の速さで近づくのは容易かった。

敵は…武器を持っていない、濃い紫色のロボ。

機体のラインが赤く光る。

攻撃開始、の筈だが。

紫色のロボ【ティア・ルーチン】の周りに渦のような強風が吹いた。

【スカイ】は弾き飛ばされた。

3人とも目を見開いた。

「身体に能力を秘めているのか…？」

「口元拡大できます？牙のような歯が…。」

「口のついたHRか…！」

敵のロボがHRと判断したが、3人とも初めて見たタイプで、詳細は知らなかった。

この映像は音声も入る。

もちろん、敵のHRの叫び声も。

『ラルクは白くない！出てこいラルク！』

☆☆☆

ラルク？初めて聞いた名前。

でも、どこかで聞いた事あるような名前…。

それは私だけかもしれない。

ラルクは白いロボじゃなければ、黒っぽいロボ…。

王子のロボは…黒より青と表現する方が良さそう。

まさか…。

「武人兄ちゃん？」

私は無意識に名前を言った。

『いや…違うだろ。』

『あの人の名前、黒川さんだし…』

2人の兄は否定していた。彼らも知らないのだけど。

でも、大声で叫ぶ敵と戦わない理由にならない。

むしろ、彼が呼ぶ相手が仮に武人兄ちゃんだとしたら…。

その可能性も否定できない。

「やっぱり、ここで食い止めよう。」

『そのつもりだぜ！』

勇希兄ちゃんが答えた。

和希兄ちゃんから返ってこなかったけど、とりわけ過度な反応もなければ肯定の意だろう。

『聞こえてるぞ！お前達の声は！』敵のロボの声だ。

『さっさとラルクを出せ！地球にラルクはいる筈だ！』

未だにラルクと声を荒げる敵のロボ。

『その前に俺達が相手する！ 武人さんに任されたんだ！』

和希兄ちゃんが答えた。

【パスティーユ・スカイ】は両手に青く光る剣をクロスした。双剣の上から、敵のロボが見える。

私達は敵に勝負する気満々だった。

しかし、敵のロボは。

『ラルク以外の相手はしない！』私達を吹き飛ばした。

『威力がすげえ…！』

『【スカイ】では装甲が弱い…勇希！【サニー】にチェンジだ！』

和希兄ちゃんが提案した。

勇希兄ちゃんは了承し、機体から光を発して、【パスティーユ・サニー】にチェンジ。

【パスティーユ】は熱でロボの形を変形させる。

コックピットは球状の特殊ガラスで守られて。

『いくぜ！雄叫び野郎！』

勇希兄ちゃんは突撃する前に叫んだ。

雄叫び。確かに敵は叫ぶと、私達を吹き飛ばす威力を持っている。

それで戦うなんて、凄いなあ。

感心している場合じゃない。彼を倒すのに集中しないと。

【フラワー】じゃないからってサボったらダメだ。

サポートしないと。

☆☆☆

（俺の策は、不味かったかもしれん。）

武人はH R形態になり、未衣子達が交戦する敵を目指して飛んでいた。

数分前、武人は輸送機の格納庫にあるモニターで戦闘を目撃していた。

敵は近づく奴を吹き飛ばす。

となると、近距離戦には持ち込みにくいのは想像に難くなかった。

操縦士に指示して、別の小さい脱出口から、武人は降りた。

耳に補聴器が付いている為、操縦士とは連絡が取れる。

『この方角で合ってる思うけど、』

『連絡取っています！』

（まだ子供やからなぁ…目の前まっしぐらや…。）

風は強くない場所。

進路さえ合えば、敵を間近で視認できると思った。

同時に武人は嫌な予感を感じていた。

（H Rは《同調性》があって、逸脱した能力持ち以外は集団で襲う。今回ののは

【ホルプレス】以上やけど、攻略しやすい方や…まずはあの子らに…！？）

物事を考えている時に、不意打ちはやってきた。

【ブラッドガンナー】の背後から、真っ白なサイコロが飛んできた！

攻撃を察知していた武人はサイコロをかわす。

今度は前からサイコロが飛んできた。

これもかわした。

（やっぱり…！）

武人の予感は的中していた。

未衣子達が現在交戦中とのロボ以外にも、敵が潜んでいる事。

だから武人は、未衣子達と出撃をずらしたのだ。

緊急時以外は見守るつもりだった。

サイコロは増える。前からも後ろからも上からも。

未衣子達に駆けつけようとした気持ちが…ここで仇となるのか…。

武人は通信を繋いだ。

『今すぐ【パスティーユ・フラワー】にチェンジしろって言ってくれへん!? 遠いところから攻撃する方が楽やと!』

攻撃を交わしながら、武人は怒鳴った。

多数のサイコロ攻撃になんて事はない武人だが、ずっと続く自身のストレスが溜まる。

誰かが仕組んでいるのに、顔が見えないのにイライラ。

さらにサイコロの角から、白い糸状の線が出てきた。

【パスティーユ】の開発に協力した武人には、この線の意図が読めた。

自分を捕獲する目的だと。

『お前らの目的はわかった! コソコソせんと出てきいや!』

武人は叫ぶと、糸状の線を電撃銃で切った。

電撃銃の銃口には、縦状の稲光が出ている。

線を何本か切って、【ブラッドガンナー】は糸の巣から脱出した。

既に、武人は周りに囲まれた。

サイコロ玉のロッドを持った白いロボの群れだった。

☆☆☆

『【パスティーユ】の子供達! 今からよく聞いてくれ!』

操縦士さんから通信が入った。

【サニー】で何度も接近を試みるが、敵が叫ぶ度に弾かれる。

耐久性の高い【サニー】だけど、何度もダメージを受けると、ロボも私達の精

神も疲弊する。

だから、操縦士さんの緊急通信は有り難かった。

『【フラワー】にチェンジして、距離を離して攻撃するんだ！無闇に近づくだけではボロボロになるよ！』

【パステュー・フラワー】。

私がメインパイロットになるロボ。

魔法使いの様な攻撃と防御ができるロボ。

私達は承諾して、【フラワー】にチェンジした。

右手のロッドで光の球を出した。

『そんなしょぼい球で、僕を倒せるか！』

敵のロボはまた叫んだ。

衝撃波の如く、球はロボの前で弾かれてしまった。

叫びの余波は私達にも及ぶ。

でも【フラワー】にはバリアを展開でき、これで被害を軽減できた。

敵は未だに立っている。

けど、ハア、ハアと息を吐く声も聞こえた。

モニター越しで画質は荒いけど、濃い紫のロボの肩は上下を揺らしていた。

あんなに叫んで、疲れないのかな…。

同時に、こんな心配も抱えてしまった。

（あの人、悲しそうにみえる。何でかな…？）

倒すべき敵なのに、かわいそうだと思っていた。

急に、何か役に立てないかと、考えていた。

そうだ。試しにやってみようかな。

最初の【ホルブレス】戦では恐怖でできなかったけど、今はロボに乗っている。

説得だ。基本、交渉とか会議とか…話し合えば解決できる事もあるから。
もし彼が悩んでいて、悩みを聞いて、解決策を練れば…彼は叫ぶ苦しみから解放するんじゃないか…。

「あの、聞きたい事があるの！」

『え？』

『未衣子、何やって…。』

兄達には突然の行為に驚いただろう。

でもそれを私は気にしなかった。

敵の口ボはまだ、ハアハア言っていた。聞こえてないのかな？

「聞こえてる？私の声！」

もう一度、私は話しかけた。

ようやく彼がこっちを見た。

☆☆☆

敵は【ホルブレス】の集団ではない。

だが武人は次々と撃ち落とす。

糸の巣から出てからまず数体、その合間に糸の巣を破壊。

迎撃はテンボ良くやっていた。

しかし、敵は増えていく。無限に増殖するように。

全てが白いロッドを振って攻撃してきた。

数が増えても、武人は対処した。

魔法のような攻撃を仕掛けるHRに、武人は見覚えがあった。

上を見上げる武人。その先は青空しかないが、彼は叫んだ。

『部下に動いてばっかりさせんと、いい加減出てきたらどうや！？』

誰かが宇宙にでもいるんだろう、と武人は思った。

だが武人の発言は虚しく、何の反応も返らなかった。

【ブラッドガンナー】は武装をチェンジした。

普段の標準型よりもゴツイ武装を施した。

両手にミサイルを放つ連射砲。

胸元にも…大砲の銃口が。

『天王星圏スイル、マルロ・ヒーストン！上で眺めてんと降りてきいや！俺の命ごと部下を落とすで！』

武人はまた、空に向けて叫んだ。

流石に周りに変化があった。

多数の白いHRが、武人から離れていった。

武人は戸惑い、離れて去る敵を撃ち落とせなかった。

（戦う意志あるんかわからんな…。）

敵のHR集団が空へ上がるのを見た武人は、未衣子達をサポートする為、【バスティーユ】の元へ駆けつける事にした。

☆☆☆

『何の、つもりだ。』

「どうしてあなたは、何でそんなに泣き叫ぶの！？」

『泣き叫ぶだと…！？僕が…。』

敵のロボは驚いた。

もしかして、泣いている感覚がないんだろうか…。

泣きじゃくる子供の様だと私は思ったけど。

敵の反応に違和感あっても、私は話し合いを続けた。

「だって戦うんだったら、私達に近づくのになぁ、って。」

『僕はラルク以外は…。』

「私達が邪魔だったら落とせばいいだけの事。こちらも装甲がポロポロだけけど耐えている。武人兄ちゃんの言うHRだったら、倒せるはずだから。」

私は精一杯、敵のロボに自分の考えを言った。

せめてでもと。

敵のロボが止まった。

正確に言えば、肩の動きが止まった。

『…だったら、教えてやる。』

敵のロボが言った。

覇気が戦闘時よりも収まっていた。

私の問いに応じてくれるんだ。

【パスティユ・フラワー】も距離を離して着地した。

近づくのだけは、ちょっと様子を見ようとした。

『僕は、ずっと避けられてた。』

避ける？嫌われるのと同じ意味かな。

『産まれた時から捨てられ、冥王星圏の研究施設をたらい回しにされて…誰も僕を助けようとしなかった。』

酷い。そんな過去が…。

『悲しみのあまり無差別に星を潰したら、クーラン様と出会った。だが僕を信用しなかった。』

敵のロボは話を続ける。

『待ち続けた結果、クーラン様は僕に命じた。ラルクの捕獲を。なのに！僕はラルク以外の敵を相手している！このままでは、僕はまた捨てられてしまう！』

「そんな事…」

『あるさ！あの人は結果にしか拘らないから！僕は…』

「なら、私達が助けるよ。」

『！？』

『おい未衣子！』

『どうなってるんだ…。』

兄達は動揺していた。それを無視して続けた。

「貴方は強いよ。だって私達とこんなに戦える。私達のロボは凄い技術を使ってるって言われているの。それでもこんなにダメージを与えてくれる。」

『そうなのか。』

「だから、自分に自信を持ってよ。」

13年しか生きてない私が言える義理はないけど、この人にはそうしてほしいと願ったから。

「負の感情がコントロールできないなら相談して？解決する方法を一緒に考えよう？」

話をする内に、自然と距離が縮まっていた。

【フラワー】は敵のロボの正面に立っていた。

一番攻撃されやすい所に。

『やめろ未衣子！』

『武人さんはまだですか！』

勇希兄ちゃんは私を止めようとした。

和希兄ちゃんは応援を待っている。

至近距離で敵の前にいるのに、私は怖さが消えた。

敵のロボが仕掛けに来ない。

戦う意欲を失ったのだろう。

【フラワー】の手は握手を求めるように、彼の前に出した。

『いいのか？僕はHRとしても役に立たないんだぞ？』

「そんなの後から考えたらいいよ。今は貴方を救いたい。泣いてる人を倒すなんてできないよ。」

敵のロボ、もう敵じゃない。

彼は私の言葉に感応したのか、【フラワー】と反対の手を出した。

2つのロボの指先は…もうすぐ触れ合う筈、だった。

☆☆☆

【ティア・ルーチン】の周りにすっぽり収まる位の円が刻まれていた。

エストはそれを知らなかった。

彼の目には見えなかったからだ。

嵌められたと知ったのは、【パスティユ・フラワー】の手を取ろうとした時だった。

刻まれていた円が光り出した。

それからの動きは速かった。

円の溝から幾多の光の糸が、植物のツルのようにメキメキと生えてきた。

糸は全て、【ティア・ルーチン】の胴体を絡めてしまった。

その時間、わずか数秒。

一瞬の動作に、【パスティユ】は動けなかった。

エストはもがき足掻くが、糸を解く術を知らない彼は、何も出来なかった。

ようやく、【ブラッドガンナー】の姿が見えた。

『下がるんや！【フラワー】！』

武人は指示した後に、右手の銃で雁字搦めの【ティア・ルーチン】を撃った。

咄嗟の判断でダメージは与えられなかったが。

【パスティユ・フラワー】はすぐに後ろへ下がったが、エストの奇声の余波を受けた。

『うわああああ！』

エストは叫んだ。それは断末魔のようで。

糸からサイコロが実り、サイコロから電撃が放たれた。

痺れで麻痺させる様な攻撃だが、エストは声で抵抗する。

声の威力は今までの攻撃よりも強力だった。

しかし、エストの抵抗も虚しく、彼の敗北で終わった。

ロボの手のひらぐらいの小さなサイコロが、【ティア・ルーチン】の胸の中心を刺した。

そこはHRの《心臓》の機能がかった。

そこを突いて決ると…HRは機能停止してしまう。

停止した【ティア・ルーチン】は力が抜けていき、関節部からオイルを溢し。

電気が起爆剤となり、爆発した。

武人の指示以降、ある程度距離をとっていた【パスティユ】。

【フラワー】のバリアもあってか、ダメージは軽く済んだ。

隣には【ブラッドガンナー】が空中に浮いていた。

もちろん【パスティユ】も浮いていた。

大爆発の惨状を、2体のロボは見守るしかなかった…。

『黒川さん、話があります。プライベート回線でいいですか？』

爆発の沈静化が見えた頃、2体のロボは撤退を始めた。

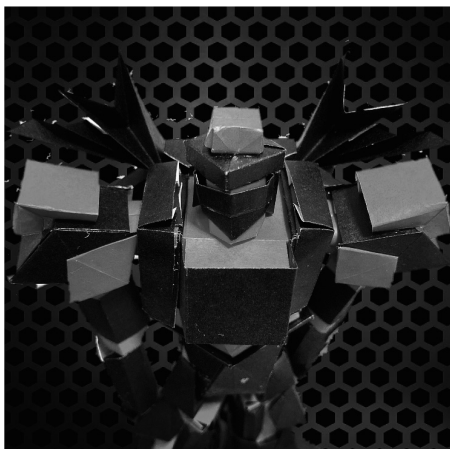
【ブラッドガンナー】の頭部右側の補聴器から、操縦士の通信が入った。

『帰ってからでも聞くけど、何や？』

『それが…。』

操縦士は困り果てた様子で報告した…。

4・暴挙の日



火星圏タレス、[レッド研究所]。

「やるねえ。お前さんも。」

暗い部屋で多数のモニターを眺めているクーランの声だ。

これはクーランの背後に立つ少年に向けて言ったセリフだった。

「切り捨てただけだ。これ以上、ベラベラ喋られるとこっちもイライラする。」

「お前らを刺激したんだなあ。」

「自分が被害者だと思い込む面には、反吐が出るだけだ。」

「そうだなあ。ま、ラルクを逃したのは痛い？」

クーランが目だけで後ろを見た。

「俺達は只の運び屋。助っ人だ。任務に失敗したのはアイツでいいだろう。」

「それより報酬か。ま、約束はしたからな。」

モニター画面が切り替わった。文字の入った図表が展開された。

「食糧と物資だ。欲しいもんあれば換金でもして買えよ？」

「十分だ。元々戦しか知らないんだ。気分を満たす娯楽など持ち合わせてない。」

「冷やかだねえ。」

クーランは図表を閉じた。その行為に少年は何の反論もなかった。モニターは映像だらけになった。

「ところで、次に派遣する奴決まったんだな。」

「あの巨人にしたわ。」

「…奴なら援護の必要はないな。」

「ラルク以外にも敵が増えたからなあ。あの白いのと、もう1個…。」

何だったかなあ、とクーランは唸った。

時間は経たずとも、少年が答えを当てた。

「宇宙船、が見えたな。」

「もうお前さんも解析すんでんだろ？」

「[フレアランス]と書いていた。乗組員は不明だ。」

「土星の王家だったら、ロボくらいあるからな…。」

「まさか。」

少年が言うと、クーランは彼の方を向いて、ニヤリと笑った。

「HRを持たない者同士組むだろうな。ラルクはHRだがな。」

クククと声を上げるクーラン。

「まずは自慢の息子の周りを消す、という魂胆でいいな？」

「やっぱお前は物分かりいいなマル口。火星圏だったら俺が可愛がったのに。」

「不自由な環境は逆に失敗に繋がる。ラルクは従順で優秀な息子だった。それでいいだろう。」

「手厳しいねえ、お前。」

「…話を変える。奴…ヒスロ・インフィはいつ降ろすんだ？」

「奴なら通信で呼び出せる。近くまで来よったらこっちの首が飛びそうだ。」

「お前の操作次第でトラップセンサーを発動できる癖に、よく言うな。」

右手のロッドの底を突きながら、少年マル口はクーランの前から去った。

1人きりになったクーランは、手元のキーボードを触り、モニターの画面を切り替えた。

誰かに連絡を取るために。

「よお、よく寝れたか？」

画面には大男が俯いている様子が見られた。

「お前にいい任務をやろう。お前の欲求を満たすもんで、簡単な奴だ。」

すると大男が顔を上げた…。

☆☆☆

戦闘から帰ってきたら、私達は怒られた。

特に輸送機の操縦士さんと、ジェームズさんに。

ジェームズさんは別の出張でしばらく空けていて、【ラストコア】本部へ戻って間がなかった。

話を聞いただけで怒りが込み上げてきたんだろう。

それだけ私…の行為は酷いのだった。

あの迷惑なHRを引き入れるとはどういう神経してるんだとか。

勝手な行動を起こすなとか。

地球の危機に繋がるんだぞとか…。

当たりキツイけど、言いたい事はよく伝わってきた。

私達は何も言い返せなかった。

当事者の私なんて、顔を俯いてばかりだった。

同時に、優しさってなんだろうと。

そんな批判の嵐の中で、武人兄ちゃんは私達を庇ってくれた。

「今回の件は俺の責任や。俺がこの子らを先に行かせたからや。同行すべきやったと思う。」

「黒川さんの作戦と同情するのは違いますよ！」

そうさそうさ、と周りの皆さんの声はヒートアップしていた。

兄ちゃんの次の一言が出るまでは。

「犯罪者を救うな言うところけど、お前らが言える義理はないで。

確かにHRやとやってきたもんはデカイ犯罪や。

でもな、誰かが手を差し伸べない限り、負の感情しか見出せなくて、結果罪を

重ねてしまう。

大きな悲劇を生む前に救えば、心変わりする。

地球人も宇宙人もそれは同じや。」

武人兄ちゃんの話は終わらない。

「お前らが最初に紹介された時を思い出し。俺や宗太郎や局長達に拾われる前の事をや。

H Rの犯罪者を悪く言うところけど、好きで犯罪を犯してるんとちゃう。

生き延びる為に誰かを犠牲にして、泣く泣く罪を重ねてしまったモンが大半や。

後は俺が注意しとく。」

統制制御室にいた誰もが反論せず、ただ俯いていた。

武人兄ちゃんの発言には、よほど応えたんだ…。

兄ちゃんの後に口を開けたのは、西条司令だった。

「君達や黒川の思いやりはよくわかる。我々も協力したい。だが、せめて声をかけてくれ。

希望に添えるかはわからんが、助言はできる。」

わかったか？と西条司令は私達に返事を求めてきた。

「わかりました。」

「…はい。」

「うん。」

2人の兄の返事が重かった。

…私のわがままに付き合わせてしまったからだと思う。

私も戦闘中に言ったらよかったけど、目の前の救済に夢中になりすぎていた。

もっと冷静にならなきゃいけないな。

「よし、今日はここまでだ。ゆっくり休むといい。」

「ご家族には連絡を入れておく。もう2度と変な行動起こすなよ？」

ジェームズさんは携帯を取り出していた。

すでに家の番号は知っている。

私達は武人兄ちゃんと統制制御室を後にした。

疲れと悲しみが混じって、早く眠りたい気分だった。

☆☆☆

リュートとサレンは、アレックスの自室で戦闘の様子を、映像で観ていた。

その後の未衣子達が叱られる場面も。

「流石にそれを掘り起こされるとこたえるな。」

「え？」

「いや、何でもない。」

アレックスが呟いているのをサレンは聞いたが、彼が問題視してないので気にしなかった。

「長時間の閲覧ご苦労様。飲み物入れるが…。」

「お茶を頂けるか？食堂で飲んだ飲料が美味しかった。」

「私もお茶が美味しかったです！何か手伝いましょうか？」

「お茶汲みなら慣れている。大丈夫だ。」

アレックスは自室の隅にあるキッチン台へ行き、冷蔵庫の扉を開け、お茶のボトルを取った。

リュートとサレンは待っている間、話を始めた。

「HRを改心させる、ねぇ。あの子達度胸はあるけども、行動が無謀すぎたわね。」

「あの単純な犯罪者だったからよかったものの…下手をすると子供達はやられ

かねなかった。」

「黒川さん？あの人銃の使い手だし、代わりに行ったら良かったのに。」

サレンの考えに、うむ、とリュートは相槌を打った。

その後に出た答えは、サレンを驚かせた。

「だがあの男の判断で正しかった。あの男は大量のHRとぶつかった。皆、技で翻弄させる戦術を使用した敵だ。子供達ではあの男よりも苦戦しただろう。」

「叫ぶだけの敵1体の方が、相手しやすいって？」

「やはりそう考えていたか。俺も似たような考察だ。」

はいお茶、とアレックスは2人に渡した。

「ありがとうございます。」

「おかわりはある。遠慮せず飲んでいいぞ。」

いただきます、と言って2人はお茶を飲んだ。

リュート達の話は続く。

「ご存じかもしれませんが、HRには《同調性》がある。」

「特化した力がない場合、他のHRと共に行動する、協調性のような？」

「そうだ。今回のHRは悲鳴を上げてダメージを与えるという、変わった攻撃をする。」

「しかし、それ以外の攻撃はない。総合的には能力は低めだな。」

リュートはお茶の残りを少しずつ口に入れた。

まだお茶は残った。

「説得とかしなくても、あのHRは倒せた筈なんだよね…。何であの子達は…。」

「感情移入でもしたのか、あのHRから滲み出た負の感情を、理解したのか…。」

「そんな事…わかるの？」

サレンは首を傾げた。

未衣子達とエストは初対面であり、口朮越しでしか会ってない。

感情移入は難しい。

リュートは未衣子達が感情を読み取る事を成し得たんでは、と踏んだのだ。

「まだ子供だからな。困っている人を素直に助けたいという意志が強かったんだらう。事情を知る大人達は、思う様に体が動かないからな…。」

「救済…ねえ。」

サレンはお茶の入ったコップに目を落とした。

アレックスはお茶のボトルを上へ上げ、2人に尋ねた。

「おかわりあるが、もういいか？」

遠慮せずに、という彼だったが、2人は断った。

「私達も休みます。これからの生活を考えないといけませんので。」

「いい体験をありがとう。」

「大したモノじゃない。王子が元気になったならそれでいい。」

リュートはコップをテーブルに置き、アレックスの前に右手を差し出した。

アレックスは左手で握手を交わした。

お茶を飲み干し、リュートとサレンはアレックスの自室を出た。

アレックスは研究の為、緊急時以外自室に居ると本人が言った。

当てがわれた部屋に戻るため、2人は廊下を歩いた。

「本当に地球のお茶は美味しいね。喉がすっきりするし。」

「そうだな。」

「母星に土産として持ち帰りたいけどなぁ。」

「…サレン。ちょっといいか？」

その後リュートが立ち止まり、サレンも同じ様に彼の前で止まった。

「どうしたの、リユート？」

「これからの計画についてだが…。」

☆☆☆

誰か、誰か。

我に挑む者はいないのか。

我が大地に立つと、皆は逃げる。

我に挑む勇敢な戦士も、私の腕力で粉々に砕かれる。

足りぬ、足りぬ。

お前達の闘志が。

それで我を満足させるともいいたいのか。

我に争える者よ。

私の元に参るがいい。

我がその期待に応えよう。

★★★

木星圏フォトムのHR、ヒスロ・インフィがクーランに捕縛されたのは、ほんの数年前だった。

クーランの巧みな発明技術の数々に翻弄され、巨大HR【アング・ウォール】は強度の高い線で縛られてしまった。

初めて負けを経験したヒスロ。

だが彼はクーランを「卑怯者」と呼んだ。

自身は表に出ず、発明品頼みでヒスロを落とす。

線で捕縛した後、薬の入った注射で細胞を破壊し、強制的に生物形態に戻された。

巨人のような体格の男であるヒスロだが、頑丈に絡まれた線は彼を不自由にした。

加えて、小さな窓しか光が差し込まない暗がりの石室で、ただ1人固定されていた。

孤独に苛まれた数年だったが、ヒスロにも解放の時が来た。

クーランの一報だった。

『地球にはラルクと地球人と宇宙人がいる。ラルク以外の生物が邪魔だ。其奴らを潰せ。』

内容は一貫して、任務遂行の件だった。

だがヒスロは内容を聞き取らず、《ラルク》の名前に反応したのだった。

ラルク。

クーランの《自慢の息子》で、11の星を滅ぼした強力な宇宙犯罪者。

ヒスロにとって、伝説の奴だと思っていた。

何故なら、今までの人生で1度も出会えなかったから。

粉々に粉碎するように星を滅ぼした彼は、相手の生物の顔を全く覚えてないのだ。

既に砂みたいな屑にしまうから。

伝説の奴に会える…ヒスロの胸は高鳴った。

クーランの遠隔操作により、ヒスロを縛り付けていた鎖は全て引きちぎられた。

彼はすぐにH R形態と変貌させ、力を解放した。

石室は完全に崩壊した。

それを気にせず、ヒスロは宇宙へ飛んでいった。

数秒で巨人の男の姿はなかった。

★★★

エストの襲撃から次のサイレンが鳴り響くまで、わずか数日しか保たなかった。

〔ラストコア〕内ではスタッフ達が総出で緊急事態に備えていた。

もちろん、武人も輸送機に乗り込み、出撃しようとした。

だが、見当たらない人物達がいた。

和希・勇希・未衣子の白井3兄妹の姿だ。

平日の昼間。中学生と高校生には学校で勉学に励むのが基本だった。

未衣子達が〔ラストコア〕内にいないのは当然の理由である。

オペレーターの呼出には応じてもらうつもりだが、合流するまでに時間は稼がなければいけない。

「愛嬌市に先行っというて！俺は震源直行で行くわ！」

武人が叫んだ。輸送機に乗り込む直前、武人はある若者達に会った。

彼らは反対側から輸送機の乗り口にやってきた。

武人に挑んだ男だった…。

「王子か？危ないから部屋に籠るとき！」

「その必要はない！私達も戦に参る！」

「メンタルいけるんか？」

「警報前に必要装備は搭載しましたよ。」

もうそんなやり取りを…と武人は思った。

だが感心している暇はない。

この短時間でも、敵は地球の一部を破壊している可能性があるからだ。

「この輸送機に我が装備を積んだ！私達も乗せてくれ！」

「…わかった。せやけど、ピーピー泣くんやないで！」

「私はそこまで弱虫ではない！」

輸送機乗り口の階段を、3人は急いで駆け上がった。

リュートの後ろ姿をサレンは、

（血は通ってなくても王子は王子。子供達が彼の刺激剤になってくれて、よかった。）

と笑っていた。

リュートとサレンは【ホーンフレア5 t h】に。

武人は格納庫の脱出口で待機した。

輸送機は発進した。

☆☆☆

授業中。

制服の中に忍ばせていたペンダントがチカチカと光った。

何度も勉強して学んでいるから、この点滅の意味がわかった。

「先生、すみません！」

私は即座に手を挙げた。

先生も私に気付き、何だと尋ねてきた。

私は先生に近づき、先生の耳元で用件を伝えた。

先生はすぐに了承してくれた。

私はそのまま教室を出て、隠れた所でペンダントを使用した。

友達いないから気を遣わなくていいし。

テストの点は採れてるから先生は何も言わない。私はね。

ペンダントは《転送装置》で、私を瞬時に移動させた。

緊急時だから、ジェット機の操縦席に着いていた。

モニター画面には色違いのジェット機が2機表示されていた。

2人の兄も乗り込んでいるのは、画面の文字で理解できた。

『ヘルメットとスーツは足元に置いている！減速しているから、着替えが終わったらすぐに声をかけてくれ！』

「はい！」

私は返事した。兄達の返事も聞こえた。

制服のままで来たから、パイロットスーツに着替えるのには手間取った。

〔ラストコア〕内だったらスカートをロッカーにしまえるけど、今はコックピットの中。

恥ずかしいけど、スカートを脱いで下に捨て置くしかない。

汚れたらクリーニングに出して、帰りは替えのスカートでも履いて帰ろう。

「着替え終わりました。」

『僕も。』

『俺も！』

『わかった。このまま現場に直行する。太平洋の孤島に敵は着地をしたようだ。』

『被害者は…。』

『無人島だから被害報告はないが…近辺の島や大陸には避難誘導を行なっている。』

よかった。

和希兄ちゃんの問いで気にした事が、1つ解決した。

『いいかい？くれぐれも前みたいに变な気を起こさないように！何か困った事

があれば聞くんだよ！』

「はい！」

私達兄妹は揃って返事をした。

モニター画面にはカーナビの様な地図が出てきて、私達を青い光の点でチカチカさせていた。

赤い光の点…敵に近づいているのも読み取れていた。

敵には、刻々と近づいている。

モニターにも映像が流れた。

『うお！？デケェ！』

『梓いっぱいだなあ…。』

兄達が声を出した。私も同じ感想を持った。

デカい、巨体のロボ。

大気圏突入時に焼けたのか、全身が焦げている。

でも、元の色が茶色なのはわかった。

焦茶色に見えたから。

地図上の点は、私達と敵の2点だけじゃない。

味方を表す青い光の点があと2点あった。

1点は武人兄ちゃんの【ブラッドガンナー】なのはわかる。

もう1点は…映像では藍色のロボが槍を持って近づいていた。

あれは、武人兄ちゃんに挑んだ王子が乗っていた…。

でも、飛んでいる…？

『未衣子、合体するぞ！』

和希兄ちゃんの声でハッ、と返った。

考える癖がついちゃって、ボーッとしている様に見られる私。ダメだ、ちゃんと集中しなきゃ。

あの藍色に王子が乗って戦っているのかはわからないけど、助っ人で来てくれるならありがたい。

私も敵の撃破に尽力をつくさなきゃ。

☆☆☆

太平洋の孤島。

ヒスロのH R形態【アング・ウォール】は焼け焦げたものの、着地には成功した。

足の裏でドン！と叩きつけるように。

孤島は小さく、ヒスロには足場がほとんどなかった。

空を飛ぶ浮上装置は付いているが、【アング・ウォール】自体速度が遅く、回避運動は困難である。

ではヒスロはどうやって敵の攻撃を凌ぐのか。

答えは耐久力の強化である。

ヒスロにはダメージを吸収し、耐久性を上げる能力を持っている。

耐久性は自身の体格にあらわれる。

ほんの数ミリでも、ヒスロの身体は大きくなる。

だからヒスロには、ダメージを少なくする方がいいと、武人は言った。

ヒスロもエスト同様、武器を持たないH R。

しかし、彼は手足だけで十分対処できた。

【ブラッドガンナー】は多数の銃があり、H Rの機能を停止させる『心臓』を狙って着実に撃つが…硬い装甲でびくともしない。

（針で刺そうにも奴の反応は鋭いんや…。鈍くなるよう意識を逸らさんといかんな。）

ヒスロに対抗するのは武人だけではない。

【ホーンフレア5 t h】のパイロット、リュートも同じだった。

武人とぶつかった時とは、ロボの装備が異なっていた。

目立つのは後部。

弓のような弧を彷彿させる、緑色の飛行装置が取り付けられていた。

【ホーンフレア5 t h】が空を飛べる理由だった。

その名も【ウインドアーチ】。

リュートの側近で技術士官のサレンが乗っていた。

彼女は常に計器と格闘しながら、ロボの状態チェックや戦闘のサポートを行っていた。

『サレン、私は背後を狙う、跳ぶぞ！』

『わかったわ！』

【ホーンフレア5 t h】は敵との距離を離し、跳んだ。

（王子はジャンプで突くつもりやな、それはええけど…。）

武人はヒスロの動きを確認した。

両腕をブンブン振り回している。

その動きは無造作で、狙い目とされる隙が発見しづらい。

リュート達の攻撃をくらわぬよう、少しずつ距離を置いて銃を乱射していた。

照準は地面。土砂崩れを狙った。

『ラルク、ラルクはどこだ！数に頼らず我に挑め！』

ヒスロは上半身で暴れるのみならず、1人の強敵を探し求めている。

武人の耳に十分届いていたが、相手をしないようにした。

できなかった。

ロボの体格差は圧倒的に【アング・ウォール】が大きい。

回避と攻撃、両方でさばくのにも必死だった。

未衣子達【パスティユ】がやって来たのが今だった。

【スカイ】の状態で、剣1本を前に押して突く型でやって来たが。

『待ちや！』

武人が叫んだ。

【パスティユ・スカイ】はおとなしく止まった。

姿は【ブラッドガンナー】の方へ向いていた。

メインパイロットの和希がたずねた。

☆☆☆

『何故ですか！このままだと…。』

『ええか？こいつはダメージを受けるとデカくなる！乱雑に攻撃したら大変になるで！』

じゃあ…孤島が多少変形してるのは…。

『今はリユート達の攻撃待ちや。一撃必殺の技やと。それからの判断でも遅くはない！念のための対策として島を削ってんや！』

『リユート？』

『王子様がな、今回協力してくれとる！もうすぐ落ちる頃や。』

武人兄ちゃんの言う通りで。

落雷の如く、敵のロボの真上から、王子のロボが落ちてきた。

槍の矛先は下へまっすぐに向けて。

敵のロボの頭に突き刺した。

王子のロボは槍を引っこ抜き、すぐに後ろに下がった。

当然の如く、敵のロボは痛みでのたうち回った。

その間、王子が言った。

『[ラストコア]の子供達よ！私は君達の行動に感銘を受けた！我々は君達の味方になる！我々に勇気をくれた事を感謝する！』

『あれは未衣子が…。』

『ええやんか。好意は素直に受け取り？この戦闘が終わってからやけど。』

敵のロボの頭部から、血に似たオイルが身体に染みるように溢れていた。

もう終わり、と油断していたのがいけなかった。

敵のロボはまだ動けた。

雄叫びをあげながらも、その覇気は私達を飛ばすには丁度よかった。

「きゃあ！？」

『うわあ！』

私、いや皆が思わず声が出てしまった。

『そうか…コイツは中身も硬いんやな…。』

武人兄ちゃんの声だ。

「どういう事？」

『HRはな、巨大化する為には改造の細工が必要やけど…コイツは結構いじられとる。恐らく《心臓》を狙わんと倒れへんやろな…。』

『いや待て！奴の体格が…！』

王子の言うように、敵のロボの体格が変わった。

王子の指摘通り、敵のロボの体格がますます大きくなった。

足場を削った小さな孤島では落ちて沈む…と言う希望は叶わなかった。

敵のロボには、瞬時移動できる能力があったようで。

別の、足場の広い島へ即座に移った。

モニターの地図に赤い光が点滅してるので、距離は遠くはない。

『小細工ばかり卑怯な…正々堂々挑め！ラルク！』

敵のロボの発言から、またあの名前が出てきた。

やっぱり…ラルクは…。

『余計な技は通用せんな…やっぱぶち抜くしかないな。』

『…提案があるのだが。』

王子のロボが手を上げた。

『もう一度、我々に一任してもらえないか？』

『さっきのはしゃあない。多少は失敗もする。何や？』

『サレンが乗る【ウインドアーチ】で矢を放つ。仕留めるなら確実にするのがいいだろう。』

『でもリュート、その間【ホーンフレア5 t h】は飛べないわ。敵の位置以外に島は見当たらないし…。』

サレンさんの言うように、周りは殆ど海だった。

ところがその問題は、和希兄ちゃんの発言で解決するのだった。

『輸送機は、上に乗れないですか？』

『そうか！』

輸送機は普段から【パスティーク】のジェット機を乗せる格納庫が存在している。

攻撃に耐える為の耐久力も拔群。

ならばロボを上に乗せるのも大丈夫なのだ。

『だったら、俺と子供らは離れた方がええな。』

『輸送機は2機稼働してるわ。一度補修作業を受けた方が…。』

『どう見てもお姉ちゃん達の方がやらなきゃいけないじゃあ…。』

『この作戦が成功すればよい。とにかく、奴と一緒に離れてくれ。』

私達は一旦、輸送機へ戻る事になった。

『くっ、また、逃げるのか！グオオオオ！』

敵のロボが片手の拳を地面に打ちつけた。

私達は飛んでいて被害は少ないが、島に穴があき、周辺の海から大きな波ができた。

あんな攻撃を直にくらったら…命の危険だ。

情けないけど、これはサバイバルみたいな仕事。

王子の秘策に従おう。

☆☆☆

ヒスロが暴れ回る島々の上空に、2機の輸送機が止まっていた。

乗っているのは〔ラストコア〕の一部スタッフのみだったが、休む暇はなかった。

搭載してあるA Iの管理や、周辺住民の避難誘導の連携等、やる事は沢山あった。

操縦士は常に神経をピリピリさせている。

『操縦士！今ええか？』

H R形態【ブラッドガンナー】で戦闘にあたっていた武人からの通信だ。

「こちらは…異常ありません。」

『それならよかったわ！どっちかでええから、王子のロボを上に乗せてくれへん？』

「輸送機を台にしてですか？」

『そうや！重量はいけるんやし、王子の提案や。』

「重量は可能ですが、一体何を…うおっ！？」

彼の目の前をロボが素早く通り過ぎたので、操縦士はびっくりした。

通過したのは味方の未衣子達【パスティーユ】だったのが幸いだった。

「もう少し速度を…」

『悪いけど、今すぐやらんと大地が壊れるで？王子も覚悟してるから、やっ
たってくれへんか？』

「いや、もう既に乗ってますか！？重量が計測されてますよ！」

『すまない。この作戦が終わり次第、我々は飛ぶ。』

輸送機の上部、僅かな平たい所で【ホーンフレア5 t h】は着地していた。

後部の【ウインドアーチ】は外されていた。

【ウインドアーチ】は遠目で見ると、弓の型をしていた。

『今度は命中補正はきっちりするわ。』

『脳を貫いたのでも見事だサレン。エネルギーは、まだ足りるな。』

『雲が見え隠れしてるのが気がかりだけど、透視能力搭載してるのよ。この

【ウインドアーチ】は。』

【ウインドアーチ】の操縦席は弓矢の支点到当たる位置にいた。つまり矢が放
たれる隣だ。

『敵は真下から、やや前方にズれているわ。』

『心臓部分ならもう少し離れるか？操縦士！』

「は、はい！」

リュートの呼びかけに操縦士が反応した。

彼も内容は把握していたが、呼ばれるとは思わなかっただろう。

『角度を斜めにできるよう、輸送機を移動してくれまいか？』

『移動？』

『微調整は私がやるから、輸送機は動かしてもらわないと…。』

「でしたら合図を下さいよ！」

『それは出すわ！』

張り合いのような雰囲気だが、ヒスロへの照準合わせは難なく終わらせた。

「もう停止しますよ、あとはお願いしますね！」

『ああ、任せてくれ。』

操縦士との回線は終わった。

【ホーンフレア5 t h】の今のポーズは弓道者そのものだった。

【ウインドアーチ】の中央に持ち手があり、左手で握る。

矢は右手で弦に掛けた。

この場合矢も弦も、緑の光の矢と糸になっている。

ここでエネルギーが必要だ。サレンは最終調整に入った。

リュートは合図待ちでレバーを引く係だ。

『照準いいわ！リュート、敵が止まってる隙に！』

『了解だ！射出する！カウント、3、2、1…』

リュートのレバーに対する力が込められてきた。

光の矢もそれに応じるように、太くなっていった。

『発射！』

勢いよくレバーを引き。

矢は斜め下に猛スピードで落ちていった。

☆☆☆

緑の閃光は、流星みたいに綺麗だった。

うわぁ、と見とれてしまった。

私達と武人兄ちゃんは、別の輸送機内で待機していた。

すぐ飛べるよう、ジェット機に乗ったままで。

王子のロボが弓矢で敵を狙って放つ瞬間を、モニター越しで確認した。

凄い威力だ、敵も倒れる筈、だった。

操縦士さんの報告で、敵は未だに生きていた。

しかも、矢を放つ前より体格が大きくなっている。

地図上の赤い点もついたまま。

『そんな…敵は殆ど動いてないのに…。』

『照準は合っていた…距離が、遠過ぎたのか？』

実行した2人はショックを受けていた。

私も画面上で見たからよくわかる。

『こうなったら、近づくしかないだろ！？』

『だけど、無闇に近づけば俺達どころか、武人さんや王子達も無事に帰れなくなるぞ？』

『また遠くから狙うのかよ！？』

勇希兄ちゃんは声を荒げていた。

私達3兄妹は経験が少ないのもあるけど、身体中ダメージが効かない敵は初めてだった。

故に常にうるさい勇希兄ちゃんの狼狽ようはよくわかる。

わかるけど、本当に大丈夫かな。

このまま、終わってしまうのかな。

ここで武人兄ちゃんが口を開いた。

『ちょっとええか？子供らも王子達も。一か八かの賭け事になるんやけど。』

やっぱり武人兄ちゃんも、運に賭けるつもりなんだ。

『俺が囨になる。その代わり、誰か背後から奴の《心臓》を貫いてくれへんか？』

半分は想定内だ。

賭けに出るしかないのは皆わかりきってたから。

もう半分…武人兄ちゃんが囨？

兄ちゃんが、倒されるの…？

黙って聞いていると、王子が回線越しに申し出た。

『我々が出る。子供達には酷な作戦だ。』

しかし、それはサレンさんに止められた。

『無茶よ！もうエネルギーの蓄えはほとんどないわ！』

『子供達を危険に晒すのは…【ホルプレス】共とわけが違うのだぞ！』

【ホーンフレア5 t h】は私達が来るまで必至に戦っていた。

エネルギーが尽きるのは当たり前。

補給をするのも時間がある。

サレンさんが訴える問題と、王子の思いやりはよくわかる。

でも、私は、私達は連れてこられてから危険な仕事を任されているのは十分間かされている。

だから何としても、この強敵を倒す課題をこなさなくてはいけない。それに。

「やります。」

武人兄ちゃんだけを私は犠牲にしたくない。

『正気なのか！？』

王子が大声で言った。王子は優しいね。

でも、子供だからって止まらないよ。

今の敵はいずれ、地球を真っ二つにするだろうから。

「お兄ちゃん達もそうだよね。」

『俺はいいが…勇希、未衣子、お前達まで、』

『俺はいいぜ。未衣子は…変わりそうにないしなあ…。』

意外と兄達があっさり承諾してくれてよかった。

これで迷わなくて済む。

『…本当にええんやな？』

武人兄ちゃんの問いは、私達を追い詰めるように聞こえた。

今更怖くて嘆いても変わらないから、はい、と答えた。

「これからどうするのか、具体的に教えてください。指示通りに動きます。」

☆☆☆

武人と白井3兄妹は覚悟を決めた。

失敗すれば後戻りはできない作戦に。

敵のヒスロのHR形態【アング・ウォール】の体格は、高層ビルに匹敵する程の巨体だった。

孤島の地面があまり崩れてないのが奇跡である。

巨人に4人が挑む。

表面上は、武人のみが相手をするが。

（もう、腹を括るしかないわな。）

『よお、アンタがヒスロ・インフィヤな?』

名前の確認を取らなくても、武人は巨人が誰なのはわかっていた。

武人は対面が初でも、噂は知っていた。

己の怪力で星を潰した男の噂。

目の前の男がそうかもしれない、と武人は信じていた。

ヒスロは武人の声が届いているのかは、不明だ。

自分の拳で敵を追いやりようとはしてはいいるが、言葉が返ってこない。

巨大化が影響を与えている可能性はわからないが、否定はできないだろう。

HR形態は細胞分裂と細胞破壊の周期運動を伴う。

強靱な身体になる一方、犠牲になる機能も存在する。

ヒスロの場合は脳の機能が完全に崩壊しているように見えた。

今紹介したのが全て仮定として語るのは、武人とヒスロがお互い初対面だから

だ。

ゴングは鳴り響かないが、戦闘が再開された。

いや、既に開始していた。

ヒスロは拳を決める。武人は難なく交わしていく。

武人は無闇に発砲しなかった。

ヒスロはダメージを受けると、吸収して体格の膨大化に繋げるからだ。

だから武人は、心臓部分が狙える位置からしか、発砲しなかった。

心臓部分が狙える位置でも、よほどギリギリの箇所でなければ発砲しなかった。

なぜならば、武人達【ラストコア】側には秘策を用意していたからである。

【バステューク】はやや離れた太平洋の海中に潜っていた。

【サニー】の姿でひっそりと近づいた。

白井3兄妹に緊張が走る。

相手は武人と交戦中の巨人。

水中では一定時間以上の維持は難しいと聞かされた説明。

短い時間で、巨人を仕留めなくてはいけない。

プレッシャーが重かった。

武人、3兄妹、操縦士のやり取りは通信回線だが、敵に傍受されないプライベート回線を使用した。

【アング・ウォール】1体のみだから、敵は細かい仕掛けは取らないとは見ているが。

（勘は鋭いんや…通信漏れで気づく可能性もある。）

武人はずっとヒスロの相手をしていて、彼の特性を発見した。

操縦士の通信より、【バステューク】がヒスロがいる現在の孤島の近海に到達したとの連絡が入った。

武人は小さめの声で、

『合図は後で送る。岩山の近くにおるんやな？』

と操縦士に伝えた。

岩山とは言え、人間がよじ登れるほどの小さな山。

武人は未衣子達が潜む場所として、目印をつけた。

（狙い目はコイツの背中や。それで一気にケリをつける。）

ヒスロとの対決の最中に、武人は岩山とヒスロの動きを見ていた。

岩山の近くに。背中を向けるように。

武人はこの2つのポイントを意識して、戦闘に応じた。

チャンスは巡ってきた。

勇希にタイミングがやってきたと小声で連絡した。

『いいか、海面ギリギリまで上がってきて、俺の合図で一気に海から上がって、そのまま手刀で奴の心臓を貫け。前に説明したが、最後の確認や。』

『兄貴達が位置を調整したぜ。』

『失敗したら俺達終わりかもしれない。逃げるなら今のうちやで？』

『ここで逃げるなんて格好悪いだろ？兄貴達もな？』

『そうか…なら頼むわな。今はお前達しかおれへん。』

武人は戦闘に集中する。

あと少し、あと少しでチャンスが巡ると願いながら。

【アング・ウォール】の足部分が岩山に触れそうな距離だった。

『今や！』

【パスティユ・サニー】が岩山近くの海から、飛沫を上げて飛んでいく。

手刀となる右手はまっすぐに、ヒスロの背中に向ける。

右手の指先を黄色い炎が包み込む。

【パスティユ・サニー】が【アング・ウォール】の背中を突き破った時間は、

1分もかからなかった。

【サニー】丸ごとヒスロの体内に侵入し、赤くドロドロした体内を一直線で駆け巡った。

胸元を破るまで。

『そのままずっと突き破りや！』

武人の叫びも受けて、【パステュー・サニー】はなんとか脱出した。

【ブラッドガンナー】の懷に飛び、捕まえてもらった。

【サニー】の装甲はどこも赤い油まみれになっていた。

その背後で、ヒスロはウオオオオと嘆いていた。

鼓膜が破れそうになる程に。

ヒスロの胸元は、【パステュー・サニー】が突破した穴ができていた。

《心臓》は…外に抜け落ちていた。

既に脳が破壊されていたヒスロは、叫び喚くしかなく。

H R形態の関節部から、多数の爆発を起こしていた。

武人と3兄妹達は撤退を始めていた。モニターで大爆発を黙って見ていた。

（《心臓》だけは、いじられなかっただけ幸いや。）

【ブラッドガンナー】は少しだけ頭部を後ろに向けた。

武人には、少しだけでもヒスロの最期を目に焼き付けようと思っていた。

（ごめんなヒスロ・インフィ。ラルクは卑怯な手を使った臆病者だと、あの世で憎んでくれ。）

頭部を前方に戻した。

【アング・ウォール】の残骸は、【ウインドアーチ】の矢によって焼失した。

ヒスロの移動先も無人島で死傷者はいないが、島は黒焦げになってしまった。

後日、[ラストコア]のA Iが後処理作業を行った。

5・酔狂の日



何で、何でなんだ、エトラトル！

『ごめんなさいラルク。ずっと黙っていて…でも、貴方には生きていてほしいの。』

今の戦闘は俺の故郷の話だ！

お前には関係ないんだ！

『私は戦う能力は持っていないの。側にいるだけでは、貴方は救われないわ。』

俺は十分だ！お前がいるだけでも幸せだった！

『ありがとう。でも、遅いわ。』

遅くはない！今すぐ能力を解放するのは止めよう！

お前がHRだったとしても、俺は責めたりしない！

お前だけでも生き延びてくれ！

『生き延びるのは貴方よ。ラルク。どうか…私の血筋である青い星の民を、幸福な世界へと導いてあげて…。』

『大丈夫…。私は貴方の中にいる。貴方の生命を繋ぎ止めてあげる。

だから、生きて導いてあげて。

宇宙には沢山の悪い人達がいる。その人達の野望を阻止してあげて。

私はずっと、平和を望んでいるから。』

エトラトル！エトラトル！

…目を覚ますともう、彼女の姿はなかった。

★★★

「ハッ！」

武人は発声と同時に目を覚ました。

目に映るのは白い天井と照明。

左右を見渡すと、病院で使う医療機器が数台あった。

あとはアレックスがタブレット端末を操作していた。

（焼け野原の遊園地…は夢やったんやな。）

武人は息を吐いて落ち着いた。

自分は眠ってたのだと。

「随分汗をかいたようだな。」

アレックスがタブレットを見ながら言った。

彼の隣には小さな台があり、その上に白いタオルハンカチがあった。

自分の汗をそれで拭いたんだな、と武人は悟った。

「検査を止めるか？数回に分けて実施してもいいんだぞ？」

アレックスはまだタブレットを見ていた。

「いや大丈夫や。俺がうとうとしていただけや。」

「そうか。また昔の夢を？」

アレックスは武人が何の夢を見たか見当がついていた。

数年間に幾度も、彼は武人のHR能力の研究をしているのだから。

「どうしても俺には、あの忌まわしい事故が脳裏につきまとうんや。」

武人は額に手を当てた。

額は熱くないが、汗は残っていた。

「移転前の遊園地の事故か…。」

「あれは沢山の人を巻き込みすぎたんや。もう無駄に傷付けるのは止めようって、誓ったんやけど。」

「あれはお前が原因ではないだろう？」

「アイツの元部下である以上は、俺が原因や。」

アレックスはタブレットを台に置いた。

研究室の隅のキッチン台に、アレックスは向かった。

冷蔵庫の中から、お茶のボトルを取り出した。

コップに注いでいると、武人がまた口を開いた。

「遊園地だけやない。昨今の襲撃事件もや。今は技術発展のおかげで被害は抑えてる。せやけど…。」

「大地の破壊は、どうしようもないのが現状だ。」

アレックスがお茶の入ったコップを持ってきた。

武人はゆっくりと起き上がった。

アレックスからコップを受け取り、一口飲んだ。

「…再び、宇宙に上がれるとええな…。いや、上がらんとあかん。受け身の姿勢では、いつか滅ぶでこの星は。」

「司令も連合等には申請を出してはいるが…。」

「宇宙へ上がるまでに、【パスティーユ】シリーズ等、戦力を補強せんとあかん。ジェームズは今も軍の基地や刑務所とかに足を運んどる。」

武人は一気にお茶を飲み干した。

「ジェームズ氏だが、現況報告ついでに土産話を持ってきたそうだが。」

「土産？ ああ、宗太郎から聞いたんやったわ。」

「なんだ。知っていたのか。」

「土産より辛い事やけどなあ…。お前、お酒あかんやろ？」

『お酒』のキーワードでアレックスは何かを察した。

「…宴会場の予約でも取れたんだろ。」

「やっぱ察しがええなあ。どうや？ せめてちょっとのぞいてみるのも…」

「興味が無い、と何度も言ってるだろ。」

アレックスは即答で返した。

「お前の事やから、要領よく人使っとるやろうけど…たまには気分転換もせな

あかんで。」

「安心しろ。俺なりに気分転換している。外で騒ぐより、内でのんびりする方が楽なんだ。」

「そうやったな。じゃあ次のミーティングで欠席する言うわな？」

「そうしてくれ。」

武人はアレックスにコップを返した。

検査の続きを再開するため、仰向けの姿勢に戻した。

「続けてもいいんだな？」

アレックスは必要のない確認を行った。

武人の答えはもちろん、

「ええよ。お前が納得するまで、十分にデータを採集してくれてもかめへん。」

肯定の意思表示だった。

☆☆☆

巨人HR戦からは、苦戦を強いる戦闘は少なかった。

ほとんどが【ホルプレス】の集団だらけ。

初めて緑種という亜種を見た時は困惑したが、【ホルプレス】のサポート機らしく、私達の敵ではなかった。

何故大量に送られるんだろう、と考えていたけど、私では答えが出なかった。

武人兄ちゃんは、

「この経験が積み重ねになる。模擬戦やと思っとき？」

なんて言ってたけど、私は納得しづかった。

私達3兄妹が【ラストコア】に来てから2ヶ月が経った。

統制制御室内でミーティングがあった。

今回はなんと、ジェームズさんからの連絡だった。

多くの人で緊張するなあ。

逆にいない人を探す方が難しい…。

しいて言えばアレックスさんぐらいかな？

西条司令が進行をジェームズさんに譲り、ジェームズさんが前に立った。

「みんなも期待していたと思うが…宴会場の予約が取れた。」

その瞬間、うおお！と歓声が喚いてきた。

今の、すごい事なの？と私は疑った。

「あー、[ラストコア]の面々はな、急用以外は殆ど外に出ないんや…。」

「場所を特定されないように、ですか？」

「それも理由の一つやし、あと陽の光を拝めない奴らも多いしなあ…。」

和希兄ちゃんは理由の一つを推測していた。

なるほど、だからみんなこんなに大喜びなんだね。

「参加しやすいよう、今週の金曜日の夕方集合だ。遅刻したらバスに乗せないからな。」

「はい！」

多くの人が揃えて言った。

「夜の9時までに子供達は戻したらええやろ。他は遅くても日が変わる前やな？」

「いつも通りの内容だ。だが説明はするぞ。」

ここからはジェームズさんのみ話をした。

[ラストコア]本部をバスで出て1時間。

愛嬌市北部にある繁華街。

座敷のある居酒屋が宴会場らしい。

普通に食べ物や酒以外の飲み物もあるので子供も楽しめるとの事。

「不参加を希望する奴は木曜日までに言ってくれ。技術局長は不参加だ。」

またかよー、と落胆する声が出てきた。

「アレックスはなあ…。静かなんが好きやからなあ。」

確かにそれはそうかも。

アレックスさんは真面目で大人しい人だから、騒ぐのは苦手だろうな。

私も苦手だけど。

でもこの人達なら、学校の百倍は楽しめるかもしれない。

時間も短めだし、たまには美味しいご飯を食べようかな。

☆☆☆

ジェームズが宴会の予定を入れた金曜日。

アレックスはモニターから黒い窓のバスの群れを見送った。

【ラストコア】本部に残るのはアレックスと、各々の事情で残るスタッフのみ。

宴会に乗り気のない者や、急用で仕事に取り掛かる者まで様々だった。

アレックスはとある部屋へ向かった。

その部屋は観葉植物が周辺に配置された、ベッドルームだった。アレックスの癒し場所はここだった。

技術局長という立場で多忙に追われていると周りに思われているが、そうでもない。

彼は適材適所の考えを持ち、スタッフにも出来そうな仕事は分けた。だから彼は、休み時間を確保できた。

この日、アレックスは仕事を駐在してるスタッフに全て回した。

部屋に入るとベッドにダイブした。

クッション性は低いベッドだが、アレックスが眠るには十分だった。

彼は研究そのものが大好きな人間で、その他の事はほとんどズボラな体質だった。

「俺は自然と触れ合うだけでも、幸せなんだ。」

アレックスは元々、化学者の父を親に持った、裕福な家庭だった。

幼少期から父の研究を見てきたが、彼が危険な実験をしてから、父の研究室に出禁となった。

読書や学校の施設を借りて科学を学んだが、父に『お前に学者になる資格はない!』と否定をされた。

性格が歪んだ彼は、事件を起こした。

自分で独自調査した催眠ガスを、学校にばら撒いた。

この事件でアレックスは家族に見放され、施設に入れられた…。

今思えば愚かな行為に及んだと後悔しているアレックス。

だが子供時代の彼は親に実力を評価してほしいのに必死で…頭が回らなかった。

施設時代は虚な日々を過ごしていた。

たまたま施設訪問にやってきた男に救われるとは、この時のアレックスには想像できなかった。

男・武人に誘われるがままに、様々な経験を積んだ。

大学の博士号取得から、世界中の企業への技術提供に至るまで…。

アレックスは研究と発明を繰り返し、[ラストコア]の技術局長にまで昇進した。

「これで…幸せなんだ。」

アレックスはおでこに手を当てた。

彼は時々、自分の最悪な過去を思い出す。
そんな時はいつもベッドで眠りにつくようにしていた。
「研究ができるだけでも、十分…。」
アレックスはゆっくりと目を閉じた。
数時間程の僅かな時間を、彼は休息に充てた。

☆☆☆

〔ラストコア〕の皆さんと行った宴会は楽しかった。
馴染みのある座敷の上での豪華な和食料理。
盛り上げにかせない、カラオケパーティーまで。
私も兄達も、1曲ずつ歌った。
学校では『同じ夢』の影響で友達ができず、大人数で楽しむイベントを経験しなかった私。
だけど、今日の宴会は楽しい。
あっという間に、時刻は9時になろうとしていた。
私達3兄妹はここでおしまい。
帰る人と次の店に行く人と別れた。
武人兄ちゃんは次、飲みに行くらしい。
離れるから、ちょっと寂しかった。
王子は…兄ちゃんに引っ張られていた。
サレンさんは帰るみたい。
帰る人は窓の見えないバスに乗る。
次の飲み会をする人は別のバスに乗る。
行き先は逆方向。

愛嬌市北部は繁華街で、夜遅くまで営業するお店が多かった。

反面、危ない人も多い。

だから私達3兄妹は先に帰るのだ。

明日は土曜日で学校はお休み。

当然、[ラストコア] 本部で寝泊まりの予定だ。

バスの出発は酔ってる人がいるのにも関わらず、スムーズに行った。

窓が黒塗りなので、外の景色は見えない。

でも行き場所は決まってるから、何も怖くない。

サレンさんの隣で、私達兄妹は固まって座席についていた。

「明日も訓練？」

「もちろんです！」

サレンさんと他愛のない会話をした。

☆☆☆

2次会に参加するメンバーはざっと数えて20人程だった。

その中に宗太郎、ジェームズ、武人、リュートが入っていた。

リュートは断ったが、武人にズルズル引っ張られる形で参加した。

武人は酒に弱くはないが、楽しむ場ではとことん楽しみたい派だ。

だから初参加のリュートを誘った。

2次会の宴会場は中華系の居酒屋だった。

こちらも座敷タイプで酒とつまみを楽しむ場所だった。

カラオケはないが、モデルの如く綺麗な女性がホール係を務めていた。

(これは子供達やサレンには刺激が強すぎる…！)

リュートは目眩を覚えた。

が、酒はあまり入ってないので倒れなかった。

対して武人は他の人とかなり楽しんでた。

顔が赤くなっており、酒に酔っているようだった。

「浮かない顔してるが、大丈夫か？」

ジェームズがリュートの後ろにやってきた。

「…体調は、なんとか。」

「ドンチャンやれとは言わんさ。年2回しか、私用では出れないからな。」

「すまない。」

「構わんさ。それより、随分健闘したんだな？前の戦闘で。」

「仕留めたのは子供達と奴だが。」

「あの大ダメージを与えたのは大したもんだよ。心、躍らせたみたいだな。」

「ああ…。」

ジェームズとリュートは店の隅で料理を嗜んでいた。

中央のスタッフ達の騒ぐ声をBGMにしていた。

騒ぐ声が大きくなった。

あまりの音量に、隅っこの2人が中央を見た。

頭1つ分抜けた長身の女性が、華麗な舞いを披露していた。

怪我しないように、女性以外は距離をあけた。

予約の時に下見に来たジェームズだったが。

「あの女はいなかったか？」

と首を傾げた。思い当たらないようだ。

「新しく入ったのだろうか？」

「やけに積極的だな…。黒川との距離が近すぎないか？」

「！？」

ジェームズの発言を聞き、リュートは踊り子の女性を観察した。

顔を、視線を、ずっと武人に向けているのがわかった。

「あれは…。」

「ボサボサだが、ルックスはいいからなあ、アイツは。」

「好感度の話ではなく、あの人は見覚えないだろうか？」

「うーん。黒髪美女は地球に沢山いるぞ？」

「ん！？」

リュートが驚くのも無理はない。

女性が武人の手を掴んだのだ。

さらに彼の耳にそっと話しかけた。

突発的行動にリュートはその場面に乗り出そうとした。

武人の制止に終わった。

武人は今は物騒な荒らしは止めとき、と言った。

女性に連れられて、武人は店の外に出た。

お勘定は【ラストコア】本部持ちなので、1人欠けても問題はない。

だが真面目なリュートは気になった。

あの女性の見た目と仕草が。

ジェームズに出る、と伝えて彼は武人を追いかけた。

★★★

愛嬌市は南北問わず、河川の数が豊富であった。

居酒屋の北には愛嬌市を代表する巨大河川も存在する。

巨大河川から枝分かれした、小さな川の側で、武人と女性は歩みを止めた。

「店長には許可貰ってるの。だからクビまでいかないわ。」

女性は石の柵にもたれ掛かっていた。

「隠さんでもわかる。お前は…。」

「気づいてると思うわ。海王星圏ミラニアのニシア・ペディルドだ、って言う
たいのでしょ？」

「話が早いな…。」

武人は言おうとしていた事をニシアに見抜かれた。

彼の表情は居酒屋内と違い、笑っていなかった。

彼は石の柵から離れていた。

「ちょっと話、付き合うぐらいいいじゃない。隣に来てよ。」

ニシアの誘いに仕方なく武人は乗った。

彼も石の柵にもたれ掛かった。

「綺麗なところねえ。地球は。」

「…どうやって降りたんや？」

「まだ強張ってるわよ顔、リラックスしなさいな。」

「まあ聞かんでも予測つくけどな。」

「本当、貴方の勘は鋭いわね…。若年期の優れた能力といい…。」

「よせ。今は静かに暮らしてるんや。過去は振り返りたくない。」

武人が言った後、ニシアは武人の体に触れた。

武人は触れた手を握った。ニシアは顔を近づけた。

「ねえ。平和に生活したいんでしょ？」

「…何のつもりや？」

ニシアは掴まれてない手で武人の頬に触れた。

今までの会話の時よりも、声量を落とした。

「この星気に入ったの。星の民を刺激しないようにしてあげる。」

「…手を出せへんってか？」

「そう解釈してもらっていいわ。その代わり、」

ニシアはハイヒールのつま先を上げて、更に武人に接近した。武人の耳元で、ニシアは条件を提示した。

「私の恋人になって下さらないかしら？」

ニシアは美貌には絶対の自信があった。

髪型、お肌、チャイナドレス。

どれを取ってもボロは一切ない、完璧に綺麗な美人だった。

男性である武人が惚れないはずがない、と信じていたのだが。

結果はニシアの期待を裏切る形になった。

「断る。俺はお前が信用でけへん。たかだか若年期に1戦交えただけの奴に。」

「なっ…！」

ニシアは武人から瞬時に離れた。

微笑みの表情は驚愕の表情に変わった。

「私とあなたで協力すれば、他のHRなんて…」

ニシアは簡単に引き下がらなかった。

「潔白な奴ならまだ同情の余地はある。お前は黒い影がある。俺には見える。

それに、」

今度は武人がニシアを引き寄せた。顎を親指でグイッと上げて。

「お前、《オス》やる？性別詐称してまで俺に近づくなや。

わかってる。お前が俺を憎んでいるのは。」

この発言はニシアの怒りを頂点にさせた。

「もういいわ、あなたの望み通りにしてあげる。私が苦しめてあげるわ！」

ニシアは石の柵を乗り越え、川の中へ飛び込んだ。

入れ違いでリュートが駆けつけた。

「遅かったか！」

指で挟める程の極小の槍を持ったリュートだが、武人の腕が制止を促した。

「何故だ！」

「そのままやと溺れるで？」

リュートにはそう言ったが、武人は柵を乗り越えていた。

「宴会はおしまい。すぐに宗太郎に知らせや。こっちは警報を鳴らすように言うわ。」

「待て、お前が溺れ…。」

既に武人が飛び込んで、水飛沫をあげた。

川の深度は深く、ギリギリだがHR形態で泳ぐ動作は可能だった。

リュートは川から離れ、右腕の時計型の通信機を起動した。

通信相手は宗太郎。

走りながら、リュートは時計に向けて大声で言った。

「西条司令、至急警報をお願いしたい！HRだ！[宇宙犯罪者]の類いであろうかと…。」

『何だと！？』

通信先の居酒屋内はさらに騒がしくなった。

☆☆☆

〔ラストコア〕に戻った私達兄妹とサレンさんは、アレックスさんが休む部屋にお邪魔した。

アレックスさんは仮眠を取っていたようで、対応当初は少し寝ぼけていた。

仮眠部屋は観葉植物だらけで自然あふれる空間だった。

真ん中にベッドがあり、植物が周りを囲むように配置されていた。

植物の鉢の隙間から、愛嬌湾の水中を眺める事ができる窓があった。

正確にはこれはカメラ映像であり、窓は画面モニターになっていた。

サレンさんはお茶を汲んできた。

和希兄ちゃんは今日の話をアレックスさんに聞かせた。

私と勇希兄ちゃんは、植物を観察したり水中の景色を眺めていた。

「綺麗だなぁ。」

「深海なんかテレビでしか観たことないぜ。」

私と勇希兄ちゃんは愛嬌湾の広さを実感した。

テレビだと他の海洋域と比べて狭いと言われた愛嬌湾。

でも聞くだけと実際に確かめるのは違うと、今はっきりと理解した。

「驚くほどではないが…楽しんでくれて何よりだ。」

アレックスさんがコップを持ったまま、私達の前にやってきた。

もう寝ぼけてないみたい。

「図鑑も置いている。もし気になる生き物を見つけたなら探してみるといい。」

勉強になるぞ、と彼は言った。

図鑑まではいいけど…気になる魚を私は見つけていた。

鮮やかな赤色の小さな魚を。

小さな魚は群れをつくり、深海をまばらに彷徨っていた。

燃える炎のように輝く赤い魚達に、私は見惚れていた。

「何ていう魚なんだろう？」

「俺も初めてみるぜ？」

へー、とみんなで興味津々な中、アレックスさんだけ首を傾げていた。

彼の顔が凶変するのも、時間の問題だった…。

「モニターから離れろ！その魚は愛嬌湾内にいない！」

私達はえ？と首を傾げた。

すぐに離れられず、私はもう一度モニターを見た。

1尾の魚がこちらを見ていた。

目と目があったのかな、と思ったのが油断だったかもしれない。

「きゃあ!？」

私は尻餅をついた。

魚が突進してきたからだ。

勇希兄ちゃんは大丈夫か、と駆けつけてくれた。

魚は私めがけてぶつかってくる。

アレックスさんは瞬時に携帯端末を取り出した。

「警報だ! A I を出せ! 子供達はすぐに向かわせる!」

アレックスさんが言い終わる前に、私は立ち上がっていた。

出撃があると察知し、私達兄妹は部屋を出た。

「待って!」

「いや行かせていい。2次会メンバーはまだ北部だな?」

「はい。」

「わかった…。西条司令と黒川に、」

「どうしました?」

「黒川の連絡?…緊急事態だ!…何、HRが潜伏していただと!？それも[宇宙犯罪者]!？」

「もしかしてあの魚は?」

「HRの仲間だな!」

☆☆☆

H R形態では、狭い川の中を泳ぐ事は不可能だった。

武人は陸へあがり、建物の屋上を踏み台にしながら、ニシアの跡を追った。

夜で影は薄らとしか見えないが、水の波立ちは視認できた。

（まるで俺に来て欲しいって頼んでるみたいやんか。）

ニシアが何処に向かうか、武人にはわからない。

だが彼女、いやニシアは《オス》だから彼である。

彼の特性を知っていた武人は、場所の目星はつけていた。

（アイツは水中戦に長けてる。この方向やと愛嬌湾が戦いやすいやろう。）

ニシアのH R形態【スイム・ドラंक】の形は変幻自在だった。

スケールの大小から数種類の生物まで調整できる。

ロボットのみしか変身しない武人とは大違いだった。

陸に上がってからアレックスには連絡を入れた。

白井3兄妹が戻ってきているので、【パスティユ】は出撃できる。

だが、それ1体のみ。

【ラストコア】本部では小魚の群れの襲撃があったとの報告だった。

本部には行かんと、と武人は思った。

ニシアの姿を完全に捉えるのは厳しい。

白井3兄妹への指示が届く範囲には、せめて行かないと。

武人は思考を変えた。

サイレンが流れた今、彼はH R形態へ変身し、猛スピードで愛嬌湾まで飛ぶ事にした。

（先回りでもしとく方がええやろ。奴は逃げる真似はせえへん。宣戦布告しとるし。）

☆☆☆

赤い小魚の群れは、[ラストコア]のA Iと私達【パスティーユ】で落としていた。

本来は合体して戦うが、小魚はジェット機に群がるから、時間の余裕がない。

ジェット機のみで稼働できる小型ミサイルで落とすしかなかった。

3機のジェット機と数機のA Iで小魚相手に戦力は十分だが。

通信回線を開いてるから、兄達の文句が聞こえてくる。

『数多すぎんだよ！』

『外来種の繁殖よりもスピードが速いな…。』

私は黙って撃墜に専念していたが、イライラは溜まっていく。

兄妹の中で気性の激しい勇希兄ちゃんが言った。

『とっとと合体して、一気に蹴散らそうぜ！』

『被害は拡大しやすいが、1発で終われそうだしな。』

「でも、合体するにはまず水から出なきゃ…」

『出なくても合体するんだよ！』

私の心配を勇希兄ちゃんが遮った。

だけど合体機能の問題点について学んでいた私は、引き下がらなかった。

「武人兄ちゃん来るまで待ってよ！」

『二次会で本調子じゃねえだろ！俺達がやらなくてどうすんだ！』

「…そうだよね。」

武人兄ちゃんにお酒が入っていたら、その影響で動きが鈍るかもしれない。

兄ちゃんがH Rの目撃者だから、それと交戦してるかもしれない。

せめて小魚はすぐ消さないと。

私は内心、焦っていた。

焦っていた故に、勇希兄ちゃんの提案に乗ってしまった。

もう少し食い下がればよかったな、と後悔したのは、この後だった。

合体を承認し、私達はすぐに操縦で手順を踏もうとした。

合体時に3機のジェット機は三角形の陣形をつくって発光するのだが。

『待て！お前達早まるな！』

アレックスさんからの緊急通信が入った。

でも、タイミングが遅かった。

発光から少し時間が経つと、シュワーっと泡が弾けるような音がした。

ジェット機内部がショートした。3機全て。

専用スーツで感電は防げたが、自分の周りに電撃が走っていた。

ジェット機が思うように動かなかった。

唯一、通信回線だけはまだ安定していた。

『脱出できるか！？』

『反応がありません！』

『くっ、すぐに救出する！』

次の瞬間。

ドボン！と爆発が起きた。

ジェット機は…形は無事だった。もちろん私達も。

だけど、ジェット機は飛ぶ気力を無くし、近くの海底にゆっくりと着地した。

『…なるほどねえ。地球産の最新鋭のロボは、ちょっとした爆発ではビクともしないのね？』

ショートの影響で暗くなったコックピット。

未だ安定してる通信回線から、女性の声が聞こえた。

いや違う。女性っぽいけど、低めの声。

画面モニターは動作できるか、試しに教わったスイッチを押した。

モニターは無事に復旧した。飛び込んできたのは。

「…竜？」

『HRって、二足歩行のロボットではなかったのか？』

『もちろん、ロボ形態も可能よ？ただそれだけ。』

よく観察すると、敵のロボの上半身はロボの名残を残している。

竜よりは人魚に近いけど、尾が長すぎて竜にも感じ取れた。

モニターで視認も出来るんだから、当然復活した地図のナビにも赤い点が点滅していた。

でも、ジェット機は動けない。

非常時の酸素ポンベを取り出して背負った。

ジェット機から出て、遠くへ逃げないと。

『大丈夫。あなた達は後で痛めつけてあげる。先に相手したい人が出来たからね。』

相手？先客でもいるの？

すると、モニター映像の敵のロボの周りに、小さな爆発が見られた。

銃弾の火薬から発生する爆発だった。

『和希、勇希、未衣子！無事か？』

『今、回収に急ぎます！』

【ブラッドガンナー】と、下に3機の小型輸送機がやってきた。小魚達はまだ、うじゃうじゃいた。

『黒川さん、助かりました…。』

『はよ回収し！群れは半分まばらになったわ！』

『はい！』

3機の小型輸送機が私達に近づくのは、モニターと地図の光で把握できた。

『ジェット機ごと回収するよ！降ろすのは輸送機に入って少し解体してから、

それまで辛抱していてくれ！』

操縦士さんが言った。

輸送機はギリギリまで近づき、複数の機械のアームで固定し、引っ張られるように引き上げた。

小魚達が押し寄せてくるが、【ブラッドガンナー】の銃と本部から射出されたA1が撃ち落としていた。

『本部で戻って待機や。王子ももうすぐ来る。』

武人兄ちゃんは敵のロボの方へ戻っていった。

☆☆☆

ニシアのHR形態【スイム・ドラंक】は、竜だとの見方もあれば、人魚のようだとの見方もある。

尾が長いおかげで、今までのHRよりも大きく感じられる。

だが、ヒスロの【アング・ウォール】よりも体格はかなり細い。

下手すれば、エストの【ティア・ルーチン】よりも細かろう。

縦長いHRというコンセプトを保つのが、【スイム・ドラंक】だ。

ニシア自身が女性と見間違えられる程の美しい容姿が、HR形態の特徴として出ているのだろう。

武人との戦闘は、合図なしに開始されていた。

長い尾で払うように叩きつけるニシアだが、HRで身の軽い武人は難なくかわす。

水中で抵抗が強くなっている状態でも、軽くかわす。

未衣子達を襲った小魚達の群れも、【ブラッドガンナー】の前に群がった。

HRは細胞分裂による巨大化が主である。

熱を利用した合体は行わない。

だから、水中戦で武人は戦える。

小魚達は両手の小型銃で、軽く撃ち落としていた。

【ブラッドガンナー】が発砲する弾丸も、特殊加工で威力の低下を防いだ仕組みとなっている。

『やっぱり身軽よねあなた。潰しがいいがあるわ。』

『こっちは手間ばかりかかるんやけどな。』

『そう言わずに、楽しみましょう？私とあなた、2人だけの戦闘を。』

武人は内心面倒くさくなっていた。

リウトもこの襲撃はわかっている為、応援を頼みたいが…。

ニシアも、武人しか見ていない。

今までの【宇宙犯罪者】達が武人しか見てないのは、彼もわかっていた。

だがニシアと小魚達、両方の相手は難しい。

今はかわせても、持久戦だと保たないかもしれない。

武人はこっそり通信を入れた。

『子供達に輸送機の砲撃をさせるんや。王子達は…身を潜めて攻撃してくれ。』

☆☆☆

小型輸送機にジェット機が格納されてすぐ、私はジェット機から降りた。

他の兄達は別の輸送機にいる。

だからこの輸送機には私と他【ラストコア】スタッフのみしかいない。

武人兄ちゃんの指示で、私は特別に操縦室に入った。

砲撃はこの部屋でしか操作出来ないからである。

操縦室の手前はほとんどモニターで埋め尽くされた。

お陰で小魚達も、武人兄ちゃんの戦いぶりも見る事ができる。

「砲撃は1種類しかないから操作は簡単だ。だが弾数には注意だよ？予備の弾数が少ないからね。」

あとAも当てすぎないように、持ち物だから、と注意事項が増えていった。

狙撃系は正確さを求めるからちょっと苦手な私。

でも小魚達を減らさないと、武人兄ちゃんが危ない。

【パステージュ】が使用不可、更に王子達の【ホーンフレア5 t h】も後手に回れと指示されてる。

この敵の口ボは兄ちゃん1人で倒さないといけない。

だから、支援を怠らないようにしよう。

☆☆☆

愛嬌湾内は銃撃戦の嵐だった。

ほとんどが[ラストコア]からの攻撃である。

水中でも爆発が各々で見られ、小魚達は落ちていく。

武人は爆発とニシアの攻撃の2種類を回避していた。

【スイム・ドラנק】の尾には、所々に繋ぎ目があった。

武人は繋ぎ目を狙い、動きを封じようとした。

銃弾は爆発を引き起こす火薬だけではない。

エスト戦で用いた電撃の銃もあるが、【ブラッドガンナー】が持つ銃の種類は他にもあった。

現時点で使用するのは、針を銃弾代わりにした物だ。

アーチェリーとは違い、片手で乱射まで出来る。

しかし火薬物と違い、大量に生成はできないのが欠点だ。

だから武人は繋ぎ目が見える場所からしか、針の射撃は行わない。

針の射撃は右手のみ操作し、左手は爆発の攪乱を誘う小型銃で応戦した。

あちこちに爆発を引き起こし、ニシアの行手を阻む。

だが【スイム・ドラंक】は変幻自在のHR。

小魚達の大量発生は、ニシアの特性にあった。

小魚達はニシアの分身そのもの。

細胞分裂の段階で切り離しの作業が行われ、分離された小さな球が小魚に形成される。

小魚達が大量発生すれば、ニシア本人の身体が小さくなる…ことはなかった。

朽ちた小魚は、彼の養分になる。

小魚達を減らしても効果は薄いのは、武人も理解していた。

しかし小魚達の群れも解消できないと、攻略が難しくなる。

そこで武人は、ニシアの盲点を探そうとしたが。

ある小魚を落とした。

ここで彼は気づいた。

小魚の腹部分を命中すると、紫の液が漏れる事を。

紫の液は海底に落ちると、海藻が萎れていった。

これを踏まえ、武人は毒液だと予想した。

武人は毒液を、【スイム・ドラंक】の頭部にかけようと考えた。

尾に針を刺して動作を止めるのを、後回しにした。

【ブラッドガンナー】は移動の為、火力を上げた。

『あら突進でもするの？大胆ねえ。』

ニシアは喋ると、【スイム・ドラंक】の尾で叩きつけようとした。武人は回避した。

水中では踏み台になる物はない。

火力を上げて、地上よりもスピードは出にくい。

だから、【スイム・ドラंक】頭部まで近づくのには手間取った。

一度近づけば、後は回避行動を取りつつ、小魚の腹を潰せばいい。

武人の頭の中はそれで固まっていた。

『じっと見つめたかったんやろ？お前。』

『随分積極的じゃないの？いいわ、すぐに楽にしてあげる。』

【スイム・ドラंक】の尾の動作が激しくなった。

武人は回避を選択するが、最終的に蛇のように巻き付けられた。

【ブラッドガンナー】の火力では、水の抵抗を抑えるのは困難だった。

ごちない動きしか出来ない【ブラッドガンナー】。

武人はあえて、この方法を取った。

両手は動けるよう、脇を開けた状態で巻き付けられた。

おかげで小型銃を、わずかでも使えた。

小魚達がニシアを守るなら…。

1尾の小魚が彼の目の前を過った。

武人は小魚の腹部分を、狙い撃ちした！

紫の液が噴射された。

方向はバラバラだった。

武人の目的である、『【スイム・ドラंक】の頭部…アイカメラ部分に毒液をかける』作戦は叶った。

『うっ、目が、視界が濁ってるわ！』

ニシアが叫んだ。同時に【スイム・ドラंक】がジタバタと暴れた。無意識に。

その影響で、【ブラッドガンナー】は巻き付けから解放された。武人は距離を取った。

ニシアは【スイム・ドラंक】の腕でアイカメラの汚れを落とそうとしていた。小魚達が汚れを落としにやってくるが、【ブラッドガンナー】の小型銃が腹部分に穴を開けた。

毒液が【スイム・ドラंक】のあちこちにかかった。

H R形態は合成金属で、簡単に錆びない。

被害が大きいのはアイカメラだった。

これもプラスチックに似た素材で染み込まないが、目の輪郭に隙間があった。

隙間に侵入すれば、毒は自然と回る…。

『ううっ、うわあああ！』

《メス》らしいニシアから想像つかない、《オス》らしい悲鳴が聞こえた。

だが、容赦のない武人はここで終わらない。

右手で持った、針の射撃銃。

毒で苦しむニシアに、回避行動を取る意識は薄いだろう。

彼はうまく、【スイム・ドラंक】の尾や上半身の繋ぎ目に針を刺した。

【スイム・ドラंक】は海底に仰向けで倒れた。

所々に刺された針で動けない。

『毒持ってんの知ってんのに、このザマなん？』

【ブラッドガンナー】は針の射撃銃を、【スイム・ドラंक】の胸元に当たる角度に定めた。

するとニシアは喚くのをやめ、逆に笑い出した。

『能力を持って余すのをやめたら？何の力もない原始地球人の味方になって、何したいのかしら、』

ニシアが言い終わる前に、武人は射撃銃の引き金をひいた。

動けなくなった【スイム・ドラंक】の心臓部を狙うのは容易かった。

周りの小魚達も、海底へパタパタと落ちていった。

『…アレックス、A I の処理頼むわ。』

『わかった…どうした？』

『大丈夫や。すぐ戻るわ。子供らは？』

『時期を見て本部へ収容した。』

『そうか…。』

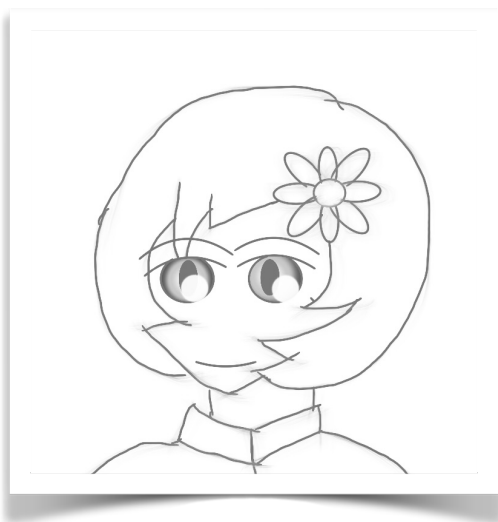
【ブラッドガンナー】は十字型で倒れた【スィム・ドラंक】を後にした。

ニシアはもう、意識を取り戻さなかった。

（もう少し、もう少し早かったら。お前と添い遂げたかもな…綺麗だった。）

武人は周囲を確認しながら、ゆっくりと【ラストコア】本部へ戻った。

6・暴露の日



私は10年以上、同じ夢を見続けていた。

男の人が街を守る夢。

武人兄ちゃんとの初対面の時から、その夢が加速していった。

同じ夢と言ったけど、毎日見ている夢は少し、変化している所もある。

でも、基本的に『1人の男の人』に焦点を当てられている。

その人の人生を振り返るような夢だ。

男の人は捨て子で。

男の人は怖い人に拾われて。

男の人は怖い人の言う事聞いて、他の生命を潰して。

男の人は優しい女の人に出会って。

女の人に救われ、男の人は平穏に暮らしていて。

男の人の訪問地が戦場と化して。

女の人が自分の命を代償にしてまで、男の人を生存させて…。

振り返ると、夢の中の男の人って壮絶な人生を歩んでるんだなあ、と思った。

キリのいい所で目が覚めて、朝起きる。

夢の中の話をするんだけど…家族にしかしなかった。

学校ではいじめのトラウマがあって…できない。

学校では大人しい真面目な子供として、振る舞っていた。

それが[ラストコア]に来てから、医療のチェックを受けるようになり、私は夢の中の話を共有してくれる人が増えた。

元々日記は書いていたけど、チェックを受けてから細かく書くようになった。

私の事を理解してくれる人が増えたのは嬉しい。

でも男の人は過酷な人生を歩んで、私は心配だった。

☆☆☆

ニシアの襲撃があった日の翌日。実際の時間は当日だが。

〔ラストコア〕本部の統制制御室では、上層部の緊急会議が開かれた。

集まったのは宗太郎、ジェームズ、アレックス、武人と…傘下の各責任者数名だった。

白井3兄妹とリュート一行はこの部屋にはいなかった。

「今回の重要事項をおさらいする。

まず重要な〔宇宙犯罪者〕の撲滅が終わるまでは屋外のレジャー活動は禁止にする。外出時は私の許可をとるように。」

宗太郎はスラスラと述べた。

傘下の責任者達は一斉にハイ！と大きく返事した。

「あともう1つ…。黒川、いいか？」

宗太郎は武人を指名した。

「ええよ？まあ、いつもの内容やけどな。」

武人が前に立った。

「2点程言うわ。1つは宇宙進出を目指したい。」

周りがあー、と頷いていた。頭を掻く人もいた。

「難しい課題やと思う。でも今は強力な助っ人がおる。フレアランス家の王子一行や。」

「そうか！彼らは土星圏の出身！」

責任者達の中の1人が言った。

「詳しい内容は王子には話している。大型宇宙船【フレアランス5】からの情報待ちだ。

他の土星圏の星々からの応援を要請しているようだ。」

アレックスが説明した。これで周囲の人間達は納得した。

武人はもう1つの事項を話した。

それは動揺を誘う内容だ。

「申し訳ないんやけど、子供達の試用期間を延ばそうと思うんや。

あと1月足らずで切れるんやけど、代わりに候補がおれへん。

今は続投で行こうか思っとる。」

1人の責任者が不安な表情で手を挙げた。

「学校通っているのでしょうか？そちらに専念させた方が…。」

「終わってからでもいいやろ。」

武人は話を続けた。

「軍に頼んでも何もせえへんし、アイツらは信用せん。それにニシアの件でこ
こも特定されとるようなもんや。

とっとと宇宙へ上がってクーランを倒さんと意味がないんや。」

「クーラン…？」

「[宇宙犯罪者]を束ねとる悪人、という認識でかめへん。追々わかってく
る。」

責任者達は武人の言い分で、「クーラン」という人物をなんとなく解釈した。

しかし、白井3兄妹の続投には納得いかなかった。

他に支援や救援がない以上、選択肢はなかったので、認めざるを得なかった。

「あの子らは俺がちゃんと責任持つ。今回のは俺の失態や。生身の奴を仕留め
とけば防げた。」

宗太郎が手を挙げた。

「続投だが…再び3か月の縛りになるがいいか？」

「かめへん。ジェームズは探してくれとるけど…見つからんやろ？」

「…ちとハードルが高くてな。」

「決まりや。俺からは以上や。宗太郎、後は頼むわ。」

武人は宗太郎に続きを振った。

「他に意見や質問はないか？」

手を挙げる者はいなかった。

「よし、これで解散だ。各自持ち場へ戻ってくれ。」

宗太郎の一言で、多くの責任者達は統制制御室を出た。

武人とアレックスも彼らに続けて出ていった。

残ったのは宗太郎とジェームズのみだった。

「黒川に知らせなくていいのか？」

宗太郎から話し始めた。

「俺が兵を集めてる事か？」

ジェームズは宗太郎の意図を理解した。

「今後、クーランの指揮系統以外でも〔宇宙犯罪者〕は出るだろう…。」

「ハードル高いのは事実さ。興味持つ奴はいるが、あっちの上層部が固くてなあ…。」

「…承認問題か。」

宗太郎とジェームズは兵集めに悩んでいた。

★★★

「ニシアも敗れて…俺が雇っているHRはあと3人か。」

「ざっくりとした数で換算すると、だろう。」

火星圏タレス、〔レッド研究所〕。

薄暗い部屋の中で、クーランはニヤニヤと笑っていた。

答えに応じたマル口は、クーランの表情があまり心地よくなかった。

見下しているようで。

「そんな部下の数まで管理できねえだろ？直系の部下じゃあるまいし。」

「直系の部下も管理できない男がよく言うよ。」

マルロはクーランのずさんな部分に呆れていた。

すぐに話は別の話題へと切り替えた。

「で？場所を特定したんだって？」

クーランの気味悪い笑いは止まらない。

「もう手は回している。ニシアの小魚の解析データで場所は突き止めた。」

「よく海へ…ってお前さんも水に強いんだったな。」

「[ホルプレス]と一緒にするな。我が[ヒーストン]部隊は頭脳明晰でなければ一員になれないんだからな。」

マルロは正方形のディスクを部屋のベッドへ放り投げた。

「自慢の息子、取り戻したいんだろ？必要分だけまとめたからな。」

「子供みたいに投げるなよ…。お前さんは見た目に反して、歳食ってるんだからな。」

「余計なお世話だ。実力を示せば、見た目も歳も関係ない。」

クーランは面倒くさい仕草でディスクを拾った。

体を動かすのが嫌いなのだ。

「ま、貴重な資源は頂いとくわ。ありがとよ。」

「貴重源だと思ってないだろう。」

「失礼だねえ。」

クーランはマルロが素っ気ない態度を取る事は知っている。

だから強い指摘はしないが、感想だけはつい述べてしまうのだった。

「お前さん達が動けば、俺は楽に過ごせるからな。頑張れよ？」

「頑張れ？すぐに終わる。情報が入り込んできたからな。」

「やっぱ用意周到だお前さん。」

「俺の部下達が優秀なだけだ。」

そう言ってマルロは部屋を後にした。

ロッドの底をツツツツ置きながら歩く姿は、クーランには見慣れた行為で。

「アイツで無理なら、俺も出るしかないな。」

と呟いた。

★★★

「マルロ・ヒーストン！」

マルロは自分呼んだ人物を探した。

金髪の、高貴な男がズンズン歩いてきた。

「貴様が出るとはどう言うつもりだ！」

マルロは正直うるさいと感じていたが、この人物が誰なのかは知っていた。

「金星圏メイスのピウス・エクステラ…聞いたのか？」

「私が直に問いました！何故私ではなく貴様が…！」

「…。」

「貴様は偵察だけをコソコソやれば良い！前線は我々が出る！」

身勝手な言い分だな、とマルロは思った。

が、返事は冷静に返した。

「…言うておくが、貴様はあの男に何かをもたらしたのか？」

「もてなし？それは結果だろう！」

「ではお前は何かを持っている？雄叫びのガキは偶然だが、ヒスロは並外れた肉

体。ニシアは変幻自在の魔術師。俺は情報網に長けた指揮を兼ね備えている。

土星圏のトンケも部下達の手腕がいい方だ。

だがお前はなんだ？ただ突っ込むだけの能無しだろう。」

「先手必勝には自信はある！」

マル口は自分に向けて手を仰いだ。

ビウスの考えを否定する意味だ。

「それは対策を練った上での考えだ。威力の高い敵が潜んでいるとか、そういう情報がない限りは戦力温存の為に、最低限の戦略で攻めるべきだ。」

マル口はビウスに背を向けた。

「地球産のロボのパイロットも特定した。」

「何…？」

「子供が乗っているんだ。しかも学は少しあるらしい。学校が存在しているからな。」

マル口はゆっくり歩き始めた。

「何か努力して奴に獲物を示さない以上、お前には振り向かないと思え。」

この発言時に、マル口は後ろをチラッと見ていた。

ビウスの表情は陰しかった。

☆☆☆

〔ラストコア〕スタッフ達の、外での宴会はしばらく中止になった。

でも学校だけは行かないといけない。

退屈だなあ。

〔ラストコア〕での勉強で単位認定でもしてくれたいのに。

私は中学生だから自動的に数年で卒業するけど。

朝は兄達と別れた後は、私は口を開かなかった。

口利かないといけない理由がないから、静かに過ごそうと考えていた。

すると私の席の前に、1人の男の子がやって来た。

白い髪が特徴の、それ以外はごく普通の男の子だった。

「はじめまして。お名前聞かせてもいいかな？」

もしかして、転校生？でもそれなら先に自己紹介の場を設けるはず…。

男の子の近くにいた女子のグループの1人が口を挟んだ。

「あーその子、白井さんがいない日に来たから。」

私がいけない日…。

〔宇宙犯罪者〕以外のHRの襲撃は平日が多いからなあ。

「でも白井さん、あんまり喋らないよ？」

「私達と話しようよ。丸井君の事、私達もっと知りたい。」

随分と心外だな、とは言っても事実だから私は彼女達を無視していた。

でも丸井君は、彼女達の誘いを断った。

「白井さんが気になっただけです。ごめんなさい。」

「あ、そうだったんだ！ごめんね？」

「じゃあまた今度、お話ししましょう。」

彼女達は後ろを向いた。もうすぐ始業時間だし。

「あの、話って…。」

「大した事はないです。君に興味があるってだけでは、理由になりませんか？」

興味…？

私、何か変な事したのかな。

夢の話は学校ではしていないよ？

「…話すだけなら、いいよ。」

「ありがとう。チャイムが鳴るまで日常会話でしよう？」

さっきの子達と同等の会話を？

「私、流行り物はよくわからないわ。」

「じゃあ、昨日何したかとか。今朝何食べたとかでもいいよ？」

「…毎朝パンだけだなあ。」

「[ラストコア]に行く事は普通の人には内緒にしてくれと注意受けてるし。

もういいや、食べ物紹介でもしよう。

私は今まで食べて美味しかったパンを紹介した。

☆☆☆

『隊長、こちらが最新の、地球産ロボのパイロットのデータです。』

「ご苦労。」

『かなり踏み込んだ情報がありますが、大丈夫でしょうか？』

「構わんさ。HRだろうがそうじゃなかるうが、中に生物が潜む。生物の核心をつくには、些細な情報も必要だ。」

『やはり隊長はすごいです。』

銀色の光沢を持つ大型宇宙船「スイルシルバー」。

天王星圏スイルのHRで「宇宙犯罪者」のマルロ・ヒーストンが乗っている船だ。

マルロは今の通信を、彼にあてがわれた個室で聞いていた。

下手に情報を拡散するのを防ぐ目的でだ。

部下の「ヒーストン」の隊員達に流すのは、必要な情報のみ。

「パイロットは3人。子供で学生とはな…舐められたものだ。」

『ニシアは奴が倒しましたが…。』

「小魚の解析データに地球産のマシンらしき物があつた。全ステージで出撃しているのは間違いない。」

マルロは小魚の残骸の破片を摘みながら通信相手に話した。

「猿とヒスロ戦では大活躍だった。」

『ヒスロ・インフィ戦には同意しますが…あの猿は…』

「やられそうな距離まで近づき、手まで伸ばした。」

根性ある奴だ。その根性をへし折ってやりたい。絶望を見せたい。その隙に我々が勝利をする。」

そうすれば我々の天下だ、ハハハ。

とマルロは笑った。

通信相手以外に声を聞いていなかった。

☆☆☆

誰かとお喋りするのが、こんなに楽しいとは思わなかった。

丸井君との初対面の日に感じた事だった。

下校の時も【ラストコア】に行った時も、この時はかなりウキウキで浮かれていたんだろう、と思った。

あまり身が入らず、やる事だけやってすぐ帰宅。

最近それが多くなった。

丸井君は聞き上手だよ。

どんなに些細な内容でも、共感を持ってくれる。

2人の兄達も、未衣子に久々の友達ができた！と喜んでくれるし。

嫌いな学校に楽しみができて、丸井君には感謝しなかった。

こんな充実した毎日が、続くといいなあ。

私の頭はそんな願いでいっぱいだったのに。

H Rの襲撃があった。

この日も学校で、丸井君と仲良くしながら勉強していた。

襲撃は昼休みの最中。

丸井君に先生への連絡をお願いしてから、現場に向かう予定だった。

丸井君の周りを、白い光の輪が、台風のように現れた。

吹き飛ばされないよう、私は必死に踏ん張った。

輪は丸井君を包むように太くなっていき、一定時間経つと、輪は引き裂けてなくなった。

輪の中にいたのは…丸井君ではなく、丸井君に似た…ロッドを持った和装の男の子だった。

「丸井…君？」

私は仰天した。

丸井君は魔法使いらしい。

もしかして共に戦うの？と期待していたのに。

丸井君、だった魔法使いはロッドを一振りすると、光の弾を生み出した。

光の弾は私に向かって、素早く迫ってきた。

幸い、制服に切れ目がついただけで私は無事だった。

背後のコンクリートの壁に…ひび割れが発生した。

「準備は整った。後は眠ってもらおう。」

魔法使いの攻撃は終わらない。

光の弾がまた出てきて、弾で私を傷つけようとする、筈だった。

「未衣子！」

勇希兄ちゃんの声だ。

おかしい…サイレンも鳴り出しているのに、どうして？

勇希兄ちゃんが私の手を引っ張ったおかげで、2度目の攻撃をうまく回避した。

結果、私達は屋上入口付近でこけてしまった。

「…立てるか未衣子。」

「大丈夫だけど…。」

「すぐに転送するぞ！ジェット機を兄貴が誘導してんだ！」

「わかった！」

勇希兄ちゃんが何で来たのかわからない。

でも今は緊急事態。

ブラウス隠してたペンダントを開けて、自分の身体を転送した。

勇希兄ちゃんは腕時計型の《転送装置》を使った。

「しまった…！」

『戻れ。お前の任務は成功だ。』

「あとは追わなくてもよろしいでしょうか？」

『愛嬌湾までわざわざ出向いたんだ。あちらもすぐに迎撃体制を取るだろう。』

人手が欲しい。』

「わかりました。後は頼みます、隊長。」

『必ず成功できる。心配するな。』

☆☆☆

愛嬌湾上空に、HRの軍団がやって来た。

各々が魔法使いのロッドを右手に持っている。

過去に、エスト戦に挑まれた経験のある武人は、この軍団を率いる者が誰か特定できた。

『マルロ…ヒーストン！』

武人は既にHR形態【ブラッドガンナー】へと変身していた。

武人は左右を見渡した。マル口を探すためだ。

しかし、全て似たようなH R形態の口ばかりであった。

数が多すぎるのもあってか、隈なく探すのが難しかった。

『またコソコソ隠れとるんかいな！

出て来いや！出ないとその目の前のデカイ宇宙船を撃ち抜くで！』

武人は片手持ちの大砲を出した。

撃墜予告を受けた宇宙船は静かだった。

『隊長、奴は隊長を…。』

「奴の相手はしない。船本体でも武装はいくらでもある。」

汎用ミサイルを放て、とマル口は部下に指示を下した。

ミサイルは様々な方向に散らばって飛んでいた。マル口の味方は避けた。

武人は…被害縮小の為撃ち落とした。

ミサイルの数も多いので、あらかじめ【ラストコア】本部から射出されたA I
もミサイル迎撃に参加した。

【ブラッドガンナー】は落ちなかったが、A Iの落ちる様は確認できた。

落ちるA Iとすれ違いで【ホーンフレア5 t h】も飛んできた。

『黒川！』

『王子遅かったやん？何かあったん？』

『すみません！改修作業をしていて…』

『まあ、行き来せなあかんもんな…。』

★★★

『隊長、今度は…』

「あの三角槍…土星圏二コンの物だな。」

『流石にまずいのでは…』

「土星人のロボはHRではない。ラルクを焦らせろ。俺は…別の所へ行く。」

マルロは指定席から立ち上がった。

マルロは個室を出た後、通路奥のエレベーターに入った。

この宇宙船は、エレベーター内にモニターがあった。

彼が見たのは、3機のカラフルなジェット機が真正面に向かう映像だ。

エレベーターが止まると、マルロはすぐに目の前の小型輸送機へ乗り移った。

「地球産ロボはどこに誘導した？」

『愛嬌市北部です。』

「ならば北部へ向かう。それまで時間稼ぎしてくれ。俺は…【パスティーユ】を潰す。」

小型輸送機の前方、宇宙船の後部ハッチが開かれた。

そこは、武人達からは死角の場所にあたり、彼らがマルロの行動を察知できないように工夫されていた。

（レーダーでバレルだろうが。）

マルロは敵に察知される可能性があるかと疑っていた。

だがその対策をとるように、部下のHRを大量に配置したのだ。

一言で言えば総力戦。後悔のない戦闘準備を進めてきた。

（電波障害も気づくだろうが、解除は不可能だ。よほどの実力者でない限り、電波に逆らえる者などいない。）

小型輸送機は発進した。

その時に白い煙を排出した。

「地球産ロボへの支援がないよう、戦地の中心から離れて行動を取る。いいな？」

「わかりました。」

マルロを乗せた小型輸送機は、煙を出してから加速をつけた。

【パステージュ】のジェット機は、直交で交わるように仕組まれていた。

☆☆☆

ジェット機に乗って愛嬌湾に向かう途中、私達は何かを捉えていた。

敵を表す、地図上の赤い光の点。

赤い点の多くは、武人兄ちゃんと王子達の周りを囲んでいた。

でも、地図をずっと眺めると、奇妙な敵の行動も見つけた。

「中心地から、愛嬌湾から離れていく敵が1つ…？」

『未衣子？何か言ったのか？』

勇希兄ちゃんは私の声が聞こえていた。

「…兄ちゃん達、地図をよく見て？」

私は奇妙な敵の動きがあると兄達に教えようとしたが。

『ああ、俺も確認したよ？1つだけ中心地から離れている点がある。』

和希兄ちゃんは既に発見していたようだ。

なら話は早い。

「武人兄ちゃんや操縦士さん達に報告しよう？あの敵を野放しにするのはいけないわ。」

『わかった、俺から…！？』

和希兄ちゃんが言うのをやめた。

同時に、通信時によく聞くノイズが流れてきた。

おかしいと気づいたのは、みんな同じだった。

『何だよ！これ！通信が開かねえ！』

『落ち着け勇希！…ノイズが酷くて反応しない…？』

和希兄ちゃんが勇希兄ちゃんを抑えていたけど、通信障害には驚いた。

「他の回線も探るね！」

『他の回線も…駄目だ、これは…。』

『…愛嬌湾行こうぜ！武人兄ちゃん達いるんだろ！』

味方と合流…安全策を取るならこの案も考慮できるだろう。

でも、私はここで言い出してしまった。

「…追いかけて。あの1点を。」

もちろん、兄達は戸惑った。

『何言ってるんだよ！俺達ずっと勝手な行動ばかり起こして…。』

『地図が活着ているのもおかしいが…。確かにこの1点を見逃すと大変だろう。方向的に他県の市街地に進出するようだ。』

和希兄ちゃんが冷静に分析していた。

「だったら、他県に被害が及ぶ前に行こうよ！」

『でも避難は終わってるだろ？』

『被害ゼロにするには越した事はないだろう…ぶっちゃけ、武人さんと合流しても通信が復旧できるかは見通しが立たない。』

『…そうだよな。』

勇希兄ちゃんはうつむいた。

『誘導する手もある。攻撃をかわしながら、最終的に合流コースへと繋げるルートが。』

『そっか！おびき寄せなんだな！』

「まとめて倒せる！」

和希兄ちゃんの奇策に、私と勇希兄ちゃんは乗った。

結局、私達は他県へ向かう1体の敵を追いかけていった。

最悪な事態を招くとは知らずに…。

☆☆☆

【ブラッドガンナー】と【ホーンフレア5th】は、マルロが率いる大群のHR【ヒーストン】を次々と落としていった。

HR能力持ちとは言えど、歴戦を潜り抜けた武人と鍛え抜いたリュート達にとっては、恐る敵ではなかった。

ところが2体共に、通信が入る。[ラストコア]の操縦士だ。

『黒川さん！王子！サレンさん！』

『どうしたんや！攻撃が激しい時に！』

[ラストコア]側の2体のロボは、周りの大勢の敵に苦戦していた。

射出されたA1はあくまでも援護目的で全面的に当てにはできない。戦力比は

[ラストコア]側が不利だった。

だが連絡を聞き逃すわけにはいかない。

『子供達と連絡取れますか！？』

『何！？』

『確認するわ！…何これ、通信障害！？』

『何やて！？』

『黒川さん達やリュートには繋がるのに、子供達だけどうして…！』

『…妨害工作しよったな、アイツ。』

武人には張本人が誰なのか、見当がついていた。

『計画立てるのは上手いなホンマ。』

武人はリュートに聞いた。

『王子、サレンちゃん？ほとんど単騎合戦になるけど、捌けるか？』

『貴様、まさか…。』

『大ボスを探そうと思うんや。』

『ですが、どうやって…。』

操縦士が方法を問いただそうとした時。

彼は輸送機のモニターの地図に目を落とした。

『…これは！？』

『何か発見したか？』

武人が操縦士に尋ねた。

すると、サレンも【ウインドアーチ】のモニターで確認した。

『１体だけ他県へ向かってるものがあるわ！それを…味方機が追いかけているよ！』

『何？』

『味方機は、子供達やな…。サレンちゃん、他県に行ってるんやな？』

『え？黒川さん！？』

サレンが動揺した。

武人がこの場から抜ける恐れがあるとみたからだ。

未だに【ヒーストン】の大軍の数はあまり減っていない。

真正面の大型宇宙船以外にも５隻程、宇宙船が飛んでいる。

愛嬌湾だけで被害が収まるとは思えない状況下だ。

そんな中で武人がマル口らしき敵を追いかけるのだ。

『アレックスには大型ＡⅠを出してもらおう。中心地はそれで凌ぐ。』

『俺達は…。』

『気が変わったわ。リユート達は俺に着いてくるんや。飛べるならスピードは持つやろ？』

『性能は上げましたから。』

『大型A I…。自分の方で許可を貰います。』

『頼んで。』

【ブラッドガンナー】が北へダッシュし始めた。

【ホーンフレア5 t h】も、武人のあとを追った。

周囲のHRを一瞬のスピードで爆発させた。

道はまっすぐきれいに開かれた。

2体共に、速度はMAX状態。

時々敵の攻撃をくらったとしても、ダメージは軽かった。

速くて命中できない。

【ヒーストン】の大軍は手を出せなかった。

☆☆☆

中心地から離れている敵を追いかけると、下はもう他県を越えて日本海だった。

たった1つ離れた赤い点の正体は、小型の輸送機だった。

映像でも確認できるのに、赤い点は動くから距離は開いたまま。

形はロケットのシャトルみたいだし、このまま宇宙へ逃げるつもりかな？と樂觀視していたら、小型輸送機から反応が。

地図の赤い光の点も1つ増えた。

敵の増援は素早かった。

このままぶつかるんじゃあ…と思うくらいには。

でも【パスティユ・スカイ】とは数百メートル程の位置で止まった。

敵のロボ…HRだろうけど。和と魔術師を彷彿させる容姿だった。

【ブラッドガンナー】よりは等身が1つ分低くみえるけど、小さいHRかな？

白だけど光沢があって、見る人によれば銀色と判断できる眩しい機体色。

ロボのボディの上に羽織る袴のようなコートは白だけど。

あとは…【パスティユ・フラワー】みたいにロボと同じ高さのロッドを右手に持っていた。

ロッドの先は【フラワー】につけてある花のくす玉とは違って、立方体？のような形をしていた。

白っぽくて眩しいし、距離が離れているのではっきりわからない。

『地球産ロボ、【パスティユ】。』

『え？』

『何？』

敵のロボが私達の乗るロボの名称を知っている？

教えたつもりなのに。

『スピード型、攻撃特化型、広範囲戦略型の3パターンにチェンジできる多機能ロボ…。』

『性能まで…！』

『これは序の口だよ。』

「！？」

多分、私達が驚いているのを見抜いているよ、この人。

『まあそれは後だ。広範囲戦略型のパターン、【フラワー】にチェンジしてもらえないかな？』

チェンジを促してきた？「どういう事…？」

『俺は自分と同じ能力の敵との差を開けたくなくてな。要は敵味方平等なハンデを設けたい。』

…もしかしたら、この人は話し合ったら、わかり合えるかも。

「和希兄ちゃん、勇希兄ちゃん。私に任せて。」

『未衣子、大丈夫か？』

「大丈夫だよ。」

『相手の要求を飲まなくてもいいぜ！アイツは…。』

「物分りはすごくいいみたいだよ。」

『むしろ危険性は高い気がするんだが…。』

『チェンジをしないのなら、俺は撤退するぞ？どうする？敵を逃すと大変なのは君達だろう？』

会話をミュートにした方がいいと思える程の地獄耳だ、この人。

この人の言う通りならば、私達はHR、誇張すると〔宇宙犯罪者〕なる問題児を逃してしまう恐れがある。

そうなれば、地球が破壊されるかもだし、宇宙の星々も砕く残酷な結末が待っているだろう。

そうは、させない。

「わかりました。すぐにやろう。兄ちゃん達。」

『え』

『わ、わかった。』

形態チェンジには、2段階の操作がある。

コックピット右側の3色のボタンと手前に引くレバー。

最初のオート操作の時は、この部分が動いているのを2、3回程見た。

熱融解によってロボを変形させるので、分離して合体する必要はあまりない。

ジェット機に戻ったりする時ぐらい。

スイッチとレバーは3機全て、オンにしないとイケない。

モニター上でオンにしているかわかるので、深刻には考えていない。

3機全てオンの状態になった。

【パスティユ・スカイ】の全身が光る。

形がわからない程白く発光して、数秒で【フラワー】に変わる。

この操作は当然慣れていた。

慣れていた、のに。

以前の水中戦と、同じ轍を踏む羽目になるなんて、想像できなかった。

チェンジなんて数秒で終わるから、攻撃するタイミングなんて一瞬でしかない。

どうして、どうして稲妻が【パスティユ】を縛ってくるの！？

「きゃあああ！」

『罨だったか！』

『そうだろ！』

私は悲鳴をあげた。今度もまた、機械がショートするのだろう。

今や日本海上空。雲と同じ高さの位置で飛んでいる。

雲？

私は意識を変えて、モニターをチラッと見た。

すぐに後ろにもたれていた姿勢を戻した。

自然の雲から、白い稲妻が【パスティユ】に流れていたからだ。

これを切断すれば、縛りの罨からは解放される。

勇希兄ちゃんの空手の型みたいに引きちぎろうか？

コックピット内がチカチカする中、私はすぐにロボを動かすレバーを握った。

『ふん。敵の指示に素直に従うとは、心が濁ってない証拠か。』

敵のロボの声だった。

『こんな甘い奴だとな。』

この人、私達を馬鹿にしてるの？

ずっと舐められてばかりは嫌だ。

私は左右のレバーをしっかりと握った。

「和希兄ちゃん、勇希兄ちゃん！踏ん張るよ！手伝って！」

友達にもレバー引いてもらうよう頼んだ。

でもレバーが、固かった。電撃が強すぎたんだ。

ひょっとしたら、壊れるかも。

★★★

『未衣子！』

男の人の声がした。

友達から発した声ではなかった。

【パスティーユ】に突進するように、猛スピードで迫るロボがいた。

あの黒いロボは見間違えるはずがない。

【ブラッドガンナー】。

武人兄ちゃんが駆けつけてきた！

兄ちゃんが退かすために、私達に体当たりをしてきた。

体当たりで衝撃が走った。

だけど、白い光が消え、【フラワー】へのチェンジに成功した。

その引き換えに…【ブラッドガンナー】が電流を浴びてしまった。

『ぐああああ！』

「兄ちゃん！」

武人兄ちゃんは悲鳴をあげた。

彼は人間みtainな姿以外、ロボから変身できない構造である。

このままじゃあ、武人兄ちゃんがやられてしまう。

何とか、叫び声が聞こえているうちに電撃を止めなきゃ…！

そうだ、雲だ！雲を消してみるしかない！

【フラワー】はロッドを上にあげて、薄桃の光の球を出した。

前に振ると、光の球は分身して、【フラワー】を囲むように陣形をとった。

「行け！」

【フラワー】が3回転すると、光の球は八方に散っていった。

雲に命中するのは容易い事だった。

雲は弾けて消えたけど、電流は止まらない。

武人兄ちゃんは未だ、電流に苦しんでいる。

他に方法は…。

考えようとした時、藍色の槍が雲に刺さった。

槍に電気が走り、避雷針代わりになった。

【ブラッドガンナー】が電流の縛りから解放された。

力が抜けているのか、兄ちゃんが下に落ちる！

私達が武人兄ちゃんを支えにいく…事はなかった。

槍を投げた張本人、【ホーンフレア 5 t h】が急いでキャッチした。

『まっすぐに飛び込んで…貴様らしくない！何を考えている！』

王子の叱責だった。

『…責任取る…言うたからな…散々酷い目…合わせとる…』

兄ちゃんは途切れ途切れに言った。

【ブラッドガンナー】は黒い口ボだけど、黒い煙と多数の傷跡でボロボロなのは一目瞭然だった。

武人兄ちゃんが、危ない！私達は危険を感じていた。

危険性を上乗せするかの如く、敵の白い口ボがお喋りを始めた。

『お前達。そいつを庇う必要はないぞ。秘密を知れば尚更、やる気を削ぐさ。』

「…どう言う事？」

『戻るぞ君達！愛嬌湾が荒れているんだ！』

王子の叫び声がした。でもそんな気になれなかった。

『【ブラッドガンナー】の正体はラルク・トゥエラー。

お前達が敵視している、[宇宙犯罪者]の1人だ。

しかも、11の星を滅ぼした、超極悪人なんだよ。』

『ラルク…？』

『[宇宙犯罪者]…だって？』

兄達は敵のロボの説明に驚いた。私だって同じように驚いた。

『過去の話だ！此奴の言葉に耳を貸すんじゃない！』

『外野は黙ってる！』

敵のロボはロッドを振るい、白く光る立方体を【ホーンフレア5 t h】にぶつけた。

『うおっ！？』

立方体は命中し、【ホーンフレア5 t h】は後ろに下がった。

『あの男はな、いい兄貴ぶりを装い、お前達を戦場に導く卑劣な罪人だ。学びの退屈さにつけ込んだ策略家だよ。』

平和を願う癖に、侵入者を徹底的に叩く矛盾。

地球さえ良ければ、それでいいと思う自己中だよ。』

真っ白な電撃の光が、私達に襲いかかってきた。

敵のロボの話の途中で。回避はしたけど。

『この星の学舎は素晴らしいぞ。優劣なしに教養や知識を学べるんだ。お前達はそれを放棄しようとしている。』

3人、学舎に潜入させたからな。』

「まさか丸井君は…！」

私は咄嗟に声が出た。

『《メス》…そうか。君が1番親しくしてくれたんだってね。

周りに友達がいないから。

どうだ？僅かな期間のじゃれ合いは楽しかっただろう？』

敵のロボの攻撃は止まらない。

ロッドを振るだけで定位置に固定したままなのに。

何度も繰り出されると、1発は攻撃を受けてしまった。

「あぁっ！」

『未衣子！』

『君に友達がいないのは、《夢》のせいらしいな。

同じ男が出る《夢》に周りが引き、拳句には乱暴に扱ってもいいレッテルを貼られた。良かったな。《夢》の男に会えて。

とんだ極悪人だったがな！』

攻撃の威力が増してきた。

何もかも見抜かれて、言い返せない。

防がないといけないのに、気力がない。

ダメージは受けるばかり。

『未衣子！俺に変われ！』

『安心しろ。目的は達成した。

お前達が俺に挑んでいる間に、本部に侵攻させた。

命を取る気はない。おとなしく勉強に励むんだな。少年少女よ！』

また攻撃をくらった。私は反動で頭を強く打った。

ヘルメットで衝撃は軽かった。けど何故か、左目に赤い雫が見える…。

きっと、前面ガラスが割れたんだ。破片が私の頭に刺さったのな…？

『未衣子！しっかりしろ！』

『くっ、落ちるぞ！』

兄達在必死に心配してくれた。でも意識が遠のく…。

【パスティユ】は装甲優れてる筈なのに。

☆☆☆

マルロ・ヒーストンのH R形態【チタン・キュレン】は、真下に落ちゆく【パスティユ・フラワー】を黙って見ていた。

『よろしいのですか？アレにトドメを刺さなくても…。』

『あれだけ心を痛めつければ改心するさ。[ラストコア]とラルクさえ消えれば地球攻略は容易い。』

マルロ側の小型輸送機の操縦士は、マルロの答えに反論しなかった。

ところが、報告はした。

『隊長！緊急事態です！[ラストコア]本部の座標より超巨大兵器が…。』

『地球産だ、大した事なからう。』

『それが…核を搭載した兵器で、地上を一瞬で消し飛ばす効果が。』

『気でも狂ったか！？』

マルロが凶変してからの、[ラストコア]の総司令官・西条宗太郎の行動は素早かった。

彼は愛嬌市及び周辺の地域まで、警告の放送を流し始めた。

『天王星圏スイル、マルロ・ヒーストンに告ぐ。』

我ら[ラストコア]は捨て身の作戦に出る。

日本一帯を焦土化する爆弾を起動させる。

一般市民は全て避難行動に移した。

地上には私と同志のみ残っている。

問題はお前達だ。

愛嬌湾上空に無数の仲間が存在している。

消し飛んで困るのはお前達ではないか？

覚悟を決めたなら、私は爆弾を起動させよう。

スイッチ1つで全てが決まるようになっておる。』

『くっ…！』

マル口は悔しがった。

『どうします？』

『原始地球の破壊活動は…。』

『クーランは破壊活動には賛同しておりますが？』

『奴とはだだの契約関係だ！…いいだろう。撤退だ。』

マル口はロッドを上あげた。

愛嬌湾にいた彼の部下達が、一気に宇宙船へと格納されていく。

マル口も小型輸送機に乗り、H R形態から少年の姿に戻った。

（綺麗な星のまま、残したかったのだからな。

まあ良い。次は本部とラルクを確実に仕留める。

ガキどもは…もう戦場に舞い戻らないだろうな。）

マル口はロッドを突きながら格納庫を後にした。

7・告白の日



欲求はシンプルだった。

宇宙の何処かの星で、意識のある機械（生物達はこれを【ロボ】と呼んだ。）が生まれた。

生物達が生きるには支えが必要で。

生物達には有限の命で一生を添い遂げられなかった。

終焉まで、終の先も側にいてくれる家族が欲しかった。

これが【ロボ】の誕生に繋がった。

生物達は同志を集め、各々の精通する分野を、【ロボ】開発の研究に活かした。現代の地球の年号からおおよそ100年程前に、遂に【ロボ】が誕生した。地球へ情報が流れていない為に、地球人は【ロボ】の存在を知らなかった。

ここから、生物達と【ロボ】の共同生活が始まった。

この宇宙産【ロボ】には、受動的な記憶装置が組み込まれていた。

見て、聞いて、読んで覚える装置を、既に宇宙では開発していた。

1体の【ロボ】はある光景を目にした。

生命の誕生を。若い夫婦から生れる子供を通じて。

【ロボ】は意志を持った。自分の魂を受け継ぐ者を残したいと。

【ロボ】は若いオスの研究者に申した。

研究者は複雑な心境で、初めは断った。

【ロボ】は補強を怠らなければ、無限の生命を得られる。

消えゆく運命に晒されないと。

しかし【ロボ】も初めて、意志を曲げなかった。生命の誕生に感動した。永久存在の運命でも、誕生の瞬間を拝みたいと。

とんだ熱意を感じた研究者は、【ロボ】の生殖機能の開発を検討するようになった。

開発はかなりの難航だった。

生物の解剖から、【ロボ】への組み込み作業まで、多数のリテイクがなされた。

【ロボ】には明確な性の判別はない。

これも開発の難航の理由に繋がった。性の取り決めは難しい。

だから研究者達は【ロボ】に対し、性の取り決めをやめた。

代わりに両方の性の機能を組み込んだのだった…。

最終的に、【ロボ】による生殖活動の自律までには至らなかった。

それでも、【ロボ】からの生成や、成長機能を備える事だけでも、大成功と言わざるをえなかった。【ロボ】は喜んだ。

研究者、いや生物達は大きな問題を見落としていた。

喜怒哀楽の感情等、生物達のありふれた行動を学習した【ロボ】達の結末を。

日常生活では家族の関係が常に良好とは限らない。

意思疎通のズレで衝突する事もある。

生物と【ロボ】の関係性も例外ではない。喧嘩も頻繁に起きた。

やがて【ロボ】の反抗期はますます拗らせていった。

その状態は喧嘩別れで済ますレベルではなく、生物達の人生を終了させるレベルであった。

【ロボ】の反抗期は暴走へと変わった。家族以外の他の生物達へも襲撃した。

襲撃に改めて目にした、怯える《メス》の生物達の存在。

《オス》と違い、丸みがあって小柄な身体は、感情を記憶した【ロボ】が欲求するのに時間は経たなかった。

【ロボ】と《メス》の生物達は、一時的に身体を「繋いだ」。

《メス》の生物達の中に命が宿り、外へ出ていく。

その子供は…生物特有の柔軟な体にも機械のメタルボディにも変形できた。

〔HR（ヒューマニティー・ロボティクス）〕の誕生は、案外単純だった。

怖がった《メス》達は子供を捨てるようになり、それを悪意ある研究者に拾わ

れ、HRの子供達は身体を改造されていった…。

わずか50年程の歴史で、【ロボ】以上の驚異的な大型兵器へと、HRの子供達は化していった。

★★★

「それからHRによる星々の襲撃が始まった。」

大型宇宙船【スイルシルバー】内の自室で、マルロは書物を読んでいた。

紙の端に穴を開けて紐を通すタイプの、簡素なつくりの書物。

だが1冊1冊、綺麗に棚にしまっていた。

読書時間の最中、設置されたモニターに誰かが映った。

火星圏タレス【レッド研究所】のクーラン・レッドだった。

『聞いたぜマルロ？核爆発を怖がったって？』

マルロは動揺せずに、レッドの質問に返した。

「あそこには俺の仲間がいた。【ラストコア】が兵器を保有しているのは想像がつくがな…。」

『なぜあの価値の薄い青い星にしがみつく？』

「あそこには自然がある。特に『海』だ。俺はあそこを第二の故郷にしたいんだ。」

『お前さんの星は、衰退気味だからなあ。』

「核爆発で『海』が濁るのは真っ平ごめんだ。定着地のあるお前には理解可能だろうが。」

『おいおい。それは言い過ぎだぜ？俺なりにサバイバル術を考えてるさ。』

と述べたクーランだが、不安そうな表情はしていなかった。

見慣れてるとして、マルロは特段腹を立てなかった。

「次は仕留める。土産の男は期待するな。」

『お前さんも似てるよな、ラルクに。余計な労力を使わずに始末する所はな。

ま、ラルクがいなけりゃ、お前と取引に応じるさ。』

「そうしてくれれば、こちらも安泰だ。」

マルロは言った後、クーランとの回線を切った。

再び、書物の通読に夢中になった。

（HRの歴史を学んだ所で、何の役にも経たない。禁忌の教訓として受け継がれるだけだ。）

書物の紙をめくる音だけが、唯一の効果音となっていた。

★★★

「あの子達は期間限定で運用していたのよね…。辞めちゃうのかな？」

「黒川は統投と言っていたが…彼らの精神状態は瞬時に酷くなっていた。」

「肉体的には無事だったが…？」

「末っ子の妹が頭に傷が入っていた。ヘルメットが頑丈でなかったら重症になっていたかもな。」

「これ以上は厳しいって事よね…。」

「ところでだ、ニコンの王家は大丈夫なのか？」

「私は問題ない。後悔の念は払拭している。サレン、君は…。」

「私はリユートについて行くよ。このままじゃ終われないのは、リユートだって同じ気持ちでしょ？」

「良い理解者だな…王子の側近は。」

☆☆☆

武人兄ちゃんは重傷だった。

H Rは人間よりも優れた機能を備えているため、命は取り留めただけ、ベッドの上で横になったままだった。

アレックスさんはしばらく安静にしてほしいとの事で。

当分出撃は不可能。

これはこれで、厳しい戦いを強いるのは目に見えていた。

私達には、兄ちゃんが動けない以外にも、重い内容を突きつけられた。

「君らはもう、帰っていい。」と。

一時帰宅とか軽いものではなく、もう[ラストコア]に来なくていい事。

同時に、武人兄ちゃんと一緒に戦えなくなるという意味も込められていた。兄達は話をほじくり出そうとした。

でも武人兄ちゃんは、『無理』の一点張りだった。

「マル口の言い分は正論や。君らは戦場に行かず、平和な世界で知識や経験を積んだ方がええ。

俺がワガママ過ぎたんや。プロを使ったらええのに、やる気ないからって拒否してな。」

俺の事忘れてくれ、と武人兄ちゃんは顔を背けた。

短気な気性がある勇希兄ちゃんはキレてしまった。

「わかったぜ！もういいんだろ！今すぐ帰ってやるよ！」

和希兄ちゃんは冷静に、だけど冷徹な表情を見せて言った。

「俺は頭の中でも、危険に晒されているのは承知してました。弟や妹が熱中していたから、俺も付き添ってあげたんです。」

武人兄ちゃんは顔を背けたままだった。

「でももう限界です。未衣子の身体が回復するまでは彼女の側にいますか…こ

こは敵に察知されたみたいですね？普通の病院へ移転する予定ですから、もう会う事はないでしょう。」

失礼します、と和希兄ちゃんは頭を下げた。同時に座ってる私に声をかけた。

「未衣子、準備が整ったら言うんだよ？」

和希兄ちゃんはスッと去っていた。

私だけ残る形になった。武人兄ちゃんは顔を向けてくれない。

「未衣子。君も早く行きや。これから面白い事、いっぱいあるんやから。」

面白い事？私は今が、楽しいんだけど…。

酷い目に遭わせたくないからかな。

「手続き済ましとるやろ？俺に関わらん方がええ。君らは普通に生きていけるんやから。」

普通に…。

学校行って勉強して、友達つくって楽しむ事、かな。

兄達はその《普通》で生きているけど…私はできていない。

友達はいないし、勉強もテストの点が取れるだけで褒めてくれない。

兄達の支えがあってなんとか学校に通えてる。

本当だったら不登校で引きこもって読書したり、家事の手伝いしたい。家事をこなせば、暮らしには困らないから。

私は《普通》が苦手だった。

同級生にいじめを受けてから、自分の身体が悪い男の人に汚されてから。

私は、《特別》な経験がしたかった。

だから、私は正直者になった。

「ねえ兄ちゃん。10年前の襲撃事件の中心にいたのは、兄ちゃんだよね？」

武人兄ちゃんの頭が少し動いた。図星だったかな。

「…誰か密告した奴おったんか？」

「誰も教えてくれなかったよ？」

むしろ[ラストコア]は基本、口が硬い人達ばかりだし。

初めて[ラストコア]に來た時に西条司令からの話では、

『10年前の襲撃事件を機に設立した』

位の簡単な説明だけだった。

事件の中心に武人兄ちゃんが絡んでいた情報は、何も聞かされていない。

だから、私が襲撃事件のかなり入り込んだ詳細について知っているはずがないんだ。

でも私は知っていた。

「《夢》かな。根拠はないけども。

私、同じ夢を見るって話をアレックスさん達にしたんだよ。」

「！」武人兄ちゃんの頭がまた動いた。

「私ね、確信したんだ。私はずっと、武人兄ちゃんの《夢》を見ていたんだって。10年もずっと。」

「それ程、苦しんでたんやな。」

「苦しくないよ。《夢》は生きがいだから。生きがいを否定する人が多くて、それが一番苦しかった。

だから兄ちゃん、本当の話を兄ちゃんからしてよ。

私は、兄ちゃんの力になりたいの。」

もう引き返せないかもと、自分でも自覚している。

だけど、この横たわる彼を、私は見捨てられないんだ。

武人兄ちゃんは顔をこっちに向ける事はなかった。

話だけは続けてくれた。

「…俺は君らの敵になるかもわからへんねんで？その時はどうするんや？」

「止めるよ。好きな人の間違いを正すのも役目だから。倒してでも止める。」

「…わかった。ゆっくり聞いてな。」

武人兄ちゃんは折れた。

☆☆☆

俺の生まれは火星圏タレス、だったのは確かだ。

産みの親の顔をよく知らない。

自分を認識できる頃に成長した時は既に、どこかの研究所の中にいた。

今だと研究所の名前はわかる。

しかし幼い頃の自分には、そこまでの知識はなかった。

おそらく善悪の区別さえつかない子供だろう。

《育ての親》、名前はクーラン。俺は彼の指示に従って生きてきた。

研究所での訓練から、敵を滅ぼす任務までこなした。

親のいない俺、いや身寄りのないHRは《育ての親》の指示に従うしか、生き延びる術がなかった。

11の星を滅ぼしたと伝えられたが、俺自身、数えてないからわからない。ただ単に、任務をこなす事しか考えなかった。

まさか、夢も希望も見出せない絶望的な環境から、救い出してくれる奴がいるなんて…俺には思えなかったんだ。

俺は地球の成人男性と変わらない位の背丈に成長していた。

クーランから偵察任務を与えられた時だった。

綺麗な女性に出会った。

地球の金髪美人を彷彿とさせる《メス》。

だがセクシーよりも清楚の言葉が似合う《メス》だった。

住んでる環境が違う、と想像させてしまう程の綺麗さだった。

しかし彼女は、こんな『汚い』自分でも、優しくしてくれた。

本来の任務を捨てたい程に。

彼女の住む星を潰す予定が消え失せた。

研究所から逃げて、彼女と幸せになりたい。

もう、星を滅ぼす卑劣な任務はやめたい。

俺は深く願った。

彼女は王女様だった。

最初は猛反対されたが、彼女の必死の呼びかけで俺は認めてもらった。権力って凄いと俺は実感した。

彼女の住む星で、俺は穏やかな暮らしを送っていた。

クーランの研究所には俺以外のHRが沢山いた。

所詮、俺も捨て駒で消えたようにされている。

だから、何の沙汰もなく数年間も、穏やかに過ごした。

彼女、名前はエトラトルと言うが、俺は意思表示が苦手であまり話せなかった。

エトラトルは優しく応えてくれた。彼女の笑みに、俺は救われた。

エトラトルのいる星、金星圏フェルホーンに、地球の交流会の企画があった。

地球の存在は知っていたが、行くのは初めてだった。

「地球の開発計画はさほど進んでないの。だから予約も現地に赴かないとダメ。……一緒に来て欲しいの。」

エトラトルは俺を誘った。小型宇宙船で地球に降下した。

交流会の交渉は難航した。どれくらいの距離を移動したかわからない。

だが地球の空気は美味しかった。

原始の生物が誕生するには相応しい星だって、エトラトルが言った。

幾度の年月を重ねてできあがる自然の景色は、俺達のいた星々の手を添えた空

間よりも美しかった。

そして交渉も成功した。

交流会前日までに、俺達は地球へ降下した。

会場は愛嬌市内の展示場だった。

既に設営準備は整っていて、いつ開催してもおかしくなかった。

寝床のホテルまで用意周到だった。

エトラトルとの距離は恋人同士のようだと周りは言った。

ように見えるだけで、寝室は別々の部屋をあてがわれた。

夜はよく眠れた。体調も優れていた。

交流会当日。地球のお偉いさんとエトラトルが握手を交わした。

俺はS P役として、彼女の側についた。

料理とかは手につけなかった。見た目は美味しそうだったが、俺には他に集中しなければいけなかった。

『警戒』体制は取らなければいけないからだ。

今だと『警戒』してよかったと思う。

敵が太平洋に落ちた。音は小さかったが聞こえた。

俺はエトラトルの側近に避難を促した。

当然首を傾げたが、行動を取ってくれた。

「エトラトル、お前は中にいててくれ。俺も後で行く。」

「どこへ…まさか？」

「君もわかるのか？」

「何となく？」

彼女の返事が気になったが、今は敵の侵入を阻止するのが大事だった。フェルホーンの軍隊と、愛嬌湾から太平洋に向かった。

敵の正体は…黒ずくめの要塞だった。

俺達は敵に撤退命令を下した。

笑い声が、俺を現実へと引き寄せたんだ。

なぜなら笑い声の主が、引きこもりのクーランだからだ。

『久しぶりだなぁ。声を聞かなくともわかるぜ？ラルク？』

俺は宇宙船の外に出ていた。まだロボ形態に変身していない。

俺には無数の銃を蓄えている。

戦闘開始の合図はないが、実戦は始まっていた。

宇宙船から動かずに多数の敵を潰した。

小型のHRの群れなら、楽に対処できた。

フェルホーンの軍隊もロボを出撃させていた。

平和主義を唱える星だが、最低限の武力は備えていた。

正当防衛は仕方ない、俺もそう思う。

戦闘は激化していった。

クーランの要塞からビームの光が発射された。

オープンしたばかりの愛嬌市のレジャー施設【天海山ユートピア】の近くに届いた。

俺は猛出力で施設を守ろうとした。

要塞のビームは威力が高く、ロボ形態になった俺は一瞬でボロボロになった。

湾岸付近の高層ビルと背後がぶつかった。衝撃で建物は半壊した。

陸地をみると、まだ逃げ惑う人がたくさんいた。

HR戦に対応できてないんだ、この星は！

俺はなんとか踏ん張った。

クーランは基本、戦いを楽しんでいた。

否定してるようだが、ニヤついた表情で嘘だと見抜ける。

幼少の頃、俺は奴に気に入られて、身体を交えた経験もある。

狂喜に満ちた奴がビームの攻撃を止めるはずはなかった。

回避しないと俺は潰れる。

だがここを離れると、民間人に被害が拡大する。

最低限のバリア能力しかない俺は、得意の銃で押し返す方法を考えた。

俺の銃のバリエーションが広くて助かった。巨大ビーム兵器もつくり出せるから。

『ほう…まだ余力が残ってたか。だが所詮はHR。親である俺には逆らえねえよ！』

案の定、同じビームを放ってきた。すぐに俺も発射させた。

クーランが吠えていた割には、俺のビーム兵器は拮抗してくれた。

実際は、威力は保たなかった。

俺はビームに押され、高層ビルを破壊され、愛嬌市外の空港まで飛ばされた。

似たような高層ビルが、俺を受け止めたのに。

俺に、力がなくなっていく。生命の糸が、切れていく感覚を覚えていた。

俺は、幸福を覚えてはいけな存在だったんだ。

11の星を潰している極悪人。クーランに命じられたとしても、罪は消えない。

迎えが来たのだろうか。金髪の《メス》が俺を…。

まさか、犯罪者の俺が天国なんていけないさ。

俺はそっと目を閉じようとしたのに。

閉じれなかった。

金髪ロングの青い瞳の《メス》を、俺は既に知っていた。

「エト…ラトル？」

『そうやルク。私はあなたを助けに来たわ。』

「何言ってるんだ。俺は犯罪者だぞ！」

『全て、知ってたわ。既知のつもりであなたに近づいたのよ。』

「何だと…？」

『実は私、HRなの。王家では養子の存在なの。』

「嘘だろ！？」

『ごめんなさい。でも事実なの。私はあなたみたいに改造を施されていない。

私は戦えないの。』

エトラトル本人が告げた。

次の発言が、俺に衝撃を与えた。

『だから…私はあなたを救う。私の生命と引き換えに。』

「よせ！」

俺の制止は効かなかった。

彼女が光に包まれたから。

エトラトルの姿は美しい金髪乙女ではなく、銀色のメタルボディへと変わっていた。

『地球を守ってほしい。私のもう1つの血を流してくれる青い星を。

ずっと待っていたの。王家の人々には感謝しているわ。でも、私を産んでくれた地球の母が忘れられなかったの。

母はもう生きてないけども。』

「それだったら、」

『でもこれで母に会えるわ。心配しないで。私はあなたの中にいる。

あなたの支えになるわ。

大丈夫。あなたはもう、罪を犯したりなんてしないわ…。』

銀色のメタルボディが光の点へと散らばり、俺の胸へと入ってきた。

愛の温もりを感じた。

同時に、涙が溢れていた…。

☆☆☆

「それから俺は蘇ったんや。彼女から貰った力は生命力だけでなかった。

クーラン達を退くまで抵抗した。奴を倒されへんかったのが悔いや。」

武人兄ちゃんの昔話。私は静かに聞いていた。

「後に宗太郎にスカウトされて、[ラストコア]の特別隊員となったんや。あとは既知の通りや。」

黙っていたけど、ここまで私の《夢》は酷似していたのかな。

全部、知っていたからだ。

武人兄ちゃんの生い立ちも、変わったきっかけもみんな。

やっぱり私は、武人兄ちゃんから離れる事なんて、できない。

《夢》を引きずったまま、一生を後悔するかもしれない。

私は意志を伝えようとした。

武人兄ちゃんがようやく、私を見てくれた。

わざわざ寝相の向きを変えてまで。

「こんな情けない俺や。それでもついてこられるか？

命の保証は無いかもしれへん。でもクーランは、倒さんといかんねん。俺はさっきみたいに助けられへんかもしれへん。

それでも、共に行くんやな？」

私の右手を、武人兄ちゃんの両手が掴んでいた。

ここまで、兄ちゃんはお願ひしてくれている。

もう既に決意は固めているんだ。ありのまま伝えよう。

「私は1人でも兄ちゃんについていくよ。私は今がとっても楽しいんだ。自分勝手だけど。私はここに来て良かったって思ってる。」

「そうか…。」

私は左手で、頭に巻いた包帯を取っていた。

武人兄ちゃんはその仕草に驚いた。

「まだ、取らんほうがええやろ。」

「大丈夫。ちょっとヘマをしただけだから。傷跡は見えちゃうけど。

今でも私はまた立ち上がれるよ。

あとは兄ちゃん、兄ちゃんが指示を出してくれる？」

武人兄ちゃんは瞳を閉じた。

間をおいて、彼はゆっくり話した。

「わかった。俺の代わりにマルロを倒してくれ。

残念やけど、俺はアレックスから絶対安静と言われてな。

動かれへん状態や。

厳しいけど、王子達やスタッフの皆と協力してやってくれ。

アイツが一番見逃したらあかん。」

武人兄ちゃんだって感じてたんだ。

あの白い人が危ないって。

実際、私も嵌められたんだ。

仕返ししたい気持ちは同じだった。

「うん！約束するね！」

私は笑顔で答えた。

「兄ちゃん、私ももう行くね。…計画を立てようと思うんだ。」

「気を、つけてな。何も出来へんけど…。」

★★★

私は武人兄ちゃんの休んでる部屋を出た。

ドアの両脇に、見知った顔があった。

「ずっと待ってたぞ、未衣子。」

声も知っている。勇希兄ちゃんだった。

「迎えに来たんだ。遅かったからな。」

こちらは和希兄ちゃんだった。

「私、帰らないよ。ここにいるから。」

2人の兄は、お互いの顔を見合わせた。私を見て、へへと笑った。

「ま、お前は頑固だしな。」

「残りそうだったよ。」

どうやら、私の決意を認めたみたい。意外にあっさりだなあ。

でもこれで気にしなくていい。

「じゃ、私そろそろ戻るから。」

「待てよ。」

勇希兄ちゃんが言った。待って事は、許してくれないのだろうか。

やっぱり、危ないから…。

でも、私の想像とは違っていたんだ。

「俺も行くよ。やっぱ心配だからな。」

「【パステージュ】は3人乗りだろ。1人でも欠けたら威力は発揮できないだろうしね。」

部屋を出た時は、あれほど怒っていたのに。

私は、嬉しかった。今まで祖母の味方していた筈の2人の兄が、今度は私についてきてくれたんだ。

「ありがとう、和希兄ちゃん、勇希兄ちゃん。」

「別に気にしてねえよ。」

「駄々をこねていたけどね。『妹を助けんのが兄貴の役目だろ！』とね。」

「兄貴！それは黙っててくれよ！」

★★★

「…本当にいいのか？3ヶ月固定でいくが…。」

〔ラストコア〕統制制御室。

西条司令、ジェームズさん、アレックスさんの3人がいる中で、私達3兄妹は更新の申請に行った。

手続きは書類で完結するので、出向かなくてもいいけども。

決意表明みたいな名目で、わざわざ行っただ。

「黒川は無理に続けなくてもいいと言ったぞ？」

「俺達も本人の口から聞きました。その上で続けたいんです。」

ジェームズさんの問いに和希兄ちゃんが返した。

アレックスさんは私達が書いた書類に目を通していた。

「ん？」

彼は書類を読んで、疑問を抱いた。

そう、実は申請書以外もあるんだ。

申請書の用紙と同サイズの小冊子を入れていたんだ。

題名は『マルロ・ヒーストン攻略法』とシンプルに書いた。

10ページ程なのですぐに読み終わる。

「昨日の、今日だぞ？よくまとめたな…。」

「今まで教わった知識もフル活用しましたよ。こちらを実現できるかは未知数ですけど。」

アレックスさんは小冊子をべらべらとめくった。

小冊子は西条司令とジェームズさんに渡っていった。

「仮想空間…ありきたりのようだが、実現は厳しいな。」

アレックスさんは首を傾げて言った。

「一部だけでもいいんですが…。」

「敵がどこに降りてくるか、特定が厳しいからな。」

「あとタイミング次第では、敵にバレしてしまうぞ？」

「そこに書きましたが…火山帯で仮想空間を実現させてはいかがでしょうか？」

小冊子とは別で、私は火山の噴火が起きそうな地帯のリストをA4の用紙に作成していた。

調査係は和希兄ちゃんがやってくれた。

表の作成はすぐに終わったし。

ポケットに忍ばせていた資料を、アレックスさんに手渡した。

「『今後噴火が起きる確率の高い世界の火山リスト』…。」

「噴火の予知とかできるのか？」

「正確な時間指定は不可能だが…調査報告のある火山だらけだ。」

2人の上司は疑問に思うばかりだった。

ここで西条司令が私達に聞いてきた。

「なぜ、この作戦を思いついたんだ？」

「弱点をついた攻略で効率よくやる方が、負担も軽く済むからですね。」

「弱点？」

「仮想空間は負担重いんだが…。」

難しいな。私達も仮想空間とは何か、コンピュータに詳しくなくても想像にかたくない。

世間的にはP C内の表現しか実現してないから。

だけど、昨日の今日でやっと思いついたのが『仮想空間の実現』だった。

あの白い人、マル口は天王星圏スイルという星から来た人。

天王星は氷の成分が多く含まれている星らしく、周りの星々はその影響を受けて、氷の星になった。

氷はともかく、水に強い生物が生息しているんだ。

逆に高熱や炎には耐えられない、という知識も以前教わったんだ。

だったら火山など高熱や炎に関係する物をぶつければ、敵は滅ぶのではないかと…。

「…荒治療になるが。」

「はい。」

アレックスさんが言った。

次の発言が、今度の戦闘で採用する作戦へと繋がったのだった。

☆☆☆

『隊長！緊急報告です！』

「どうした。手短かに話せ。」

『地球で爆発が起きています！』

「何？」

【スイルシルバー】内の自室で、マル口は部下の報告を聞いた。

すぐに異変を調べるために、周りのモニターの切り替えを行なった。

「…これは？」

マル口は地球の映像を観た。

地球の各地で爆発が起き、大地が荒れていく様子が映し出されていた。

「待て！我々の部隊で兵器を使用した者はいるか！」

『全員使用してません！使用履歴もゼロでした！』

「奴ら…正気なのか？己の母星なんだぞ！？」

マル口はモニター下のキーボードを操作し、他の部下に連絡した。

『第1部隊です。』

「お前達、先に地球に降下しろ！」『もしや…』

通信相手のマル口の部下も、地球上の異変に気づいていた。

マル口の第1部隊にも地球を監視する隊員がいるからだ。

「その通りだ。俺も後に行く。爆発の兵器を調査しろ！」

『わかりました。』

ここで通信が切れた。

「くっ…。なんて野蛮な奴らなんだ！」

マル口はロッドを手にとると、すぐに立ち上がった。

すぐに自室を出ていった。彼の歩くスピードは速かった。

（ラルクと［ラストコア］のみ仕留めるつもりだったが、気が変わった。原始人を排除する。我々の豊かな故郷に作り変えてやる。）

☆☆☆

「アレックスさん、すごい焼け野原になってますけど…人命大丈夫ですか？」

『比較的生物の少ない地帯を指定している。避難誘導業務は大変だったが、数日かけた作業の成果を祈るばかりだ。』

「無理難題を聞いてくださり、ありがとうございました。」

『いや、むしろこっちが助かった。』

契約更新と計画書を提示してから数日後。

敵のマルロ・ヒーストンの部隊を撲滅する計画は、着々と実行されていった。

西条司令は火炎爆弾の配置と使用の指示を出した。

ジェームズさんは人命の避難誘導を行なった。

アレックスさんは…私達【パスティーコ】の強化装甲の説明を行なった。私達3兄妹は、アレックスさんの説明を聞いた。

『黒川のHRに近づけるよう、柔軟性を重視した。』

装甲の素材の配合の割合を変えている。

試運転を実施していないから、この先の話は不確定だが…コックピット以外の部分を再構築できるかもしれないんだ。

だが、この話はまだ信用するな。』

『再構築…?』

『面白い効果と言えば…そうだな…。』

切断された手足が復活するとか、だろうな。

あまり期待するな。なるべく切断無しで帰ってこい。』

機体の改造か…。

コックピット内は変わってないみたいで、特別な訓練は必要なかった。装甲強化がメイン、って言ってたし。

私達は輸送機に乗って、コックピットの中で待機していた。

いつでも迎撃体制を取れる準備をしていたんだ。

モニター上の映像には、各地の火炎爆弾の仕掛けが次々と起こしている模様。

もちろん、消火装置を搭載したヘリも飛んでいる。

そこに、流れ弾がヘリに衝突したのだった。

いいや、それは『球』と呼んだらいいかもしれない。

白い立方体が、消火装置搭載のヘリを直撃したんだ。

「これは…。」

『アイツだな！もう出るぜ！』

『いや待つんだ。』

和希兄ちゃんが止めた。

まあ、出撃許可はまだないので、勝手に出る事はできないけど。

確かに、敵は近づいてきた。

武人兄ちゃんからマル口のHRの名称は、【チタン・キュレン】と教わった。

降下したHRの群れは、【チタン・キュレン】に似ているけど、一部異なる部分があった。

【チタン・キュレン】は頭部に金色の角が生えていた。

口本的に言えば付着しているとでも言えばいいのだろうか…。

降下したHRの群れは全て、金色の角はついていない。

だから、マル口の仲間達だと区別できる。

HRの群れはヘリと…火炎爆弾の鎮圧に集中した。

消火作業をしているのに？

HRの群れには、一回り小さいA Iの群れが迎撃するようになった。[ラストコア]は世界各地に支部があるんだ。

支部から輸送機が飛んで、そこからA Iが発進する形を取っていた。

「まだ…見当たらないですね？」

『焦るな。統領のHRの頭部の角はわかりやすい濃い金色をしている。手分けして探せば、すぐに見つかる。』

アレックスさんもマル口を探している。

私もモニターの映像から目を離さなかった。

『あの巨大船は…。』

『何色なんだアレ！眩しいぞ！』

「銀色…？」

群れに混じって発見したのは、巨大宇宙船だった。

銀色で見えにくい、側面にデカデカと宇宙の文字がプリントされていた。おそらく、宇宙船の名称なんだろうなと推測できる。

私は宇宙の言語まではわからないけど。

『名前は【スイルシルバー】か…。天王星圏スイルの汎用宇宙船。』

『…特別優秀ってわけではないんですかね？』

『戦闘能力以外は劣るHRにとっては、これでも相当優れた宇宙船だと思ったんだろうな。』

アレックスさんは宇宙船の名称を教えた。

船の話をしていると、映像に動きがあった。

『…来たな、【チタン・キュレン】！』

「え、数が多くてわかりませんよ…！」

『【スイルシルバー】が映る映像を見てごらん？』

『…やっぱりアイツだ！』

私も姿を発見した。

マルロ・ヒーストンのHR形態、【チタン・キュレン】を。

両脇のレバーを強く、握っていた。

『まもなく発進準備に移る。心構えはしておけよ。』

「はい！」

『いい返事だ。』

アレックスさんに褒められた。

映像の中のマルロは、まっすぐ地上に降下している。

群れもまばらになって、姿がはっきりした。

『固定装置を外すぞ！絶対に奴を倒して、帰って来い！』

黒川も観ているぞ！』

武人兄ちゃんが、観てくれている。応援してくれるんだ。

そう思った私は、出撃までの少しの間、そわそわしていた。

『…未衣子？』

勇希兄ちゃんがモニター越しに尋ねてきた。

『大丈夫か？今ならまだ…。』

「大丈夫だよ！ごめん、私変なことしていたかなあ？」

一応、笑って誤魔化した。

『そうか。今から出撃を開始する。固定装置、外すぞ。』

アレックスさんがそう言った後、コックピットの後ろから、空気の抜ける音がした。装置の解除には、いつもプシューと音がするんだ。

『ハッチ開くぞ。まだ、動かないからな。合図を出す。』

輸送機の後部ハッチがゆっくり開かれた。

動作エンジンもかかっている。

計器のパラメータのグラフも上昇しているから。

『カウントする……3、2、1…。』

アレックスさんがカウントダウンを始めた。

既にレバーは握っているけど、握力はさらに強くなっていった。

もうすぐ激戦地へ飛ぶ。

マルロを倒す、それ一直線で行かなきゃ。

『発進！』

3機のジェット機が急に加速を始め、上空を飛んだ。

私達はレバーを握りしめている。

これまでの戦闘で何回も飛んでいるから、敵を追いかけるのは慣れた。

あとは合体。マルロ本人、【チタン・キュレン】が出るなら、私の【バスティー

ユ・フラワー】で対抗したい。

「2人とも、私に任せてもらってもいい？」

『合体か？』

「マルロは最初、同じ特性を持った者同士で戦いたいって言った。

だから、【フラワー】で対抗したいの。」

『でもダメージキツくなるだろ！』

「【フラワー】にはバリアがあるわ。それに【フラワー】は広範囲攻撃の要になっているから。」

『そうだな…。敵の数が多い。片付けるなら一気にやってしまうといいかもな。』

和希兄ちゃんはモニターの地図を見て推測してくれた。

『未衣子、辛い時は言ってくれよ？形態チェンジして、マルロを思いっきりぶん殴ってやる。』

勇希兄ちゃんはやる気満々だ。右手の拳を左手に当てている。

「大丈夫だよ兄ちゃん達。私はもう怯まないよ。

彼には痛い目を合わせたかった。丸井君の件も含めてね。」

『お前…アイツを？』

「ただの友達だよ！でも、会話をするだけだったのに、とても楽しかったんだ。」

私は丸井君を忘れない。

ほんの少しの日々でも、私を拒まず来てくれた友達を。

マルロは私と彼の思い出を、潰した。

教育を受ける必要性は説くくせに、友情を裂く事には厭わないんだね。

マルロ。あなただって間違っている。

誰かをマトモな道に歩ませたいのだったら、その誰かの気持ちを犠牲にさせて

はいけないよ。

あなたがその気なら、私もあなたを潰すよ。

合体も無事成功し、【パスティユ・フラワー】はロッドを振り回した。ポーズを決めてしまった。

苛立ちを感じたのか、敵の群れが私に向かってやってきた。

広範囲攻撃に特化した【フラワー】なら、数回全方位に放射攻撃をすれば、大半は散っていく。

エネルギーの浪費だけが怖いんだけど。

マルロの、【チタン・キュレン】の姿を見つけるまでは、私はロッドを振り続ける。

踊り子のように、回って踊る。

それだけでほら、群れが1体1体、海へ落ちていく。

望み通り、あなたと似た武装で落としてあげる。

後悔するなら、今のうちだからね。

マルロ・ヒーストン。

8・業火の日



武人は個室を離れていた。

愛嬌湾内に潜む【ラストコア】本部の撤退作業に移っていたからだ。

マルロ戦の任務につく者だけを残し、皆機器等の移送に専念していた。

武人は他の【ラストコア】のスタッフと共に、アメリカ東部海底の臨時支部で身体を休めていた。

回復は順調で、横たわっていない。

臨時支部の個室で、武人は壁際のモニターの映像を覗いていた。

これから始まる【宇宙犯罪者】のHR、マルロ・ヒーストンとの対決の中継だった。

4つのカメラで撮影されており、画面も4分割で表示されていた。

「マルロも子供らも出た頃合いやな。」

武人は常温のお茶を飲んだ。

【パスティユ・フラワー】が手持ちのロッドを振るい、放射攻撃でマルロの部下を蹴散らしていた。

「頼むで君達。地球を守るには、君達現地人の強い意志が必要なんや。

俺は庇うのはできる。でも他力本願ではいつかボロが出てしまう。

力は貸した。あとはうまく、力を使いこなしてくれ。」

★★★

マルロはHR形態【チタン・キュレン】にチェンジしていた。

火災爆発が頻繁に起きている今の地球へ、降りてきた。

元々【ラストコア】本部を仕留める目的で地球の近くで滞在していた。おかげで地球降下に時間を要さなかった。

目の前で、自分の仲間の散り様を確認した。

これまでの戦闘でも、仲間が散る姿を何度も目視していた。

今更焦りも後悔もないはずだが。

『何だ…？強化でも施したのか？』

マルロは得体の知れない不安を感じ取った。

HRは機械生命体と似ている為、倒すと爆発を引き起こしやすい。

大爆発を起こせば、装甲に傷がつきそうだが。

【パスティユ・フラワー】に傷跡がなかった。

前回の戦闘から経った期間は短かったのに、地球産のロボが強力になったとマルロは感じた。

『問題は消費だ。耐久性に優れても、エネルギーが枯渇すればいつかはやられるだろう。』

マルロはたかを括っていた。こちらに分があると思ったからだ。

適当に相手してやろう。

【パスティユ・フラワー】との距離は近い。

【チタン・キュレン】はロッドを上に掲げ、立方体の弾を1つ繰り出した。弾は【フラワー】へ向かわせた。

『まずは小手調べだ。すぐ避けるだろう。』

マルロはフッ、と笑っていた。

次の弾を用意する、時だった。

【パスティユ・フラワー】のとった動きが、おかしかった。

弾は案の定避けた。次の行動だった。

【フラワー】は【チタン・キュレン】に背中を向け、離れるようにダッシュした。

『逃げるのか！』

マルロは動揺した。

あれだけの仲間を落としたのに、自分に挑まないのが気に食わなかった。

『残っている者で【フラワー】の進行を妨げろ！挑むのは俺だけでやる！』

『わかりました、うわあ！』

マルロの部下は指示に従う所で、【パスティユ・フラワー】の連射攻撃をくらい、沈下した。

部下がどれほど束になっても、【フラワー】の敵ではなかった。

『無駄に落ちるだけか…！』

仕方がない、とマルロは考えを改めた。

『隊長！』

『【フラワー】の相手は俺がする。お前達は火炎爆発の鎮火と【ラストコア】の拠点占拠に専念してくれ。』

『わかりました！ご無事で！』

理由が不明のまま遠ざかる【フラワー】を追う為、マルロはH R形態のまま猛ダッシュを始めた。

☆☆☆

「和希兄ちゃん、マルロは追いかけてる？」

『今は順調だ。異常がなければ、このまま諸島の火山帯に誘導してくれ。』

「わかった！」

私は【パスティユ・フラワー】でマルロを攻撃、していない。

私達には奇策があったからだ。

奇策を実行する為に、私はあえて『逃げていた』。

『エネルギーの消費には気をつけてくれ。放射攻撃で1割が減少だ。』

『数多すぎるんだよ、あいつら。』

「あとは王子達とAⅠで倒していくんだね？」

『俺達はマルロだけ専念すれば良いって事だ。どうやら彼も、単騎で挑むつもりらしい。』

「ほんとだ。」

私はモニターの地図を少し確認した。

1体だけ、群れから外れていった敵の赤い点があった。

『予備のエネルギーの補充操作は完了しておく。このまま諸島まで加速してくれ。』

『攻撃してこないか？』

「弾を打ってきた時はうまくかわすわ。バリアだけは作動させて。」

『了解だ。』

和希兄ちゃんからの反論はなかった。

☆☆☆

『加速した？本気で逃げるのか？』

マルロのHR形態【チタン・キュレン】も、【パスティユ・フラワー】につられてスピードをあげた。

【フラワー】側の攻撃は、今回はマルロに対して1度も仕掛けてこない。

このまま逃げ延びるのを押し切るのか…？ここでマルロは疑問に思った。

逃げる行為は、戦う意志がないと同等の考えでもある。

戦意がなく、さらに意思疎通が不可能となれば、逃げる選択肢が生まれる。

ところが、先程の【フラワー】の攻撃を見て、[ラストコア]に戦意損失の意図がなさそうだった。

自分の仲間達を、容赦なくほぼ1撃で壊滅させたのだから。

（何か、策を考えているな…？）

【チタン・キュレン】の動作が止まった。

マル口が一旦、思考を整理しようとして。

HRは変身型なので、操縦席の概念が存在しない。

周辺の地形の確認は、ほとんど頭部のカメラアイがメインだった。

『周りは海だらけ。だが、もう少し遠くを見れば…。』

【チタン・キュレン】のアイカメラは、視界を広げた。

マル口は海以外の地形を発見した。

『岩だらけの山々か。なぜあそこには、緑がないのか？もしや、火山か…？』

その時、マル口の心臓にズキッと痛みを感じた。

『う…、まさか、炎？』

マル口は動揺してしまった。

天王星圏スイルの民であったマル口は、種族柄水中でも暮らせる生物でもあった。

海王星圏ミラニアのニシア・ペディルドみたいに、海洋生物と密接した生物ではない。

しかし、天王星圏の星々は基本、氷で覆われた冷水の中で生活してきた。

はっきり言うと、マル口は海などの水中戦が楽だった。

だと言うのに…、【チタン・キュレン】の武装は、水中戦では弱体化するという矛盾が生じた。

水中戦が得意ならば、水中に特化した武装も持つはず、だが。

（俺達【ヒーストン】は幼少期から虐げられてきた。スイルの種族柄、小柄な体躯は他の族にとって格好の獲物だったんだ。

星も幾度か移っている。）

生物とロボットの禁忌の子供であるHRは、嫌われ者の存在。

故郷のスイルでも拒まれて、帰ることができなかった。

（だから、この星の海で静かに暮らしたい。

地球人に海底の生活は無理だ。

ならば、俺達の故郷にしてもいいだろう。）

【チタン・キュレン】の方向は、岩山と逆向きへ変わった。

☆☆☆

『ちょっと止まってくれ、未衣子！』

和希兄ちゃんが言った。

指示通り、私は【バステュー・フラワー】の動作を止めた。

地図は岩山近くで固定していた。

「どうしたの和希兄ちゃん。」

『マル口が向きを変えたみたいだ。』『逆に向かってるぜ！』

「まさか…気づかれたの？」

気づくの早いな、と私は思った。

だけどマル口はかなりの戦略家だったので、聡明だから有り得そう、とは予想していた。

予想していたから、気づかれる可能性はあった。

私も、次の手立てを実行した。

「和希兄ちゃん、逆方向に火山帯がある地域は？」

『この方向だと、アジアに行ったか…。』

『日本に戻ったらマズイだろう！』

『日本はないだろう。火薬爆弾を仕掛けていないんだ。』

「世界の都市部は火薬爆弾の設置は避けているんだよね。」

『田園地域でも居住地・農耕地等の営みのある場所は避けてもらっている。マルロの軍は火薬爆弾の鎮火に割合を割いているみたいだからね。』

他には〔ラストコア〕本部への侵入部隊も確認したけど、そこも見逃していいと、アレックスさんが言った。

愛嬌湾内の〔ラストコア〕本部は移転が即座に決まり、多くのスタッフや機械は潜水艦を利用して臨時支部に移った。

臨時支部はアメリカ東部の海底にあるらしい。

私達も戦闘後はそこに行く。

今〔ラストコア〕本部にいるのは、マルロ戦に参加する一部のスタッフとA Iのみだった。

アレックスさんと西条司令は本部に残り、ジェームズさんと武人兄ちゃんは臨時支部に移っていた。

『ここはあえて、追いかけるのはやめよう。』

「え？なんで？」

『しばらくマルロの動きが見たいんだ。』

『もしアイツが攻撃を仕掛けてきたらどうするんだよ？』

『その時は駆けつけよう。憶測だけど、多分俺達にしか眼中にないかもしれないぞ、あの男。』

「そんな人が他の行動を取れるとは思えないよね。」

『同情したくねえけど。不憫だな、アイツ。』

勇希兄ちゃんは本当に優しい。

☆☆☆

【パスティーユ・フラワー】が諸島付近の海上に止まって、数分が経過した。

『追いかけて…こない？』

【チタン・キュレン】の頭部が左右に動いた。

【フラワー】の姿が見えない事に気づいたのだ。

『何故だ。俺を逃すと地球が危ないと判断しているのだろう？何のつもりだ。』

マル口はますます、思考が回らなくなったと嘆いた。

もう一度、冷静になって周りを見渡す事に決めたのだった。

（先程の方向へ戻るか…。いや、あの諸島には火山帯があった。下手をすれば俺が放り込まれる…！そうだ。）

【チタン・キュレン】の行動は早かった。

彼は北を目指したのである。

マル口の考えた北とは、北極の事だった。

熱や炎に弱い分、水や氷に強いマル口の身体は、極寒の北極には最適だった。

『戦略とは、自分に有利な様に状況を変えるんだ。』

原始の地球人には長時間、寒さに耐えられないはずだ。』

マル口には攻撃する敵がいらない為に、自由に動き回れたのだった。

『俺を1人にさせたのが盲点だったな！哀れなガキども！』

マル口は調子良く言い放つと、【チタン・キュレン】のスピードを上げた。軍隊の戦闘機の倍のスピードを出していた。

『こっちは幾度の戦闘経験を積んでいる！マグマの罠なんかに引っかかるものか！ガキが引っかかればいいさ！』

☆☆☆

『まずい、この速度にこの道のりは…！』

『兄貴？』

和希兄ちゃんの反応がおかしかった。

私も同じ様に地図を再確認した。

「北極へ真っ直ぐに向かってる…？」

『な、新幹線より速くねえか！？』

『自分に有利な方に置きたいって訳か…。』

和希兄ちゃんの言い分に私は納得した。

『どうすんだよ！また同じ手でやられるのかよ！』

「勇希兄ちゃん、はっきり言うけど心理作戦は通用しないわ。きっと他の手よ。」

『アイツは寒さに強いが、俺達は【パステージュ】に力を借りた普通の人間だ。

寿命が縮むのは、俺達の方だ。』

私もつくづく思うよ。宇宙人の能力は便利だなと。

正直嫉妬している。

地球を壊すのに注げる力を、他の方法に利用すれば、平和に繋げれるのに。

今は感傷的になっている暇はない。

マル口は自然の利を生かして暴走を始めるだろう。

H Rの能力をフルパワーにさせたら、勝ち目はない。

残された手段は…1つだけ。

私達兄妹で考えた作戦。

「アレックスさんに連絡をつけて、仮想空間を展開しよう？」

『え？』

『アイツ素早いんだろ！？偽物ってすぐにバレるって！』

勇希兄ちゃんはうるさいなあ。

吠えられても仕方ないのは明らかだけど、状況的に。

「…ダメ元でも展開してもらおう？」

北極と南極にはやってくる可能性はあったし。」

実は私達が期間継続の申請書を出した時に提出した作戦案は、実現が困難だった理由で却下された。

ところが、アレックスさんが部分的にはギリギリいけるだろうと検討してくれて、北極と南極の極寒地を指定した。

指定地に仮想空間を本物の様に見せるホログラム装置を事前に設置してもらった。その実現が、今こそ叶う時が来たんだ。

「我々は心理的ダメージをくらったけど、敵は何もくらっていないんだ。

せめて同じ様な痛い目に合わせてみたいんだ。

恐怖心を煽る効果って、強いんだから。」

『俺も同じかも。アイツ許せねえよ。妹を傷物にしやがってよ…。』

「あの時よりは、大丈夫。」

『馬鹿野郎！俺や兄貴は凄く心配したんだぞ！お前の身体を！』

「勇希兄ちゃんが私の代わりに涙を流してくれているのは知っている。

私の涙ははじめの時に枯れ果ててしまったんだ。

読書で感動体験を試みても、無駄だったし。」

『…きっと、泣ける時くるって。』

勇希兄ちゃんが涙を流した。私の事になると感情移入して、喜怒哀楽を表に出してくれる勇希兄ちゃん。

ごめんね、私の我儘を庇ってくれて。

『未衣子、アレックスさんには展開の要請を依頼したぞ。』

「あ、ありがとう。」

和希兄ちゃんが準備を進めていた。

そうだ、今はまだ戦闘の序盤なんだ。

マル口を落とすのが先だ。

昔話は戦闘が終わってから。

全然良い思い出がないだけだね。

共感する兄達がいるから、いいかな。

「進路は北極でいいよね、和希兄ちゃん、勇希兄ちゃん！」

『ああ！』

『おう！』

2人の兄は肯定の意を示してくれた。

北極へ向いて、【パスティユ・フラワー】は加速を上げていった。

☆☆☆

マル口は心の底から、ずっと笑っていた。原始の地球人は愚かだと。

（幾度の仕掛けを考案したこの俺が、地球の地理を知らないはずがないだろう！山々はあれど、マグマを蓄える山は限られている！）

彼は嬉々として真っ直ぐ北極へ猛発進していた。

勝利を確信していたのだろう。

『さあ、最強の俺に挑んでくるがいい！それとも怖気付いたのかな？[ラストコア]も襲撃しているのだ、防波堤を張るのに必死かな？』

【チタン・キュレン】の頭部だけ、後ろを向いていた。

敵の【パスティユ】に向けて、言葉を発していたからだ。

この時、マル口はロボに気を取られすぎた。

地球の空は、雲がなければ青い。北極は氷の影響で、地面は白い。

知識が浅くても、地球人には想像がつく景色だ。

北極まであと少し。

マルロは自分の来た道のりを間違えたのかと疑った。

空にポツポツと黒い点。点は黒い雲へと成長していく。

雲に同調したのか、空の青さも濃くなった。

空の変化は然程気にならなかった。

雪でも降らせるつもりだろうと予測できるのだから。

マルロが疑いを抱くと共に怯えるようになったのは他の現象が原因だった。

氷の地面が揺れて、ヒビが入った。

割れて砕かれ、吹き出したのは氷水…ではなかったのだ。

なんと、高熱の真っ赤な泥だった。

マルロはこの泥が何か、一目でわかった。

『溶岩か！？』

溶岩の勢いは激しく、遠くの距離まで飛沫が飛んでいった。

火の粉の様に飛びかかる溶岩のかけらを、【チタン・キュレン】は必死に回避した。

回避自体の難易度は彼には易すぎるレベルだったが。

『ちょっとでもやけどしたら…。』

元々氷や雪に慣れていたマルロには、高熱の炎は恐怖の対象だった。

彼は過去に8つの星を滅ぼした【宇宙犯罪者】である。

星の制圧行動時、滅ぼされた星の民の猛攻は幾度もあった。

中には炎を駆使した種族もいたのだ。

マルロは臆病者になり、部下を使役してその星を潰したのだった。

（部下達はよくやっている。臆病者の俺を、十二分に支えてくれている。複雑なロボの【バステューユ】は俺が沈める。逃した俺の責任だ！）

【チタン・キュレン】の頭部は左右に振った。

炎に怯えるマルロ自身を立て直す行為なのだろう。

氷一面だった白い光沢は、一瞬で真っ赤に染め上げられた。

マルロに、【チタン・キュレン】に足場がなくなっていった。

燃え盛る溶岩だらけで、落ちたら1発で機体が溶ける状態にまで変化していった。

空は黒い雲に覆われ、落雷の瞬間も捉えていた。

『冷静に考えると、急に気象が変化するとは…。』

『最近の地球は異常気象に見舞われてるよ。』

『！』

☆☆☆

【パスティユ・フラワー】で北極までたどり着いた。

【フラワー】はスピードが低めだから、速度をあげるにはエネルギーが必要だった。

和希兄ちゃんが計算してくれて、最短距離で北極に行けた。

まだ約8割は残している。

北極と海の境目付近（地図上）で立ち止まる敵を見つけた。

マルロが地球の異常気象について言及していたので、日常茶飯事だよと返しておいた。正確には、簡単な話し言葉だけで済んだけど。

マルロはこっちを向いてくれた。もうこれで、戦闘を再開できるね。

でも、マルロは鼻で笑ってきた。

『フン、どうせ北極限定だろう。入らなければ…。』

【フラワー】は既に動いていた。速度を上げてのタックルだった。

お喋りを始めたんだから、隙があるなぁと思って、レバーを前に強く倒したん

だ。

『未衣子！移動にエネルギーを費やしすぎるな！』

「大丈夫、中に押し込むだけだよ。」

仮想空間だから、擬似マグマに沈ませても無駄だし。

お喋りなマル口は予想通り、回避しなかった。

『え、な、うおっ！？』

変な声をあげてすぐ、球状のバリアを張った。

私達はそれのせいで弾かれた。咄嗟の防御で威力自体は弱かった。

「怯えすぎ。溶けて無くなるのはこっちも同じなのに。」

『…何？』

「私達も熱に弱いからね。」

そうしないとフェアじゃないでしょ？と付け加えておいた。

『どこまでも、愚かなガキ共だ。』

「ここからは勝った人しか出られない。そういうルールでいこうよ。」

『ほう…。』

ロボ形態の状態だと、はっきりとした表情はわからない。

いまだにニヤついている事は、声だけでもわかる。

彼の自信過剰さを、今ここでへし折るんだ。

「私はこのまま戦う。こっちがいいんでしょ？」

『短期間しか、しかも顔を見合わせてなくせに、わかった風にいいやがる。』

「もう決着ついたらパイパイだからね。じゃあ、お喋りはおしまい。」

【フラワー】のロッドは既に光の弾を出していた。

ロッドをバトンの様に振り回しただけで、光の弾達は勝手に動いてくれた。

方向は【チタン・キュレン】。マル口へ一直線。

進行速度は素早いはずだ。

軽くあしらわれたけど。猛スピードで北極に向かった男なんだ。

【フラワー】の普通の攻撃で負傷するわけがないのは、把握済み。

『弾遊びの続きをやるつもりか？効果がないのはわかっただろう。』

「悪いけど、今はただのお遊びだからね。」

【フラワー】はロッドを上に掲げた。

先端のくす玉の真上から、淡いピンクの光を放つ。

豆球のような小さな光は、時間を経て大きくなっていく。

弾が大きくなり、両手で支えた。

大きな塊の様に見える光は、実は小さな光の弾の集まりだった。

ロッドを倒したり振り回したりするだけで、光の弾の一部が離れていく。それは、花びらが散っていくような光景。

ロッドを横向きにし、光の弾の集まりをマル口に向けて、放った。

大部分は桜吹雪みたいに勢いよく飛んだ。

ごく少数の光の弾は、【フラワー】に降りかかった。

耐熱性の優れた【フラワー】なら、演出用みたいにフラフラ飛ぶ光の弾なんて、何も怖くない。

単調なビーム砲ではない攻撃。

数の暴力で、敵は押し潰されるだろう。

射程範囲も広いから逃げられない。

マル口はぎこちなくなるだろう。

これも避けられないけどね。

【宇宙犯罪者】級のHRに、並大抵の必殺技は通用しない。

だから、何か追加技を入れないと、思ったダメージは与えられないだろう。

桜吹雪みたいな光の群れに動けないマル口に、私は突撃を試みた。

魔法みたいな技と違う、物理攻撃での不意打ちを。

桜吹雪の光はすぐに消えていった。

【チタン・キュレン】の姿も丸見えになった。

【フラワー】との距離は至近距離。

ロッドを両手で持ったまま、底の宝石部分を【チタン・キュレン】の正面に突きつけていた。

底が細いんだから、彼の心臓部分に突き刺せるだろう、との考えで実行した。

やっぱり、まだまだ爪が甘かったみたいで。

【チタン・キュレン】の両腕が、彼の心臓部分を守ったのだ。

手前にあった左腕は貫通した。

根本的に機械の一部だからか、貫通した穴からビリビリと稲光が出ていた。

『随分と早い成長だな。奴のもののまねのつもりか？』

「目で盗む方法もあるのよ。」

『奴は無口だったな…。』

「そうでもないわ。私達とは仲良く会話できてるよ。」

【フラワー】は【チタン・キュレン】から距離を離れた。

ロッドは右手だけで持った。

「自発的に学ぶ意識を持たないと、成長しないでしょ？」

『意識の方向性を間違えたな。』

「何とでも言えればいいわ。」

挑む姿勢を改めて見せるように、ロッドの先端をマル口に向けていた。

「もう一度言うよ。勝った方が灼熱の地帯を脱出できるからね。」

『今のうちに吠えとくがいいさ。平穏な日常に戻れない事を、後悔するがいい！』

【チタン・キュレン】のロッドの先端も、照準は私達に定められていた。

☆☆☆

〔ラストコア〕臨時支部。

武人はジェームズとマル口戦を観ていた。

ちょうど北極と海の境目に設置された、数十個の仮想空間の展開装置が起動した頃合いだった。

「見抜くとは、思ったんやけどな…。」

「簡素なつくりだしな。」

「それ程アイツにとって、炎はトラウマやねんな。」

「交戦経験あるの…だったか？」

「ニア程やない。天王星圏はHR多いんや。【ホルプレス】になった奴もたくさんおる。」

武人は以前から、マル口の噂は聞いていたのである。

『かなりの戦略家のHRがいる』とクーランから聞かされていた。

HRは大抵が、権力持ちに拾われる存在だった。

王家、軍隊、研究機関など。幼少期から拾われ、使役される存在。

指示や命令等、彼らには常に任務が与えられていた。

それを消化する日々が続いた。

結果、戦闘要員として育成されたHR達に、思考能力が育ちにくかった。ロボ形態に変形するよう改造された肉体で、十分生物を倒せるからだ。

ところが、HRの人口が増えていくにつれて、HR同士の争いも増えた。

同じ力を持つ者でぶつかる場合、能力は拮抗する。

ただの力比べの勝負では生き延びれないHRも増加した。

そこで、HRを従える権力を持つ者達を筆頭に、HRの『差別化』を図ったのだ。戦略も技術も一新した。

生物側の遺伝もくまなく調べた。

星々によって、生物達的能力も変化するからだ。

『差別化』で、HRに個性が生まれた。

ほとんど戦闘能力による差であり、性格などの内面まで変化はなかった。

今でもHR達は、権力の強い者に依存してしまうのだった。

「マル口って奴なら独立できるだろ？」

「アイツのように自らで思考して知で攻略するHRはそうそうおらん。賢い子はおるけどな、権限を任せられる奴は少ない。多分、他の理由やな。」

「他？」

「地球も似たところあるやろ？資金源やら拠点やら…独立するには準備が必要なんや。」

「そのクーランとは…。」

「協定を結んだ形ちゃう？」

個室内のモニターから、大きな音がした。

もちろん映像の音声だが、音量に迫力があつたのだ。

「障害物はないんだがな…。」

「やっぱマル口は罠を仕掛けんのが得意やな。脱出を防ごうとすると。」

「張本人が全く動かん。【フラワー】は動きすぎではないか？耐えられるのか？」

ジェームズは未衣子達の勝敗の行方を心配していた。

エネルギー切れはHR以外のロボの活動を停止するからだ。

「いや、あの子らはもう心に決めとるんや。ギリギリまで粘るかもな。もしもの時の予備エネルギーも持参しとる。」

「勝てるか？」

「勝てる。今のあの子らに迷いはなくなったんや。」

ジェームズは武人の目を見ていた。

いつも眼鏡をかけていた武人だが、今は外していた。

素顔の武人だった。

彼の目は真っ直ぐだった。

どこにも行かない、真剣な眼差し。

ジェームズは武人の瞳から、燃え上がる闘志をひしひしと感じていた。

「久しぶりに見たな。その目。」

モニターの映像に映る【バスティユ・フラワー】は、【チタン・キュレン】の技を受けて戦い続ける。

機体のあちこちに傷が山程できても、耐え抜いている。

「マル口の魔法みたいな攻撃ってな、アイツに近づけないよう細工もしよるねん。それをわかって、あの子らはワザと近づこうとしとる。」

「ワザと…？」

「所詮捨て身ってやつやな。マル口の場合、細かい攻撃を仕掛けよるから、正攻法で攻略はしにくいようできとんねん。」

「…いいのか、それで。子供達は…。」

「言うたやろ。もうあの子らは決心がついたんやて。もう逃げられへん。十分わかつとるで、あの子らは。」

武人は戦闘シーンを映すモニターに視線を戻した。

「お前の紹介は、いつになったらできるんや？」

「もうすぐだ。志願者達の訓練も済んで、正式投入の審査だけだ。」

「おもしろい物語書きよるな。お前の彼女。」

「恋人じゃねえよ。学生時代の友人だ。」

「そうやったな。」

☆☆☆

私の人生の中で、これ程がむしやりに相手に挑んだのは初めてかもしれない。

そう思わせる位に、私は【パスティユ・フラワー】を機敏よく動かしていた。

【チタン・キュレン】の光の弾には、何度ぶつかったか覚えてない。

でも今回は敢えてぶつかった。【フラワー】のバリアを信じて。

『未衣子！エネルギーは4割を切ったぞ！』

『俺が変わろうか！』

「いや大丈夫。まだ3割は残ってるでしょ？」

あの直線型の放射攻撃を出してから、【フラワー】は技を繰り出さなかった。

なぜか。私の考えだった。

無謀な行動に賭ける事。

敵のマル口に私自身を変人扱いさせる事。

魔法のような攻撃に特化した【チタン・キュレン】に、似ている攻撃で対処し

ても私に勝ち目はない。

私は地球人で【ラストコア】のロボに乗って戦うパイロット。

マル口は生物型からロボに変身できる超人・HR。

身体能力だけでも、マル口が有利なんだ。

彼に勝つには、他の方法でいかないと。

そこで思いついたんだ。

私の秘策は、もうすぐ達成できる。

【チタン・キュレン】との距離を縮めていった。

ついに、ジャンプ一つで体当たりできる距離まで短くなった。

ここまでできたら…再びロッドの底で貫通してやろう。

左腕がやられているなら、心臓を庇えるのは右腕だけ。

なんて行動を、取るように見せかけたんだ。

瞬時にロッドを右手で持って、くるくる回してからマル口に投げつけたから。

『何っ！？痛い！』

ゴン、と音がした。

もちろん、これで彼は倒れない。経験無くてもわかる範囲。

ここからが正念場だ。彼に、新たな隙をつくらせておいた。

真下はマグマの海と化した北極。

私は【フラワー】で突撃し、【チタン・キュレン】にしがみつぎ、高火力で真下へ移動した。

『くっ、離れる！』

マル口の行動もおかしかった。

彼ならバリアでも発動して、私の抱きつきを阻止できたのに。

炎にトラウマ抱えてるのか？彼も底がついたのか…？

彼の身体の状態は、私にははっきりとわからないけど。

どうでもいい。敵の心配なんて必要なし。

ただ、マル口を下に押しつけて沈ませるだけ。

高火力移動により、【フラワー】は勢いよく【チタン・キュレン】を沈ませた。

この作戦は成功。【フラワー】はマル口から離れた。

まだ、終わりじゃない。次の作戦があるから。

灼熱のマグマの海と化した北極だけど、知ってる通り実は仮想空間を実体化した創作物。

マグマの海面下は…ご存知の通り冷たい氷水だった。

体感温度で彼は目を覚ますだろう。体力を回復でもするかもしれない。

大丈夫。隙はまだつくれる。

☆☆☆

もう終わりか。32年、だろうか。

生命を奪う罪を犯したからだろうか。

業火に焼かれて消滅する刑に服して当然だと思った。

部下の話からは、どこにでもいるような、普通の可憐な少女だと聞かされた。

裏表のない、清純な女の子。

傷みも汚れも知らない、純粋な子供と想像してた。

彼女を戦士として成長させたのは「ラストコア」か、ラルクか…。

あんなに可愛い女の子だったら、静かに穏やかに暮らしてほしかったのに。星間戦争とは無縁の生活を送って欲しかったのに。

今更敵に何を願っているのだろう。

どうせ自分は生還できまい。

このまま落ちるだけだ。

マグマの中に…マグマ？

俺は手足をバタバタさせた。普通に動ける状態だった。

全身に伝わるマグマの温度が…冷たすぎる？

マグマは数百度から数千度の高温の溶岩のはずだった。

今感じる温度は…雪山に立っている時と同じぐらい冷たい低温だった。違和感を覚えた。

視界もマグマの割には、鮮明だった。

炎も光と同じように、眩しさを感じるのだが。

目が痛くない。にじみは少しあっても、奥に何があるかわかる。

生物も僅かながら潜んでいた。

地球人ならば、プランクトンの名前は聞いた事あるだろう。

微生物が潜んでいるのは、アイカメラで把握できた。

炎の中、マグマの中は高温で、おそらく地球上の生物は生きながらえないだろう。

そうか。北極は灼熱のマグマ地獄ではない。

地球の常識だ。なぜ常識を疑わせようとしたんだ…。

何か裏がある。人工物か、異常気象か…。

【パステュー・フラワー】のパイロットは異常気象と言っていた。

異常気象はありえない。

地球の他の惑星も、気象の変化は時間をかけてゆっくりと進行している。昨今の地球の異常気象も、背景に温暖化が関わっている事が原因、と言われてい

る。

急速に大地が変化する程の荒れ模様は聞いたことがない。

だとすれば、地球人の人工物しかないだろう。

マグマの流れは滑らかだった。

雲の形の輪郭も、現実に存在するかの如く複雑に描かれていた。

地球人でここまで細かく演出できるのは、映像技術の類ではと仮説した。

『俺のトラウマを刺激したわけか…。ククク、随分姑息な真似をしてくれた

な、クソガキ共！』

足裏からバーニアを噴射していた。

俺は全身を上昇させていた。地上へ、空中へ出るために。

もう阻む難敵はいない。

能力をフルに使って、ガキ共を落としてやろう。

真面目に教育を受ければよかった、と後悔するほどに。
クソガキ共。貴様らに幸福など望めない。俺が終わらせるのだから。

☆☆☆

『大丈夫か、お前達。』

「王子、サレンさん。」

『雑魚は片付いたわ。あとはマル口本人だけよ。』

サレンさんは自身ありげに言った。

マル口の仲間って、数が多かったと思うけどなあ。

『[スイルシルバー] は私達の弓矢で大爆発したわ。汎用船程度じゃ、簡単に潰せるわ。』

ヒスロ戦だったかな。あの時の【ホーンフレア5 t h】は凄かったな。

ジャンプを駆使した槍攻撃ももちろん。

【ホーンフレア5 t h】が駆けつけてくれて、私達は安心した。

『マル口・ヒーストンは仕留めたか？』

『おそらく、もう一度這い上がるとは想定してます。』

和希兄ちゃんが答えた。

『不安だが…お前達の作戦にどうこう言わん。思い切ってやれ。』

『アイツを逃したら地球の終わりだと、覚悟したらいいんだな。』

『その通りだ。支援が必要なら行動するが、どうする？』

「そうですね…ん？」

私は仮想空間が解除された北極を見た。

マル口をぶつけた衝撃で割れた氷があった。

氷は粉々になり、海中への入口ができた。

氷の割れ目は時に、海中からの出口にもなる。

実際、【チタン・キュレン】がザバーンと波が広がるように、勢いよく這い上がってきたからだ。

『ククク、よくも俺をかき回してくれたな。その両目を二度と開けられないようにしてやるよ、クソガキ共。』

『マルロ！』

「大丈夫です。もう講じてありますから。」

【パステュー・フラワー】は【ホーンフレア5 t h】の腕を掴んだ。

王子達には回線で漏れる恐れがあったので、【ラストコア】のA I達と共に他の敵の相手を頼んでもらっていた。

だから、これから起こす私達の一手を知らなかった。

『人工物で誤魔化して、俺の心を蝕もうとした。だがもうこれで、俺は怯える必要がない！なぜなら、真下の北極海は俺の味方だからだ！

俺は無敵だ！来るなら…ん？』

【チタン・キュレン】は北極の上空に止まっていた状態だった。

マルロは口上を垂れているうちに、周りの異変に気づいた。

『何だ？全身に熱を感じる…！』

マルロがこぼした一言。

そうだよ。だってちょうどあなたのいる地点の四方から、炎が発射されているから。

キョロキョロ辺りを見渡すマルロだから、炎を識別した時回避行動をとった。

『下だと落ちてくるだろう…上だ！』

【チタン・キュレン】は上昇した。

残念。火炎放射器は4台だけではないわ。

あっさりと【チタン・キュレン】の頭部は焼かれた。

1 発目の台の上に滞空している火炎放射器によって。

『あああああ！？』

とうとうマルロが悲鳴をあげた。

頭部を焼いた炎は瞬く間に全身へと燃え移った。

HRは耐熱性抜群のはずだけどなあ。

炎に包まれたせいで、【チタン・キュレン】は身動きが取れなかった。

【フラワー】は炎のかからないギリギリの所まで近づいた。

トドメを刺す手段が残ってるから。

「これは報いよ。私に友情という希望を失わせたんだから。

教育を謳うのなら、子供の支えを無くすのはダメな事じゃないの？」

『相当…根に持っているな貴様…！』

「まだ喋れるんだ。どう？純白の衣装が黒焦げになった気分は。

友情を切り裂く行動は犯罪と同上って、覚えておいてね。

まあ、もうすぐ雲の上に行くから意味ないか。」

『こんの…クソガキい！！』

ガシヤンの音と同時に、私は引っ張られる感覚に気づいた。

『未衣子！』

『ワイヤーでも備えていたか！』

兄達が狼狽えた。

私にも、マルロが出したワイヤーから炎が燃え移ると予測できた。

往生際が悪いわね、この人。自分も行くから巻き込もう、て？

『俺の命はいい！だが、お前達も一緒に来い！違う世界で調教してやる！』

彼は高らかに笑った。

ワイヤーに怯む必要はない。

右脚のみ絡まれたなら、切断すればいい。

コックピットは胴体の中。右脚が無くても問題なし。

だから光の弾が連なるリングで右脚を縛り、ワイヤーの束縛から退いた。

私はアレックスさんの言葉を僅かに信用していた。

《再構築》の機能を持った説明を。

燃えて形が歪になった【チタン・キュレン】の表情は読めない。

え？と発していたから、動揺したのだけわかった。

もう遅いけど。右脚切断後、【フラワー】はロッドの底を前にして、槍投げの要領で投げた。狙いはもちろん心臓部。

槍投げも自信はないけど、やってみたら案外うまくいくなぁ。

投げたロッドは、【チタン・キュレン】の心臓部に、見事に貫通したから。

うるさい口上が嘘だったみたいに、【チタン・キュレン】は機能を停止して、静かになった。

代償は大きいけど、私達は勝利した。

『勝った、んだよな、俺達。』

『そのようだが…右脚が切断して…！？』

和希兄ちゃんが驚くのも無理はない。彼は切断された右脚を確認していた。

切断部分の端が光って、成長するように装甲の素材を延ばして…右脚を形成していった。

『これが…アレックスさんの言った…！』

「帰ろうか。」

『！？』

「臨時支部に、武人兄ちゃんがいるんでしょ？」

流石にロッドまで《再構築》できなかったか。

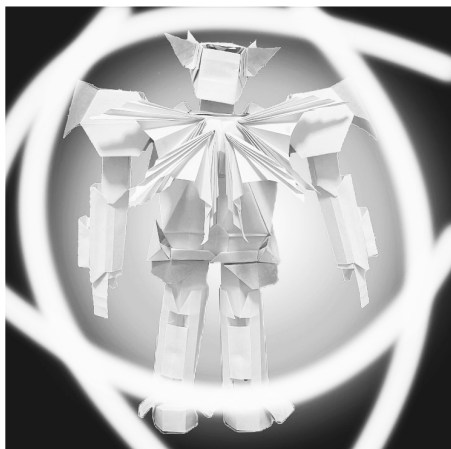
黒焦げの【チタン・キュレン】はロッドを突き刺したまま、北極へ落下していた。回収は望めない。

アレックスさんには、ご迷惑をおかけするかもしれないな。

何だか疲れたな。帰ったら寝ようかな。

まだ戦いは終わってないから。

9 ・ 協議の日



国際電話のプランも充実してきた現代となつては、利便性も向上してきた。

海外に縁のない俺が、国際電話を使うなんてな…。

俺・白井勇希は〔ラストコア〕の臨時支部にいる。

アメリカ東部に広がる海の底の建造物に入っている。

愛嬌湾内の〔ラストコア〕は敵にバレた理由で一時撤退となったから。

臨時支部となると流石に、愛嬌市に戻れそうにないから。

俺は初めての国際電話を利用する事になったんだ。

電話の相手は友達。共に空手の修行をする同士だった。

『もしもし？』

「燈太（とうた）、久しぶり。」

『その声、勇希！？久しぶり！元気にしているの？』

「俺は平気。」

『ずっと心配してたんだよ？課外活動は順調？』

「順調さ。あと2ヵ月で帰れるからな。燈太は？夏の大会どうだった？」

『…予選大会準決勝で…。』

「いいところ行ったじゃねえか！」

『でも…くやしいよ。負けたのもくやしいし、何より勇希がいなかったのが、寂しくて。』

「燈太…。」

〔ラストコア〕の仕事を表に出せないから、普通に学生生活を楽しんでる燈太に打ち明ける事ができなかった。

本当だったらもう帰れる頃合いだったが…〔宇宙犯罪者〕とか言うHRとの戦いが激化して、3ヵ月期間が延びたんだ。

燈太は優しい性格だ。

黙っていて不安にさせているのは俺なのに。

俺は決めた。

「燈太、戻ってきたら、話せる範囲で課外活動の思い出を話したい。

不安にさせたお詫びがしたい。

だからお前も、夏の大会の思い出を話してほしい。」

嫌か？と俺は言葉を付け加えていた。

『むしろ聞かせてほしい。今ちょっとだけでも…。』

「今は帰れない。遠くにいてるから。」

『そっか…帰れないから今話せないんだね。』『そういう事。』

燈太はどうやら腑に落ちないらしい。

電話越しの声からでも、トーンが低いのはわかるから。

こればかりは、我慢してもらうしかない。

延長は後から決まったけども、今俺が伝えてる『課外活動』を終わらせないと
いけないんだ。

普通に暮らす燈太達に、HRの魔の手が伸びないように。

俺達が立ち向かわなきゃ。

「俺は必ず帰る。思い出話もたくさんする。待っていてほしい。

寂しいのは俺も同じだ。

今度は絶対終わらせるから。」

『…わかった。元気でね。』

「ああ。」

言葉が続かず、電話は終了した。受話器を充電器に差し込んだ。

その後に俺はため息をついた。

「もう戻れないのはわかりきってるけど、友達に隠し事している俺がづらい。

あんなに気にかけてくれる親友は、そうそういないのにな…。」

呟いた後、俺はすぐに通信室を出た。
自分を責めても仕方がない、と切り捨てて。

☆☆☆

マルロ戦以降は〔ラストコア〕臨時支部が本拠地となった。
場所はアメリカ東部の海底に潜めている。
愛嬌市とは違い、距離が遠すぎるため、《転送装置》のペンダントは使いづらい。
期間が終了するまではここで寝泊まりする事が決定している。
祖父母への連絡は既に済んでもらっている。
ジェームズさんや事務関係の仕事をしていた人達はヘトヘトだった。
統制制御室で開かれている今のミーティングで確認できたから。
今回はリュート王子が主要人として、私達の前で話した。
「この度は提案の場を設けていただき、ありがとうございます。」
王子と隣にいたサレンさんが頭を下げた。
「宇宙進出の件につきましては、度々伺っております。
王に請謁した結果、地球の陸地での会議の開催が決定しました。」
おお、と全員の声が上がった。
「土星圏の星の数は多いです。確実に協力できる見込みある星々の首領陣にお越しいただきます。」
今度はサレンさんが発表した。
宇宙には惑星の周りに属する星々に生命体が存在し、その星で暮らしているのはもう既知の知識。
土星圏の星々は数が多すぎて、把握しきれていなかったなぁ…。

その人達が私達の住む地球にやって来るんだ。

出会いを楽しみにしている。

反面、仲良くなれるかの不安もあるな。

初対面だし。

リュート王子達は対策を必死に考えていたようで。

「会場はもう承諾を得ています。アメリカ東部の地の会議場。

地元民の人払いはしています。

会議は時間を要するために、内外の警備強化に努めておきたいです。」

「内側は〔ラストコア〕のスタッフの一部に任せておきました。残りは外側。」

会議場の外は怖い。

事件の始まりは大体が外側からの襲撃だからだ。

スパイで潜入とか特殊なスキルで攻めない限りは、外側の警戒は必須だ。

「〔ラストコア〕の子供達と、我が王家の部隊がフルで配置する体制を取ります。

かなりの忍耐が必要だが、君達、受けてくれるな？」

王子が私達に言った。

もちろん、私達は非道なHRに挑むためにここにいるんだから、待機ぐらいお安い御用だ。

「大丈夫です。」

「いけるぜ！」

「しっかり見張っておきます。」

「よかった。この会議こそが、宇宙進出可能の境目になります。

どうかご協力をよろしくお願いします。」

2度目の礼をする王子達だった。

★★★

「勇希兄ちゃん、終始浮かない顔していたね。」

「え？んな事ねえよ！いつも通りだぜ？」

ミーティングが終わった後、私と勇希兄ちゃんの2人は通路を歩いていた。

会議は3日後。

事前準備の為に訓練も時間短縮で実施予定だった。

本日は個室に戻り、眠るだけだった。

勇希兄ちゃんも方向は同じだから、一緒について行った。

「電話で何か言われたの？友達に。」

「…バレたか。すごく寂しそうにしてたんだ。」

夏の大会はベスト4ぐらいいったんだが、俺がいなくて寂しいって。」

「前に言った燈太さん？」

「おう。燈太は気は弱いけど優しい人間なんだよ。」

優しい友達…。

丸井君みたいに、気にかけてくれる友達。

「本当はアイツだけは打ち明けたいとは思っているんだ。『課外活動』って言葉で誤魔化したくない。

決まりは決まりだから、うまく話せないのがしんどいんだ。」

「勇希兄ちゃん。私に着いてきた事、後悔している？」

「それはねえよ。」

「だったら悔いのない活動を頑張ればいいじゃない。[ラストコア]の説明はできなくても、要点や感想ぐらいは言えるんじゃないかな？

笑顔で応えてあげたら、きっと燈太さんも笑ってくれると思うよ。」

「お前からそう言ってくれるなんてな。ありがとう。」

勇希兄ちゃんに感謝された。

ついでに私も何か言った。

「…私も、共有しあえる仲がいたらいいな。」

勇希兄ちゃんが私の肩に手を置いた。

「できるさ。お前にも笑い合える友達ができるって。」

丸井とは仲良くできたんだろ？大丈夫だ。」

「そうだね。ありがとう。」

いつか、私の夢を信じてくれる人がいてくれたらいいな。」

☆☆☆

どこかの宇宙空間。

木目調のデザインの、茶色の宇宙船がゆっくり移動していた。

「グロス！グロスはいるか！」

船内の通路を忙しく歩く頭がトカゲ姿の大男。

名をトンケ・スパークスと言う。

土星圏ブラドンのHRで、[宇宙犯罪者]の1人であった。

また彼は一団の長でもある。名は[トンケ団]という、長の名前そのままの一団だった。

トンケは個室にズカズカと入った。

個室の主は、書物を読んでいた。

「ヒッ！いかがなさいましたトンケ様！」

トンケの声がデカイので、小さなトカゲ頭のメガネの男は変な声をあげてしまった。日常的でトンケは気にしなかった。

「クーランからのご指名だ。頼みてえ仕事があるんだとよ。」

「クーラン様が？」

「俺の部屋に行くぞ。まだ回線切ってねえんだよ。」

「回線は切ってくださいね！誰が聞いているか…ヒィ！？」

トンケは個室の主のグロスに顔を近づけ、鋭い目つきで睨みつけた。

「俺に文句あんのか？」

小心者のグロスは、トカゲ頭の大男に恐怖した。

「いえ、滅相もございません！」

「なら行くぞ。クーランのご指名ならば、なんかあんだろ？」

「…私の推測ですと、ラルク討伐が候補にあがりますね。」

「ほう…ラルクか。」

トンケは歩きながらニヤニヤ笑っていた。グロスは未だ怯えている。

「最強のHRと聞いたが、俺達との戦闘は避けてやがる。」

ようやく派手に楽しめそうだな。」

トンケの笑い声は、宇宙船の通路の1フロアに響き渡った。

（討伐とは限らないが…トンケ様は好戦的なお方。

クーラン様の任務次第では、私が後手に回るでしょうな。）

グロスはトンケを横目で見た。

★★★

『わざわざ来てくれてご苦労だったなあ、グロス君。』

「ご指名頂き光栄です。」

宇宙船内、トンケの部屋。

グロスは奥のモニターに映る者に頭を下げた。

相手は〔レッド研究所〕のクーランだった。

薄暗い部屋で椅子にもたれ掛かっていたクーラン。

迷惑かけた事も微塵に思っていない。

『こんな連絡する必要もないがな…形としてやっとう、てな。』

「そうですか。」

『聡明なお前さんなら、とっくに調べはついとるだろう？』

クーランが聞いてきても、グロスには驚かなかった。

彼の述べたい内容は、グロスには想定内の範疇だった。

「やはり、ラルク案件でしょうか？」

クーランはニタリと歯を見せた。

『賊団の智将なら察したんだろうな。』

実はな、マルロが消えた後は動こうかと決め込んでいたけどなあ。

やっぱり面倒くさくなっちゃって。

そこでお前さんに白羽の矢が当たったんだわ。』

「ビウス殿はよろしいので？」

『あれは猪突猛進だ。何も考えてねえよ。』

クーランは首を横に振った。

『それにグロス、〔トンケ団〕はほぼ土星圏の浮浪者の集まりだろう？』

「テメェ…俺達を奈落者呼ばわりすんのか！？」

「トンケ様！」

『すまん、言葉が悪いな。土星圏にニコンという星があるだろう？』

「！？」

《ニコン》の名前にトンケ達は過敏に反応した。

「ニコン…だと？」

『まあ知ってるよなあ？一度潰しにかかろうとした星だったし？あれ？何で滅

ばなかったかなあ？ニコンはよ？』

「もういい！グロス！回線切りやがれ！」

「しかし…」

『俺様が原因知ってるとでも？馬鹿だなあ。火星と土星じゃあ距離離れてるだろう？俺は博士じゃあ…』

ガラスが大きく割れる音は、クーランが言い終わる前に響いた。

彼が映るモニターのど真ん中にヒビが入り、映像はまともに流れなくなった。

トンケの怒りの拳が、クーランとの通信回線の切断に繋がった。

「グロス！土星圏の星々の侵攻を進めておけ！あと兵も集めろ！地球行くぞ！」

トンケの怒鳴り声にグロスは怯えていた。

唐突な行動に戸惑っていた彼はトンケを冷静にさせようとした。

「兵は集めます！が、時期をもう少し見ましょう。

ニコンであの少年の所在の確認するまでは、ヒッ！」

トンケを抑える対応はできなかった。

グロスは再び、上司の大男に凄まれたからだ。

「俺はHRだ、奴はただの宇宙人だ！機械になれる存在の俺が宇宙人に負けるはずはない！」

「ですがあの少年も成長しております故、能力もますます膨大化している可能性も、否定はできません！」

するとトンケは急ぎ足をやめた。

やっと、自分の忠告を聞き入れてくれたのか、とグロスは思った。

足を止めたトンケの口から出た内容は、意外な話だった。

「奴の故郷は滅んじまってるらしいな。」

「あの特徴はかつての水星圏の類いでしたね…。」

「生き残りの奴が十数年も長らえていると思うか？賢いお前なら、すぐ答えが出てくるだろう？」

グロスは目を大きく見開いた。

「そうですね…例えば侵攻で生存したとしても、生命維持の栄養素がなければ…。」

「あのガキもくたばってるさ。保護されようが、必要物資が足りねえと生物は生きていけねえ。」

グロス、追加依頼だ。兵の何人かにニコンを侵略させろ。

土星圏を手中に収めたら、ラルクさえも手出しできねえだろ？」

グロスはトンケの言葉を聞いて、思考を巡らせていた。

ラルクは現在地球にいる事実。

地球は他星よりも宇宙渡航の開発が遅れている現実。

（とすると、宇宙進出には土星圏の者達の力が必要になる…。

我々が土星圏の制圧に成功すれば、ラルクと地球人達は宇宙に上がれずに…。）

「うまく人員を調整しましょう。ニコン以外は忍ばせたスパイ達筆頭に動かします。ニコンに兵の多くを向かわせます。」

「地球はどうする？」

「トンケ様と私、残りの兵で十分かと。ラルクと地球産の最新ロボさえ攻略できれば、地球が落ちるのは時間の問題です。」

グロスはそう進言した。

☆☆☆

土星圏の星々の人達との会議、当日。

アメリカ東部の会議場は、有名人の豪邸並みに膨大な建物だった。

その周辺、半径100メートル程離れた地点に、リュート王子が言った警戒策を張っていた。

王子の側近が乗っているロボが数機散らばっている。

私達【パスティユ】も同じように。

『ふぁ…。』

勇希兄ちゃんが欠伸をした。

『みっともないぞ勇希。』

『だってよ、全然動かないから退屈だしよ。』

「動きなんて、ないに越した事ないじゃない。」

空手家なのに、緊張感なさすぎるよ。

王子やサレンさんが、会議の交渉に尽くしている最中なのに。

眠気がするのは私もだけど。

『武人兄ちゃんは中にいるんだよなぁ。』

『最後の砦、の存在だからだろう。』

会議場に入り込まれたらおしまいだからね。』

「武人兄ちゃんはHRで人にもロボにもなれるんだから、応用がきくんだよ。」

勇希兄ちゃんはムッ、として私に言ってきた。

私の発言が刺々しく聞こえたからかな。

『お前さ、勉強のし過ぎで疲れてるだろ？会議が終わったら息抜きしろよ。今読んでる漫画でも貸そうか？』

「勉強は好きでやってるわ。それに勇希兄ちゃんが読んでる漫画って、スポーツものばかりじゃない。」

『スポーツ漫画舐めんじゃねぇよ！』

モニター越しに勇希兄ちゃんがギャンギャン吠えた。

『2人とも、お喋りはここまでだ。王子の側近から注意してきてるぞ。』

「ごめんなさい。」

『うう…。』

しまった、と勇希兄ちゃんは額に手を当てていた。

私からしたら、これで少しは目が覚めたからいいかな、と気に留めなかった。

兄ちゃんの言う通り、もう少しガス抜きしようとも思っていた。

☆☆☆

土星圏の星々の首領陣との会議の前日までには、既に各々の宇宙船が地球に到達していた。

同時降下では事情の知らない地球人が慌てふためく恐れがある理由で採用しなかった。

1隻ずつ、電波の伝達によって降下作業を行なった。

土星は他の惑星と比べて、派生した星が多い惑星だった。

地球にやってきたのは、その中の幾つかの厳選された星々の首領陣。

元々フレアランス王家と親睦が深い星や、事前交渉の末に会議の都合をつけてくれた星まで。

よりどりみどりの特徴的な見た目をした星の住人達が、大きな会議室のテーブルの両脇に座っていた。

「これより交渉会議を始めます。」

会議室の奥、ホワイトボードの左手前にいたサレンが会議の司会進行を担った。

サレンの隣には、会議の主役であるリュートが座っていた。

「まず初めに、自己紹介をします。呼ばれましたらご起立とご挨拶をお願いします。」

サレンは1冊の冊子を取り出し、順番に名前を読み上げていった。

最初にリュートの名前が呼ばれてから、時計回りに首領陣を紹介していったサレンだった。

「出席者全員の自己紹介を終わります。司会進行はリュート王子の側近である私、サレン・D・フェルテがお送りします。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。」

サレンは小冊子を静かに閉じた。

「今回の会議の主催はリュート王子でございます。始めに王子から皆様への議題を述べます。

皆様からのご意見やご要望をお願いいたします。

詳細はテーブルの上の小冊子にも記載されております。そちらからも参考して頂いても構いません。

議題の後に場を設けますので、まずはお聞きくださいませ。」

サレンは一步後ろに下がった。

入れ替わるようにして、リュートが立ち上がった。

彼の議論が始まった。

「改めて、本日の御来訪に感謝いたします。手短ですが、皆様へのお願いを申し上げます。

…地球人の宇宙進出に、どうか御支援、御援助をいただきたい。」

その瞬間、会議室がざわついた。

サレンが静粛に、と言い放ってすぐに収まったが。

「事前交渉時に説明が行き届かず、誠に申し訳ございません。

ですが本日、私のお隣に〔ラストコア〕の西条宗太郎司令官もお越し頂きました。彼は地球人です。宇宙進出への熱意は本物です。」

「宇宙進出って…一体何をするのかね？」

首領陣の1人が口を挟んだ。

「応答の場を設けます、まずは王子の話を…」

「概要はおおむね理解した。何の為に宇宙へ出るのかね？」

膨大な自然溢れる星で、資源に困り果てているわけではなかろう。」

「仮に資源不足だとしても、我々派生の星々の民からすれば雲泥の差だろう。」

1人が口を出すと、周りの者達も同調して意見を言い出した。

サレンも司会進行の務めとして、静粛の指示を出し続けた。

しかし、会議室内は騒ぎを増すだけであった。

そこで、机を手のひらで強く叩いた者が1人現れた。

リュートの隣の席についていた、会議室内の唯一の地球人。

〔ラストコア〕のトップである、西条宗太郎総司令官が立ち上がったのだ。

叩いた音の衝撃が効いたのか、首領陣は一斉に静かになった。

「司会者からの紹介でご存知と思われますが、改めて名乗り申し上げます。私は外宇宙対策本部〔ラストコア〕の総司令官・西条宗太郎と申します。」

宗太郎は言い切った後、深く頭を下げた。

姿勢を正すと、話を再開させた。

「私は地球人代表としてこの場に出席しました。

事実、派生の星々の皆様と比較すれば、我々原始地球は平穏な星とみなすでしょう。

ですが、我々もずっと平穏に暮らしてはいません。

地球では多数の民族が存在します。

かつての歴史を辿れば、地球には多数の内部戦争を経験しました。
現在は表面上は穏やかでも、内に民族間の遺恨が残り、時折武器を交えた戦いを繰り広げる地域もあります。」

ここで宗太郎は一旦区切りをつけ、目を閉じた。

目はすぐに開かれた。ふう、と深呼吸をして、発言を続けた。

「つまり、我々とて内部で協力し合える良好な環境下であれば、我々で知恵を出し合い、自力で宇宙進出に挑戦できた。

だが現実はいまうまく築き上げてはいない。

だからこうして、我々地球人は貴方方に協力を申し上げているのです。」

「それはちょっと、虫が良すぎる話でございせん？」

「！？」

誰かの指摘の声に、宗太郎はもちろん、リュートも反応した。

来訪した首領陣から…と彼らを見たが、誰1人口を開いていなかった。

1番遠く離れた席につく首領陣の1人が、指差した。

会議室の出入り口である、西洋風の豪華なドア。

開いた出入り口の真ん中に、トカゲ頭の小柄なオスがいた。

「貴様は…[トンケ団]の参謀グロス！」

リュートが新たな来訪者の名前を言った。

グロスは両脇の手下を率いて会議室へ入った。

「警備は…どうなっている！？」

宗太郎はすぐに携帯を取り出した。その間、グロスは事実を告げた。

「彼らの星々は皆、我々の息がかかっているんですよ。」

グロスはリュートの藍色のショートヘアを見ていた。

この時、彼は微々たる危険を感じていた。

(…この髪の色。あの時の少年と同じ色をしていますね。まさか。)

「グロス様。」

手下に名前を呼ばれたグロスは我に返り、片眼鏡を調整する仕草をした。

「なんでもありませんよ。続けますね。」

グロスはテーブルの周り、首領陣の後ろでゆっくり歩いていた。

首領陣の表情は、病気で苦しんでいるような表情をしていた。

「彼らを黙らせたのは、貴様か？」

「いくら智将の私でも、わざわざ出向いて手駒にしませんよ。トンケ様の命令と私の戦略で、団員を動かしているだけです。」

まあそれはさておき、と言い放った時、グロスはリュートに近づいていた。

「リュート王子？貴方様は原始地球よりも、もっと身近な故郷のご心配をなさってはいかがです？」

グロスは板状の電子端末を取り出し、映像を流した。

「！？賢者様！」

リュートは映像に映る人物の呼称を口にしていった。

後ろでサレンの表情も一変した。

「これでニコンが落ちるのも時間の問題ですよ？」

土星圏の支配は我々【トンケ団】が管理していきます。

原始地球の皆様？宇宙進出は望めないと覚悟してくださいね？」

「それはどうやろうな。」

「何？」

会議室の天井には、空気の流れを良くする通気口があった。

黒く硬度のある通気口の網を外し、網はテーブルの上に着地した。

首領陣は驚き、頭を両手で守って姿勢を低くした。

網の次は…人間。

いや、人間の男性の姿をしたHR。

彼は着地に成功すると、グロスに銃を向けた。

「…貴方は、ラルク…？」

「悪いんやけど、俺は黒川武人って言うねん。」

「貴様！一体どこにいたんだ！」

リュートは武人に怒鳴った。武人は動じる事なく、あっさりと答えた。

「最初から上におった。小型端末の映像に怪しい所なかったからなあ。勘付かれずに侵入できると見込んで、最終的にココに辿り着くと予想しとった。」

「そうですか。ですが言い訳なんて…。」

「言い訳すんのはお前らやる？そこの王子、お前らの顔見知りとちゃうんか？」

「何、ですと？」

グロスは武人からリュートへと顔を向けた。

彼はもう一度、髪の毛をよく観察した。

（この方は藍色の髪をして…目は細くなりましたが、瞳の色は…！）

「あ、ああっ！」

「グロス様！」

手下達はしゃがむグロスを両脇で支えた。片方が武人に銃を発砲する。

武人は避けて、弾は天井の照明に当たった。会議室が暗くなった。

「気づいたやろうけど説明するわな。リュート王子は拾い子や。

彼の出生は水星圏ラドム。

藍色の髪と瞳が特徴の、地球人と種族が似てる星や。」

「ラドム…ですと？」

「今はもう滅んでなくなるとる星やけどな…。」

聞いた噂やと、トンケの天敵やて。

トンケは力を出すやと肉体で物を溶かす能力持ってるんやけど、リュート王子相

手には効かへん。

リュートはラドム人やから、温度の耐久性が高いんや。

水星圏はどの種族もそうらしいんやけど。」

武人はリュートの席の前まで歩くと、テーブルの上から降りた。

グロスとの距離は、かなり近づいていた。

（黒川。）

（首領陣をテーブルの下に押し込めて、扉を閉めるんや。リュートとサレンちゃんもな。）

武人は小声で宗太郎に指示を出した。

「皆さん、テーブルの下に身を潜めてください！」

宗太郎は強く避難する事を、首領陣に要請した。

怯え惑っているのか、首領陣は急いでテーブルの下に潜る。

「王子、サレンさんも！」

「私は残ります！HRが来るのだろう！」

「いや、お前も今回は避難しとき。」

「今度も子供達に任せるのか！？」

すると、武人は急に声を荒げた。

「ええか！お前の宿敵は誰や！？俺なんとちゃうんか！？

こんなチンピラ共に負けたら、お前は故郷の仇を取られへんやろ！

俺はずっとお前の敵討ちを待っとる！

それまでは命取るときや！」

リュートはこれ以上、言葉を返せなかった。

サレンが側について、避難の誘導をした。

反対に武人の発言で、暴走した者がいた。

グロスである。彼は会議室の窓を開き、大声で叫んだ。

「トンケ様！我々がチンピラと格下の言葉を使われております！
どうか、トンケ様の偉大なるお力で、罵倒する者を沈めてくださいませ！」
外は【パスティユ】他、警戒にあたるロボのみだった。

☆☆☆

『叫び声か…？』
勇希兄ちゃんが呟いた。
叫び声にしては小さい気がするんだけど…。
「気のせいじゃないの？」
『後ろから聞こえたんだ。会議場だろ？』
「会議の最中で叫んだら周りは引くでしょ？マナー違反とかの指摘もあるし。」
勇希兄ちゃん頓珍漢な事言うなあ、と私は思った。
勇希兄ちゃんの感じた違和感は、嘘ではなかった。
和希兄ちゃんが原因を調査していたので、はっきりわかった。
『これは…！勇希、未衣子。会議場の建物を見てくれ。3階の窓だ。』
「3階？わかったよ。」
和希兄ちゃんに促されて、私はモニターを切り替えて、会議場の3階の窓を確認した。1か所だけ、窓が開いている場所があった。
中に人が立っていた。叫んだ人の特定はできるだろう。
いや、人？
私はモニターを拡大して、もう一度凝視した。
中世の欧州の…海賊の船長の様な服装しているけど、頭部がおかしい。
トカゲ頭？今日は会議であって、仮装パーティーじゃないし。

トカゲ頭に疑問を浮かべていたら、突然警報が鳴った。

男の人のアナウンスも大声で繰り返していた。

王子の側近の兵達のロボが、同じ方向に槍を構えた。

会議場の位置と真逆の、広大な更地。

そこに、ドォン！と地割れしそうなくらいにデカイ音がした。地面も数秒間揺れた。

だって、重たい物体が猛スピードで落下したら、当然そうなるでしょ。

実際は物体じゃなくて、背筋の伸ばした恐竜っぽい生き物だけど。

『恐竜っぽい』って言ったのは、生き物というより機械、すなわちロボのよう
に見えたから。

目は発光しているし。身体中が鋼みたく硬い金属でできてるから。

もしかして、HRを呼んだ…？

ただの戦闘ロボとは違い、どんよりした空気が流れている気がしたからだ。

『気をつける君達！奴の手下もくるぞ！』

王子の側近兵が叫んだ。忠告通りなのか、『恐竜っぽい』ロボの後ろに数機の
ロボが着地した。

あれ…？

「ねえ、兄ちゃん達？」

『あ？』

『どうした未衣子。』

「『恐竜っぽい』ロボの後に着地したロボ達って…量産機だらけ？」

今振り返れば、私は突拍子な質問をしたかもしれない。

王子みたく、実力あるロボのパイロットもいるのに…。

この質問は相手を舐めている様な発言にも聞こえた。

でも、誰も私を否定しなかった。

『いいじゃねえか！HRだらけより好都合だぜ！』

『油断は禁物だが、今までの敵よりは…。』

『うるせえガキ共！』

やっと怒ってくれる人がいた。声の主は敵の『恐竜っぽい』ロボだった。

『ラルクもテメェらも、散々俺達トンケ団を舐めやがって！

ただの賊じゃねえのを証明してやる！』

あの『恐竜っぽい』ロボが大将なんだね。

立ち位置でわかっていただけ。

大将（仮）は右手に背丈ほどの大きさの斧を持った。

形成して構築するタイプ…。

普通のロボではできない機能だった。

「やっぱりHR！」

『フン、女のガキも混じってやがる。だがな、俺様は甘くはないからな！』

大将（仮）が【パスティユ・フラワー】に突進してきた。

後ろは会議場。避けたら建物が破壊される。

会議場の崩壊だけは避けたい私は、【フラワー】のロッドとバリアで防御した。

至近距離まで近づいた大将（仮）。

やはりHRだと戦闘能力は間違いだった。地味に押してくるから。

相撲の試合みたいに苦戦する私に、勇希兄ちゃんが私を呼んだ。

『未衣子、俺に代われ！』

「勇希兄ちゃん？」

『コイツは肉弾戦が強そうだ！格闘に慣れてる俺に代われ！』

『ほう。拳で戦うガキがいたとはな…試したいが、その姿で…うおっ！？』

大将（仮）が無意識に声を出してしまった。

【バステューユ】の形態チェンジの時は、いつも機体を光らせて変形させるから。

H Rの大将（仮）も、高熱を発する機体には手を出せないでしょう。

一戦交えた限りでは、近接戦タイプと判明しているから。

形態チェンジはすぐに終わる。【フラワー】から【サニー】へと変わった。

既存の分離と合体を繰り返す作業を無くした変形システム。

敵に迫られている最中でも、形態チェンジで臨機応変に対応できる。

改めて、【バステューユ】はすごい性能を持ったロボだと実感してる。

大将（仮）は後退したのみで、ピンピン立っていた。

『恐竜っぽい』から、上半身は猫背だけど。

【サニー】は正面でパンチを繰り出す為の構えを取っていた。

右脚だけ一歩、前に出して。

『恐竜野郎、俺は武器がなくても戦えるぜ？』

素手か斧か、どちらで戦うか選べよ？』

『ハン！ ガキが一丁前に言うんじゃないよ！』

大将（仮）は自身の斧を地面に捨てた。

斧は粒子になって消滅した。

大将（仮）の手下のロボは、王子の側近のロボと交戦している。

上空からも爆音がした。

木目調の茶色の宇宙船、大将達の要塞かな。

そっちはアレックスさんのA I 達が撃破に取り掛かった。

私達は大将（仮）のH Rを倒す事に専念すればいい。

ゴングが鳴らなくても、両者は前に動き出していた。

☆☆☆

土星圏の首領陣との会議に使用した会議場は、[ラストコア]のアメリカ支部が独自に設計した建物だった。

3階の大会議室のテーブルが特殊な構造になっていた。

テーブルの中に巨大な直方体のケースが搭載されており、避難の際にリュート達を収容した。扉を閉めるとケースのみ降下した。

会議場の真下は、[ラストコア]の臨時支部に繋がる地下通路があった。

智将のグロスと言えど、このルートは予測できないだろう。

ひとまず、リュート達の無事は確保できた。

残されたのは武人と、固定済みのテーブルに散らかったイス。

震えるグロスと、銃撃で倒れた手下達のみだ。

（さて、戦況はどうなってるかな。）

武人はグロスが開けた窓から、外の戦闘を確認した。

上空は木目調の茶色の宇宙船…[ティンバルン]と武人は文字を読み取った。

[トンケ団]の宇宙船はアレックスのAⅠ達が交戦していた。

[ティンバルン]は武装のみで、AⅠやロボは存在していない。

（[ティンバルン]はすぐ落ちるなあ。これはええか。）

武人は視線を上空から地上に移した。

会議場の近くでは言うまでもなく、激しい戦闘が繰り広げられていた。

[トンケ団]の団員が操縦する角張ったロボ達は、王家フレアランスの側近兵が相手していた。

能力差はあまりなかったようだ。

（こっちは援護すればええか…あとは。）

武人が問題視する敵が1体、存在した。

[トンケ団]の団長、トンケ・スパークス。

H R形態名は【イント・バイアス】。

相手したのは側近兵と警戒にあたった【パスティユ】。

すなわち、白井3兄妹。

【サニー】でトンケの相手をしているのだが。

武人は窓辺から見て、【サニー】の変化に気がついた。

（外装が溶けとるな…！）

トンケのH R形態【イント・バイアス】の特徴、それは『溶解』。

H R形態だと彼の身体に触れただけで、手が溶けてしまうのだ。

特殊な材質加工とバリアの消費のおかげで、【サニー】は五体満足でいられるが。

（一番援護が必要やな。）

武人は3兄妹vsトンケの戦闘に目星をつけた。

3階の開いた窓から飛び降りようと決めた時。

銃声が鳴った。弾は会議室の壁に穴を開けた。

グロスが震える手で小型銃を発砲していた。

「トンケ様の、前に、誰かを、忘れてませんかぁ！」

彼はうまく話せてなかった。

武人はグロスに顔を向けたが、その視線は下っ端を見下す様な侮蔑的な眼差しだった。彼は黒縁のメガネを押さえて、グロスに尋ねた。

「聞きたい事、あるんやけどな。」

「な、なななんです！」

グロスは必死に言葉を紡いだ。

「トンケのH R形態は、【イント・バイアス】って名前やな？」

武人の問いに、グロスはすぐに答えた。

「そ、そうですよ！トンケ様は強いお方、土星圏を制圧した最強のH Rでござ

いま…。」

グロスは答えを全部言い切らなかった。いや、できなかった。

武人が即座に出した、ニードル銃が彼の喉を貫通したからである。

重心が定まらなくなり、グロスは倒れた。

うつ伏せ状態になると、首から血が流れてきた。

「強いモンから逃げ切って、弱いモンを支配した奴らが言える義理あれへんやろ。

後で大将も一緒にいかせてやるから、そこで眠るときや。」

そう言った武人は飛び降りて、HR形態に変身した。

【ブラッドガンナー】の銃は、敵のロボに発砲した。

☆☆☆

『エネルギーがあと30%程だぞ！勇希！』

『予備はあるのかよ！』

『補充はするが…装甲も所々傷がいつている！』

『傷ぐらいなんともねえよ！』

兄達が言い争うように話をしていた。

大将（仮）との戦闘中、【サニー】は拳を交える度に傷を受けていた。

正確に言えば傷ではない。

私も被害状況を逐一確認しているが、『溶けている跡』が多いのだ。

接触を数回行ううちにこの有様。

攻撃方法の変更を示唆する必要があるかも。

「勇希兄ちゃん、【フラワー】にチェンジして。距離を離して撃破していい？」

『未衣子！【フラワー】だと余計にエネルギー使うだろ！？』

「このままじゃ…装甲のダメージで【パスティユ】が沈むわよ？」

『くっ、クソッ！』

勇希兄ちゃんがコックピットの足元を蹴った。

モニター越しでも音が聞こえたし。

まさにピンチの状況で、【パスティユ】の全てが泥にならないか、不安だった。

その時だ。私達に運気が巡ってるんじゃないかと思えたのは。

大将（仮）の周辺に、銃弾が数力所放たれた。

大将（仮）のHRに敵対するのは私達【ラストコア】か、王子達ニコンの人々だ。銃を駆使して挑む者といえば。

「武人兄ちゃん！」

【ブラッドガンナー】が飛行状態で大将（仮）に乱射していた。

威嚇射撃でしかなく、大将（仮）へのダメージは殆どない。

でも足止め自体は有効だった。

『勇希！そのまま倒したいんやったら、一撃で仕留めるんや！』

『武人さん、エネルギーも底をつきます！これ以上、保つかどうかも…』

『和希、今は勇希と話しとる。どうや？』

武人兄ちゃんは【サニー】のままで行く為の手段を授けていた。

勇希兄ちゃんはすぐに返答をしなかった。

『俺は…』

返答の第一声がこれだった。

武人兄ちゃんはもう一押し、勇希兄ちゃんに意欲を湧かせた。

『約束、しとんのやろ？』

空手の修行仲間と、思い出話をするんやろ？それを破るんか？』

すると勇希兄ちゃんは、すぐに顔をあげた。

『そうだ、燈太に俺は約束したんだ！』

【サニー】のエネルギー出力が最大になった。

覇気が感じられる程に、機体が燃えあがっていた。

『勇希！』

『和希兄ちゃん、未衣子。フルパワーで使わせてくれ。』

「え？」

『無茶だ、そうなれば【パステージュ】全体が…』

『もう決めた事だろ？俺達はこのまま戦っていくって。』

『終わりが見えてるかもしれねえ。けど、ここを乗り越えなきゃ、燈太も兄貴も、未衣子も守れねえ！

この一撃に賭けたい。だから、許してくれ…。』

『…わかった。お前が寂しくない様に、俺も行こう。』

「私もよ？兄ちゃんが泣きするのはごめんだし。」

『お前、もうちょっと励ましてくれよ。』

勇希兄ちゃんと私が火力上げの操作をし、【サニー】の機体は更に燃えあがっていた。

『おいおい、燃えて自爆でも図るってか？だったら勝手にやற்றろ！

俺はラルクに回る…』

大将（仮）の周りにまた、威嚇射撃の弾が。

『俺はただの助っ人や。お前を仕留めるつもりは一切あらへん。』

武人兄ちゃんの発言は、大将（仮）の怒りを爆発させた。

『上等だ火星野郎！テメエは絶対俺様が落としてやる…うおっ！？』

大将（仮）が怒りの宣戦布告をしていたのが、いい狙い目だったかもしれない。

威嚇射撃の時点で動けない大将（仮）に、【サニー】は真正面から突撃した。
炎に包まっていた【サニー】は猛スピードで、大将（仮）のHR形態を真っ二つにした。

炎のおかげで切れ端が燃えて、ついでに心臓部分も見事に燃えていった。

大将（仮）は断末魔をあげる暇もなかった。

恐竜の様な両目がバッチリ開いていた、それだけだ。

大将（仮）のHRの機能が停止した。

大将（仮）の身体を突き抜けた先に、【サニー】は着地した。

着地後すぐに、【サニー】は膝をついた。

エネルギーの残量は、もう僅かな量だった。

はあはあと、勇希兄ちゃんは呼吸を繰り返した。

私も手袋の中で、汗を感じ取っていた。

【サニー】は、【パスティユ】はしばらく動けない。

今回もやっぱり運氣は巡ってきてたのかな。

他の敵のロボも、既に滅んでいた。

王子の側近兵達と、アレックスさんのAⅠ達の善戦のおかげだ。

『大丈夫か？』

『…生きた心地がしねえよ…。』

『ハハハ、そうか。』

輸送機がもうすぐ来る。それまで俺も付いとるから、辛抱してくれ。』

【ブラッドガンナー】は【サニー】の隣に立っていた。

勇希兄ちゃんはもちろん、私達もシートにもたれていた。

敵を倒して、生き延びて、ホッとしたんだと思う。

『燈太、約束は守るから…。』

回収前だと言うのに、勇希兄ちゃんの両目が静かに閉じられた。

10・誓約の日



「誠に、申し訳ございませんでした。」

〔ラストコア〕 臨時支部、統制制御室にて。

土星圏の星々の首領陣の1人が謝罪の言葉を述べた。

彼が頭を下げると、他の者達もそれに倣って同じ行動を取った。

「我々は臆病者です。あの悪賊共に怯えながら、のうのう暮らしてきましたので…。」

「いえ、お気になさらず。我々も配慮が足らず、申し訳ございません。」

〔トンケ団〕 襲撃時に同時避難をした、〔ラストコア〕 総司令官の西条宗太郎が言った。

「〔トンケ団〕の襲撃は過去に幾度もあったはずですよ。何故我々に連絡をなさらなかったのです？」

ニコンの代表としてリュートは尋ねた。

「口封じと、油断ですね…。近年の〔トンケ団〕は活動を静めていたようです。」

「何故です？」

「我が星の兵士によりますと、トンケ団は火星人と協力関係を結んだようです。」

「火星…！」

宗太郎、リュート、サレンの3人が驚いた。

「星とか、人物でもいい。判明しているものはありますか？」

ジェームズは会議場にはいなかったが、襲撃時の避難誘導に立ち合った。だから統制制御室にいた。

彼も同じ様に驚いたが、情報収集に徹した。

「智将のグロス様、でしたか…。

彼は何も話さなかった。ただ命令を下し、背いた者に罰を与えた男です。

ただ、変化がなかったと言えば嘘でしょう。」

「変化？何があったのです。」

リュートは自然と続きを知りたがっていた。

「私が見聞いたのは、地方の商人の管理長からでした。

火星人と協力関係を結んだことで、商業が発展していったと。」

「まるで戦争の恩恵パターンですね。」

ジェームズが皮肉を言った。

この場の者に対してではない。

「喜んでいる彼らを、私は無碍にする事はできません。

経済の活性化は、星の生命維持にも必要な成分となりました。

それは我々の血肉となる素材さえも、今や取引、交換で賄う時代に…。」

首領陣の1人の言い分に、地球人の宗太郎とジェームズはある程度納得していた。経済の概念が同じだからだ。

「ですがこれでようやく、支配からの脱却ができました。

商業人の反発を買う羽目になりますが、被害に遭われた者達も我々は考えなければいけないです。

地球人との交渉会議は、解放への切り札だと見込んでました。

少数ですが、今回は参加させていただいたのです。」

首領陣の話はまだ続いた。

「協力しましょう。技能知識等習得の必要な分野は準備がいますが…。」

「幾つかの宇宙船の提供を検討しましょうか？距離にもよりますが、太陽系内でしたらそのままの運航が可能な船がありますよ。」

他の首領陣が言った内容に、4人は表情を明るくさせた。

宗太郎を筆頭に、4人は頭を下げた。

「ありがとうございます！」

「我々の母星には即時報告いたします。迅速に対応させるよう指示を出しますので、それまでの辛抱を。」

「わかっています。お待ちしております。」

この数分後。

意見や質問がないかの確認後、宗太郎が解散の表明をした。

とはいえ、バラバラに散らばるのではない。

サレンが首領陣を休ませる為に、個室の案内をしていた。

統制制御室には、宗太郎、ジェームズ、リュートの3人だけになった。

「王子にもご苦労かけたな。」

「いえ。話し合いの場を用意して頂き、助かりました。」

「じゃあ、俺は黒川達に伝えておく。真ん中の子供も起きるだろうからな。」

ジェームズも統制制御室を後にして、

室内には宗太郎とリュートだけになった。

「私も我が星の現状を把握してきます。」

「大事な人が危険な状態だったが…。」

「王家の兵士達が救出に向かって、命に問題ありませんでした。」

「…すまないな。ずっと引っ張り続けて。」

「大丈夫ですよ。」

☆☆☆

勇希の友達のことを聞いた俺も、自分の仲間が気になっていた。

眠る勇希を未衣子に預け、俺は「ラストコア」の閲覧室にやってきた。

目的はPCの利用。

インターネットに繋ぎ、ブラウザ上でチャットサイトを開いた。

ログイン情報を入力し、専用のチャット部屋に入った。

《部屋名・吉川高校電子工作研究部》

白井：ごめん。今誰か起きているか？

～数分後～

〇〇：その名字、本当に白井か？

白井：ああ。ご無沙汰しててごめんな。

◇◇：マジで！久しぶりじゃん！

白井：今起きているのは2人だけ？

〇〇：先輩達は勉強合宿中で、携帯いじれないって。

◇◇：後輩達、誰か呼ぼうか？

白井：いやいいよ。君達2人の近況が聞きたい。

〇〇：近況？だったら◇◇がすごいぜ？市内のロボコン優勝したからな！

◇◇：よせよ、府内の大会が控えてんだから。

白井：おめでとう！その時の画像ってある？

〇〇：あるぜ、ほら。

◇◇：ちょ、恥ずかしいって！

〔市内のロボコンでの優勝記念撮影〕

白井：春の部活で見た時と違うな…大分改良している。

◇◇：悪い。パーツ諸々については、お前の意見も聞きたかったが…。

白井：こっちの都合でいなくなっただけだから、気にしなくていいよ。〇〇は？

〇〇：俺はコイツのアシスタントしただけだぜ。

◇◇：〇〇も大会出たらよかったのに…。

〇〇：白井やお前に比べたら、俺なんて初心者レベルだって。

白井：出場するだけでもいい経験になるんだぞ？

〇〇：冬には出てみるぜ…。ところでさ白井。

白井：なんだ？

〇〇：チャット覗いたの、別に俺達目的だけじゃないだろ？

白井：…バシたか？

◇◇：白井はあまりチャットには顔出さないからなあ…。

白井：学校の教室の方が、作業が捗りやすくてね。電子工作は、目と手で覚える方が早いから。

〇〇：それはすげえわかるぜ。…聞かなくていいのか？

白井：櫻井はどうしてる？チャットには…厳しいか。

〇〇：…。

◇◇：…。

白井：何だよ、聞いてこいって言ったの君達だろ？

◇◇：白井は『課外活動』でいない時だったから、知らないだろうけど。

〇〇：絵の勉強するのに海外留学したんだ。期間は1年くらい。

白井：そっか…。アイツ美術部と掛け持ちで入っているからな。

◇◇：…悔いはないのか、お前。

白井：後悔？

〇〇：お前、綺麗な絵描いてたんだろ？

白井：何言ってるんだ。1年後に戻るんだし、それに、あの絵はボツだよ。

◇◇：決めつけるのはもったいないだろ？

白井：アイツが描くのはキャンバスで、俺が描くのはPCのペイント画像。そんな絵を彼女に見せたら悲しむだろう？

◇◇：〇〇、これ言っていいか？

〇〇：いいぜ。

白井：まだ話してない事があるのか？

◇◇：白井、櫻井からの伝言だ。

『白井君の描いたP Cの絵が久しぶりに見たい』って。

白井：…いいのか？

〇〇：本人の希望なんだぜ？メアド知ってるだろ？

一度評価してもらえよ。意外と喜ぶかもしれねえぜ？

白井：…そうだな。部屋を出たら、アイツのメアドに送るよ。

◇◇：そうこないとね。

〇〇：じゃあ、早いけどお開きにするぜ？俺達もう寝るからな？

◇◇：おやすみー。

白井：おやすみ。

[チャット終了]

「海外留学か…。」

フゥと俺は息を吐いた。

「ま、櫻井もチャットしないけど。」

それでも文字だけでいいから、会いたかったなぁと俺は思ったのに。

櫻井とは、俺の同級生の櫻井美空（さくらいみそら）という女の子だ。

美術部と掛け持ちで研究部に所属している。

知識は乏しいが絵がうまく、完成図のイメージから回路図などの製図を作成した。

だから俺達は作業に専念できた。

櫻井がいなくなったからと言って、別に回路図ぐらいは描けるから、心配無用だが。

俺には他に約束事があった。

個室のロッカーから持ち出した携帯電話。

メモリーカードをうまく取り出して、PCの差し込み口に購入した。

データは自動的に表示され、別途設定は必要なかった。

俺はフォルダ内から、1枚の画像ファイルを探して、プレビュー表示をした。

何の変哲のない、風景画。

花がたくさん咲いている所は、他の風景画とはちょっと違う所だろう。

絵の具で描いたような水彩画。

何の説明がなければ、手書きの絵画で美しく感じとる人もいるかもしれない。

実はこれ、俺が植物園に1人で行った時に、タブレット端末でデッサンと色付けした画像だ。

手書きキャンパスの要素なんてどこにもない。

別の絵を彼女に一度だけ見せた。

彼女はたくさんの指摘をしてきた。

我に返って反省したようだが、彼女にはデジタル化された絵画は苦手なのだろうと納得してしまった。

美術部でキャンパス上に筆で絵を描く彼女なら尚更だと。

だから自分のデータに残したままだった。

だけどここで戻込みしてはいけない。

せっかく仲間で後押ししてくれたんだ。

勇気を出して、絵を見せるんだ。

俺は登録済みのブラウザ上のメール機能で、絵の画像ファイルを添付し、彼女のメアドに送った。

多少の応援メッセージと、正直な絵の情報を伝えて。

メールは無事に送信できた。

★★★

〔ラストコア〕臨時支部内の通路も、愛嬌市内の本部と内装は似ていた。カメラ映像ではあるが、窓際側のスクリーンは海底の様子が映っていた。白井3兄妹に付き添っていた武人と、避難誘導に関わったジェームズが同じ場所立っていた。ドア側の壁に、2人ともたれながらだが。ジェームズが武人の所にやって来たのは、報告する為だった。

「土星圏の支援が可能になった。宇宙進出の日も近くなるだろう。」

「技術の伝授なん？」

「船を何隻か用意してくれるみたいだ。数次第では日が短くなるかもな。」

「今回の目的は手取り早い方がええ。…奴は早く止めないとな。」

ジェームズはポケットから自販機で入手した缶コーヒーを取り出して、開けた。

「しかし、〔トンケ団〕だったか？」

土星圏を支配していた割に大した事なかったな。」

「強いのはHRのトンケだけや。昔見た時は華奢やったけどなあ…かなり改造されとったな。智将に指揮任せてみたいやし。」

武人が言っている間に、ジェームズはコーヒーを1口飲んだ。

「昔のトンケは頭悪いHRちゃう。」

改造で身体が大きくなって行って、思考が弱くなったんやろうな…。」

「…いいのか？」

「何がや？」

ジェームズが武人を見た。

「王子に戦闘を挑んで来い、とお前は言ったようだが…。」

武人は通路の天井を見ていた。

「[宇宙犯罪者] がのうのうと生きてたらあかんし。

俺も変身のせいで寿命も縮まっとるしな…。

最後に生き残りに倒されたとしても、俺に悔いはあらへん。

…クーランに潰されたら話は違うんやけどな。」

「先に宇宙進出を目指すんだな。」

「そうや。」

ジェームズは残りの缶コーヒーを飲んだ。

「船がやって来たら、試用運航後に進出をしたい。

H Rを悪用し、宇宙の秩序を乱す輩を打ちのめしたい。

クーランの討伐は、その先駆けとなるやろう。」

「衛星データも、王子達の話でも…悪用する権力者の始末のニュースを耳にした事がないな。」

「それだけH Rの開発技術も発展してしまったんや。

負の資産だけ、肥大化しとる。

俺も負の資産の一部やけどな。」

「…子供達にしたら、違うと否定しそうだがな。」

「それだけでも十分や。」

ここで2人の会話は途絶えた。

ジェームズは缶コーヒーを飲み干して、回収箱に捨てて行った。

★★★

[レッド研究所] のクーランは頭を抱えていた。

自分の部屋に1歩も出ずに、ある現状に悩まされていた。

『強力なHRの不足』だった。

まず、『自慢の息子』のラルクは研究所内どころか、火星圏タレスにもいない。

彼は地球に潜んでいるからだ。

次に、雇ったHR達の欠員。

エスト、ヒスロ、ニシア、マル口の4名は既に倒されていた。

依頼を行った時に拳で回線を切られたトンケも、つい最近倒されてしまった。

5名全員が、[ラストコア]との関わりを持っている。

「あそこにはラルクがいるが、強大な組織には見えんがなあ…。

だが結果ははっきり出ているしなあ。」

以前からクーランは情報をこまめに入手していた。

マル口の報告以外でも、彼は偵察用に衛星やHRを飛ばしていた。

原始地球のロボの正体も、パイロットの素性もわかっているのだが…。

「やっぱり博識な俺が出向かんとダメだなあ。いくらリーダー格でも、HRは思考力が欠けているわ。」

クーランがため息つきながら呟いていると、部屋の奥のモニター画面が切り替わった。

『クーラン様！』

金髪の顔の良い男性が、真っ直ぐ見つめていた。

音声のボリュームのせいか、クーランの身体が微動に揺れた。

「…ああ、金星の王子様ね…。」

相手を確認すると、彼は平静を取り戻した。

金星圏メイスの、ビウス・エクステラ。

彼がクーランの通信相手になっていた。

実は彼もHRであり、[宇宙犯罪者]に指定されている1人である。

本人はプライドが高く、『犯罪者』のレッテルを張られる事を不服に思ってい

るが。

「何か用？」

クーランはとりあえず、話だけ聞こうとした。

『同志達から聞きました！他のHRが全て倒されたと！』

「あー、うん。俺のとこのはな。」

『でしたら、是非我々をお使いくださいませ！』

キラキラと笑顔で話すビウス。

聞き手のクーランは頭を掻きながら、苦い表情をしていた。

「いや、いいわ。ちょっと俺に考える時間をくれや。」

クーランの応答に、ビウスが吠え出した。

「何故です！？我々は準備万全なのですぞ！」

「…お前ら、何にも調べてねえのか？」

クーランは首を左右に振って、ビウスの過剰さに呆れていた。

「知っていますとも！地球には憎きラルクが生存しているでしょう！地球人と手を組んで！」

「じゃあ地球人の素性まで…いやこれはいい。

地球産のロボは？あと地球に協力する宇宙人は？

お前さんはどこまで、この情報を知っている？」

『子供が操縦するロボでしょう！』

「ガキが扱うから、地球産のロボの守りが堅いんだろう？」

クーランの答えに、ビウスは口を閉じてしまった。

これ以上ビウスを指摘しても時間の無駄と思い、クーランは話を変えた。

その時、両目を閉じる仕草をした。

「…で、お前さんは何で奴に挑みたいんだ？」

『奴は、ラルクは、エトラトル様を消したのだ！』

我々の希望の女神を…あんな火星男に…！』

ビウスの発言に、怒りの感情が見えていた。

「あの嬢ちゃんはフェルホーンで、お前はメイス出身だろ？利害関係ねえじゃん。」

『女神様を斯様な呼称で呼ばないでください！あの方は、元はメイス出身のHRなのです！』

「拾われたのは聞いてたが…メイスだったとはな…。」

新たな事実を知ったクーランは、右手の指で顎の肉を摘んでいた。

「俺も人の事言えんが…恨みだけではラルクは倒せんぞ？」

対策は施すつもりか？真正面から突入したら、やられるぞ？」

『それはこれから…』

「だから遅いって。確かにお前さんの力は認める。

だが力のゴリ押しで、今の地球人に勝てるかと言えば難しい。

開発も交渉も、かなり力を入れてるしな。」

『でしたら、これはどうでしょう？』

ビウスは右手を前に出した。

『クーラン様は一研究所の博士であります。繁栄の継続の為、開発と研究に専念したい筈です。

時間と引き換えに、我々がラルク討伐に参りましょう！』

ビウスの提案に、クーランの目つきが変わった。

「…いいのか？」

ビウスの反応は早かった。

『はい！要は取引をしましょう！

我々はラルク討伐、クーラン様は新兵器の開発のみ。

これでクーラン様は一步も出なくていいでしょう！』

クーランは彼の言葉を聞いて、自分の行動を振り返ってみた。

ここ数年、自分の部屋から出た回数は少なくなっていた。

久しぶりに身体を大きく動かすと、すぐ疲労が溜まるのは経験済みだ。

ならば、もう少し部屋に籠る方が楽だろうと、クーランは金髪の高貴な男に気付かされたのだ。

最終的にクーランが決断を下した。

「わかった。必ず仕留めてこいよ？」

取引だし、報酬も弾むように考えておくぞ。」

既にキラキラ輝いていたピウスの表情が、更に明るくなった。

『かしこまりました！我が同士達とともに、討伐に参ります！』

敬礼の構えをした後、ピウスは自ら回線を切った。

「はあ…無駄な出費をしたなあ。」

暗くなった部屋の中で、クーランは再びため息を吐いた。

「運動でもするか…。」

★★★

〔トールメイス〕は派手な装飾のついた、金星圏産の汎用型の宇宙船だった。

メイン制御室であるブリッジに、男性陣が集まっていた。

全員、髪の色は金髪の、凛々しい若者達。

宇宙船が金星圏産ならば、乗組員も金星人がほとんどなのも当然で。

〔トールメイス〕内は全員が金星人だった。

彼らの先頭に立ち、彼らに向けて演説を行う男がいた。

先程クーランと取引に応じたピウスだった。

「同士達よ、時は来た！我々の女神様を打ち砕く憎き男を裁く時が！

あの男はクーラン様から逃げ、女神様と密かに添い遂げていた！

不埒な輩は断罪せねばならぬ！」

ビウスは高らかに言った。彼の演説に応えているのか、聞き手の同士達はおお！と歓声をあげた。

「奴を、ラルクを野放しにするわけにはいかぬ！

闘志の持たぬ愚か者はこの世に要らぬ！同士達よ！我と共に行こう！」

歓声の音量が大きくなった。

「目指すは地球！ラルクと、奴に従う者を始末する！皆よ、配置につけ！」

ビウスの号令に同士達が従い、各々の配置についた。

ブリッジ内を任されている者以外は、素早くブリッジから出ていった。

ブリッジの正面奥はモニター画面になっており、ブリッジ以外の船内の様子が映し出されていた。

各画面に共通しているのは、皆ビウスの同士達が横一列で並んで立っていた。

「よし、現在位置を確認しろ！我々はどこにいる！」

「我々の母星を出たところです！」

「3日あれば地球降下できる！皆の者、進め！」

ビウスの号令は、【トールメイス】のみならず、左右の2隻の宇宙船も前進させた。

今は小さく見える地球だが、宇宙船では目標がくっきり表示されていた。

（この美しき原始地球、本来は我々高貴なメイス人が手に入れるべき星。

10年前のフェルホーンの降下に、目を瞑る必要はなかった…。

今度こそ、我々の領地にするのだ。）

ビウスはラルク討伐と同時に、地球獲得の野望も抱えていた。

船長席で座ったまま、真剣に青い星を目でとらえていた。

☆☆☆

【ラストコア】臨時支部でも、警戒体制は万全になされていた。
地球上に敵が出現している訳ではないのに、突然の警報。
俺はメールを送ってから、閲覧室に頻繁に通っていた。
彼女からのメールを確認しなかったからだ。
この時も、メールボックスに彼女のアドレスはなかった。
警報がやかましく鳴り響く。閲覧室から出て、出撃に備えないと。
PCの電源は自動的に切れる。
USBメモリ内の画像ファイルは送っているから、荷物は無い。
俺はイスだけ素早く元に戻して、閲覧室を出た。
通路は走っていい場所ではないが、走っているスタッフさんがちらほらいた。
俺は腕時計型の【転送装置】があったので、スイッチを押して一瞬で移動してもらった。
コックピットの中まで移動できるなんて、すごい機能だと感心していた。そんな感動している暇はない。
備え付けのパイロットスーツに着替えて、レバーを握らないと。
勇希と未衣子も、次々乗ってきた。
【バスティーユ】は合体前のジェット機状態。
輸送機の中に格納されたままで飛行すらもしていない。
エンジン自体は起動しているので、モニター画面で外の様子は確認できた。
大気圏に突入した宇宙船が3隻。
【ラストコア】は衛星ロケットを飛ばしていて、宇宙からの映像も入手できた。

大気圏突入は成功する。

熱の膜が無くなった瞬間に、敵の船の外観を視認できる。

輸送機は既に発進していた。

敵の降下地点は太平洋上だと推測されている。

弟と妹もレバーを握っている。

武人さんも同じ輸送機に乗っている。

ニコンの王子達は別の輸送機で待機していた。

ようやく、敵の宇宙船が地球内に入った。

金色？の飾りが多く、凝視すれば目が痛くなりそうな船だった。

真ん中で先陣をきる船だけが豪華だった、というのが救いかもしれない。

3隻ともに派手な船だったら、めまいを起こしそうだから。

『あー、あれは金星の奴やな…。』

武人さんが言った。

『知っているの？兄ちゃん。』

未衣子が尋ねた。

武人さんは首を左右に振って、

『…いや、金星も広いから、未確認の新しい奴でも出たんやろ？』

と返した。

俺ははぐらかしているのだろうか、と考えていた。

深読みしすぎだろうか。

戦闘を交えたら色々判明するし、今は気にしなかった。

☆☆☆

「うっ、摩擦熱が強力です！」

「怯むな！我らの船は他星よりも頑丈だ！

第一、金星圏の硫黄ガスはこの数百倍は厳しいのだぞ！」

大気圏突入した【トールメイス】のブリッジでは、ビウス含め全乗組員が慌てていた。

ビウスも仲間達に叱ったが、彼自身も地球降下は初めてだったのだ。

他星との和平的交渉は、同じ金星圏のフェルホーンの独壇場だったのだ。外の宇宙に出ることすら、メイス人には不可能だった。

彼らもルーツを辿れば、過去の地球生物の魂から来ているとの言い伝えがあるのに。

メイス人が『外』に出るには、強くなるしかない。

ビウスの軍団もHRが多かった。

もちろんビウス本人もHR。

西洋の貴族紳士の身なりをした彼は、ロボ形態【シェーク・フローレ】も中世西洋の鎧をモチーフにした見た目となっている。

今はまだ船長席についたままで、金髪の麗しき男性の姿だが。

突入には成功した。

だがブリッジのモニター前の操縦士は、冷静さに欠けていた。

おかげで【トールメイス】は太平洋の水平線とは平行な角度を保たないまま、落下していた。

速度の計測も誤ったせいか、初動でスピードを出しすぎていた。

結局、【トールメイス】は太平洋の海に着水して、沈んでしまった。

残り2隻は後続の体制を取っていたためか、うまく制御して着水で済んだ。

☆☆☆

『…ど素人のやり方やなあ。』

輸送機の後ろで飛んでいる武人兄ちゃんのセリフだった。

H Rのロボ形態で兄ちゃんは備えているけど、セリフの雰囲気のがん気を感じられた。

その真逆が操縦士さんの張り合った声だった。

『宇宙船が沈んだんですよ！津波被害が出てくるかもしれません！』

『そうですね…。』

『王子とか土星人も来てるんや。』

避難誘導は伝わっとるし、沈んだ船が這い上がらんように祈ろうや。』

『だよな。そっちの方が楽だし。』

勇希兄ちゃん…確に残りの茶色い船を潰したらいいだけにはなるけど…。

戦闘は残りの2隻の船を落とす目的へと変わる、予定だった。

沈没したと予想した派手な宇宙船、這い上がり時も威勢がよかった。波が大きくなり、津波の二次災害が起きないか心配だった。

災害関連処理は全般的にスタッフの皆さんに任せきりなのだけど。

大気圏突入時でも眩しかったのに、近くで見るとさらに目が痛くなる。船を凝視しない方がいいな。

宇宙船も派手で大層だなあと思えば、乗組員の態度もデカイなあと実感したが、宇宙船から発せられた音声だった。

『ラルク！そしてラルクに跪く愚かな原始人共よ！

我々は金星圏メイスの高潔なる軍隊、〔エクステラ隊〕である！

我らの尊敬する女神様を失わせた罰として、貴様らを処刑する！』

また武人兄ちゃんをラルクを呼ぶ人が出てきたなあ。

『女神様？』

『兄ちゃん、知ってるか？』

『うーん。金星圏は知っとるけど、女神様おったのは聞いたことないわな。』

武人兄ちゃんがとぼけてるぐらいだし、私達を知るわけないよね。

すると、私達の会話を聞いた船の中の男の人が怒鳴った。

『誤魔化すではない！エトラトル・フェルホーンの名を知らぬ筈はなかう！』

『…さあ？それが何か関係あるん？』

『このお、黒ずくめ犯罪者があ！』

派手な宇宙船の前方の扉が開き、1体のロボが出てきた。

金と銀のみでできた中世西洋風の鎧が、巨大化したみたいなお姿だった。

この人もHRかな…？ロボっぽくはないから。

彼の後ろから、次々とロボが宇宙船から出撃してきた。

銀1色の、こちらも中世西洋風の鎧のようなデザインで眩しくはなかった。ボスはやっぱり、1番最初に登場した金銀の鎧の人らしいね。

【パスティユ・フラワー】のロッドで蹴散らすか。

ロッドを右手であげて光の球を繰り出そうとしたが。

ビュンビュン、風が吹く音が激しかった。

敵のロボ軍団の、動きが速いのだ。

また油断したのかな…。

広範囲の技で一掃するつもりが…素早く散られてはダメージを思うように与えられない。この人達はうまく切り抜けるだろう。

スピードに気を取られすぎたせいか、【フラワー】に衝撃が走った。

敵のロボ軍団の1体が、体当たりして来たんだ。

「きゃっ！」

衝撃で機体の中が揺れた。私は咄嗟に変な声を出した。

【パスティユ】は常にバリアを張っているから、ショックは和らいでいるけども。長くは保たないなあ。

『大丈夫かお前達！』

【ホーンフレア5 t h】が王子に応えたのか、【フラワー】に駆け寄った。【ブラッドガンナー】は両手の銃で敵を引き離していた。

『これは速さ比べの方がええな！』

【ブラッドガンナー】の銃の1発が、敵のロボの1体の片足に当たった。命中したロボは速度を下げた。

ロボはよろめいて、ゆっくりと下に落ちていった。

武器の剣を投げつけようとしたらしいが、追い討ちの銃弾で機能を停止させていた。

『ビウスという金星人、騎士道精神マシマシ男やから、剣同士で勝負したらええんとちゃう？』

『【スカイ】で挑むって事、ですか。』

和希兄ちゃんが呟いた。

『勇希、未衣子。今から【スカイ】にチェンジしようと思う。

バリアは張るようにしてほしいが、装甲は弱くなるだろう。

少しの辛抱、耐えてくれるか？』

モニターの四隅で兄達と連絡とっているけど。

四隅の小さい画面からでも感じ取れる、和希兄ちゃんの真剣さ。

真っ直ぐに前を見ていたから。

真摯な姿勢で取り組みたい和希兄ちゃんの気持ちを、私と勇希兄ちゃんは拒むことができなかった。

「大丈夫だよ。変わりたい時は言ってくれたら変わるよ。」

『兄貴は控えめすぎるんだよ。ガツンと行く時いかねえと後悔するぜ？』

「行き過ぎて泣き喚く誰かさんよりは冷静だけど。」

『おいコラ！』

勇希兄ちゃんはすぐ反応するなあ。私も揶揄うからいけないのだけど。

『今回も敵の大將落としていこうな？』

周りの手下は俺らが協力して落とすとく、と武人兄ちゃんが引導を渡そうとしていた。

これに反発した男がいた。

武人兄ちゃんに女の人の事で因縁を持っていたビウス？だった。

『逃さんぞラルク！貴様の相手は私だ！心身ともに腐りおって…！』

ガンガンガン、と3発の銃声。弾の行方はビウス本人ではなく、彼の後ろの離れた手下達の心臓部分に定まっていた。

ロボ形態の手下達は撃たれると勢いを失って、ゆっくり下の海へ落ちていった。

これなら雑魚は無視でいいか。

武人兄ちゃんは固まるビウスに向けて、正直な話をした。

『エトラトルは自らを捧げただけや。負傷で意識を失った俺を救うために。エトラトルに報いる為の復讐やったら、クーランにするべきや。

10年前の地球襲撃事件の主犯はアイツやから。』

『ふざけた事を抜かすな！動揺をさせる気か！』

また銃声が響いた。

これもビウスの後ろにいた手下に向けられたものだ。

同時に、兄ちゃんの背後にも手下が！

和希兄ちゃんに【スカイ】で飛ばさないと、と焦燥に駆られてると。

藍色の小さな槍が、手下の心臓部分に突き刺さった。

手下は武人兄ちゃんに手を下せずに、落ちていった。

『因果関係の話をしている場合か貴様！今回はHRだらけなのだぞ！』

『わかつとるって王子。コイツは甘ちゃんやから、一言添えただけや。』

『…早くケリをつけるぞ。』

『被害が大きくならんように終わらすか。』

【ホーンフレア5 t h】と【ブラッドガンナー】はピウスから距離を離れた。
舐められたピウスが黙るはずがなく、兄ちゃん達に攻撃を仕掛けようとした。

『批判を述べるのならば、私と勝負せんか！』

ロボ形態の彼の剣が上から下へ振り下ろされる前に、刃が何かにぶつかった。
本当はぶつけたが正しいかな。

【パスティユ・スカイ】の青く澄んだ2本の剣が防いでるから。
相手が武人兄ちゃんじゃないと知ったピウスは、すぐに【スカイ】から距離を取った。

【スカイ】の2本の剣は、目の前でクロスしたままの構えだった。

『武人さんの前に、まずは俺が倒しますんで。』

和希兄ちゃんの宣言だった。

私と勇希兄ちゃんは黙って機体の状態チェックに徹した。

『あの愚か者につくとは正気か！奴は多くの生命を追いやったのだぞ！』

『追いやるのはあなたも同じではないですか？浮上時にあれだけ宣言しておいで…撤回しませんよね？』

和希兄ちゃんが饒舌でピウスは言い返せなかった。

兄ちゃんは、

『さて、試合を始めるか。』

と笑みを浮かべた。

☆☆☆

〔レッド研究所〕は実験施設から製造施設まで完備している、総合的な開発機関である。

クーランの部屋だけが、彼の仕事場ではない。

クーラン本人が部屋から出なかったのは、備え付けのモニターの通信で指示系統全般を発信できるからだ。

とうとう彼が、自室を出るようになった。

頼みの綱にしていた〔宇宙犯罪者〕達が、悉く消されていった。

頼り甲斐のないピウスも予想通りなのか、端末で戦況が芳しくない事を確認した。

〔ラストコア〕の統制制御室のような司令室は、〔レッド研究所〕にも存在した。

司令室に特別な名前はつけていない。が、機能は充実していた。

〔レッド研究所〕から発する電波の範囲は広がった。

火星圏タレスに位置するこの研究所だが、太陽～土星圏まで電波が届いた。

天王星圏スイルのマルロ・ヒーストンと頻繁にやり取りをしていたのは、天王星圏から奥の太陽系外まで電波が届かないから。

司令室の地下は、電気が蓄えられていた。

蓄電した電気は放電し、振動が生まれ、その積み重ねが電波の距離を伸ばす仕組みになっていた。

同時にクーランは、電波が届く各惑星圏に衛星を数十機飛ばしている。衛星も立派な通信回線の強化につながっていた。

司令室は自動操縦で、基本的に誰もいなかった。

中央奥までクーランは歩いた。

中央奥のコンピュータ群が、司令室のメイン制御装置となっていた。

配線のつながったマイクを口元に寄せて、クーランは口を開いた。

「いいか？照準は金星の王子様だ。

せめて四肢だけでもチョッキン、だ。

王子様が壊れたら軍団は一気に戦意を失う。

ガキ共？今はまだ放置しておけ。」

誰かに指示を出しているクーランだが、静音設定で彼以外は相手側の声は聞き取れなかった。

「じっくり痛めつけてやるよ。

マル口は証言だけで戦意喪失を促したが、効果がなかった。

実践で引き剥がして、ガキ共を殴りつけさせるのがわからせやすいとな。

…ラルクを連れ戻す準備もするからな。」

☆☆☆

地球の高校生である和希兄ちゃん。

H Rで部隊のリーダーを務めるピウス。

ロボ搭乗状態の地球人と、ロボ形態に変身した金星人。

両者の力量に差はなく、拮抗していた。

良く言えば和希兄ちゃんはかなり善戦をしているし。

悪く言えばピウスが他の〔宇宙犯罪者〕より弱いと判断できる。

実は和希兄ちゃん、中学時代の途中まで剣道教室に通っていた経験があるんだ。

メキメキと強くなっていった勇希兄ちゃんと違って…弱い印象を受けていた。

けど何度かジュニア大会に出ていた実績もあったんだ。

趣味の電子工作と勉強を理由に、剣道の稽古から身を引いたのだけど。

H Rのビウスといい勝負しているって事は、和希兄ちゃんは剣道の勉強もおさらいしていたのかな。

和希兄ちゃんも私と似て、自分自身を前に出さない内向的なタイプ。

勉強、電子工作の合間に、今回の剣術戦に備えたんだろう。

『くっ、やるではないか！』

カギンと刃の音がはっきり伝わった。

「和希兄ちゃん、エネルギーがまだ5割程残ってるよ？」

『もっとパワー出してもいいんじゃない？』

サブパイロットとして和希兄ちゃんのサポートにまわった私と勇希兄ちゃん。

エネルギーの管理はもちろん怠っていなかった。

和希兄ちゃんはハアハアと過呼吸気味のまま言い返した。

『いや、もうちょっと詰めていく。

あと少しずつ減らしてから一気に攻めていきたい。』

「わかったよ。念の為に予備エネルギーを準備するね。」

『ありがとう。』

私はパネル操作で予備エネルギーを準備し、接続を行った。

H Rと地球人の差は、あった。和希兄ちゃんの息遣いでよくわかる。

体力的に見れば、ビウスの方が余力を残しているようで。

和希兄ちゃんの体力は、もうすぐ限界点まで到達しそうだ。

コックピットのモニター画面は、私達の健康チェックまで調べてくれていた。

『…いいだろう。私の必殺技をお披露目しよう。』

ビウスはロボの半分程の長さの剣を、胸元に寄せた。

刃先は頭部より上を指していた。

両手でマイクを持つように握っていた。

彼の両脇、浮いている足元から白い霧が出てきた。

白い霧はもくもくとあがり、剣の刃先へ集っていった。

やがて刃先に、丸い光が現れて、少しずつ膨れ上がった。

『これは…。』

『今すぐ離れなアカんで！』

『え？』

ビウスの手下と交戦していた武人兄ちゃんの声だった。

同じHRの兄ちゃんが、遠くからでも危険を察知しているって事は…。

『潮時か…。』

『回避したらいいだろ！距離を取ろうぜ！』

「攻撃分をギリギリ残せる範囲で、バリアを張っておくね！」

その場凌ぎでも、防ぐ手立てを私達は行った。

ビウスの近くから移動すると、彼は剣先を上に掲げた。

ロボ形態の頭部の面が、両手で隠された。

あげる動作は2段階で、今度は肘も位置が変わった。

どうやら剣を振り下ろす技らしい。

まだ離れないと、バリアを張ってもダメージをくらうだろう。

警戒するように、【スカイ】は下がっていった。

だけど、私達はビウスの攻撃を受ける羽目にならなかった。

トドメを刺すつもりでビウスが爆発に巻き込まれたのだ！

『え？』『あーあ、締めへんなあ…。』

『ビウス様！』

和希兄ちゃんは驚き、武人兄ちゃんが呆れ、手下は心配の声があがった。私と

勇希兄ちゃんはもちろん、驚きの反応だった。

『うわああああ！』

ビウスの悲鳴。

爆発の影響で、ビウス以外の者は状況がわからなかった。

『…まさか。』

『そうみたいね。宇宙からの発射の軌道が見つかったわ。』

武人兄ちゃんと同じく他の敵の迎撃にあたっていた王子とサレンさんが言った。第3の敵が、判明したらしい。

爆発はすぐにおさまった。

しかし、姿を現したビウスのロボ形態はボロボロで。

特に悲惨なのは、手足の先が無くなっていた事だ…。

『HRは生命体や。再構築なんて要素は、余程の改造が施されない限りあらへん。』

『やっぱりアイツの手足は…。』

『手術でもせんと、回復せんやろうなあ…。』

『そんな…。』

『ビウス様！』

手下の2、3人がビウスの周りに駆けつけた。

『フフ…惨めな姿を曝け出してしまった…。

貴様の言う通り、私は締まりのない戦士だろうな…。』

『静かにして下さいビウス様！今すぐ解除して施術を！』

『もう…よい。撃ってきたのはクーランであろう。』

ビウスは息絶えるのを踏ん張って、話しかけていた。

私にはそう映っていた。

『私が幼稚すぎたのだ。

クーランにつく周りのHRは皆、力か頭脳どちらか突出していた。

私は…メイス随一の大隊長を務めていただけに過ぎない、一介の兵士だったの

だ。

夢を、見すぎてしまったのだ。』

『そんな事は滅相もございません！我々を導いて…。』

『エトラトル様は希望の女神だった。彼女の宇宙進出が一縷の望みだった。

…ラルク、貴様がエトラトル様に手を掛けてないのは存じている。

クーランの襲撃で倒れた貴様を、彼女は救っただけだと。

だが、私の怒りが収まらなかったのだ。』

ビウスはぎこちない動きで頭部を【スカイ】のいる方向に向けた。

『我々は降伏する。残存兵をそちらで扱ってもらいたい。

私はこのまま命を絶つ。

…青年よ。君の蒼き剣で私を刺してくれまいか？』

『ビウス様！？』

『勝手な事を言うな！』

『ちょっと待ち、王子と手下君。』

【ブラッドガンナー】の手があがった。

『ビウス、残存兵の扱いは【ラストコア】の規律に沿ってもらうけど、ええな？』

『我々は兵士の身だ。同士達よ、理解してほしい。

我々が討つべき相手はクーランだ。

この者達は反クーラン組織となろう。

今は新たな同士として、共に戦ってくれ。』

それ以降、手下達が後ろへ下がった。

ロボ形態のビウスが不思議と浮いた状態になっていた。

『私は呪わない。青年よ、奥まで貫いてくれ。』

『…和希。』 武人兄ちゃんが名前を呼んだ。

モニターから様子を見ると、和希兄ちゃんの手が震えていた。

『いいのですか…こんな勝ち方。』

『構わん。神が君達を選んだのだろう。』

原始地球の空と、空気を味わえただけでも幸せなのだ。私は。』

【スカイ】はそこそこのスピードでピウスの前へ向かった。

止まると、【スカイ】は1本の剣をピウスの心臓部分…の前に近づけた。

和希兄ちゃんの震える手は、意外に早く止まった。

『…もっと仲良くなれたなら、草花も見せたかったですね。』

『…そうだな。』

『最後まで、目に焼き付けてくださいね。青空。』

剣は勢いよく、下に降りた。

【スカイ】の手によって、ピウスのロボ形態の心臓部分に穴が開いた。

大きな音がする筈なのに、音が聞こえないような感覚がした。

『…櫻井、今は俺も留学生だ。今度は、海の絵を描くよ。』

「え？」

『いや、なんでもないさ。もう帰ろうか。』

【スカイ】は剣を収め、輸送機へと帰った。

背後では後に聞いたピウスのHRの名、【シェーク・フローレ】の胴体が海に落ちていった。

11・包囲の日



吉川区の襲撃から半年程経った。

私は今も、武人兄ちゃんの夢を見ている。

私は兄ちゃんの味方をしていて。

続々現れた【宇宙犯罪者】達を倒していった。

紆余曲折はあれど、地球を守ってこれた。

なのに、武人兄ちゃんの心が晴れていない、と感じ取れていた。

気のせいと思えない程に。

やっぱりクーランという、武人兄ちゃんの故郷のおじさんを倒さない限りは、兄ちゃんに平穏が訪れないんだろう。

ビウスの手足を失わせた相手、詳細は掴めなかった。

だけど皆、発射源と思われる宇宙の外から、1つの可能性は生まれていた。

クーランが絡んでいる可能性がある。

武人兄ちゃんの身体を改造し、兄ちゃんの想い人を奪ったような、クーランという男。

私は宇宙に行った事もないから、クーランに実際、出会った事もない。

でも夢の中では。

彼が悪の微笑みをしていた人物で、何度も鉢合わせた記憶は存在している。

直感的に危険を察知して、目が覚めた経験も。

☆☆☆

ビウス戦後の【ラストコア】臨時支部のスケジュールはぎっしり詰め込まれていた。

トンケ戦後から土星圏の有志達との、技術面での調整は進んでいた。

ビウス戦の状況下で一時進行不可になっていた土星圏の宇宙船も、次々と降下

を開始していった。

ビウス戦を経て追加された内容もあった。

ビウスの残存兵の扱い。ビウスの言葉を信じたのか、意外にも残存兵は素直に指示に従っていた。

彼らはクーラン討伐への前衛に立つ部隊としての役割を務める事を約束した。

3兄妹・王子達・武人・アレックスのA Iの他に、【ラストコア】に戦力が加わった。

実は予定された戦力がもう1つあった。

「ジェームズ。君の選んだ志願兵達が来るようだが…人数はどうだ？」

【ラストコア】総司令官の宗太郎と、事務局長のジェームズ。

2人は世界各国の外交官との交渉の指揮を取っていた。

本来、直接訪問が不可欠の交渉だが、宇宙進出まで猶予がない彼らは、大規模な通信回線での交渉に踏み切った。

事務局のオペレーター達が、200近くの国々の交渉に追われている。

事務局はこれまでも、世界各国の人々に請願と謝罪の対応を繰り返していた。

まさに、【ラストコア】の真の裏方部隊とも言われている。

宗太郎の問いに対し、ジェームズはオペレーター達の苦戦している姿を見ながら返した。

「ざっと、10人強だな…。」

「ビウス隊よりもかなり少ないな。」

「正規軍の規制がガチガチに固定されていたんだ。彼女に裏道を辿ってもらうように依頼したがな。」

「彼女は…作家だったか。」

「まだ収獲のいい方さ。機体は余るかもしれんが。」

ジェームズはオペレーターの挙手を発見した。

挙手はトラブルの合図。

ジェームズは小走りで該当オペレーターの側に駆けつけた。

宗太郎のみ作業風景を見守る形になった。

（土星圏の有志達とビウス隊の残存兵の協力で、戦力はかなり増強されてきたが…。クーランの戦力が…今の今まで把握しきれていない。）

宗太郎は額に手を当てていた。

（偵察用の衛星は幾度も飛ばしている。

解析作業も万全の筈だが…いつも発生時のみしか情報が掴めない。

タレスの位置も、黒川の言った研究所も特定はしているが…。）

「すまん宗太郎。」

宗太郎は顔を上げた。ジェームズが手招きの動作をしていた。

宗太郎もすぐに近くへ向かった。

宗太郎の今の役割は、ジェームズでも対応できない最悪の事態への処置であった。

どうした、と尋ねる宗太郎。

ジェームズはオペレーターのPCを指差した。

1人の外交官がカメラに向けて怒りをぶつける姿があった。

オペレーターは女性で、怒り狂う男性に怯えていた。

泣き喚くまで酷くないが。

「私が最高責任者の西条です。いかがなさいましたか？」

『君達は！あれだけの損害を撒き散らして、まだ我々に我慢の要求か！』

宗太郎が名前を名乗ってすぐ、外交官は文句を述べた。

宗太郎は頭を下げた謝罪した。

「申し訳ございません。

もう襲撃事件を起こさぬよう防止に努めますので…。」

『その文言は聞き飽きた！こっちは島国でいつ沈むかわからんのだぞ！ただでさえ温暖化で海水の水位があがっているのに…。』

他にも幾つか外交官はキツイ口調で不満点を言った。

宗太郎もジェームズも、相槌を打つだけで何も言い返さなかったが。

「もうすぐ決着つきます、あと少しの辛抱を…。」

『全く、10年前の襲撃事件の張本人が対策本部の要など…我ら地球人の尊厳を知らん奴が。』

宗太郎とジェームズの両目が大きく開かれた。

外交官の述べた『張本人』はラルク、即ち武人を指している。

2人はこの事実を設立当初から知っている。

しかし同時にそれは機密情報として扱われていた。

黒川武人の正体について、[ラストコア]外に許可なく流してはいけないのだ。

「黒川は斯様な愚男ではありませんが…誰から聞いたのです？」

『元正規軍の中年からだ。彼はかなりストレスを抱えていたみたいだぞ？』

「…訓練兵から情報を巻き上げたと考えたと、漏れた可能性はありますな。」

ジェームズは冷静に原因を推測した。

装っただけで、内心は宗太郎同様焦っていた。

『とにかく！今回できっちり終わらせろ！次避難しろと言ったなら、連合に抗議するぞ！』

回線は外交官の手により、強制的に打ち切られた。

不都合な事由を押し付ける人間に礼儀は不要と判断したからだろう。

宗太郎もジェームズも、外交官に対して怒りを覚えることはなかった。

「…相互理解は、難しいな。」

宗太郎は小さく呟いた。

ジェームズの耳に届き、彼の肩に手を置いた。

「いずれはバレルの時が来るし、国の偉いさんには知った方がいい情報だろうしな。宇宙進出が一般的になれば尚更。」

宗太郎はジェームズの手で視線を下ろした。

「君の言う作家や志願兵達がこぼしたとかは？」

「志願兵達は知らん。作家は知っているが…俺が口止めしたら彼女は口を開かないさ。約束を守る女だからな。」

そうか、と言って宗太郎は手から視線をずらした。

P C画面はアドレス一覧が表示されていた。

「処理するか？」

「今は進出を急がせる。しばらくは、他の〔宇宙犯罪者〕の動きはないようだ。あれだけの人数を倒せば躊躇するだろう。」

宗太郎とジェームズは、P Cの近くから離れて行った。

オペレーターは迅速に、他の国の外交官との連絡を開始した。

交渉手続は、まだ時間がかかる。

☆☆☆

ビウス戦後、私達にゆっくりできる時間はなかった。

流石にビウス戦後すぐは、入浴や睡眠を取らせてもらった。

けどその時間を延ばす事は許されなかった。

起床後、武人兄ちゃんの指示に従って、私達3兄妹は特別講座を受講していた。

内容は宇宙進出への基礎知識であった。

特別講座の受講は私達3兄妹以外にも、複数のスタッフの人達が参加していた。

「ラストコア」が設立されて10年ちょっと。数年しか在籍していないスタッフさん達は、宇宙についてあまり知らないみたいで。

これから厳しい戦が控えてるのに、なんだか学校の穏やかな授業を受けているようだった。

本当に気を引き締めて、真剣に学ばなきゃいけないけど。

個人の復習用に製作してもらった冊子の資料で、もう一度勉強しようと決めた。

実戦で体験するとわかりやすいと土星圏の人が言ったけど、ある程度の知識は定着しておく。振り返りで感覚も身につくから。

講座は短期間で一旦終了した。

統制制御室にて、臨時ミーティングがあった。

私達3兄妹をはじめ、武人兄ちゃんや「ラストコア」の人達、王子達土星圏の人々にピウスの残存兵。

ジェームズさんの後ろに…初対面の若いお兄さんやお姉さん達がいるのも確認できた。

全員が参加するミーティング。当然、室内はほぼ満杯だった。

幾らかの人々は、モニター画面越しでミーティングに参加しているから、寿司詰め状態にはならなかった。

「宇宙進出の事前準備に忙しい最中、臨時で集まっていただいて申し訳ない。」

集団の真ん中に立った西条司令が頭を下げた。

司令も激務に追われているのを皆知ってるので、何も言わなかった。

「宇宙進出…行き先は火星圏タレスに決定している。

土星圏の離れた商人、ピウスの残存兵から敵の本拠地を特定した。

開始時期は1週間後に設定する。

3日前には準備完了しておくように。」

はい！と司令の周りから大きな返事が聞こえた。

もちろん、私達も一緒に返事をした。

「次に紹介に移ろう。新しい仲間達だ。ジェームズ、前に出てくれるか？」

「わかった。」

ジェームズさんが前に出て歩くと、後ろから若い人達もついてきた。

キリッとしてるまではいかないけど、若い人達の歩く姿勢は綺麗だと感じた。

整列の時も同じで、隙間の間隔も均等に見えた。

若い人達の先頭に、ジェームズさんが立った。

「諸事情が重なり、遅れてしまった事をお詫びする。

正規軍から何名か、兵士を引っ張ってきた。」

すぐにスタッフ達がざわついた。

私達3兄妹は意味がわからなかった。

側で武人兄ちゃんが言ったのだ。

「君達が来る前に色々あってやな…。」

静かに、と西条司令が小さな混乱を抑えた。

「君達の意見はわかる。だが今回の兵士達は自らの志願でここに立っているんだ。今までの訓練兵は、忘れてほしい。

代表者に交代する。皆、聞いてあげてくれ。」

ジェームズさんは横へずれていき、中心から後退した。

若い女性が中心に立った。

敬礼！と女性の号令で、若い人達全員が私達に構えを取っていた。

中心に立つ女性の挨拶が始まった。

「私達はフェリー少佐のおっしゃる通り、自らの意志でここに参りました。今まで参戦が不可能な状態が続いたのは、正規軍の統制に問題点があったからです。」

「それ、言っているのか…？」

勇希兄ちゃんが首を傾げた。

気持ちはわかる。女性の今の発言は、正規軍？の秘密をバラしている行為と同一だから。

「大丈夫や。臨時支部も海底で、ここは日本やない。正規軍は嗅ぎつけれる程能力ないし。」

「その通りです黒川隊長。」「認めてどうすんだよ！」

またすごい人達に会ったなあ…。

「正規軍は[ラストコア]について、悪い風潮のみ拡散していました。極悪人を寄せ集めた、活動内容が不明な集団と。」

またざわついた。

スタッフ達の厳つい表情を見れば、理由は一目瞭然。

正規軍の人達が自分達を馬鹿にしているらしいから。

悪口を浴びせられた側なら悲しくなるのは当然だ。

「ですが私達は少佐の知人が執筆なさった小説を拝読し、考えを改めました。

一生懸命、地球の未来を見据えている素晴らしい組織だったと。

私達は共感した者同士、少佐と知人を伝え、参りました。

今までの無礼と参戦への遅延につきまして、代表でお詫び申し上げます。」

若い人達が一斉に謝った。

スタッフさん達の表情の陰しさは和らいだけど、うーんと困惑している人がちらほらいた。

「全責任は俺が取る。戦闘における指揮も、元正規軍の奴に事前に話をつけて

いる。

クーラン戦は宇宙を戦場に選ぶ程、過酷な戦になる。

人員の補充としても確保したい。

今は彼らを信じてやってくれ。」

ジェームズさんはかなり念を押していた。

実質No. 2の存在でもある事務局長にここまで言われたら、スタッフさん達も黙らざるを得なかった。

暗めの空気を変える為か、西条司令が話題を切り替えた。

「そこで。彼らや土星圏の人達と残存兵を交えて、進出の3日前にパーティーを開催する。」

ミーティングってこんなに騒がしいのかな…って疑う程、今回は皆のどよめきが凄かった。

「大丈夫ですか？愛嬌市では禁止令が…。」

「[宇宙犯罪者]の再来があれば規則を科すが、現時点では発見されていないのでな。」

「前夜祭と思って、気分転換といったらええやん。ただ、お酒はお預けやで？」

どよめきは一瞬で収まった。

宇宙進出という重大なお仕事が控えているんだし、妥当な約束だけど。

「参加の是非は本日から受け付ける。

私やジェームズの所に来るように。難しい場合は誰かに言伝してもらうように頼んでくれ。

以上で解散する。間に合うよう、持ち場に戻って作業を続けてくれ。」

☆☆☆

宇宙進出まであと3日。

襲撃の警報はなく、順調に準備が進んでいった。

数日間の短期間で、8割の調整が完了していた。

技術提供によるロボやAIの強化や、宇宙船の到着まで。

お陰で西条司令もジェームズさんもアレックスさんも、皆疲労が溜まっていた。養生していた人もいた。

私達3兄妹は身体が鈍らないよう、軽い訓練を受けていた。

と言っても、叱責の声は幾つかあった。

ビウスの残存兵や土星圏の兵士達、正規軍の志願兵も交えての訓練だから、余計に。

身体を動かしたのでお腹も空くし、ヘトヘトだった。

初日よりは大分身体は持ち堪えてきたから、成長したかなあ。

パーティー当日の訓練が終わり、いよいよパーティー会場へ出発する事になった。

窓を黒塗りにした、外の見えないバスは臨時支部でも健在だった。

人数が増えた為か、バスの台数も増えていた。

10台ぐらいはあったかもしれない。

リュート王子達は、土星圏同士で固まってバスに乗った。

だから私達とは別々のバスに乗った。

代わりに、ジェームズさんが連れてきた志願兵の皆さんと一緒に乗った。

外は見えず、点灯しないと暗いバスの中。

でも雰囲気は明るいのは、きっと志願兵の皆さんとの談笑のおかげだと思う。

臨時ミーティングで話してた通り、この人達は小説を読んでいたの。

シナリオを聞いただけでも、私達の過去の戦闘と似通った部分が見つかった。

小説の執筆者はどこかで戦闘を見ていたのかな？と疑うほど。

小説の名場面と、私達の戦闘の経験談との、交換のやり取りをした。

あっという間にパーティー会場に到達していた。

談笑で時間の感覚を忘れていた。

パーティー会場は位置的に【ラストコア】臨時支部の近くに設定されていた。

これも早く着いたと感ぜられる理由の1つでもあった。

会場内はいつスタートしても違和感がないほど、飾り付けが施されていた。

綺麗なテーブルクロスの上に、真っ白なお皿と光沢のあるナイフ・フォーク・

スプーン。ワイングラスのツヤも、美しく輝いていた。

料理はバイキング形式で、洋風メインのメニューとなっていた。

会場内の前方には、幕が下ろされたままのステージが存在した。

あともうちょっとで、音楽コンサートが開幕する。

ワクワクするなあ。

勇希兄ちゃんはバイキングのメニューに夢中だけど。

下の方の兄の行動に呆れていると、会場内にアナウンスの放送が流れた。

放送はコンサート開催の合図で、それが終わるとステージの幕が上がった。

温かみのある照明の中、オーケストラの楽団の皆さんが横一列に並んでいた。

皆さんが一礼をして、指揮を担当する人が軽く挨拶を述べた。

楽団の皆さんが楽器演奏の持ち場につき、楽器を持って演奏の準備をした。

少し静かな間を取った後、指揮者の両手が動いた。

弦楽器のソロパートから、曲が始まった。

やがて勢いをつけるように、他の楽器の演奏も私達の耳に入ってきた。

プロの楽団によるクラシック曲の演奏は、心地良かった。

1曲1曲終わるたびに、私達は拍手をしていた。

バイキングに夢中になっていた勇希兄ちゃんが、私と和希兄ちゃんの分を持ってきた。

勇希兄ちゃんは自分の皿にかなりの量を詰め込んでいた。

私達の方はこれより少なめだ。

満腹になってしばらく動けなくなっても知らないからね、勇希兄ちゃん。

説教ではないけど、兄に一言指摘するのを今日はやめた。

心の中に留めて、後で覚えてたら言えいいかと。

1日が終わる前にコンサートは終了した。

クラシックだけだったけど、綺麗な演奏に酔いしれていた。

パーティー開催中に問題は発生しなかった。

…武人兄ちゃんがいなくなった以外は。

☆☆☆

パーティーが順調に盛り上がりを見せている最中、武人は会場を出ていた。宗太郎にすぐ戻る、と耳打ちして。

彼は護衛の付き添いを促したが、武人はこれを拒否した。

外の空気を吸うには、会場の通路で止まるだけでは物足りず。

武人は会場の玄関の扉を開いて、真っ暗な外へ出た。

会場の外はクラシック音楽とは無縁そうな、スラム街が近くの離れた場所に存在した。

敵の襲撃の可能性もあり、パーティ会場の指定をあえてここにしたので。

武人が意識していなくても、街の中に訪れる事はできた。

夜の影響もあって、街中は静かだった。

酒場でもあれば、フラッと立ち寄れたが。

（都合よく、飲めるわけないわな。）

仕方なく武人は歩き、5階建ての建物同士の間隙に入った。

片方の壁にもたれ掛かった。

ハア、と武人は息を吐いた。

（どこまで、保つんやろうな…この身体。）

武人の顔には少し、汗がかかっていた。ポケットのタオルで、流れた汗を拭き取った。

武人の身体は、限界まできていた。

クーランに《ラルク》と呼ばれ、物心ついた頃には他星の制圧に参戦させられた。事実上、11の星を潰してきた。

潰した星全てを力押しで粉碎したわけではない。

民にとっての生命線を破壊し、自然に壊滅させた星もある。

武人はHRでも頭の良い方だった。

12番目の星、金星圏フェルホーンで、武人は運命的な出会いをした。王女エトラトルは、彼の精神的な支えになってくれた者だった。

地球の交流会で失ってしまった。

クーランの襲撃で絶えかけた彼を、彼女は救ってしまい…そのまま消えていった。

地球の血が流れる彼女の想いを武人は継いだ。

他の「宇宙犯罪者」と武人の違いは2つ。

前線に立ち過ぎたのと、身体をいじられた事。

武人はクーランの下に属していた時も、王女の警備時も、「ラストコア」の特別隊長になった時も、ずっと前線に立ってきた。

HRのロボ形態の変身の根幹は、細胞の分裂と破壊の繰り返しである。ロボットになるために細胞の分裂が始まり、元来の生物に戻るために細胞は壊され

る。

脅威的な力を持つHRの代償である。

他の者は比較の変身をしていない。

マル口のように仲間を使役する者もいれば、ニシアのようにHR以外の戦略を持つ者もいる。

武人は基本、戦い抜くにはHR能力がいる。

せいぜい、武器の銃を単発で出して生身で戦える程度だ。

だから武人は、アレックスに地球産ロボの開発の依頼をした。

同時に自分の身体の検査を彼に認めた。

【パスティーユ】等の超高性能なロボは、武人の身体検査なしでは完成しなかった。原始地球ではHRの知識が足りなかったのだ。

アレックスは武人の身体の検査を幾度も行い、地球上で再現可能な物質と仕組みの構築を模索した。

人間を守るコックピット《剛力ガラススフィア》、ロボの柔軟な骨格をつくる《神経チューブ》、体格の変幻自在を可能にした《熱溶解》を生み出した。

1人乗りではこの環境下でも絶えきれなかった。

だから3人乗りのコンセプトに変えた。特殊性能のオプションをつけて。

オプションが、【パスティーユ】がスピード型・火力近接攻撃型・広範囲攻撃型にチェンジできた。

（なんか売店でも開いてたら、水でも買えたんやけどな…。）

武人は思っ空を見上げた。空の色は黒に近い青色。

普通の店舗であれば、閉店を過ぎている頃合いだろう。

（街の雰囲気あんま良くないから、なんか開いてるなぁと期待してたけど…人払いしとるわな。）

武人は空を見上げるのをやめて、背もたれを支えた建物の側から離れた。

帰ろうかとキリをつけて、建物の隙間を出ようすると…。

武人の両目が細くなった。会場へ戻る足も止まった。

彼は自分の左右を目で追った。

（…誰かおるな？）

武人は人の気配を感じていた。

街を歩いた時、建物内の照明はどこも消灯されていた。

単純に住人が就寝時なだけだとも受け取れそうだが。

（灯りついとる部屋が1つもなかったんや。）

最初から武人は、この街の違和感に気づいていた。

（こんなスラム街やったら…酒場の1つや2つありそうやのに、見当たらないのが引っ掛かったんや。）

建物の隙間は彼の後ろにも出入り口があった。

彼が立ち止まって、数分が経過した。

カンカンカン、と軽い音に聞こえたが、立派な銃声だった。

銃弾の跡が付く場所を、武人は察知していた。

即座に前へ飛んだ。クルッと1回転して着地。

姿勢を少し屈んだ状態で立っていた。

先程まで背に向けていた側の隙間の出入り口に、人影は見当たらない。

（上から撃ったんか？せやけど…！）

同じ軽い銃声が、彼の後ろから聞こえた。

着地の仕方姿勢も同じやり方で行った。

武人が出入り口として利用しようとした側だったが、こちらにも人影はない。

（やっぱり上やろうけど…）

彼はもう一度空を見上げた。

3度目の銃声。銃弾が律儀に上から降ってきた。

これも武人は軽いステップでかわしていく。

（姑息やなあ…！）

3度目の場合も、すぐに途絶えた。今のうちに再度上を見上げる。

人の姿を…視認できなかった。

（おかしい…屋上にはおるやろ…！）

武人はありえない物を目視した。

建物の隙間…この場合は広めだったが、約3メートル程度の幅だった。

そこに落ちてきたのは、神社の巨大な鐘みたいな檻。

人間1人をすっぽり入れるには、ちょうどいいサイズだった。

（空気孔が天辺の丸い穴だけか…！これに入ったら抜け出されへんかもな…！？）

鐘のような檻は、武人をさらに驚愕させた。

同じ物が、また落ちてきたのだ。

狭い隙間内という厳しい条件の元、武人は檻の罠を回避していった。

落ちてくる檻をよじ登ったり、銃を出して檻の軌道を変えたり…試行錯誤の手段を取った。

（このまま広い通りに出るか…いや、被害や騒ぎが拡散される…！

屋上付近まで登れたら、あとは…！）

武人はこの時も回避行動にジャンプを使用した。

ジャンプが最大の落とし穴と彼は知ってただろうか。

マル口戦の結末を思い出せるなら、理解しやすいだろう。

武人も『敵』に挟まれた。

屋上に人…『敵』がいるのは彼の読みどおりだったが。

檻を直角に向きを変えて、両方の建物の屋上から投げつけられるまでは…予測できなかった。

（しまった！？）

武人は危険を感じたが遅い。彼は檻に閉じ込められた。

檻の縁には細かいギミックが施されており、捕獲対象を完全に逃さないようにしていた。

だが山のように積まれた檻の影響により、足場は不安定。

武人の入った檻は、転がるように落下した。

（ぐっ…！）

ショックを和らげる為に、彼は頭に両手を置いた。

武人の入った檻は、大通りの向かいの建物にぶつかり、動きを止めた。

「ぐっ！？」

弾かれるように彼は衝撃を受けた。

おでこの上から、血が流れていた。

檻の中で揺さぶられた彼は、思うように起き上がれなかった。

悪い事は重なりやすいもので。

真っ暗な檻の中は、ガスを充満しやすかった。

薄い霧のような煙はガスだと武人は判断した。

両手の位置は、鼻と口に移った。

（頃合いやな…。）

彼はなんとかガスを吸わないように抵抗したが、小さい穴しかない檻の中では限界が来る。

まぶたがゆっくり、閉じられていく。

（土星人と金星人の助けもある…進出は可能や。頼むで…皆…。）

★★★

武人…『ラルク』を捕獲した檻の動きが止まり、屋上の『敵』達は全員飛び降りた。

黒髪の少年達が屋上から飛び降りる姿を見て絶句する一般人は多いだろう。

しかしこの日の住人は既に人払いされており、目撃者はいなかった。

少年達…見た目はそうだが、中身は地球人とは別物だった。

彼らの『ラルク』に発砲した銃は、ホルダーに収めていない。

そもそもホルダーみたいな入れ物は必要ない。

銃を自らの手で出したり消したりできるからだ。

この行為は、当然地球人にはできない。

彼らが地球人でない証拠は他にも、5階建の建物から飛び降りても難なく着地できる事もそうである。

ならば、彼らは何者か。数人が『ラルク』の入った檻を持ち上げた。

…二足歩行のロボに変身して。

他には空の檻を両手で持った者も数人。こちらもロボに変身した。

全員がロボに変身し、上空へすぐに飛んでいった。

飛行時間はわずか数秒。雲隠れする宇宙船まで移動した。

『ラルクを捕獲しました。』

『ご苦労。最初から犯罪者共に頼らず、奪い取ったらよかったなあ。』

『はい。』

『そのまま俺の所まで連れてこい。後は俺がなんとかする。』

『かしこまりました。』

オペレーターが誰かと通信でやり取りしていた灰色の宇宙船。

後部にロボ達が次々入っていった。

☆☆☆

「何でもアイツについて行かなかった！」

「申し訳ございません！」

ジェームズさんの怒鳴り声と、志願兵の皆さんの謝罪。

統制制御室内の空気はかなりビリビリしていた。

武人兄ちゃんが行方不明になったから。

パーティー終了後、臨時支部に戻る為の点呼を取ったんだ。

武人兄ちゃんの姿がないと気付いたのはこの時だった。

西条司令はすぐに搜索指示を出した。

今回のパーティーでも不参加の人達がいたので、彼らに搜索の任務に就かせていた。

珍しく参加したアレックスさんも、電話でA！射出の命令を下した。

私達参加者は、急いでバスに乗って戻った。

臨時支部に戻った後も騒がしい状態は続いていた。

判明している情報は2つ。

武人兄ちゃんは会場に出て、そのまま歩いていった。

半径数メートルほどの街の地面に、何かやらかした跡が数カ所見つかった。

銃を発砲した痕跡と、大きな土管の淵でつけたような丸い跡。

事件があったようだ。

その事件に武人兄ちゃんが絡んでいた可能性は高い。

いや、絡んでいるのは確かだろうと、この場にいる全員が睨んでいた。

「お前達だけではない！王子の側近兵やピウスの残存兵も会場内にいただろう！何をしていた！」

「そ、それは…」

指摘を受けた彼らは何も言い返す事ができなかった。

リュート王子とサレンさんも含め、皆顔を上げていなかった。

ジェームズさんの怒りを鎮めたのは、隣にいた西条司令だった。

彼はジェームズさんの肩に手を置いて言った。

「もうよせ。責任の押し付けは無駄だ。私の油断が招いたのだ。

〔宇宙犯罪者〕の気配がないと思い込んでいた…。」

ジェームズさんはぐっ、と堪えた。

彼もまだ言いたい事はあったようだけど、上の人に止められたら黙るしかない。

「クーランの所以以外にも、〔宇宙犯罪者〕は存在しているんだ。

黒川には護衛を拒まれたからな。

せめてアイツにバレないように護衛をつけるべきだった…。すまない。」

西条司令は謝罪の礼をした。

土下座まではいかなかったけど、頭は低く下げられた。

ここで土星圏の人達の手があがった。

よろしいでしょうか、と言添えて。

「HRは基本、単独で行動する者は少ないです。あるとすれば、一部の尖った能力の持ち主のみ。金星の人も集団で襲撃したでしょう。」

「《同調性》ですね…。」

「今までそれで、生き延びてこられましたので。ピウス様のような首領レベルでしたら判断力はつきますが…。」

王子がHRの特性を1つの単語にまとめ、残存兵達は否定しなかった。

「考えられるのは、クーランの手が延びていない〔犯罪者〕が、原始地球を襲わない事です。」

「襲う理由が…ないからですか？」

「そうでしょう、ねえ。あるとすれば資源問題か環境か。」

「各星々に共通する問題事項ですね。」

うーんと考えこんでいた大人達。

そこに、勇希兄ちゃんが割り込んだ。

「兄ちゃんと言ってたクーラン、って奴じゃねえの？」

その瞬間、室内がざわついた。確信を得たと思ったのか、西条司令が声を大きくして言った。

「そうかもしれん！黒川と繋がりのある奴なら…。」

「科学者さんですよ…？あんな隠蔽工作ができるとは…。」

統制制御室に通信が入った。

〔ラストコア〕内の一研究室の人が映っていた。

『司令、報告があります！』

西条司令とジェームズさんは回線相手が映るモニターへ向かった。

「何か発見したか？」

『はい。採取した僅かな黒い破片を観察の結果、黒川さんの汗が検出されました。あと、この破片は軽金属でしょうか…地球上の金属とは思えない構造をしてまして…。』

『司令！』

別のモニターに誰か映った。こちらも一研究室だけど、違いは顕微鏡の代わりにPCが複数設置されていた。

「今は取り込み中だが…。」

『衛星データですね？お先にどうぞ。』

最初の発信者が後発の人に譲った。

『ありがとうございます。データの映像を分析した結果、1日程上空に宇宙船らしき物が止まっていました。』

後発の発信者はすぐに映像の一部を出した。

かなりぼやけているが、黒色の宇宙船がロボを発進させているシーンが流れていた。

「この船は…もしや！」

声をあげたのは、ビウスの残存兵だった。

兵達の間ですぐに話題が広まった。

西条司令とジェームズさんが残存兵に寄りに行った。

「何か、知っている情報があれば教えてほしい。」

「もちろんです。あれは火星圏タレスの宇宙船、[フィルプスリトル12] かと思われます。」

「私はビウス様と共に、クーランの元へ伺った経験があります。」

私達兄妹と王子達、西条司令とジェームズさんは驚いた。

訪れた過去があるなら勿論…。

「クーランの本拠地も特定できるのか？」

「タレスの位置までは把握できます。研究所は…目星はついていますが…。」

「そこは特定できた方が…。」

「ビウス様の付き添い時は、自動案内されまして…味方、身内しか受け入れない厳重体制を取っております。」

西条司令はうーん、と悩んでいた。

隣にいたジェームズさんも、困ったなと漏らした。

再び、土星圏の人が意見を述べた。

「タレスに行きましょう。元々計画を立てていたのです。」

調整を早めましょう。研究所の位置は搜索すれば良いだけです。」

「我々の宇宙船があれば、多視点で星全体を隈なく調査できるでしょう。」

土星圏の人達以外からも声があがった。2人の兄達からだ。

「早くアイツらから武人兄ちゃんを取り戻そうぜ！」

「俺達は準備できてます。今から急いで搭乗しても構いません。」

次に王子達。

「すぐに側近兵に連絡します。司令は命令を。」

サレンさんは既に走り出していた。

「私達は来て間もないですが、黒川さんは現在の地球に不可欠な存在です！私達にも是非！」

志願兵の代表者が言った。

「護衛できなかったお詫びとしても、我々はお供いたします。

ビウス様もあなた方に託しております。」

残存兵の1人が言った。

ジェームズさんは落ち着け、と沈静化を促した。

彼の1歩下がった位置で、西条司令は黙って聞いていた。

ようやく、司令の口が開いた。

「…わかった。予定をかなり早めるが、宇宙進出を今すぐ実行しよう。」

「少し待て！アレックスらに調整完了か…。」

『いつでも乗れるぞ。ロケットに。だからパーティーに参加したんだ。』

3つ目の通信回線が開かれた。

いや、違うかも。その理由は司令とジェームズさんの話でわかるから。

「アレックス！回線は…」

『一応ミュート設定で聞き流していたよ。司令、一か八かの賭けになるが、今すぐ叩きに行こう。』

ズルズル引っ張ると、黒川の身に変化が起こる可能性がある。』

「無論、そのつもりだ。

皆！これから長い修羅場を迎える事になる！

【ラストコア】にとって久々の宇宙進出だ。

今回は土星圏と金星圏の協力で、以前と比べると成功率は格段に高いだろう。

しかし、それを踏まえても、我々に生命の保障はないと思え！

これから、もっと過酷な戦場を駆け巡る！」

西条司令が皆に伝わるよう、声を張って言った。

「各自、すぐ持ち場につけ！進出のタイミングは任せる！

目標、火星圏タレス！生き延びれば、再開しよう！」

「はい！」

大きな返事の後、室内の皆が持ち場につく為に走り出した。

私も兄達と、【パスティユ】の積まれたロケットに向かった。

★★★

【ラストコア】には宇宙用の発射台が数基設置されていた。

台にロケットのブースター部分が接続している状態である。

大気圏突破の為、ロケットを地面と垂直に飛ばすのだ。

ロケット内に隠された宇宙船は、縦の向きに変更されていた。

宇宙船に合わせて、私達搭乗員も向きを揃えた。

発射の最中は危ないので、専用のシートに座り、頑丈なベルトで固定する。

超高速エレベーターが止まるまでは、この体勢で我慢しないとイケない。

私の両脇には、2人の兄達がシートに座っていた。

「そういや未衣子。お前どうしたんだ？

統制制御室にいた時、全然喋らなかっただろ？」

まずはいつも通り黙らない勇希兄ちゃんが言った。

「そうだな…武人さんの事、いつも気にかけている未衣子が…。

あまり浮かない顔はしていたみたいだけど…。」

今度は和希兄ちゃんが言った。

室内で私が落ち込んでいると思っていたみたいで。

それは半分、合っているのだけでも。

「…そうだね…。なんでかな？わかりきっているのに、いきなり恐怖が込み上げてくるの。」

「ちょっと待てよ！今更戦闘に怖気付いてんのかよ！」

「違うよ！その恐怖じゃないよ！」

そりゃあ戦闘も怖いけど、今まで潜り抜けてきたから、もう慣れた。

「何が未衣子に恐怖心を煽ったんだ？」

和希兄ちゃんが聞いてきた。

私は正直に伝えたかった。

でもここではっきり伝えたと、2人共戦闘に躊躇してしまいそうで…。

だから、今は誤魔化した。

「武人兄ちゃんが心配なだけだから、気にしないで。」

「兄ちゃんはこれから取り戻すんだろ？」

「その為の任務だ。踏ん張ろう。」

2人の兄は武人兄ちゃんの詳細について、深く触れなかった。

バレずによかった、という安堵感と。

黙っていてごめんという罪悪感。

私の中には2つの感情が混ざり合った。

これ以降、私達は静かにシートに座っていた。

もうすぐ、ロケットの発射時間だ。まずはこの閥門を突破しないと。

ロケットを宇宙に飛ばさなければ話にならないから。

クーランのいる火星圏タレスまで届かなくなるから。

『まもなく発射のカウントに入る！』

座る前にゴツイ宇宙服を着ていた私達は、ヘルメットの通信機能から放送を聴いていた。

【ラストコア】には宇宙進出でも基地に駐在する人もいた。

ロケットを安全に飛ばす為に、外側視点に立つ人が必要だから。

カウントは駐在スタッフさんの声で刻々と迫ってきた。

『10秒前！』

あと少しで、私達はしばらく地球の地面に足をつけなくなる。

寂しいけど、武人兄ちゃんを取り戻す事を考えたら払拭できた。

『5秒前！…3、2、1…！』

発射！

駐在スタッフさんの一番高い声が耳に伝わった。

下からゴゴゴ…と音が聞こえる。

接続が切れて、ブースターに火がついて…ロケットが上へ登っていくだろう。

振動が、私達の身体に伝わっていく。

真逆のジェットコースター、いやそれ以上の迫力を感じ取っていた。

ロケット内部は揺れていた。視界も安定していない。

私は静かにしていたが、勇希兄ちゃんはうう～！と唸っていた。

一番怖がってるの、勇希兄ちゃんじゃないの？

この振動が収まる時はやって来た。

放送は駐在スタッフさんからロケットの操縦士さんに代わっていた。

声の違いですぐわかった。

ロケットの分離が開始され、私達の乗る宇宙船が表に出た。

ロケットは下側のブースター部分を外すと、残りの部分を真っ二つに綺麗に分かれたんだ。

ロケットの部分はそのまま、地球へ落下する仕組みである。

地球の被害については、事前に各国へ連絡済みだから心配ないとジェームズさんが言った。

宇宙船は横向きへチェンジ。シートと同時に私達の足場も変わった。

壁だった物が、床として利用する事になった。

シートから降りていいとの指示が出た。

ベルトを外して、シートから離れた。

同じ乗組員さんが案内してくれた場所があった。

宇宙船の外が拝める通路へと向かった。通路の壁には窓があった。

当たり前だけど、私達は衝撃を受けていた。

地球の外観を眺めるのは、本か科学館でしか出来ないだろうと勝手に思っていた。宇宙飛行士じゃない普通の人には無理だろうと。

それが実現できているんだ。

今、私達兄妹は宇宙から地球を眺めている。

宇宙船の窓から眺める巨大な惑星は、青く輝く宝石のようだった。

「綺麗…。」

私はこの一言しか出なかった。

それほど私達の住んでいる地球は美しかったんだ。

「貴重な光景だから今のうちに目に焼き付けるんだ。」

乗組員さんの言う通りだ。肉眼でじっくり見れる機会は、二度とないかも。

武人兄ちゃんを取り戻したい気持ちが今、強く思うようになった。

私の不安。

実は彼が今回の戦闘で、消えてしまうかもしれない事。

消失したら、彼は地球に帰れなくなるだろうから。

消えそうになる前に、間に合ってほしい。

私は両手を繋ぎあわせて、祈った。

12・潜入の日



火星圏タレス・[レッド研究所]。

この施設の7割近くを、実験室のように扱われていた。

その内の一部である、病院の手術室とそっくりな、小さな部屋があった。

キャスト付きの上側から灯す照明と、折り畳み式のベッド。

ベッドの上に横たわるのは、捕らえられた黒川武人本人だった。

横たわっているだけなら、楽になれただろうに。

武人の手足とお腹周りには、鉄製のリングがつけられていた。

それは彼をベッドに固定させる道具だった。

「…悪趣味やな。こんな事すんのは…。」

武人が目を覚ましてからの、最初の発言であった。

「悪趣味？お前は慣れてるだろう？」

武人の呟きは、誰かに聞かれたようだ。

ゆっくりと歩み寄ってくる、白衣姿の中年男に。

「やっぱりあの子らは、お前の差し金だったんやな…クーラン。」

「おいおい…久しぶりの親子の再会なんだぜ？喜んだらどうだ？」

「あんな招待のされ方で、喜ぶバカがどこにおるん？」

「ま、そうだわ。」

武人が固定されているベッドの側までやってきたクーランは、少し苦しめの表情をした。

「お前さん、そのしゃべり方…。」

「もう10年もあっちおったら、今更直しづらいんやわ。」

「あの時は物静かで可愛げあったのによお？」

「よう言うわ。黙って従順になる子供が好物なだけやろ？」

クーランは肯定すると、スッと白衣のポケットからスイッチを取り出した。

「何や、それ。」

「賢いお前なら理解できるだろ？」

家出したお前を躰けたいって言ったら、尚更。」

「俺はもうアラサーのおじさん突入してるんやで？体力も落ちとるし。若い子らの育成を進めたらええんとちゃうの？」

「その先導に立つもんが必要だろう？」

そう言ったクーランは妖しい笑みを浮かべていた。

（ろくな事考えず、何か企んでいるな…。）

武人はクーランの動きを警戒した。

しかし、手足とお腹周りの動作が封じられた今、何も行動を起こせなかった。

クーランの持つスイッチが、押されていても。

☆☆☆

地球から火星圏タレスまでは、2週間はかかると連絡があった。

宇宙の軌道を計算した結果だそうで。

他の星の宇宙船ならもう少し早く着くと聞いたけど、地球の技術ではこれで限界らしい。

何も知らない頃よりも格段に早くなったとアレックスさんは言ったが。

戦闘になると体力も激しく消耗する恐れがあるから、今のうちに体調を整えておけと言われた。

私達兄妹が乗っている宇宙船で忙しいのは、アレックスさん等の技術者の人達だった。

【パスティーユ】と他A I の最終調整が必要で。

本来は進出前に過半数は完了させる予定だったらしいけど。

武人兄ちゃんの件もあり、計画を早める事になったからだ。

私達は戦闘になったら主力として扱われる。

一度の出撃でケガをするかもしれないし、帰れないかもしれない。

今までの地上戦も同じ事は言えた。

でも今回と違うのは、生存確率だった。

空気のある地球と、空気の薄い宇宙。

足のつける地球と、足の届かない宇宙。

今まで宇宙の知識が素人レベルだった私でも、宇宙の方が危ないと判断がつく。

最後のひととき…と思いたくないけど、私達は休息を取った。

宇宙は常に藍色の空間だから、時計を逐一確認しない限り、時間の経過がわからない。

デジタルな時計も、正確な時刻を刻んでいるかわからなかった。

でも通路の窓がわりの映像から眺めると、巨大な地球がコインより小さくなっているように感じて…。

逆にオレンジ色の星の一部が映るようになった。

通路の個室側の壁に、折り畳み式のイスが設置されていた。

上のボタン1つで壁と一体化されていたイスが前に出て、上開きで展開された。

1人用のイス3脚を用意し、私達兄妹は座った。

火星圏にはもうすぐ着くけど、のんびり宇宙の神秘的な景色を眺めていた。

もう二度と見れないかもしれないし。

期間限定の言葉に皆が弱いのも、それが気持ちの底にあるからだろう。

他には、王子達土星圏の人々が行ったように、初訪問時には電波のやり取りをしなくてはいけない。

敵はクーランとその勢力であって、火星圏の人達全員ではないからだ。

無関係の人達を流石に戦禍に巻き込むわけにはいかない。

被害拡大を抑える為にも、多少手間のかかる作業を行うのだ。

王子達の訪問時には、私は電波受信の現場に立ち会ったけど。

今回は戦闘の備えとして、電波のやり取りはアレックスさん等ブリッジにいる乗組員に限定された。

緊急時以外は体調を整えろとしつこく言われてるから。

「なんか、暇だなあ…。」

私の左に座る勇希兄ちゃんが言った。

「パイロットの仕事に専念させてくれるから、いいんだけどね。」

右に座る和希兄ちゃんが言った。

勇希兄ちゃんはあくびをしろような雰囲気のもの言いで、和希兄ちゃんはまあまあと弟を宥めるような物言いだった。

「見た事ない星がたくさんあるし、退屈しないよ？」

私は軽く身体を捻る運動をする勇希兄ちゃんに言った。

「だって俺さあ、プラネタリウムなんか鑑賞して喜ぶ柄じゃねえし…。」

「勇希は身体を動かす方が好きだからな。」

「でも兄ちゃんの勉強には最適じゃないの？中間テスト、点取れた？」

私はちょっかいをかける意味合いで勇希兄ちゃんに言った。

予想通り、兄ちゃんはムツとした表情になった。

「赤点は取ってねえよ！」

「でも平均点スレスレだよね？」

「大体、中学で宇宙の問題って頻繁に出ないだろ！」

「未衣子、あんまり勇希を揶揄うなよ。」

「わかってるわ。」

和希兄ちゃんに軽く注意された私は、これ以上勇希兄ちゃんにしつこく言うの

をやめた。

「今は少ないけど、今後宇宙旅行が活発化したら、義務教育の一環として加わるんだろうなあ。」

「ちょ、兄貴まで怖い事言うなよ！」

「ははは。でも、勉強はやった方がいいぞ？視野が広まるしな。」

「う…帰ったら、ちゃんとする…。」

勇希兄ちゃんは小さめの声でモゴモゴ言った。

発言をはっきり聞き取れなかった私は、イスから立ち上がり、窓がわりの映像を間近で拝んだ。

手で触れるとタッチパネル機能が作動し、景色の拡大や縮小ができた。これで私は退屈しなくて済むかな？

映像は英語表記だけど、星々の簡単な紹介をしてくれた。

火星圏なので、《MARS ○○》と表示されている星が複数あった。

火星にも衛星があったけど、1個か2個ぐらいしかなかった気がするから、こんなに衛星以外の星が存在していた事は驚いた。

その中で、等倍でも大きく見える星が1つ。

《MARS TELLESS》。

ローマ字読みのように読めば「テレス」って読めそうだけど、この星が火星圏タレスだと、武人兄ちゃんに教わった。

英語はローマ字読みと異なる読み方をする場合があるから、「タレス」と読んでもおかしくはなかった。

もうすぐ、武人兄ちゃんの産まれた星に…。

武人兄ちゃんは納得しているのかはわからないけど…。

彼はあそこで酷い事されたって言ってたし。

もしかしたら今、兄ちゃんは酷い事されているかもしれない。

クーランという男は武人兄ちゃんの口からしか真相は聞いてないけど、悪い奴だろうな、という想像はつく。

私の胸が痛む。

私の不安に、兄達はすぐに気づいてくれた。

「どうした未衣子、身体を震わして。」

まずは和希兄ちゃんから。

「やっぱり、怖いんじゃないの？」

和希兄ちゃんの反対側から、勇希兄ちゃんもひょっこりと近づいていた。

私はすぐに否定した。

「怖くないよ！とうとう来たなあって思っただけ。」

口ではこう言ったけど、多分無意識に怯えていたかも。

武人兄ちゃんを思い出して。

だから話を逸らすように、映像のタッチパネル機能で遊んだ。

兄達はこれ以上気遣う言葉を使ってこなかったけど、代わりに私の両肩にくっついてきた。2人とも男の子だから、体重で重く感じる。

でも心底は私が怯えているとわかってくれるから、多少の負荷に口出ししなかった。

「すげえ真っ黒だよなあ。」

「武人さんの髪の色を表現しているようだな。」

「所々の赤い点がチカチカして目が痛いぜ…。」

「照明用には使いたくない色だな…。」

兄達が星の外観の感想を色々言っていた。

ありふれた第一印象の感想が飛び交う中で、私はタレスの外観を隈なく観察していた。

すると、意外な物を発見したんだ。

地球の赤道ぐらゐの位置に、白い物が見られたんだ。

「何これ…？」

私が首を傾げるような物言いをする、兄達も私の反応が気に入り、同じ箇所を見ていた。

「すげえ眩しく光ってて、逆に酔いそうだぜ…。」

「そこまでは大袈裟だけどね。未衣子、拡大できる？」

「いいよ。」

私は映像のタッチパネル機能を数回駆使して、該当部分の拡大を行った。かなりのズームインだというのに、輪郭の境界線がくっきりとしていた。

白の正体は…花だった。

ハイビスカスのように花びらが大きな花ではなく、星の形を彷彿とさせる小さな花の群れだった。

星から離れた軌道上の宇宙船から眺めているので、実際は私達の身体より大きな花かもしれない。

「綺麗…。」

声に出してしまうほど、私は白い花の群れに夢中になってしまった。

「『ペンタス』…という花かな？」

「は？」

「花の名前だけど…火星だし、別の花かもしれない。」

和希兄ちゃんが名前を推測していた。

そういえば、和希兄ちゃんはスケッチの為に植物園に足を運んだんだっけ。

兄ちゃんは同じ部活の人に絵を見せたかったみたいだけど、どうなったのかなあ。

和希兄ちゃんは真面目だし、数枚は仕上げて絵を見せているんだろうなあ、と勝手に想像していた。

しばらく花の群れの純白な美しさに、私達は見惚れていた。

じっくり眺めていたから、おそらく異変にも早く気づけたかもしれない。

群れの内の1輪の花が、中心の上でくっつくように閉じられた。

布を絞るように、閉じられた花びらは時計回りにクルクルとねじられた。

ねじられた花びらは再び開花したのだが。

花びらにシワはなかったけど、輪郭周りにギザギザ模様が見えて。

花特有の雄しべと雌しべの部分が無くなり、代わりに尖った透明の宝石が露わになった。

「え？」

私達は動揺した。

勇希兄ちゃんに至っては眩し！とか叫んで腕で両目を覆った。

兄ちゃんの取った行動は正しかった。

尖った先から白い光が現れて…。

力を溜め込むかのように光は大きくなり…。

膨張して破裂したかの如く、白い光の球から同色の光線が発射された。

拡大映像のモニターだけ、点滅が激しかった。

私達兄妹はすぐに下に伏せた。

これ以上、あの白い花の群れを直視すると失明しただろう。

白い花として拝んでいた時、花は斜め前に向いていた。

白い光線は…一体何処に？

答えはあっという間に導かれていた。

だって宇宙船全域に、緊急事態の警報がやかましく鳴らしていたから。警報は何度も繰り返すから、戦況の概略も把握できた。

タレスに比較的距離の近い宇宙船が、ビームの攻撃を受けたと。

さらにタレスに咲かれた白い花達が次々と尖った宝石を露わにさせていた。も

ちろん、宝石からのビームは追撃に加担している。

白い花が群れを成すのは、重要な要素だったんだ。

ビームの猛攻撃に、いつかはダメージをくらう。

私達が乗る宇宙船も、地震のように揺れた。

「うわぁ！」

私達は無意識に声を出していた。

窓がわりのモニターは宇宙の光景ではなく、この宇宙船の見取図が開かれていた。

右側のブースター付近に軽い被害が出たと、見取図で読み取れた。

『子供達！早くジェット機に乗り！攻撃はビームだけじゃないぞ！』

この宇宙船の艦長として率いるアレックスさんの放送だ。

ペンダントもしくは腕時計の転送装置にも放送が聞こえてくる。

「大丈夫か？」

和希兄ちゃんが言った。

兄ちゃんにケガはなく、立ち上がれそうな感じだった。

私と勇希兄ちゃんが負傷したのかって話には、なっていない。

そもそも3人で一緒にいて、ここで宇宙の外を眺めていた。

宇宙に出てからのショックは、今起きている揺れしかない。

「大丈夫だよ。」

「俺も。」

「なんとか立てるか？」

「手すりみたいな取っ手があるから、なんとか…。」

また宇宙船が揺れた。

備え付けのイスの下に手すり型の取っ手があり、そこを掴む事で私達は立ち姿を維持できた。

イスは元に戻っていた。

「飛ぶぞ！このままだとクーランに挑む前に壊滅する！」

「その方が早いわ！」

「俺も今やろうとしてたぜ兄貴！」

緊急時は息ピッタリになりやすい。

方向性が同じだから尚更である。

既にペンダント、又は腕時計の《転送装置》は胸元に、腕に定着していた。

パイロットスーツは既に着用しているから、《転送装置》で乗り込めば、発進の準備は整う。

これで武人兄ちゃんを取り戻したら、[ラストコア]とはおさらばだろう。

平穏な普通の生活に戻るだろう。

でもこの半年間、武人兄ちゃんと共闘できて良かった。

これで苦手な『普通』に耐えていける。

[ラストコア]に行けなくても、離れていても、兄ちゃんは側にいると信じられるから。

《転送装置》は作動した。

私達は光に包まれ、通路から姿を消した。

★★★

格納庫のジェット機はまだ飛んでいなかった。

外は宇宙だから、地球の中とは勝手が違うと判断してるからだろう。

「すみません！遅れました！」

水色のジェット機のコックピットに座る和希兄ちゃんが謝った。

相手はもちろん、モニター越しのアレックスさんだった。

『本来なら叱るところだが…お前達は宇宙戦は初めてだ。

今まで無事でこられただけでもありがたい。』

通路の時の放送のように、アレックスさんは怒鳴ってこなかった。

モニター画面に割り込みが入った。

格納庫にいる整備士さん達だ。

地球の輸送機で運ばれた時と違い、人が多かった。

地球の時は「ラストコア」との距離が近かった為に、スタッフさんの配置は少なめに設定されていた。

アレックスさんのA I ロボも優秀なものもあったと思う。

武人兄ちゃんから聞いた話だと、宇宙を経験した数はごく僅からしくて。

だから私達兄妹や志願兵の皆さん以外にも、初めて上がる人もいた。

『君達、宇宙には驚くほど足場はない。下手すれば遭難しやすいだろう！

絶対に浮上用のエネルギーの確保と、地図機能の徹底的な活用を怠らないでね！』

警告の意味合いを込めているのか、整備士さんの声は張っていた。

その他、非常脱出の方法などの最終チェックが行われた。

かなり早足だった。

『じゃあ、扉開けるよ！

酸素の補給もこまめにやってね！』

整備士さんが言うと、ジェット機前の大きな扉が開かれた。

通路の窓がわりの映像よりも遥かに近くで触れる、宇宙の光景。

真夜中のように静かな景色は、さっきまで存在していたのに。

ビームの光と爆発が、宇宙を騒がしくしていた。

『うまくかわして飛んでね！バリアも忘れずに！予備エネルギーも多く積んだから！』

整備士さんはしつこく言うけど、それは彼なりの心配だから、この対応はありがたかった。

『発進に移るよ！…10秒前…5秒前、3、2、1…。』

発進！

レバーを既に握ってるから、私達は指示でうまく飛べた。

☆☆☆

「【パスティーユ】、飛びました。」

「よし。主力はほとんど出たな。」

アレックスと白井3兄妹が乗る宇宙船とは別の船には、宗太郎と他スタッフの
みが乗る船があった。

名前は【天海号】。

【ラストコア】本部の地上部が遊園地として稼働する予定だった名残で、名前
の一部が使われた。

メイン制御室であるブリッジで、宗太郎はオペレーターから状況を受け取って
いた。

彼は今、総指揮官としての立場に立っている。

戦況を把握し、味方の部隊に命令を下さないといけない。

敵のクーランの勢力にも違う動きが。

ビームの猛威に隠れて、黒っぽいロボが多数出撃した。

【ブラッドガンナー】に似たロボの集団だが、サイズの見ると…小ぶりなロ
ボ達だった。

火星圏タレスの出港口らしき入り口から出てきたロボ達であり、拡大映像でし
か確認できなかったが。

「クーランという奴が関わっているとすれば、HRか…。」

「側近兵、残存兵は先に察知したようです。」

オペレーターの報告どおり、ブリッジの前面モニターにはリユートの側近兵のロボとピウス残存兵のHRが駆けつける姿が確認された。

【ラストコア】側では貴重な、宇宙戦に慣れている連中。

こちらは個別に指揮を執るリユートに任せてもよかった。

問題は、地球人側の戦力であった。

ジェームズが指揮官で搭乗した宇宙船から、ジェット機が複数機出撃した。

色は紺、深緑、茶色の3色のみ。数は均等に振り分けられていた。

実はこのジェット機、合体機能を搭載している。

【パステージュ】同様、3機のジェット機が合体し、1体のロボになる仕組みを採用していた。名前は特になかった。

開発はアレックス達が担当したが、実戦に運用ができなかった。

パイロット不足が主な要因だったからだ。

呼び名としては、【軍用機】で仮づけられた。

紺・深緑・茶色の3色で1つのグループとなり、合体を行うのだが。

『きゃっ！』

『うわっ！』

うまくはいかなかった。

パイロットである志願兵達の経験不足と、敵の猛攻撃が原因であった。

【ラストコア】に配属されるまで、志願兵達は訓練を受けていた。

【軍用機】を秘密裏で、閑散とした基地に搬送された履歴も残されている。

ただ、訓練期間が短すぎた。

2、3年前からジェームズが独自で募ったのだが、学生時代の友人の手伝いもあっても、集まったのは約1年前。

それでも十数人程が限界だった。

正規軍にバレないように細工するのは困難で。

友人の小説にファンタジックな要素を書かせた理由は、検閲に引っかからないようにする為だった。

訓練開始は召集してまもなくだった。

ざっくり言うと白井3兄妹の経験した半年間と比べると、彼らは豊富なはずだが。

実際の戦闘経験は、今回が初めてだ。

正規軍の網目を潜り抜けるのも困難なのだ。

しかし、ここでネガティブな過去を振り返っても何も起きない。

限られた人数でも、この正念場を乗り越えなければならない。

ジェームズは宇宙船で志願兵達の動向を見守りながら、マイクを握って彼らを叱った。

「焦るな！ビーム兵器の届きにくい離れた地点へ行け！

合体してから仕返しすればいい！」

『ですが少佐！土星や金星の人達は…。』

「彼らはプロだ！しばらくは時間を稼いでくれる！先に合体に集中しろ！」

『わかりました！』

志願兵達はハキハキと返事した。

その後、志願兵達が乗るジェット機が距離を離すように後退する。

ビーム兵器の攻撃が届きにくい位置に来ていた。

『チーム1、コードS、始動！』

紺の機体に乗る女性の志願兵が号令を下す。

同意で深緑と茶色の機体の者達が繰り返した。

深緑、茶色の2機が横に並び、その上に紺のジェット機が乗った。

正面側から見ると、紺の機体を頂点にした三角形ができあがる。

『乗った』という表現だが、実際ジェット機同士は間隔を空けていた。

正面側と背面側に、三角形のラインが激しく点滅する。

3機のジェット機全てが光出した。

三角形のラインは残した状態。

3つの光は1つの大きな固まりと変化した。

やがて光の強度は弱くなっていくと、人型ロボが姿を見せた。

ロボの右手には先端に水晶のような球体がつけられたロッドがあった。

【パスティユ・フラワー】と同じ、広範囲の攻撃型のロボが登場した。

メインパイロットの女性含め、志願兵達はドキドキしていた。

うまく成功するか、不安で気持ちがいっぱいだったからだ。

成功の反動で、志願兵達は思わず喜びの声をあげた。

『やったわ！』

『よかった…。』

しかし、戦況的に喜ぶのはまだ早い。

他の味方は敵と交戦中で、疲弊してるだろう。

即座に味方の支援に努めなければならなかった。

「いいか、『コードS』は【パスティユ・フラワー】と特徴は同じだ！だが機体の耐久性は【フラワー】より劣る！

まずは後方からの支援に徹しろ、状況によりチェンジの指示を出す！」

『わかりました！』

ジェームズの指示に志願兵達は従った。

☆☆☆

宇宙へ旅立つのも初体験な私達兄妹にとって、宇宙戦も初めての経験だった。

だからビーム兵器と敵のHR達に翻弄されていた。

ジェット機に分離された状態では、攻撃の威力は弱い。

出撃したら、すぐに合体しなくてはならなかった。

その合体に、私達は苦戦した。

幸い、無事に【バステュー・フラワー】として飛べたのは、アレックスさんの指示のおかげだった。

西条司令が艦長として指揮する宇宙船〔天海号〕は、他の宇宙船よりもスケールが大きい。

なので、西条司令達は私達より遅く宇宙に上がった。

〔天海号〕を盾にして合体しろ、と言われた。

言われた通りに〔天海号〕の後ろでの合体は成功した。

前線に出て、まずはビーム兵器と敵のHRを蹴散らそう、と思った時。私達【フラワー】の両脇にもロボが3、4機程飛んでいた。

「…これは？」

『【軍用機】で、お前達と似た機体だ。ジェームズが連れてきた志願兵達が乗っている。』

アレックスさんは私の小声を聞いていたようだった。

「この人達と一緒に行動するの？」

『違う。司令の通達で、お前達は〔レッド研究所〕に潜入しろ。』

『え！？正面突破じゃねえのかよ！』

『一応伝えた筈なんだが…。駆け足気味で説明したから聞き逃してしまったか？』

『ううっ…。』

勇希兄ちゃんがバツの悪そうな表情をしていたが、それは放っておき。私はアレックスさんに聞いた。

「この人達も潜入するんですか？」

『彼らはまあ、囧に近いが…。

タレス周辺を守る敵のHRの撃墜をしてもらう。

耐久性が低めだからな…大物狙いだと機体が保たない可能性がある。』

『ではやはり…ビウスの残存兵のみの同行となりますか。』

『くっ…。敵の攻撃が激しくてだな…。まずは目の前の沈静化か？』

『それはご心配なく！』

アレックスさんが頭を抱えていたら、残存兵のHRの1体が駆けつけてきた。

残存兵は銀色の剣を下に向けて、【フラワー】の前に立った。

後から2体、【フラワー】の側に近づいた。

『地球の兵士達と交代して参りました。』

『あの魔法のような広範囲の攻撃の威力は凄すぎます。』

『…褒めても何も出ないぞ。』

『え？』

『なんでもない。事前に説明したように、残存兵は《裏口》の案内を頼む。【バステューユ】は遅れるなよ。』

「わかりました！」

私は了解の意を示した。兄達も同じ返事だった。

既に残存兵達は動き出していた。

私達がついていけるように、若干スピードは遅めだった。

同じスピードで、【フラワー】は残存兵達の後ろで進んでいた。

クーランが所長の【レッド研究所】には、複数のルートがあった。

残存兵達からの情報によると、合計3つのルートが存在している。

1つは正面突破の如く、出港口から入るルート。

これは敵に落とされる危険性があるので、論外とされた。

残りの2つが《裏口》ルートになる。

同行する残存兵の1人は、ビウスと共に《裏口》ルートの1つを利用した事がある。

本来ならば、残存兵の知っているルートを利用の方が早い。

だけど、そのルートを利用するには、セキュリティの問題を解決する必要がある。

HR、又は他のロボでもいいけど…実体の姿の認証に引っかかるらしくて。

この認証、ビウスのHR形態【シェーク・フローレ】以外は登録されていない。

今現在、側にいる残存兵達では、《裏口》ルートのゲートを通る事ができない。

消去法のように選択肢を絞っていくと、第3のルート、すなわちもう1つの《裏口》ルートしか残されていなかった。

今までのルートも残されたルートも、宇宙に上がる前と後で何回もしつこく聞かされた。

勇希兄ちゃんはたまに大事な事聞き逃すせっかち人間だから、内容をちょっと忘れてるだけで。

残されたルート。認証システムなどのセキュリティが存在していないらしく、誰でも侵入可能なルートがあった。

それは寂れた搬入口、と説明を受けた。

おそらく、廃止された物品の入出荷口だろう。

《宇宙進出》前、武人兄ちゃんの知るクーランの人物像も聞いていた。

そのおじさんは体を動かすのが苦手で、いつも部屋に引きこもり気味だったと。

だから研究所内でも、お手入れの施しが無いボロボロのフロアは昔からあったと。

その内の1つが、今回の通る予定の、寂れた搬入口なのだ。

ところがこの搬入口にも問題点があった。

武人兄ちゃん救出の道のりが、搬入口に侵入以降は不明な事。

迷路のような状態になり、下手をすればトラップに引っかかる恐れがある事。

実は私達兄妹はもちろんだけど、土星の人達も、ビウスの残存兵達も搬入口の出入りをした経験がない。

つまり、搬入口をルートとして採択したのは、一種の掛けを選ぶ羽目になるのだ。

一か八か。

搬入口より先の救出活動は、運任せしかない。

残存兵達は潜入捜査に長けた人がいて、ある程度は信頼できそうだけど。

胸の奥が痛む。

生存できるかの不安と、兄ちゃんの心配でぐちゃぐちゃになった。

☆☆☆

「ぐっ、ぐわああああ！」

こうして悲鳴をあげたのは、マル口戦以来かと武人は思い出していた。

マル口の攻撃同様に、彼が受ける電撃ショックは強力だった。

手足やお腹まわりの拘束具から、診療ベッドの縁から…視認できるレベルで電気が流れている。

この電流を操るのは、クーランだ。

片手で握れるスイッチを持ち、上部のボタンを親指1つで押す。

これだけでベッドまわりの電流が走るのだ。

「久しいだろう？ガキの頃の躰を、大人になってから味わえるなんて、お前さんは幸せだぞ？」

クーランは皮肉めいた言い方をした。

普通に考えて、電気を浴びて喜ぶ生物はいない。

電流を大量に浴びると、命の危険性が高まるからだ。

しばらくして、クーランの親指はボタンから離れた。

どうやらボタンの長押しで電流が流れる仕組みであって。

押されてない現在、電流は止まっていた。

武人の身体のあちこちから、白い煙が出てきている。

露出された肌にも火傷の痕が残る。武人の息遣いも小刻みに荒い。

むしろ全身に電気が流れたというのに、生き延びているのが不思議なレベルであった。

元々武人は人間のような生物ではなく、HRなのだが。

「まあ、お前がこのレベルの躰じゃあ、満足できんだろうがな。

これでお前が従うなんて、俺は微塵も思ってねえよ。」

クーランは握っていたスイッチをポケットにしまった。

後ろを向いて、拘束されている武人の元を離れた。

（くそッ。こんな拘束具程度やったら、変身すればあっという間に外れるし、なんなら奴もそれくらいの常識は知っとる…。

やっぱり部屋の隅にある、あの装置が原因なんや…。）

武人は自分の足元へ視線を落とした。

正確には、彼が危惧している装置なのだが。

（あれはHRの変身を抑止する装置なんや。今ここで拘束解こうとすると、装置から電波が発生して、余計に身体を痛めつけてしまう！）

何か脱出できる他の方法は…と武人はずっと模索していた。

ところが、ほぼ全身を拘束されているような状態では、動く事が不可能だった。

その為、武人は脱出を図るのに、今はタイミングを待つしかなかった。

それでも、できる事はやった。キョロキョロと部屋全体を目で見ている。

今の部屋の造りで、脱出を成功するヒントがあるかもしれないと判断して。

（身体が解かれてたら、脱出できん事はないな。天井に通気口があるし。ドアから出るという手も使えるな。

全くの密室空間とちゃうな。）

「ほう…。やっぱまだ元気が残ってたんだなあ。」

「！」

武人の身体がピクッと動いた。

拘束具に当たっても、電流が流れていない場合は痛くなかった。

クーランが武人の所へ戻ってきた。

病院でよく見かける、点滴の器具を運びながら。

「…何や、それ。」

武人はぶっきらぼうに聞いた。

「僕のグレードアップ、ってどこだろうなあ？」

「グレードアップちゃうやろ。それで俺を、眠らすつもりか？」

するとクーランは自慢げに笑った。

「眠るのは、後だ。

下のタンクの液体が流れるが、あるもんが混入されてんだ。」

「あるもん？」

武人は点滴の正体が気になった。

彼の頭の中で、『知らない方がいいぞ』という警鐘が鳴っていても。

『知らない方がいい』ものは、クーランの口から吐かれた言葉に存在していた。

「微生物だよ。俺の命令に背くと、液体の中に潜む微生物がお前の身体を蝕んでいく。

…どこまで耐えられるか、楽しみだなあ？」

ヒ、ヒ、ヒ、とクーランは点滴用の小さな注射器を指で摘んでいた。

「どこまで行っても、お前だけはど畜生やなあ…！」

武人は口先だけでも、平気なフリをしていた。

脱出経路を探っていた武人だが、彼の身体はそこそこの限界まできたしている。

脱出は成功したとしても、その後生き続けられるのか…彼もわからなかった。

運命が決まっていたかもしれないと、彼は危険な治療を施そうとする《親》を睨みつけた。

全くの効果はなく、治療は開始された…。

☆☆☆

恐ろしい程に、目的の搬入口までの道のりで、敵の襲撃はなかった。

敵のHRは、初めに確認した白い花の群れ周辺でしか、出現しなかった。

HRでも普通のロボでもいいけど…最低限の人員は監視係として必要だけだなあ。

私と同じ事を、勇希兄ちゃんが漏らしていた。

『勇希が侵入対策について指摘するなんて、珍しいな。』

『え！当たり前的事だろ！』

『初歩中の初歩ですね。もしくはクーラン殿に余程の監視技術をお持ちであられるか…。』

兄達の会話は残存兵達にも丸聞こえだった。

別にうるさいと、咎められたりはなかったけど。

今は作戦遂行中だし…。

注意は他の残存兵の人がしてくれた。

『これからはなるべく静粛に遂行しましょう。作戦に関する内容は構いませんが、音量は下げた方がよろしいかと。』

この注意に対して、全員が同意した。

同意しただけで、全く話合いがない訳ではなかった。

話合い云々より、解決を急ぎたい問題があった。

搬入口周辺はかなり寂れていた。

火星圏タレスは地球のように、大気圏の概念はなかった。

星の外観の黒色の正体は、多重構造の壁だった。

テレビなどに使用されている液晶みたいな物質で…星の内外での景色が変わる。

宇宙からだと黒く丸い星が見えて、星の中では空模様を確認できる。

搬入口に近道の出港口から入って…搬入口についたものの…。

『何だコレ！』

「瓦礫の山が…できてるよ？」

私と勇希兄ちゃんは思わず声をあげた。

瓦礫…よく見ると機械のガラクタばかり、山ができるくらいに積まれていた。

『えっと…搬入口ですよ？』

和希兄ちゃんも困惑していた。

『我々も、実際に訪れるのは初めてですので…。』

「でも、山の後ろに建物が見えるよ！」

私は兄達に建物の証拠の映像を転送した。

『塞がれている感はあるな…。』

『遠方に多数の建物が立ち並んでいますね…もしや？』

『あの白い建物群は、研究所でしょう。ピウス様とご覧になってます。』

タレス…研究所…。

「ここに武人兄ちゃんが捕えられているって、目星をつけてもいいんですね？」

『我々は火星圏を訪問する機会はありません。[レッド研究所]には出向いた経験があるだけで…』

『周辺にも街らしき場所がありますが…黒か焦茶色の建物ばかりですね…。』

『つーか、なんか英語でレッド？と書いてるぜ？』

「あ。」『…そうか！』

勇希兄ちゃんは地図を見て、ローマ字読みのように英文字を読んだ。

その読み方に私と和希兄ちゃんは反応し、なるほどと感心した。

地図に名前があるなら、答えは簡単に判明できそう。

勇希兄ちゃんにしては冴えてるね。

『でしたら、ここから突入しますが…。』

『まず瓦礫の山を退ける作業が必要ですな。』

やっぱり瓦礫の山は撤去しないといけないんだ…。

山の高さは、大体3階建の一軒家ぐらいたとモニターの計算では想定されている。

まあ4体で取り組めば…ちょっと退かす程度ならすぐに済むだろう。

ところが撤去作業に、勇希兄ちゃんが反対した。

『いっそのことぶっ放そうぜ？いらねえモン捨ててんだろ？』

はあ。さっきの英文字の件は冴えてると評価したのに。

「勇希兄ちゃん…爆発騒動になったら、警報が鳴るかもしれないじゃない。」

私は血の気の多い兄に対して落胆していた。

私が呆れていると、頓珍漢な策を考えた張本人が逆上した。

『ガラクタを退ける時間がもったいねえだろ！ 武人兄ちゃんを助ける気はねえのか！』

その言葉に、私はハッとした。

和希兄ちゃんも残存兵達も、そうだな…と呟いていた。

『確かに時間の猶予はありません。強行突破もいいでしょう。』

残存兵の1人が賛同の意思を示していた。

他の人は何も言わなかったけど、多分同意とみていいだろう。

「じゃあ、ガラクタを破壊するわね。」

【フラワー】のロッドを瓦礫の山に向けて放とうとすると。

勇希兄ちゃんに止められた。

『待て未衣子。搬入口の扉まで潰したいんだ。』

「【フラワー】の攻撃でも潰せるわよ？」

『強行突破、って言っただろ？』

【サニー】に代われよ。下から直進して、一気に入るぜ。』

『俺達がいいが…。残存兵達は？』

和希兄ちゃんは残存兵達を見た。

『見張り用に1人残します。貴方方の真後ろにつきましよう。』

瞬時に進めば大丈夫です。』

残存兵達で目配りをしていた。1人が瓦礫の山に背を向けた。

『【サニー】は高火力です。近づきすぎると燃えますよ？』

『瞬足のスピードを出せますから。』

道さえ作っていただければ秒で追いかけます。』

「すごい…。」

流石1HRとして戦い抜いているだけはあるなあ、と私は思った。

『未衣子、兄貴。今から【サニー】にチェンジするぜ？いいよな？』

勇希兄ちゃんが確認した。

そうじゃなくても兄ちゃんはしそудし、チェンジの雰囲気になってるから私達は何も言わなかった。

普段戦闘で経験してる通り、『熱融解』によるチェンジをした。

【サニー】は空手家の構えをした。

瓦礫の山の前に【サニー】は立った。

【サニー】の全身から、橙色の淡い炎が繰り出された。

炎で気合いを高めてから、【サニー】は軸の右足を前に出して、膝を少し曲げた。

両手はボクシングでパンチ攻撃を仕掛ける前のポーズになっていた。

しばらくして、【サニー】は前へ跳んだ。

『うおりゃあああああ！』

勇希兄ちゃんの威勢と共に、【サニー】の右手の拳が瓦礫の山のガラクタにめり込む。

【サニー】の高温の炎で、ガラクタ達は溶けている。

振り向かず、ガラクタに囲まれながらも、猛スピードで直進する。

やがて、厚い壁？が壊れる大きな音が聞こえた。

扉を突き破ったかもしれないと、私達は確信した。

【サニー】が普通に立てるし、歩行もできた。

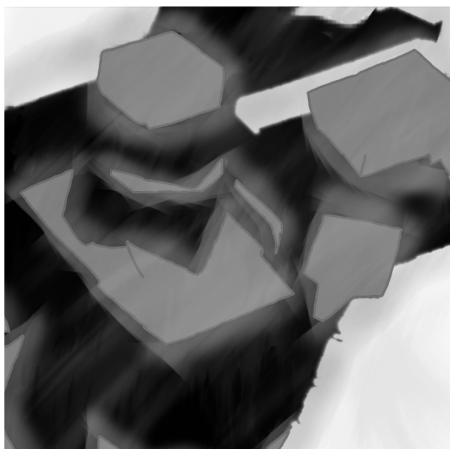
ガラクタのような障害物は消えていた。

『中に、入ったのか…？』

「中だと思うけど、真っ暗だなあ…。」

搬入口の扉の奥は、真っ暗でよくわからなかった。

13・奪還の日



搬入口の中は、真っ暗で何も見えなかった。

モニター画面の映像も、ほとんど黒1色だった。

残存兵達がついてきたのは、音とデータ認識で確認できた。

コックピット内にいる兄達以外の顔がよく見えない。

『本当に…研究所の中でしょうか？』

和希兄ちゃんが疑問視するのには納得がいく。

突入前は地図上に《RED LABO's》とデカデカと表示されていたのに。中に入ると《Unknown》の文字が赤く点滅された。

地図のデータも存在しない状況。

『せめて…灯りをつけましょう。そのまま進むのは危険すぎます。』

残存兵の1人が搜索しやすくするよう示してくれた。

「灯り…。」

『エネルギーを消費しやすいが…。勇希、どちらの手でいいから、火を出してくれないか？』

『それで減らねえと思うぜ兄貴。』

勇希兄ちゃんはこう言ったけど、【サニー】の右手の手のひらの上に、火を出した。

ロボの手のひらの上だから、サイズ的に人間くらいのスケールだった。

残存兵達は自らの剣を手前に構えて、刃の部分を白く光らせた。

これで半径10メートルくらいの周辺の状態を把握できる。

今のところは、灰色の壁と直進できそうな暗闇がある事が判明しただけだけだ。

『西条司令より、貴方方だけでも返さないといけません。前後で我々は護衛します。』

残存兵がそう言った後、奥へ進む順番を変えた。

【サニー】は残存兵達の間に挟まる形で並んだ。

クーランとの戦闘は激化を増していくので、生きて帰れる保障はない。

私達に武人兄ちゃん救出の命令を出したのも含めて、司令、轟真目に言えば

〔ラストコア〕の皆さんの気遣いなのかもしれない。

歩いて進む方がバレにくいけど、救出作戦は迅速に遂行する必要があつて。

私達は天井に当たらないように浮上して、足裏のブースターで奥に進んだ。

地図は相変わらず《Unknown》の文字がしつこく点滅している。

何か手掛かりが見つかればいいのに、と私達は願っていた。

☆☆☆

白井3兄妹とピウス残存兵の数人が武人の救出活動に専念している中。

タレスの出港口が見える外宇宙では、未だに激しい戦闘が繰り広げられた。

宗太郎率いる〔ラストコア〕の部隊と、クーランが送り出したHR達とビーム

兵器の攻防に、終わりが見えない状況であった。

敵のビーム兵器とHRの出撃は、交互に行われた。

実際には戦力の配分が均等になされているだけで。

ビーム兵器が猛威を奮っている時、HRは少数のみの出撃。

HRが多数出撃時に、ビーム兵器は一時停止し、補給準備に入るらしい。

宇宙船のブリッジの中で、アレックスが分析して出した仮定だ。

正直な所、武器や兵士をたくさん出して体力や精神力を削っていく戦略しか見

えてこないせいで、『仮定』としか言いようがなかった。

宇宙の地理的なデータでも『火星圏タレス』と記載されており、〔レッド研究

所〕の存在も武人から聞かされているのだが…。

(同レベルの敵ばかり…)

〔天海号〕のブリッジの艦長席で、宗太郎は親指を口に当てていた。

彼もモニター越しに激しい戦禍を見守っていた。

時に艦長らしく、司令官らしく、〔ラストコア〕のスタッフや助っ人の他星人達に指示を出すが。

(戦闘開始からどれくらい経っているのか…。補給と再出撃の繰り返しばかり。)

宗太郎の目に映った今の戦況は芳しくなかった。

むしろ悪化していると見ていた。

まずは【パスティーユ】以外の〔ラストコア〕の主力機に代わる、アレックスのAⅠロボ。

敵のHRにより悉く落とされていき、アレックスは出撃の頻度を減らし、各宇宙船から直接射撃するよう切り替えさせた。

次に他星からの応援。

リュートの側近兵やビウスの残存兵達と、敵のHRとの力は互角だった。

AⅠと比べれば彼らはよく耐えている。

しかし、両者共に補給等の作業で撤退と復帰を繰り返し…精神的な疲労も溜まっていた。

前線に立てる面々がリュート達と彼らのみというのも、過酷さを増していた。

頼みの綱として期待されていたリュート達の【ホーンフレア5 t h】。

初めのうちは自前の槍捌きで敵を倒していたが、数が多すぎた。

そこで、味方を全員避難させ、【ウインドアーチ】と連携した超強力なアロー攻撃を放った。

この一撃で敵のHRとビーム兵器を大量に一掃したのだが。

タレス内部には、未だHR達が潜んでいた。

【ホーンフレア5th】を撤退させ、出港口に突入を図ったが。

銃という武器は、性能によっては果てしなく遠い距離でも発揮する。

姿の見えない出港口からビーム弾が放たれて、兵達に命中する。

数人が生命の機能を停止し、宇宙に漂った…。

ジェームズが連れてきた志願兵達の【軍用機】は、【パステージュ】より耐久性が低い以外、性能は高水準だった。

だが今回の宇宙戦が初陣の志願兵達には、操縦技術も戦闘技術も未熟であった。

【コードS】状態を保ったまま、広範囲の遠距離攻撃を仕掛けていく事しかできなかった。

敵の攻撃の猛威でタイミングを読み取る事ができず、3機合体ロボの【軍用機】は【コードS】からチェンジしなかった。

時々敵が疎らになった状態でジェームズはチェンジしろと指示を出しているものの、初陣の志願兵達は前に進めなかった。

堕ちるかもという恐怖に、若者達は煽られた。

実際に側近兵や残存兵達の数人の散りざまを目撃している。

土星圏の宇宙船の乗組員達は、同郷の者に応援要請を出していた。

要請に応じた宇宙船がやってくるという報告も受けている。

（【パステージュ】を残すのがよかったか…。）

宗太郎は頭を抱えていた。

気を急ぎすぎたと反省した。

しかし首を左右に振って、持ち直そうと決意した。

後悔しても、勝ち目は無い。

何か打開策を探さなくては、と宗太郎が出した答えは、命令となって現れた。

「出港口を潰せ！侵入は不可能になるが、黒川救出後は必要ない！

H R達の出入りを潰せ！」

前線にいた兵達の照準が出港口に変更された。

そもそも武人救出には出港口ではない出入り口から侵入させている。

彼らなら、ルートを確保できるだろうと宗太郎は信じていた。

同時に心の底で、祈りを捧げていた。

（頼むぞ子供達。早く黒川を救出して戻ってきてくれ。戦禍を見送るしかできない役立たずで申し訳ないのだが…。）

☆☆☆

搬入口を強行突破して、研究所の中に入り、暗闇で何も見えないから灯りをつけたのだけど。

中は普通の通路のようで、無機質な床と壁と天井しかなかった。

搬入口って言うから、下に車輪の通った跡でも残ってるんじゃないかなあ…と勘ぐってたんだけど、床は綺麗だった。

『我らのように浮遊して進む機械族もおりますし…。今までそちらで物資を運ばれたのでしょうか？』

『ブースターを使用していれば熱で凹みそうですが…石でも埋め込まれているのですかね？』

『石でも溶けるんじゃないの？』

残存兵と兄達が道中で話をしていた。

あまりにも通路が綺麗すぎたから。

潜入調査とか捜査ってこっそり遂行するんだから、基本的には静かに行動しないといけないのだけど。

こうも綺麗に整備？されているような状態では、何の為に建設されたのか疑問

に思ってしまう。

自動の地図作成ツールで通路内の道筋を記憶させながら、こういう疑問を呟いてしまった。

私達の疑問に、残存兵の1人は自身の考察で答えてくれた。

そうこうしているうちに、限界がやってきた。

【パスティーユ】全体のエネルギーが枯渇したとか、地図データの作成でデータの容量が満杯になったとかの理由ではない。

狭い空間の中では当然、『行き止まり』という壁が存在する。

道中で分岐点も発見したので、別ルートを残存兵の1人に行かせただけど、こちらも最後は『行き止まり』の壁だった。

『搬入口』という名は物品の出入り口だし、倉庫のような部屋があってもおかしくないけど。

倉庫もなければ、『行き止まり』の壁の隅に荷物が置かれているわけでもない。

この搬入口とそれに伴う通路が、一体何の目的で利用するのか、わからなかった。

用途不明な建物に『行き止まり』。

私達は悩んでいた。

早く武人兄ちゃんを助けないと、彼が危なくなるのに…。

『行き止まり』と確認した地点で私達は集合した。

この地点は通路内の最奥部と認識している。

元々《Unknown》表記なので、せめて目印となる地点は確保したかった。それで搬入口付近と最奥部の中央側の『行き止まり』を目印に設定した。

作成した地図のデータだから、信憑性は薄いかもしれないけど、信用しなければ後がしんどくなるから。

『これ、入り口でよかったのかよ？』

何もねえじゃん、と勇希兄ちゃんがブツブツ言った。

『…まあ一か八かの賭けだからなあ。間違いの可能性はあったよ。』

『すみません。我々の能力不足で。』

『いいえそんな、逆に追撃される事なく侵入できましたし。』

「そう言えば…。」

和希兄ちゃんの発言で今までの経路を振り返ってみた。

搬入口突破前には敵の追手がなかった。

突破後は狭い暗闇の通路ばかりが広がっていた。

本当に敷地内を守りたいのだったら、通路内にトラップがあってもおかしくはないはずなのに。

『そうですね…。逆にここまで何も攻めてこないのは、不気味に感じますが。』残存兵の率直な感想だった。

『戻りましょうか。遠回りになりますが、別ルートを辿るしか…。』

「大丈夫です。」

私が言った。

『いや大丈夫じゃねえだろ？何もないんだぜ？』

「違うよ。『行き止まり』の壁に耳を傾けて？」

『聴力の解析データかな？』

和希兄ちゃんがコックピットのパネルを操作していた。

一方で、2人の残存兵達も『行き止まり』の壁に耳を当てていた。

『…なるほど、かすかに何か聴こえてきますね。』

『え？なんだよ、とうとう敵がきたのかよ！』

勇希兄ちゃんはキョロキョロと左右を見ていた。

『勇希、今からコレを開け。聴力解析データだ。』

『聴力？』

勇希兄ちゃんも首を振るのをやめて、同じようにパネルを操作した。

『…すげえグラフの振れ幅あるなあ！』

確かにグラフの変化が激しいのは認めるけども…耳の方も敏感になって欲しいんだけどなあ。勇希兄ちゃん。

『地球産のロボは精密な解析ができるのですか？』

残存兵達は驚いた。

「【パスティユ】だけです？他は無人AⅠばかりですので…。」

『我々HRでも、解析技術に長けた者は少ないので…。』

『HRが生命体、と認識していればですね。』

和希兄ちゃんに小話が聞こえてみたい。

【パスティユ】の高性能さについては、今は深く触れる話題ではない。

これからどんな行動をとって、武人兄ちゃんを救出するのかを決めないといけない。

「解析データでも十分示しているみたいです。…この壁を壊しませんか？」

『え？』『はあ！？』

私の提案に残存兵の1人は首を傾げるだけだったが、私の下の兄はいつものように大袈裟に反応した。

「【サニー】の状態だったら、この壁程度なら壊せるわ。」

『できるが…これで破壊活動は2回目だ。エネルギーの消費もかなりの量になる。』

和希兄ちゃんの指摘通りで、エネルギーの残量メーターもあと6割だ。

『行き止まり』の壁を壊せば、残り半分を切ってしまう恐れがある。

救出後の帰りの分も確保したいと思う気持ちもよくわかる。

でも、他に方法はない。

別ルートを選択は可能だけど、また振り出しから再出発になる。

それだと、武人兄ちゃんの救出にかなりの時間を費やしてしまう。

『搬入口』ルートを選択でも賭けに出たんだ。

今更怯えなくてもいいだろう。

それに…これは自分勝手な思いになるけど。

私達の【ラストコア】の一員として、【パステージュ】のパイロットとして務めるのが、この救出イベントが最後かもしれない。

延長期間も3ヶ月で、地球では9月に突入している。

この任務が終われば、武人兄ちゃんと離れ離れになるだろう。

最後の最後で、後悔したくないから。

「予備エネルギーの蓄えはあるし、時間はないと思います。壁を壊して進みましょう。」

私は今の決断がミスだったとしても、悔いは残しませんから。」

兄達は私の進言について、ただ黙っているだけだった。

最初に口を開いたのは残存兵だ。

『わかりました。我々はビウス様の意思を継ぐ者達です。ビウス様も貴女の決意に賛同なさと思います。期待に応えられる働きができるよう、貴方方を御守りいたします。』

残存兵達は私の決断に賛成してくれた。

たった1、2週間程の付き合いだけど、すごく親しくしてくださり、感謝しかなかった。

残るは2人の兄の同意だけだった。

意見対立するかもと懸念していたけど、答えは意外とあっさりだった。

『ま、俺も他に思いつかねえし…。兄ちゃん助けたいし。』

『末衣子が今の活動に熱中している事はよくわかっているからな。俺も…そう

かな？』

『兄貴も随分見入ってたよな、ロボットに。』

『ハハハ、そうだったな。』

和希兄ちゃんは軽く笑っていた。

この場にいる全員が、私の決断に賛同した。

あとやる事は、実践のみ。

壁の破壊活動は【サニー】が率先して行うから、【サニー】が先頭に立った。

その背後にビウスの残存兵2人が、少し距離を離して並ぶ。

『行くぜ！』

勇希兄ちゃんが叫ぶと、【サニー】の全身から半透明の炎が出てきた。

残存兵達はもう慣れたのか、凝視しないように腕で顔を覆う事はしなかった。

両腕を後ろに引いて、【サニー】は再び飛び跳ねた。

『行き止まり』の壁まで直進。

右手の拳と燃え上がる炎を前に出した。

壁は硬そうな見た目と違って、あっさりと破られた。

3機合体ロボットで突進しているような衝撃を加えているんだし、逆にこれで壊れなかったらすごいと思う。

壁を破ってラッキー、なんて喜んでる暇はなかった。

喜ぶどころか、落ち着いて情報を整理する時間も与えられなかった。

壁を破壊してそのまま奥へ入ると、【サニー】は動けなくなった。

全身に電撃ショックを浴びせられたからだ。

「ぎゃあああ！」

『うわああ！』『うっ！』

反応は違えど、私達は声をあげてしまった。

電撃は止まる事を知らないかのように、強烈に流してくる。

【パスティーユ】は保つのかな…。

そんな不安は一旦解消された。

後に続いた残存兵達が電撃ショックの元を絶ったからだ。

『大丈夫ですか！』

「あ…はい。」

『い、いきなり攻撃くらうとか…。』

『！？これは…？』

和希兄ちゃんが何かに気づいたようだ。

私と勇希兄ちゃんも、立ち直ってすぐにモニター画面を確認した。

コックピットの外の様子が映し出された映像。

暗いピンク色の空間に、赤く光る光の線が何十本も交錯されていた。

空間自体は何の障害物もない、ただっ広い部屋だった。

人間の10倍以上は大きいロボでも、天井まで全然手が届かないから。

他にも、トラブルが発生していた。警報のアラームだった。

耳を塞ぎたくなる程のけたたましい音量で、何回も鳴らしてくる。

視認できる光の線はもはやトラップの防戦だろう。

警報が鳴っているという事は、近々追手の攻撃もある筈だ。

『やはり、引き返すしかありませんか…！』

残存兵の1人が落胆気味に言った。

ところが偶然、私達に光明の兆しが見えるようになった。

【サニー】、ひいては【パスティーユ】の地図データが正常に機能し始めた。

わかりやすく言うと、今まで《Unknown》の点滅表示が繰り返されていたが、文字は完全に消えた。

逆に大広間の空間を出発点に、道が形成されていった。

「和希兄ちゃん、勇希兄ちゃん！」

『ああ、地図データが復活したんだ！』

『真正面の奥に示されてんのかよ！』

勇希兄ちゃんが怒鳴った。

ちょっと現状を嘆きたい気持ちもわかる。

光線のトラップを潜り抜けた先に、地図データが示す道のりが確保されているんだ。

潜り抜けないと進めない。

ここで残存兵の1人がこう進言した。

『無茶苦茶な戦術を取りますが、トラップセンサーの光線を封じましょう。空間の壁の中にでも、光源がのめり込まれている筈です。』

もう1人の残存兵も言った。

『見張り役の者も呼びましょう。現時点で一番危険なのはこの領域ですから。』

ビウスと一緒に戦場を潜り抜けた人達だから、冷静に打開策を考えてくださっている。

これはもう、逃げ出せない。

逃げるつもりは微塵もないけれど。

『もうこうなったら、突き進むしかねえぜ！』

『地図データが復活している。武人さんの元へ導いてくれると信じよう！』

「そうよ、行こう！」

☆☆☆

武人の身体は、かなり疲弊していた。

隙を見て脱出を図らないといけないこの緊急時に、ぐったりしていた。

いや、させられたのだ。

彼の左腕に、小型の注射器の針が刺さっていた。

点滴の薬は器具の下部で固定されたタンクに入っている。

それを機械で吸い上げて、上部の袋に溜める。

溜め込んだ液体の薬を、管を通してゆっくりと注射器に注がれる仕組みだ。

薬の正体は、クーランが知っていた。

『液体の中に微生物が潜んでいて、それは身体を内側から蝕む』作用がある
と。

つまり、武人の身体を衰弱させる害薬であった。

今すぐ注射器を取っ払いたいのが武人の本心だ。

だが注射器を抜くのを阻む困難も、同時に存在する。

武人が目を覚ます前から固定された、ベッド一体型の拘束具。

手足とお腹まわりの上に、金属の輪は微動すら起きていなかった。

彼の足元側、部屋の隅に置かれた『HRの変身を抑止する装置』も困難要素の
1つになっていた。

「投薬してから、随分大人しくなったなあ。」

ベッドの傍らでクーランが言った。彼はケラケラ笑っていた。

「効果が効いてきたのか？ん？そりゃあ身体中の内臓や筋肉や骨を、微生物が
食べているんだからな…。」

武人に対して残酷な事実を告げてくるクーランだが、武人は言い返せなかった。

言い返す気力がない、というのはなかった。

脱出を計画しているのだから、まだ体力は残っていると武人は信じていた。

ここで害業投与した悪魔と話を交わすのは、体力を削る羽目になると彼は判断した。今は喋らず、機会を待った。

脱出して帰還できるだけの余力があればいいと武人は思った。

部屋内にアラームが鳴った。

ベッドと反対側に位置する通信モニターからの音だった。

何だよ、とぼやきながらクーランはモニター前に向かった。

アラーム以外の音は流れず、要件を知るにはモニター画面の文字を読むしかない。

地球では見かけない記号のような文字を、クーランはスラスラ読んだ。

「出港口が破壊されて塞がれた？ったく、他の経路を使えばいいだろ？後処理は適当に済ますから存分にやれ、と。」

クーランは文字を読み上げた。

後に画面前のパネルを数回操作して、音声入力で文字を打ち、その文章をメールのように送信した。

「少しは頭使えってのによ、なぁラルク。」

武人の本当の名を呼んだクーラン。

しかし、彼の平常心が崩れ去る時がやって来た。

2度目のアラームによって。

「チッ、うるせえなあ…。」

2度目は送信後すぐに鳴らされた。

よってクーランは振り返るだけでモニター画面の文字を読み取る事ができた。

同じように、声を出して読み上げた。

「何…？地上の電力室の…破壊だと！？」

ガシャン！と物が壊れる音がした。

クーランは両目を大きく開いたまま、武人が拘束されているベッドへ、ゆっく

りと振り向いた。

いや、もう拘束は解かれていた。

武人を拘束していた鉄製のリング達は、上の欠片が破られて床に落ちていた。

武人はベッドの上に座った状態で、手首を軽く握っていた。

「やっぱりな。クーラン、自分の家の庭はちゃんと手入れせなあかんで？」

彼は不敵に笑った。

2人の表情が逆転する瞬間だった。

あれだけ妖しげな笑みを晒していたクーランだが、とうとう笑顔がなくなっていた。

「お前…どこまで漏らした？」

「そりゃあ敵の情報は漏らさんと、攻略でけへんからなあ。」

「《息子》の癖に、調子…こきやがって。」

「ふざけてへんで俺は。お前の事は、《生かしておけん危険人物》と認識しておく。」

ニヤニヤ笑う武人の背後、部屋の壁が一気に粉碎されていた。

奇跡的にベッドは下の階に落ちずに済んだ。

ベッドをすっぽり収める大きな手が受け止めていた。

「お、おお…。」

クーランは壁を粉碎されたと同時に、尻餅をついてしまった。

目の前に現れた巨大口ボを見て、しばらく言葉が出てこなかった。

最近クーランが悩まされていた、地球産の口ボ。

彼の派遣した【ホルブレス】や【宇宙犯罪者】達を次々と倒していった強者。

武人を服従させ、彼に敵対させて陥れようとした邪魔者。

H Rではない、何の能力を持たない地球人が乗りこなせる驚異の高性能な巨大

ロボット。

ようやく【バステュー】が自分の研究所まで押し寄せてきた。

☆☆☆

「武人兄ちゃん！」

研究所の施設の壁を壊した時、私は思わず叫んでいた。

『行き止まり』の壁を壊した後、セキュリティ増し増しの空間で【バステュー】の地図データは復帰した。

このまま前進するしかないとした時、施設内の仕掛けを潰しながら探す方法を取った。

複数のトラップを一掃できるように、【サニー】は【フラワー】にチェンジさせていた。

バリアを張りつつ、自前のロッドの攻撃で離れた場所から仕掛けを壊していった。

2度の強行突破でエネルギーが半分以下になっていた【バステュー】。

本来は後に控えるボスの為に温存した方がいいだろう。

でもその心意気だと、武人兄ちゃんを救出できないと思い込んで。

拳句には今回のクーラン戦が終われば武人兄ちゃんにしばらく会えないかも、と寂しくなって。

予備エネルギーの準備は和希兄ちゃんにしてもらってるけど。

せめて最後は、どんな事をしてでも…この戦いに勝利したいんだ。

ある施設内の1枚の壁を破壊する前、私は地図データを確認して、嬉しくなっていた。

青い光の点は、自軍のメンバーが存在している印。

トラップ満載のただっ広い空間とは違う、狭い部屋の1室。

現在捜索中の場所の名前を知っているならば…【ラストコア】に誰が行方不明かご存知なら…。

点滅する青い光の点の正体は、武人兄ちゃんしかいない。

だから壁を壊した時に、私は彼の名前を呼んだ。

彼は上半身は何も着ていなかったし、眼鏡もつけていなかった。

だけど、ボサボサ気味の黒い髪の毛は、出会った時からずっと変わっていなかった。

諦めずに進んでよかった。

私の心は今、嬉々に満ちあふれた。

壁は粉々に崩れると、床の一部もつられて落下していく。

武人兄ちゃんの座ったベッドも落ちそうになり、【フラワー】の手でキャッチした。

彼の無事を一旦確保してから、半壊状態の部屋をモニター越しで見た。

部屋の真ん中に、1人のおじさんが座っていた。

白衣を纏った、髭を生やしたおじさんが足を三角に曲げて、両掌を床に付けたまま動いていない。

おじさんの表情は、初めて怖い物を見た時のように強張った感じになっていた。

この人、もしかしたら夢の中で…。

なんて見てきた夢を思い出している余裕はない。

兄ちゃんを連れて脱出しないと。

「武人兄ちゃん、今から飛ぶけど大丈夫？」

「【フラワー】の指に捕まっとく。遠くまで離れたら変身するから、宇宙へ出られるで。」

武人兄ちゃんはそう言ってから、ベッドごと収めていた【フラワー】の左手の中指にしがみ付いた。

ベッドはいらないみたいだし、半壊した部屋に右手で置いた。

部屋の位置とは真逆の方向へ向いて、【フラワー】で来た道を戻った。

少し進んで行った頃合で、武人兄ちゃんが助言をくれた。

「もう少しスピード上げよう。【スカイ】に変わるんや。」

「兄ちゃん、熱が出るよ？」

「ここまで来たら【ブラッドガンナー】になっても大丈夫や。」

私達は助言を信じ、和希兄ちゃんとバトンタッチした。

【フラワー】が白く光ると武人兄ちゃんが前へジャンプし、彼も目の前で【ブラッドガンナー】に変わっていた。

【スカイ】にチェンジした後、スピードが一気に上昇した。

H R形態の兄ちゃんに、今にもぶつかりそうな勢いで。

【ブラッドガンナー】もそこそこのハイスピードを出せるので、衝突の心配はしなかった。

『お前達だけで来たんか？』

『いえ、ビウスの残存兵達数人が抑えてくれています。』

『無事なん？』

『1人、やられちまってヤバくなってるぜ…。』

『急がな…ゲホッ、ゲホゲホッ！』

兄ちゃんが喋っている最中に、咳き込んだ。

「大丈夫！？」

『…大した事ないで。むせただけや。』

武人兄ちゃんは左腕で口元を拭う仕草をしていた。

【ブラッドガンナー】に口は見当たらないけども。

大声を出すと急にむせる事は多々あるから、今はあえて気にしなかった。

通路の『行き止まり』だった場所までたどり着いた。

1人の残存兵が待機していた。

『ご無事でしたか！』

『まあなんとか…ゲホッ！』

「兄ちゃん！？」

『大丈夫だよ！』

『むせただけ言うたやろ？』

『…急ぎましょう。所々で爆発が起きています。』

残存兵が私達を先導した。

小さな事に気を取られる時間はないけど、残存兵の沈黙の間が気になった。

彼は武人兄ちゃんの異変に、気づいているんじゃないかと。

私は今、サブパイロットの状態で【パスティユ】に乗っている。

脱出の合間に兄ちゃんと話もできただろう。

むせる姿を見せられたので、話はできなかった。

☆☆☆

【ラストコア】の面々及び、彼らに協力する他星人達の猛攻によって、火星圏タレスの出港口は塞がれた。

塞がれたというより、塞いだと言い換えるのが正しいだろう。

出港口の上部の岩石を遠距離攻撃で破壊し、雪崩を起こしたり。

下部の滑走路を破壊して自由に飛べなくしたり。

最高司令官の宗太郎の命令で、出港口はぐちゃぐちゃな岩石や金属の山に変貌

した。

まだ敵のHRは残っていたが、出港口が塞がれた今、出撃が困難になっていた。

ビーム兵器も鳴りを潜めた。

残った残存兵達と側近兵達がうまく回り込んで、至近距離で剣や槍を刺して、機能を停止させた。

激戦真っ只中に解析を行った結果、ビーム兵器も一種のHRと判明した。

最初は植物の白い花だったのが凶暴なビーム兵器に変化。

しかも誰の手も借りずに自らで。

結果を聞いたアレックスはやっぱりな、と驚きの反応をしなかった。

さらに今回が初陣の志願兵達にも変化が生まれた。

残存兵や側近兵の技能を学んだ一志願兵がチームメイトに対し、【軍用機：コードL】にチェンジを要請した。

仲間意識の強いチームメイトは要請に応じ、掛け声とともに【軍用機：コードL】に変身した。

深緑のボディである【コードL】は、【パスティユ・スカイ】同様、スピード重視タイプだ。

一志願兵は協力者・側近兵達の技能を真似しようと、必死にコックピットのレバーを動かした。

意外と強気で行動すれば、うまくいく事も起きる。

無我夢中で操作すると、【コードL】はビーム兵器の設置された場所に着地した。

まずいと感じたジェームズは宇宙船から、急いで離れるよう指示した。

ところがこのビーム兵器、一方向にしかビームを発射できない仕組みとなっていた。

ビーム兵器の『根元』まで来られると、兵器側は仕返しが出来なかった。

『根元』付近に小威力の砲弾が備わっていれば、兵器側が有利に立てただろうが。

『根元』付近は、敵側の仕留め放題だった。

【スカイ】より短い、ナイフのような双剣を【コードL】はビーム兵器に向けた。

前に双剣を、何度も振り続けた。

しかし、HRの植物は切り刻まれただけではビクともしない。

そこで、近くで仕留めていた側近兵の指導が入ったのだ。

『『根元』を狙って刺してください!』と。

指導を受けた通りに、志願兵は実践した。

すると…剣を1回刺しただけで、HRの植物は枯れていった。

コツを掴んだ志願兵は他の志願兵達にも共有した。

次々と【コードL】にチェンジし、即座に着地して『根元』を刺していった。

積み重ねの結果、ビーム兵器の勢いは衰えたのだった。

敵勢力の沈静化と捉えた宗太郎は、他の宇宙船の艦長達に一時帰還の命令を下した。

宇宙船の武装で事足りると判断された部隊は、続々帰還を果たした。

一時的なので、次の出撃の可能性は残っている。

ロボ等の機体は補給と点検整備を、パイロット達は休息を取った。

限られた時間は有効活用した。

戦闘の警戒体制はレベルを下げ、緩くなった。

技術士達は次の戦闘体制に入る事を見据えて、補給に整備に大忙しだった。

逆にパイロットやHR（残存兵）、宇宙船で砲撃や操舵を担ったクルーは、持ち場で待機のまま、身体をリラックスさせていた。

火星圏タレスの外観から、騒がしさが消えた。

宗太郎が乗っている宇宙船「天海号」に、通信が入った。

「ラストコア」側の他の宇宙船からだ。

女性オペレーターが内容を読み上げると、タレスの出港口から数千キロ離れた地点から、こちらに向かってくる飛行物を発見したとの事。

拡大等の解析を急がせていて、それまで宗太郎は艦長席で待っていた。

オペレーターの声が大きくなった。重要事項と判断し、即座に報告しないといけないと思ったからだろう。

彼女の報告を聞いて、宗太郎は艦長席から立ち上がった。

他の宇宙船が捉えた映像が見たいと言って、転送してもらうように頼んだ。

あまり笑わない宗太郎が、喜びの表情を見せた。

H R形態の2人の残存兵の間に、【パスティユ・スカイ】と【ブラッドガンナー】が挟まれる状態で、飛んでいた。

映像はすぐに全域の宇宙船に送られて、ジェームズにアレックス、休息待機中のリュートとサレンの目に入った。

皆、喜びを分かち合っていた。

『無事に帰還してくれた。』と。

手を大きく振っている者がいた。嬉しくなって、涙ぐんだ者もいた。

表現は様々だったが、全員が【パスティユ】と【ブラッドガンナー】の帰還に歓喜していた。

2体とも、アレックスが艦長指揮を執る宇宙船に收容される予定である。

宇宙船背部の收容口に、2体と残存兵は向かっていた。

收容するまであと少し、の所で異変が起きてしまった。

「ラストコア」側に問題は発生していない。

協力関係のある他星人達からも、トラブルの報告は出てきていない。

火星圏タレス側から発生した異変だった。

宇宙船のブリッジで席についている者達が、星を壊す轟音を耳にしたからだ。

情報は拡散された。警報もすぐに発令した。

手を振っていた者は下げて、涙ぐんだ者は服の袖や腕で涙を拭った。

〔天海号〕のブリッジ。

宗太郎はオペレーターに映像切替を指示した。

操作を数回行った所で、お目当ての映像が発掘された。

武人救出時に3兄妹が潜入した〔レッド研究所〕。

タレスに珍しい白い建物群だった研究所は、今は全体が黒焦げの跡地のような状態になった。

有名人の豪邸みたく、広大な敷地の〔レッド研究所〕。

一瞬にして真っ黒な廃墟と化してしまった。

誰かが雨でも降らせたのかと、宗太郎達は聞いた。

ところが返ってくる答えは『いいえ』しかなかった。

【パステューユ】や【ブラッドガンナー】達が攻撃を放ったかというと、『違う』と返ってきた。

敵勢力の暴走…。

この1択しか、予測つかなかった。

予測がつかなくとも…答えははっきり現れていた。

潰された出港口にへばりついた、超巨大な黒いクモが、映像でも確認できたのだ。

研究所の廃墟化と、へばりついたクモ。

いろんな個体のHRがいるが、彼らがこんな真似を披露できるはずがなかった。

《同調性》という特性があったとしても、それは基本、クモ型に改造されたH

R達が元となる。

このような芸当が可能なのは、人間に似たタレスの者では1人しかいない。

☆☆☆

『クーラン…。まああれでへばったとは思えへんけどな。』

『やはり、あの男ですか？』

『そうや。広すぎるから誰か居るとか想像するやろうけど、施設内の管理なんかは自前のA1に任せたりしとんねん。

だから、あの研究所は奴の居城で、奴以外の民はおらんねんや。』

そうだったんだ…。

あのへたっていたおじさんがクーランって人なんだ。

夢の中でニヤニヤ笑ったおじさんと、顔つきがそっくりだったのは覚えてる。

宇宙船へ格納される前に、コックピット内のアラームが鳴り響いた。

武人兄ちゃんと同じ考えで、確かにおじさんが引き下がるとは思わなかった。

エネルギー不足の問題がなければ、そのまままっすぐ巨大グモへ立ち向かうのに。

『我々はこのまま参加します。御二方はまず応急処置を！』

『いや、俺もこのまま行く。【パスティーユ】の調整だけやってくれ。』

『何を仰っているのですか！クーランに悪い治療でも施されたのでしょうか！？』

『悪い…治療？』

『毒でも入れたとかか？』

今の勇希兄ちゃん、勘が鋭くなっている。

私も同じ勤が働いていた。

クーランが武人兄ちゃんの身体に毒を仕込んだんじゃないかって。

私達兄妹はともに処置を受けようと説得した。

せっかく救出したのに、帰還できないのは悲しいから。

だけど兄ちゃんは強く反対したんだ。

『【パスティーユ】は最終兵器、俺は一介の兵士や！お前らの力は最後の最後まで残しとくんや！…助けてくれただけでも、感謝やで。』

私達兄妹に強く言い放った後、【ブラッドガンナー】は宇宙船から離れた。

巨大グモを目指して直進した。

「そんな…違うよ、兄ちゃんはただの兵士じゃあないよ。」

『未衣子。』『…うん。』

和希兄ちゃんは名前を呼んただけだったが、『もうやめろ』と制止するのは伝わっていた。

【パスティーユ・スカイ】はアレックスさん指揮下の宇宙船に収容された。

分離は手動の作業で行われた。

☆☆☆

『アレックスには子供達を任せといて…。宗太郎、今いけるか？』

武人は【天海号】のブリッジに通信を入れた。

彼は通信手段としての補聴器を装着していた。

脱出時に宇宙へ出た時、持参していた未衣子から受け取っていたのだ。

ロボの指で摘めるサイズの補聴器は、彼の耳につけられた。

外観だけで見ると、【ブラッドガンナー】に装着された補聴器は不安定な状態で固定されていた。

だが補聴器の固定に気を取られてる暇はない。

出港口にへばりついた巨大グモへの迎撃体制に入る方がよっぽど大事だ。

武人が宗太郎に通信を入れたのには、ちゃんとした理由があった。

『黒川！戻らなくてよかったのか？』

『これくらい辛抱できる。調べてもらいたいもんあんねんけど。』

『今緊急事態なんだぞ？』

『それに伴った依頼や。廃墟化した研究所の様子、捉えられるか？』

『…1隻向かわせるがいいか？』

『あのクモは取り押さえとく。ざっくりでかめへんから。』

〔天海号〕のブリッジで、宗太郎は首を傾げながら、武人の依頼に応えようとした。

研究所と距離の近い宇宙船に探索指示を出した。

武人は通信を止めて、巨大グモへ攻撃を仕掛けられる距離まで詰めていった。

銃が基本の【ブラッドガンナー】の武器は、遠距離用の装備も充実している。

故に巨大グモとスレスレの所まで詰め寄る必要はない。

【ブラッドガンナー】の隣に、3兄妹に付き添ったH R形態の残存兵、整備完了した【ホーンフレア5 t h】が追いついた。

彼らの後ろに出港口側で激戦を潜り抜けた残存兵・側近兵・【軍用機】達が立っていた。

宇宙船類は、背後に控えていた。

『貴様！状態が悪いと聞いたぞ！』

リュートの怒りだった。

彼は彼なりに、武人の心配をしていた。

『最善の策を取っただけや。【バスティユ】はもうじき戦闘に加入しよる。できる限り万全の対策で挑ませたいんや。』

『だとすれば…何故司令に探索の依頼をかけたのですか？』

今度は残存兵が尋ねていた。

彼の疑問はごもっともであり、臨時体制ならば先に問題解決を図るのが、被害の縮小に繋がるからだ。

しかし武人は、宗太郎への探索依頼も問題解決の1つとしていた。

『簡単に言えば、動力源の問題や。』

子供達が潜入した時、地上の電力室が破壊されたんや。』

『…セキュリティが緩くなった原因も…？』

『あの子らはなりふり構わず破壊し尽くして、俺を探しにきただけやろうけどなあ。』

地上の電力室が破壊されたんやったら、あの巨大グモの生成は…地下の電力か、宇宙船が跳ねたかやな。』

『もしかして…能力値も変化するって事ですか？』

武人は肯定の言葉を返した。

『電力もエネルギー源となる。エネルギー源という後ろ盾が大きい程、こちらが不利になってしまう。宇宙船の動力やったら限られてるから、持久戦でもこちらが有利になるかもしれへん。』

『なるほど…』

と側近兵が感心している隙に、ビームが飛んできた。

ビームと勘違いしたのは、白く光っていたからである。

実際は様々な物体に絡みつく、糸のような鞭だった。

目の前に飛んできたのを武人達が回避した。

すると、鞭の向かう先は宗太郎達のいる宇宙船だった。

武人達は落とし穴に引っかかってしまった、と後悔していた。

宇宙船の回避行動は遅い。

だから宇宙船の1隻が白く光る鞭に雁字搦めにされた。

鞭から浴びせられる電撃により宇宙船は感電して、思うように動けない。

残存兵が自分の持つ剣を投げた。

そのまま切断しに行くと、自身も感電するだろうと判断して。

鞭自体はうまく切断した。

電撃は収まったが、宇宙船に煙が上がった。

所々にポツポツと爆発が広がっていく。

1隻の宇宙船が落ちるのも時間の問題だった。

幸いだったのは、[ラストコア]のスタッフが乗っていない土星圏の宇宙船だった事だ。

それでもリユート・サレン・側近兵達にとって、かけがえのない仲間を失った、と嘆いていた。

『油断してもうたな…。』

武人は小さく呟いた。

思考を切り替えて、彼は出撃中のメンバーと宇宙船に指示を出した。

『宇宙船はもう少し後退や！残存兵と側近兵、酷やけど俺と一緒に奴の注意を引きつけるんや！志願兵は遠くから支援攻撃をかませ！』

『残念だなぁ。やっぱお前さんは隊長格以上の能力あんのによ。』

中年男の声が聞こえた。巨大グモの位置する地点から発した声。

武人は声の主が誰か、当然知っていた。

『…クーラン。』

『ヘッヘッヘッ。革命は自力で起こさんとダメらしいなぁ。』

武人は巨大グモの胴体に目を落とした。

真上に円形の透明の窓が存在していた。

クーランの居場所だろう。武人は推測していた。

『HRやない一研究者が身体改造を施したから言うて、勝たれへんで。お前、自滅する気か？』

『ほう…？宇宙船を落とされても、まだ余裕ぶっているのか？』

クーランは言い終わると、糸状の鞭を吐いた。

今度は数本吐き出しており、横糸を紡いで網を生み出した。

網目は細くなり、気づいたら自分達が囲まれていた。

武人は粗い目のうちに網の外側に出ており、電撃トラップから免れたのだが。

『うわあああ！』

残存兵、側近兵の一部が網目を抜けられず、トラップに引っかかってしまった。

今の悲鳴は電撃で痺れて苦しんでいる事で発せられている。

【軍用機】に乗る志願兵達は遠方にいたから助かっていた。

しかし、恐怖を植え付けられた影響で【コードS】特有のロッドの攻撃を繰り返すのに躊躇した。

『糸吐くのを封じるだけでかめへん！どんどん放っていくんや！』

『おい！』

『何や王子！流石に動かんと巻き込まれるで！』

『奴の心臓部はどこだ！それさえ示せば、一撃必中で機能停止も可能だろう！』

【ブラッドガンナー】の状態で表情は隠されているが、武人はフツ、と笑った。

『…そうか。秘密兵器やったら他にもいたな。自分の身体に限界が来すぎて、無我夢中で熱くなってしまうたわ。ごめんな。』

【ブラッドガンナー】はゆっくり上昇した。

『まず糸を吐けへんように俺らが前線で格闘しとく。見つけたら、そこに照準合わせてくれ！上手い事…胴体をひっくり返す。』

『貴様！そんな身体で…』

『今そんなむせてないから平気や。』

武人は前へ加速していった。

スピードは衰えていない。

『…リユート。』

『サレン。巨大グモの胴体をひっくり返すまでは待てん。胴体と星との隙間を狙いたい。』

『どちらもほとんど固定で動きはないから…狙うのは可能だけど…。』

『奴や同郷の者達…タレスの民の心配をしているのか？』

『民はまあ、避難はしているだろうけど…。』

『どちらにせよ、あの巨大グモを野放しにするのは危険だ。』

奴は電力供給について云々言った。

供給量の少ない今なら、我々で抑えられるだろう。』

『…そうね。最小限に抑える事を考えなきゃ。』

【ウインドアーチ】のcockピットで、サレンは左側のレバーを握り、右手でパネル操作をした。

★★★

（クーランにHRのような能力はない。タレスは髪色と目の色が統一しとる以外は地球人と同格で、生物由来の能力は持ち合わせてない。王子が射る前に…。）

『黒川さん！』

【ブラッドガンナー】の頭部が後ろを向いた。

武人を呼ぶ声がしたからだ。【軍用機】に乗る、志願兵達だった。

『君ら！戦闘に集中せな！』

『すみません！いや、その…司令からの報告です！』

『研究所の跡地ですが、巨大な半球のくぼみが発見されたとの事です！』

1人が戸惑ったせいか、他の志願兵が代わりに内容を報告した。

『地下から太い管を引いとるとかは？』

『ありませんでした。』

志願兵達の報告を聞いた武人は、勝利の兆しが見えたと確信した。

『君ら【軍用機】は、パワー系の形態にチェンジできるんやな？』

『…【コードW】でしたら。』

『二手に分かれるで。半分は【コードW】って奴で俺と一緒に巨大グモへ近づく。残りは攻撃できんように、遠方で動き止めるんや。』

『わかりました！』

鍛えられた兵士だから、返事の威勢は良かった。

『【コードW】、始動！』

前線に向かう兵達は【軍用機】の形態チェンジを行った。

訓練通りの声掛けを忘れずに。

遠方攻撃を仕掛ける兵達はそのまま、【コードS】のロッドを振り回した。

その間、武人は他の兵を呼んだ。

『側近兵、残存兵！お前らは槍とか剣とか、自前の武器持っとるやろ？足を切り落とせるか？』

『…精一杯の努力はしますので！』

『それでええよ！お前らは切断処理をやってくれ！俺と志願兵達で胴体をひっくり返すで！』

武人は大声でその場にいた味方の兵達に指示を出した。

ここで無駄話は終えた。

側近兵と残存兵はバラバラに散って、巨大グモの足の根元へ急いだ。

突然糸を吐いてくるかもしれない、と内心怯えながらも、必死に剣を振るって、槍を落とした。

H Rや操縦ロボの相手よりも、強大な威力を発揮した。

意外と効果は出た。巨大グモは暴れ出した。

『ぐっ！足が不自由になったぐらいで、俺を落とせるか！』

巨大グモは糸のような鞭を再び吐いた。

足の不自由さが効いたのか…鞭の威力は衰えていた。

『今や、すぐひっくり返すで！』

武人は【コードW】に乗る志願兵達に言った。

志願兵達は黙って、胴体の下まで降りていった。

巨大グモの胴体と、タレスの壊された出港口の間に、ロボ1体は潜れる隙間があった。

このスペースを利用して、巨大グモをひっくり返すのだ。

『失敗したら埋め込まれるで。後がないと思いや。』

【ブラッドガンナー】と【コードW】は下に潜れた。

武人の声量がバシないよう、小さめだった。

巨大グモの足の半数は剣で切断。

残り半数も槍が貫通していた。

【コードS】によるロッド攻撃も止まない。

クーランの操る巨大グモは動きを封じられた状態だった。

『ぐぬ…。急ピッチで宇宙船から吸い込んだ燃料では…追いつかねえか…！

ぬお！？』

今のクーランは、大量の管に絡まっていた。

長年かけてセルフで改造した身体に接続して、巨大グモの動力の一部として利用していた。

自分の身体と宇宙船のエネルギーで、巨大グモを暴れさせた。

ガチガチに身体が固定されたクーランだが、乗り物の上昇は感じ取れた。

巨大グモは上昇ではなく、放物線を描くように落ちていったが。

固定されて動けないクーラン。

回避行動も取れないから、頭もぶつけてしまう。

巨大グモの胴体がひっくり返されて、配線の入り乱れたお腹部分が露わになった時に。

『王子が弓矢の奥義を放つで。俺らはここから離れるんや！』

武人は志願兵達に言って、巨大グモから遠ざかった。

★★★

『黒川さん達、ひっくり返したわ！』

「なんと素早い行動力だ…！」

【ホーンフレア5 t h】のcockピットの中で、リュートは驚いていた。

武人達の一連の動きを、映像で確認して。

彼とサレンの2人で、武人達の動向の前に弓矢でひっくり返そうと目論んでいた。

ところが矢を射る構えをとってすぐの所で。

巨大グモがひっくり返されて、内部の配線の管が露わになったのだから。

【ブラッドガンナー】と【コードW】が巨大グモから急いで離れていったのも確認できた。

足が4本になって、胴体を起こせずもがき苦しむ巨大グモの姿が、今流れてる映像だった。

今がチャンスだと、武人の合図がなくとも2人は思った。

「サレン。他の武装に切り替える。時間を要するか？」

『今放つ槍に力を蓄えるわ。他の武装よりもかなり強力よ。』

「そうだな。そちらを採用する。」

【ウインドアーチ】は現在、【ホーンフレア5 t h】の弓として機能していた。

装填した槍の下に、頑丈なコックピット部分があった。

そこでサレンが、リュートの同意を得てパネル操作をしている。

藍色の槍の周りに、明るい緑の光の輪が形成されていった。

槍の温度が上昇して、高温になっている。

【ホーンフレア5 t h】の手は、まだまだ高温の熱に耐えられる。

光の輪は線を太くし、やがて槍を覆うような姿に変化していく。

槍が緑の光の尖った棒へと変貌した。

炎のように、槍の周りが激しくうねりを上げている。

【ホーンフレア5 t h】手指の耐久性も、限界がやってきた。

「サレン！まだ照準が合わんか！」

『もう少しの辛抱よ！』

【ウインドアーチ】のコックピットには、照準用のスコープも備わっている。サレンはそれを使いながら、標的の照準を合わせた。

『今よりュート！』

サレンが叫んだ。

槍を放つ役割はリュートだった。

【ホーンフレア5 t h】の隠されたレバーを彼は出した。

「発射！」

彼は上部ボタンを押した。

光に包まれた槍は、勢いよく放たれた。

土台代わりの宇宙船は糸の鞭攻撃を逃れる為に後退している。

巨大グモとリウト達の距離は、ロボ達の中で一番離れているだろう。

遠距離と感じさせない程、光の槍は一瞬で巨大グモに直撃した。

巨大グモは胴体内部を刺され、燃え上がった。

緑色の炎で巨大グモの姿が見えなくなった。

炎は一気に燃え移り、巨大グモの周辺も火があがった。

遠く離れた宇宙船からでも、火星圏タレスの表面の半分が燃えていると視認できた。

『性能は既知っているけど、改めて凄いわね。』

「ああ。クーランのみならず、手下も一気に焼失するだろう。」

『民達が巻き込まれてないといいのだけど…。』

「今は避難していると信じるしかない。最初は交渉に応じる予定が、有無を言わさぬ奇襲を仕掛けられたのだからな。」

『予定、狂ったしね。』

リウトとサレンは、タレスの燃え盛る姿をただ見ているだけだった。

クーランは暫く苦しむだけだろう。

自軍のロボや残存兵のHR達に戻ってきた。

クーランも、タレスにも存在するだろう防衛機関も、うまく機能が働かなくなった。

炎が沈静化するのを、[ラストコア]側全体が待っていた。

戦力を出し切ったロボは調整の為に、宇宙船へ収容された。

残存兵達は未だ出ているが、呼吸が乱れていた。

リウト達のコックピットには心拍数などを測る、健康状態の精査機能も備わっていたから、把握できた。

燃え盛る炎も永遠ではない。時間が経てば、徐々に鎮火していく。

自動的に消火装置が作動しているのか、そのスピードが早かっただけで。

下火になり、煙の上がった巨大グモが姿を見せた。

巨大グモは元々黒いボディだったので、焦げているのか区別できなかった。

足の動作が微塵も感じられないので、巨大グモに強大な炎は効いたのだと思われた。

胴体内部の右側…心臓部のエンジンらしき装置に、【ホーンフレア 5 t h】の放った槍が貫通していた。

巨大グモへ見事に命中した。

巨大グモが完全に機能を停止した、と判断した【ラストコア】の面々は、大いに喜んだ。

あの悪徳研究者を始末できたぞ、と。

宇宙船内ではガッツポーズしたり、手合わせしたりする者が現れた。

リュートとサレンも、コックピット内で胸を撫で下ろした。

敵の姿はないとし、宗太郎は撤収を命じた。

しかし、巨大グモから全く離れていない武人が異変に気づいた。

『ちょっと待て。微かだけど動いとる。』

『…何？』

武人の発言を聞いたジェームズは、宗太郎に通信を入れた。

その最中に、巨大グモの動きが再開した。

正確には、槍の貫通しなかった胴体左側が、スルッと外れた。

胴体左側は上昇すると角部分を前へ向け、8本の足を出した。

背後にも8羽の羽が出現し、自由自在に空を飛べるようになった。

『ヘッヘッヘッ。随分舐められたようだなあ。俺に体力がないとでも思ったのか？』

発した言葉の主はクーランと既にわかっていた。

言葉の後に、糸の鞭が吐かれた。

宇宙船は後退を図っており、各前線に立ったロボ達も撤退で、クーランと距離を空けていた。

にもかかわらず、糸の鞭は届いてしまった。

「ぐっ！」『きゃっ！』

【ホーンフレア5 t h】に鞭が少し擦れ、機体が揺れた。

【ウインドアーチ】は握られている状態。

リュートとサレンは声を上げた。

糸の鞭攻撃は、[ラストコア] 側全体にまで及んだ。

擦り傷で耐えた宇宙船もあれば、直撃し落ちた宇宙船もあった。

巨大グモの約半分以下のサイズしかない飛行物体なのに、脅威的な攻撃を発揮する余力を残している。

[ラストコア] の面々はクーランの凄さを改めて実感していた。

鞭攻撃が収まって、少しだけ宇宙に静けさを取り戻した時。

宗太郎は被害状況の報告を徹底的に行った。

彼以外にジェームズやアレックスはまだ健在していたが…土星圏の宇宙船達は壊滅的だった。

宇宙船の機能をフルに駆使できる船は、土星圏だと【フレアランス5】のみだった。

地球側も被害報告があった。

落とされた報告は少ないが、2隻の宇宙船は危篤な状態で、帰還が困難になった。

戦闘後に乗組員を他の船に移動させなくてはならなかった。

【軍用機】も1機、撃墜状態でパイロットを脱出させた。

他の1機が猛スピードで健在な船へ避難させた。

全体が危機的状況抱えている中で、決して安全とは言えないが。

『ヘッヘッヘッ。油断は禁物だと教わってこなかったのかぁ？甘ちゃんだなあ。』

クーランの笑い声が聞こえた。

『ラルク以外は凡人だらけだなあ。もうちょい待機するもんだろお？まあ、数回やっただけでボロが出てるもんなあ…。』

クーランは笑うだけでなく、語尾も若干伸ばし気味に話した。

『ホンマにしつこい奴やな、お前。』

『褒め言葉としてとってやるよ。』

【ブラッドガンナー】は鞭攻撃をスルッとかわして、見た目は無事だった。だが武人の身体自体は…手を施したクーランならば『むせる』原因を知っていた。

『ラルクには劇薬を投入したんだ。次の一撃でお前らをバラバラにしてやるよ…！？』

巨大グモから分離した飛行物体が2度目の糸の鞭攻撃を繰り出そうとした。

残酷な糸は、二度と吐かれる事はなかった。

淡いピンクの光の弾が、飛行物体の所々に撒き散らしていた。

物体の動きを封じた。

『ぐおおお！？』

クーランは光の弾で痺れて、悲鳴をあげた。

弾の威力は弱まっていき、彼は再び喋った。

『な、なんだあ…？』

『万全な状態に回復したんやな？』

武人が呟いた。

《自慢の息子》の声を、クーランは聞き逃さなかった。

『一体、誰の事だ？』

彼は武人に聞いた。

クーラン本人の頭脳なら、あらかたの予想はできたのだが、敢えて聞いた。

武人は平然と答えた。

『お前が恐ろしいと思ってる地球人。』

遠方から再度、光の弾が放たれた。

同じように飛行物体のクモ型ロボはダメージをくらった。

飛行グモは思い通りに動けず、喋る事もできなかった。

さらに遠方から、猛スピードで突撃するロボが現れた。

武人を拘束した部屋の壁をぶち破った、ピンク色の巨大ロボ。

クーランはロボの色がピンクだけじゃない事も知っている。

派遣した【宇宙犯罪者】達は、黄色や水色にも倒された。

3色の変幻自在の合体ロボ、【パスティーユ】がやってきた。

☆☆☆

「遅くなってごめんね！兄ちゃん！」

『かめへんよ。本来は俺らでケリをつけるつもりやったけど、意外に厳しくてな…。』

『とりあえず、予備を使用せずともクーラン戦は凌げるとアレックスさんが言っていました。』

『そうか…。それやったら俺と君らだけで最後は締めていこうな。』

武人兄ちゃんは他の人達に戻るよう伝えた。

宇宙船内の待機中でも、激しい戦闘で皆消耗していつてるのは、映像でわかっていた。

勇希兄ちゃんは行かせてくれ、と吠えてたし、和希兄ちゃんも技術士さん達に

出撃許可を伺っていた。

私は2人みたいに口出ししなかったけど、内心不安だった。

やっと通常分のエネルギーが満タンに回復され、機体の微調整も終了し、再出撃が許可された。

直前の糸を吐く攻撃が厄介だった。出撃前に、武人兄ちゃんの元へ辿り着く前に宇宙船ごと破壊されるかもって。

私達がここで帰れなくなるんじゃない、と心配になって。

土星圏の宇宙船が落ちたのを聞いて。

奇跡的に糸を吐く攻撃から回避できたのは、私と兄達だけにとっただけ…よかった。

こうして武人兄ちゃんと共に戦えるのだから。

『[フィルプス10] …。』

「…兄ちゃん？」

『なんでもあらへん。最初のクモから分離してても、図体はデカいな。【パスティーユ】の10倍はあるやろう。』

武人兄ちゃんの話は終わらない。

『せやけど、クーランはHRと違う。あのクモの母体は宇宙船から来とる。今までの激戦を繰り広げてきた君らやったら勝てる。これで負けたら…まあごめんと謝っとくわ。』

『んな事ねえよ！俺達覚悟の上でここまで来たんだぜ！勝てるんなら心配ねえだろ！』

『まだ【フラワー】で痺れさせただけだろう…。期待を大きくしすぎだぞ勇希。』

「和希兄ちゃんは冷静に物事を判断できるのはいい所だけど、今は逆に強気に出るべきだよ。」

『ハハハ。末衣子に言われちゃあ俺もおしまいだな…。』

和希兄ちゃんは私のコメントに笑って対応していた。

雑談はここまでにして。

いよいよクーランとの直接対決が始まる。

武人兄ちゃんが狙うポイントを指定してくれた。

『いいか？君らは分離したクモの腹部分の…動力エンジンがあるやろうと思う。危なっかしいけど、そこをぶち破っていくんや。エンジン破壊したら、そのまま帰るんや。』

「兄ちゃんは？」

『俺はクーランが操縦するブリッジ付近を壊して、奴を仕留める。大丈夫や。それが終わったら俺も戻る。』

「わかったよ。必ず戻ってきてね！」

『君らもな！』

【フラワー】と【ブラッドガンナー】は各々の作戦行動に移る為に別れた。

【ブラッドガンナー】は威嚇射撃をした。

飛行グモはバリアを搭載していたから、威嚇射撃は弾かれた。

『ヘッ、地球産ロボでガキが乗ってんだ。倒れたのは【宇宙犯罪者】共。俺はそいつらより頭脳は勝るんだし…ぬう！？』

飛行グモの糸攻撃が復活するのは、モニター映像で発射口を確認できたから、即座に把握できた。

【パスティーユ】は【フラワー】から【スカイ】へチェンジして、キレのある素早い攻撃を仕掛けた。

双剣を駆使し、【スカイ】は飛行グモの8本の足と羽を生やした動力源を切り落とした。

無重力で、切り落とされた一部はゆっくり落ちるように浮いた。

『くっ、再生するぞ！』

クーランの喋り声だ。彼は焦っているように感じた。

糸攻撃の方が強力だったと思うけどなあ…身体の一部を失ったとこのおじさんは思ったのかな？

そんな事はどうでもいい。

確かに彼の言う通り、飛行グモの足の復元を開始していた。

復元の速度は、今の【パスティーユ】と比べて鈍かった。

クーラン本人が復元を願っても、宇宙船からの限られたエネルギーでは期待に応えられなかった。

宇宙船は、戦闘面では前線部隊のロボの支援をするサポート型が大半。

攻撃力では【パスティーユ】に敵わない。

だから、【スカイ】から【サニー】にチェンジして、飛行グモの腹部分へ直進した。

【サニー】の全身が燃え上がっていた。

エネルギーの残量はまだ6割は残っている。

これならフルパワーで突破しても、帰還まで余力を残せる。

『うおおおお！！』

勇希兄ちゃんの雄叫び。【サニー】は右手の拳を前に出す。

コックピット内の速度メーターの数値が頻繁に変わる。

『ガキ共！調子に乗るなあ！』

飛行グモ、必死の糸攻撃。

実際のクモのように、糸は網を作って【サニー】を捕えようとした。

でも、【パスティーユ】の中で鈍足の【サニー】でも、フルパワーなら瞬間移動もこなせるんだ。

素早い動作で網の目を抜けて、攻撃を回避していった。

糸攻撃の影響で回り込んで近づく形を取ったので、多少の時間口スはあった。

それでも、飛行グモの腹部分を確実にぶち破る事はできた。

飛行グモの内部構造なんて、どうなっていたのか覚えてない。

一瞬にして突き破っていったから、知る余地もなかった。

でも、それでいいんだ。

私達が武人兄ちゃんに言われた内容は、飛行グモの動力エンジンの破壊。それが終われば先に帰還しろという指示だった。

腹部分をひたすら突き破っただけだけど、兄ちゃんにはそこがピンポイントだと認知してたんだろう。

だから、私達は帰還した。

兄ちゃんの事は気掛かりだったけど…。

☆☆☆

クーランの人生の中で、喚き散らす程の慌てぶりは今回が初めてだった。【パスティユ・サニー】が突撃した時に、動力エンジンが爆散してしまった。

ノイズが入りながらも辛うじて起動しているモニター映像から、クーランは察知していた。

『ぐっ、配線を繋ぎすぎてしまったか…！？』

自身と繋がった配線が絡み合い、クーランは自由に操作できなかった。

悪戦苦闘している最中、彼はとある人物を目撃してしまった。

クーランの操縦席として使用したブリッジの、入り口の扉が破壊されていた。

扉の破片を跨いで入ってきた男は、黒いショットガンを持参していた。

「[フィルブス10]、10年前にお前が地球降下した時に利用した船やったな。」

これは男の、クーランの《自慢の息子》の声だった。

『ラルク…』

「お前があの時襲撃したお陰で、俺はこの船がトラウマになってんねん。そんなと共闘させるとか、やっぱりお前は狂気の研究者やな。」

クーランの答えはなかった。

「それともあれか？俺を使役するだけやって、背後から俺を倒そうと思ったんやろ？側に置きたいなら、細菌を投入せえへんもんなあ。」

『…どうやらお前さんも、賢くなり過ぎたなあ。』

へへへ、とクーランは渴いた笑い声を出した。

彼に生きる気力は残されてない。

なので彼は《自慢の息子》、ラルクこと武人に最後の命令を下した。

『撃てよ、その銃で俺の息の根を止めろ。』

「最初からそうやった。お前をあの世へいかせた後、俺も後を追う。」

クーランの、機械に蝕まれて妖怪のような両目が大きく開かれた。

『お前さんも…正気か？』

武人はフツと笑みを浮かべた。

「何度も細胞分裂と破壊を繰り返した身体は、長く保たないんだ。ロボ形態にならなきゃ済む話だったが、なかなかうまくいかなくて。あとは…お前に入れられた劇薬の効果も効いている。」

『ま、待て！解毒の在処を…！』

クーランの声はここで途切れた。

右手のショットガンで、武人はクーランの息の根を止めていた。

クーランは、目と口を大きく開けたまま、2度と動かなかった。

この飛行グモも、所々に爆発が発生しており、墜落も秒読み状態だった。

「呆氣ない、30年やったな…。」

武人はゆっくり歩いて、ノイズまみれの映像を確認した。

巨大グモの影響で真っ黒な荒地と化した、火星圏タレスの出港口。

他のモニター画面からは、《DANGER》の文字がブリッジのあちこちで点滅していた。

アラームの音も騒がしく響く。

武人は脱出をせず、ただモニター前で立っているだけだった。

「…達者でな。」

飛行グモは爆散した。

14・忘却の日



昨夜の夢。

私が幼稚園通う前の年頃だった。

家族総出で遊園地に行く計画を立てており、その日が行く日となっていた。

私はまだ歩行が少しおぼつかなかったので、母におんぶしてもらいながら遊んだ。

母と一緒にメリーゴーランド等緩やかなアトラクションで楽しんでいて。

兄達は父と一緒に別のアトラクションに乗って楽しんでいて。

その間、私は母、祖父母と近くの休憩所で待機していた。

祖父が購入してくれたジュースを、ゆっくり吸って飲んでいて。

丸一日遊園地で楽しんで、夕食を高めファミレスでご馳走になって…。

幼いながらも私は満足していた。

★★★

昨夜の夢。

私は幼稚園を卒園し、小学生になった。

祖父にピンクのランドセルを買ってもらって喜んだ。

小学校に通う前も、家で中身が空のランドセルを背負って、遊んでいた。

それだけ、私は楽しみにしていたんだ。

実際に学校に通い出してから、私は注目された。

クラスメイトの女の子達が私に、かわいいランドセルだね、と言ってきた。

その女の子達のランドセルも、私に取っては可愛らしい鞆だった。

水色や薄紫色は、ちょっと落ち着いた印象で魅力あるなぁと思った。

昔ながらの赤の人もいた。

時代に流されなくて強そう、と微かに思ってた。

★★★

昨夜の夢。

小学校中学年になって、いろんな事を知るようになってきた。

私は本を読む事が好きで、文章の易しい物語本は沢山読んでいた。

おかげで長文の読解にも慣れて、国語の成績はかなり良かった。

逆に苦手なのは、算数とか理科だった。

手を動かして学ぶからかな。

勇希兄ちゃんみたいに赤点ギリギリの点数ではないから、苦手ではなかったな。

テストでそこそこの点数を取ったから、いつも先生に褒められた。

母代わりの祖母からも絶賛されて、経営する喫茶店でも話題にされた。

なんだか恥ずかしいなあ。

でも、私をこんなに愛してくれて…嬉しかった。

☆☆☆

「アレックスさん、先生。これが昨夜、未衣子が見た夢です。」

兄貴がアレックスさんにノートを渡した。

アレックスさんはノートを開いて、未衣子を書いた内容を読んだ。

俺達は深刻そうに見つめていた。

「やはりか…ここまで来ても一向に“アイツ”の名前が出てこないとは…。」

アレックスさんが俺達に内容を見せた。

未衣子の昨夜の夢は、只の日常風景だ。

体育の授業で膝をケガしたけど、俺が心配してくれたから気持ちがあっ飛んだ、とかだった。

一昨日の夢には兄貴が現れた。

パソコンの設定でトラブルが起きて、その時に兄貴が助けてくれた、だったな。

過去を振り返ると、俺や兄貴、祖父母に父、学校の先生や喫茶店の常連までが、度々未衣子の夢に出演していた。

コイツが普通の女の子だったら、これくらいの夢は普通に見るよな…ってだけで済む。

だが、未衣子は普通の女の子じゃ、なかったんだ。

〔ラストコア〕に来て最初の健康診断があった。

未衣子はアレックスさんや医者先生に、自分の異常を伝えていた。

『同じ夢しか見れない』という異常を。

『同じ夢』の中に毎回出演する“アイツ”の正体を知ったのは、〔ラストコア〕に来てからだ。

黒ずくめの男の生き様ばかりを、俺達は未衣子から聞かされていた。

やめろと止めてもだ。

未衣子は延々と黒ずくめの“アイツ”…《武人兄ちゃん》の話ばかり広めようとしていた。

結果、祖母が怒鳴りちらして、未衣子の同級生がドン引きして、未衣子が年上の男にいじめられて…。

俺の妹は誰かに心を開こうとしなかった。

唯一、俺と兄貴だけは、ある程度相談してくれるけど。

未衣子が中学生になった4月、吉川公園での謎のロボの襲撃事件。

今となっては雑魚敵の【ホルプレス】と知ってて平気だけど、あん時は怖かつ

た。

偶然にも、俺達は《武人兄ちゃん》に助けられた。

【ラストコア】の高性能ロボ、【バステューユ】の期間限定パイロットと引き換えに。

それ以来、パイロットという危険な『課外活動』にもかかわらず、未衣子は活き活きと過ごすようになった。

途中、期間満了で俺と兄貴は辞めよう決心していたのに、未衣子は《武人兄ちゃん》の側から離れようとしなかった。

おかげで俺達は期間延長し、アメリカの臨時支部で暮らす事になった。

火星圏タレスのクーランを倒して帰還しても、未衣子は《武人兄ちゃん》を探し求めている。

飛行グモの動力エンジンを破壊した後、俺達は先に宇宙船に戻った。アレックスさんの宇宙船で俺達は待機していた。

だが…《武人兄ちゃん》の帰還は果たせず、一定期間が過ぎて地球に帰った。

★★★

未衣子が眠る前と後で、一変した。

眠る前はずっと、《武人兄ちゃん》の帰還を待ち望んでいた。

土星圏の人が搜索に向かうと申し出た時、よろしく願いますと頭を下げたくらいだし。

だから、心配すんな、休めって、未衣子を俺と兄貴は寝かしつけたんだ。

それが引き金なのかはわからない。

未衣子が眠ると、俺と兄貴も眠った。

地球降下時は衝撃に備える為に起きたけど、未衣子だけは深い眠りについてい

た。

本当はコイツも起こす予定だったが、アレックスさんが特別に認めてくれて、そのまま眠らせていた。

降下先はカナダの森だって、兄貴から聞いた。臨時支部の近くで良かった。

洋画のヒッチハイクのシーンみたいに、俺達は車に乗せてもらった。

【パステージュ】とかのロボ等、機体や機械やら…宇宙船に搭載されていた物は後日回収する予定らしい。

俺達地球人や協力した他星人達のみ、臨時支部に戻った。

臨時支部では歓喜の嵐だった。本来なら感謝でいっぱいなのに。

未衣子が未だに起きない。

背丈が同じくらいの俺では背負いきれず、兄貴がおんぶして運んでいた。兄貴が肩とか腰とか痛まないか、多少心配していた。

未衣子の事で頭がいっぱいになり、祝福ムードを素直に受け入れられなかった。

兄貴にせっかくだからと言われて、形だけ喜ぶようにした。

ベッドで眠る未衣子の隣に祝いの品を置いて去った、半日後。

未衣子が目を覚ました。

この12時間で、俺と兄貴は《武人兄ちゃん》の行方を耳にした。

土星圏の人達が必死に火星圏タレス全域を搜索してくれたが…《武人兄ちゃん》の姿はなかったと。

巨大グモや飛行グモの残骸ばかりだと。

とは言え、搜索自体は続くようだった。

西条司令には無理はしないでくださいと労いの言葉をかけていた。

《武人兄ちゃん》が消えたのには、変わりはない。

未衣子に知らせないと。

俺と兄貴は駆け足で未衣子の眠る部屋に向かった。

部屋に入って、強引に起こして現状を伝えたかった。

起こす手間が省けた。未衣子は既に起きていたのだ。

ベッドの淵に座って、足をブラブラさせながら妹は言った。

「おはよう、和希兄ちゃん、勇希兄ちゃん。」

慌ててる様子の俺達と違って、未衣子は落ち着いていた。

ドアが開いているのに気づいた妹は、部屋を出ようとした。

クローゼットにしまっていた普段着に着替えていたから、外に出るのに何も問題はない。

しかし、俺達は未衣子が外に出るのを防いだ。

戦いが終わって呑気に過ごしている場合じゃない。

妹には、重大な話をしないとイケない。

「何？どうしたの２人とも。お腹空いたから軽食でも…。」

未衣子は平然としていて、俺達の慌てぶりに首を傾げていた。

「ご飯はもちろん食べるぜ！」

「その前に未衣子、今わかった事を話したいんだ。《武人兄ちゃん》なんだが…。」

兄貴は事実を話そうとした。妹の左肩に手を置いていた。

話が途切れたのは、未衣子の反応が割り込んだからだ。

え、という声を聞いた俺達は、もしかして夢で彼の行方を見たのだろうか…と推測した。

俺達の説明で行方不明の事実が判明し、妹が泣き崩れると予想した。

予想は、裏切られた。未衣子本人の、反応後の発言によって。

「《武人兄ちゃん》？誰なのその人。新しい家族でも増えたの？」

この発言は、逆に俺達に動揺を誘っていた。

おかしいと疑った俺達は、もう一度尋ねた。

「家族じゃないけど、家族のような存在の《武人兄ちゃん》だぞ。」

「知らない。」

「お前結構慕ってたじゃねえか。《武人兄ちゃん》頼りに毎日〔ラストコア〕に行ってるし。」

「知らないわ。」

一点張りに『知らない』発言を繰り返した未衣子。

冷静さに欠けていた俺は、未衣子の発言に腹が立って声を荒げてしまった。

「俺達をからかっているのかよ！あれだけ《武人兄ちゃん》に会いに行きたいが為に、俺達を足として使いやがって！」

「お婆ちゃんの言いつけでしょ、仕方ないわ。」

「だったら、兄ちゃんの事忘れたとか、平気な顔して言ってんじゃねえよ！」

「忘れたじゃなくて知らないって言うてるでしょ！」

俺と未衣子は口論になっていた。

大切な存在として扱っていた妹との間に、亀裂が入ってしまった。

修復不可能な亀裂を避けるのに、兄貴が仲裁に入った。

「落ち着け勇希。まずは整理しよう。…未衣子、俺達の事はわかるか？」

「何言ってるの？和希兄ちゃんと勇希兄ちゃんでしょ。」

未衣子はさっきの口論のせいとか、不機嫌な物言いだった。

頭の良い和希兄ちゃんは、未衣子に幾つかの質問を始めた。

淡々と答える未衣子を、俺は黙って見ていた。

最初は俺達の家族構成から、〔ラストコア〕の知識まで、ありとあらゆる質問を行った。

口に出さないでいた俺だが、質問の合間合間で困惑させられた事もあった。未衣子の答えが影響していた。

例えば、「【パスティーユ】の開発者は誰か？」の質問。

未衣子はアレックスさん、と答えた。

開発者がアレックスさんという答えは正解だ。

これはまだいい。問題は次だった。

「【パスティーユ】開発に立ち会った人物は？」という質問。

これはHRの《武人兄ちゃん》が自分の身体を検査してもらい、擬似的な技術を発明させたと聞かされていた。

ところが、未衣子は違う答えを言った。

「世界中の著名な研究者達を集めて、アイデアを出し合った。」と答えただ。

他には、遭遇した【宇宙犯罪者】の名前や、俺達の最大の敵勢力を未衣子に言ってもらった。

勉強していた妹は、スラスラと答えた。

クーランの名前すら、きちんと言ってるのに…。

「本当に知らないのかよ？」

「だから、知らないって言ってるじゃない。」

口論の時を引きずるように、未衣子は俺への対応が強かった。

「《武人兄ちゃん》だけ、覚えていないのか…。」

うーんと兄貴は悩んでいた。

右手の親指を顎に当てて考えた兄貴は、とりあえずの提案を出した。

「アレックスさんに聞いてみよう。」

他に方法が思いつかない俺達は、兄貴の提案に乗る事にした。

未衣子は…身体に異常は感じないよ、って首を傾げていた。

そして、今に至る。

アレックスさんは検査の一環で、妹の見る夢を調べようとした。

それが、未衣子が今綴っているノートだった。

地球に降り、もう2週間が経った頃だ。

【パスティーユ】のパイロット期間は、延長しても3ヵ月が限界で。

クーランも倒したし、現時点では新勢力の反応はなかった。

アレックスさんを通じて敵を察知しているのか何度も兄貴が聞いていたが、彼は首を横に振るだけ。

だから、本来なら俺達は契約切れで家に帰ってもいいんだ。

未衣子の件で、すぐに帰宅できなかった。

アレックスさんは「未衣子の脳から《武人兄ちゃん》の記憶が抜け落ちている。」状態だと説明した。

説明不要かもしれないがとまこぼしていた。

言われてみればそうだろうな。

俺達家族や「ラストコア」の人達、過去の敵勢力まで、全部覚えているのに。

ある特定の人物を忘れるのは記憶喪失になるのか…？

俺達は不思議に思っていた。

「このまま手続きを済ませて帰宅も可能だが…個人的には彼女を分析して結果を取らせたい。兄弟である君達に滞在だけでもしてもらいたいが…。」

アレックスさんからのお願いだ。俺達は互いの顔を見合わせた。

これからどうするのか、話し合いを始めたい気分になった。

アレックスさんは察したのか、滞在への助け舟を出した。

「俺からの頼みだ。君達の家族に連絡するし、学業の面倒にも対応する。志願兵は訓練に取り掛かるが…自由に参加してもいいぞ。」

俺達の、妹以外の悩みを取り払うつもりだ。

原因不明なままモヤモヤするのはしんどいから、俺達は滞在を引き受けた。

「お願いします。未衣子の側には、なるべく離れないよう心がけます。」

「身体に異常はないから、基地内は迷惑行為以外は自由にさせていいぞ。退屈するだろうからな。ただ、夢をノートに綴るだけは欠かさんように。」

アレックスさんの1つだけ提示した守りごとに、俺達はわかりましたと答えた。

ノートはアレックスさんで夢の中身を保管した後、兄貴に返された。

これ以上は用事がないので、アレックスさんがいた医務室を出た。

《転送装置》の時計は《12:00》を表示する前だった。

ランチ食べようと思った。

★★★

「あ、和希君と勇希君ね？」

食堂でランチのメニューを眺めていると、後ろからサレンさんに声をかけられた。隣にリュート王子もいた。

「今からランチなの？」

「そうですが…。」

「なら席を広く取るから、一緒に食べましょ？」

サレンさんは王子に一言言って、席の方へ向かった。

男3人だけで食堂のランチを選んで、出来上がりを待っていた。

「未衣子はどうしたのだ？」

「彼女にも連絡は取りましたが…勉強が落ち着いてから行くと。」

「いくら健康体だったとはいえ、根を詰め込みすぎると身体に毒だぞ。」

「俺も…肝に銘じておきます。」

兄貴が王子と会話していた。

俺も会話に加わろうと、自分から話を切り出した。

「王子達は何で今もいるんだ？みんな帰ってるのによ。」

「君達の異変を、アレックスから聞いたのよな…。」

「変わってるのは…未衣子だけなんだけど。」

「家族に不調があれば気遣うのは当たり前ではないのか？」

王子がそう言った。

俺はそうだな…と王子の発言に納得していた。

「私の場合は他にもあるのだが…。未衣子の今の異常性に、我々他星人側から推測できる根拠はないかと尋ねられてな。私とサレン、同じく長期滞在する同朋達と情報共有と交換を行ったのだ。」

「俺達がアレックスさんと相談している時にですか？」

兄貴が言った。兄貴としては、俺達の対応と同時進行で王子達と掛け合ったんだなあと、想像したんだろうな。

そう考えると、アレックスさん大変だと心配してしまう。

「私は一般的な素養、サレンは技術士官なのよな…。限られた人員で専門的な情報を入手する事になり、断片的ではあるが…。」

王子は言葉に詰まっていた、ように見えた。

次に話そうとした内容に、マズい事でも入ってんのかな？と俺も兄貴も思った。

困惑気味の王子だけど、続きの内容は話してくれた。

「些末な事柄でも触れたら申し訳ないのよな…。和希、勇希。君達の両親はどのような人物なのだ？」

「え…。」

俺は戸惑ってしまった。

ここでいきなり、俺達の家族について触れてきたから。

「祖父母と一緒に暮らしているって…。」

「ああ、そう言えばゆっくり話す機会がありませんでしたね。」

動揺する俺の隣で、兄貴が代わりに言った。

連戦続きで話してないか、と振り返って思った。

「勇希が言ったように、俺達は現在祖父母と暮らしてます。父は健在ですが、単身赴任のような形で仕事してまして…実家には中々帰りません。」

「母君は？」

母君…お母さんの事か？

何で王子が深く聞いてくるんだろうと、俺は混乱していた。

兄貴も、ああ…と頭を掻きながら説明を続けた。

「俺が10歳の時に、病気で…」

「この世にはいないと。」

「そうです。」

兄貴の軽い説明で、王子はうむ、と考え込んでいた。

だけど王子からの質問は、ここで終わらなかった。

質問じゃなくて、頼み事だった。

「母君の写真など…記録保存されている媒体は所持していないか？」

「媒体？アルバムみたいな？」

「…家に探せばあるかもしれませんが…もう7年も前で俺も顔をはっきり覚えていなくて。」

地球では写真という紙媒体がまだ主流なので、丁寧に保管していないと…。」

「…わかった、この話はなかった事にしてくれ。」

王子はカウンターで注文したランチを受け取った。

「サレンがもうすぐ来る。私は先に席についておく。」

私達も今は自由な身だ。後からゆっくり雑談でしよう。」

王子はランチを席まで運んでいった。

サレンさんの分も出来ていて、後は彼女が取りに来るだけだった。

「俺達も何か頼もうか。」

兄貴が言ったので、俺もランチを選んで食べていた。

★★★

未衣子の付き添いで、俺や兄貴も別の部屋で寝泊まりしていた。

訓練自体が自由参加でも、体調のリズムは整えておかないと、健康体を保てない指摘されて。

パイロット期間中と同様に規則正しい生活を送っている。

就寝時間も、毎日決められた時間に設定していた。

俺は元々朝型だから、目を瞑って寝息を立てるのは早かった。

清潔なベッドの中で、俺はぐっすりと眠った。

と思っていたのに。俺は…起きていた。

起きていて…感覚がおかしいなあ、と気がついた。

あるはずのベッド一式が消えていて、寝巻き姿の俺は宙に浮いたままだ。

しかも…足場らしき地面や、頭上の天井すら存在しない、謎の明るい空間。

「あれ？何だここ…。」

「勇希！」

兄貴の声が聞こえた。

後ろを向くと、寝巻き姿の兄貴がふわりと飛んできた。

兄貴も浮いていたから、俺の肩に手を置いた。

明るだけの空間では、触れる物体は俺達のみ。

感覚がおかしくなって、気分が悪くなっていく。

表情が一変するまでじゃないから、普段の俺を保てていた。

「よかった…。俺1人だけ彷徨ったのかと思えば…。」

「奇遇だぜ。俺もひとりぼっちで迷ってんのかビビってしまったし。」

安心、安全な空間にいと決まった訳じゃない。

兄貴だったとしても、側にいてくれるだけで気分が少し良くなった。

男2人、浮いた状態で固まっていると。

「君達も閉じ込められたのか!？」

焦りが丸見えの、迫力がある男の声が聞こえた。

何で男ばかり増えるんだよ…と呆れていたら、これまた[ラストコア]内で
見知った人物だった。

リュート王子とサレンさん。2人が俺達を見つけた。

サレンさんは女性だから、男だらけの集団になるのは避けられた。

だからって、俺達は安心できる状況に立てた訳ではない。

明るいだけの空間に、4人が彷徨っているだけ。

まずは脱出を考えないと、俺達は一生このままかもしれない。

「少し周辺を調べましょう。何か手掛かりでも見つけないと。」

「そうですね。」

サレンさんの提案に全員が一致して、移動を開始しようと決めた。

そこに、制止の声が流れてきた。

『待ちや。探索しても、ここに出口はあらへんよ。』

特徴的な方言で話す、男の声だった。

[ラストコア]に来てから、いや公園での襲撃事件の時から…何度も耳にした
男の声。

「武人、兄ちゃん？」

『そうや。ま、何度も会ってたらすぐにわかるか。』

ただでさえ明るい空間なのに、眩しい光を放った。

咄嗟の反応で、俺達は腕で両目を守った。失明を防ぐために。

光が放たれてから、少しだけ時間が経った頃。

『もう大丈夫や。目は痛くなれへんで。』

武人兄ちゃんがそう言ったから、俺達は光が消えたんだと解釈した。だから、腕を下ろした。

下ろしてから最初に見たものは、身体の線がぼかされている、普段着の武人兄ちゃんの姿だった。

「え、何だよ…それ。」

俺達は武人兄ちゃんの今曝け出している姿を見て、絶句した。

輪郭がぼやけているだけでなく、足の下が…。

『ああ、これか？まあ色々やらかしてもうてな…一部しか出されへんかったんや。』

「ヘラヘラしている場合ではないだろう！今どこにいるのだお前は！」

王子が怒りながら武人兄ちゃんに向けて言った。

兄ちゃん的笑みが消えた。

どこか哀しげな表情で、俺達を見つめていた。

『もう居らんよ、ここには。』「何…？」

『探しても無駄やって、同郷の人に言うといてな、王子。』

武人兄ちゃんは王子に搜索を止める事を促した。

でも、王子を含め、兄ちゃん以外の全員が納得していない。

『ここにはいない』とは、どういう状況なのか…。

何を意味するのかはすぐにわかる。

それを否定する自分達の意識があった。

状況を理解できるのに、理解を拒みたい自分達がいた。

懸命に、俺達は説得を試みた。

無駄な行為だと気づいていても、兄ちゃんには戻ってきてほしいから。

俺は、彼をずっと慕っていた妹の名前を出した。

「未衣子が、未衣子がお前の記憶を失くしているんだよ！クーランとの戦闘後まで、はっきりと覚えていたのに！せめて妹だけでも、顔を合わせてやれよ！」

ぼやけた姿の武人兄ちゃんは、目を閉じた。

『…そうか。遂に《夢》が醒めたんやな。』

「…は？」

「どういう意味ですか？」

兄ちゃんの意味不明な発言に、俺と兄貴は困惑した。

目を開いた兄ちゃんは、視線を王子とサレンさんにずらした。

『王子とサレンちゃんなら、症状をわかるやる？』

「症状…？」

「未衣子は健康だって言ってたぜ！ありえねえよ！」

アレックスさんの検査でも報告は聞いているんだ。

未衣子は病気じゃない、と信じていたのに。

王子とサレンさんの反論がない。

何か事情を知っているような素振りを見せた。

「…彼女達の母親の、特定はできませんでした。」

お母さん？何で俺達のお母さんが出てくるんだよ？

俺には理解できなかった。

代わりに兄貴がもしやと、推測した事を言った。

「俺達に家族構成を聞いてきたのは…所謂未衣子の《症状》と関係があるので

すか？」

兄貴の問いに対して口を開いたのは、王子ではなく武人兄ちゃんだった。

『俺も秘密裏で白井家の家族構成を調べたんやけど。まあ、俺もびっくりしたわ。俺と未衣子達の出会いが、必然的だったと思い知らされたからな。』

「何言ってるんだよ！俺達が最初に会ったのは、公園の襲撃事件だから偶然だろ！」

俺は反論した。武人兄ちゃんがおかしな発言をしたからだ。

『10年前。[天海山ユートピア]の旧地で起きた襲撃事件。逃げ惑う人々の写真や映像から、小さい子供を抱えた母親の姿があった。』

「証拠が、存在したのか！」

王子が驚いた。家族構成を調査していた彼らにとっては、解決の糸口を発見したような事を言われたからだ。

俺でも驚くよ。

あまり機械に詳しくない俺でも、10年前はカメラの性能が良くなって、写真も映像も粗く仕上がる傾向が強かった時代。

それらを保管していた事にびっくりしているが、特定までされるなんて…。

『わかりやすい髪の色やから、特定しやすかった。ピンク色の女の子と赤髪の女性は目立ちやすい。』

ピンク色の女の子。

俺達の知っている中で存在するのは、未衣子しかない。

10年前だったら未衣子はまだ3歳で、判断力は中学生の今よりかなり劣る。

当然、誰か大人が側にいないと危険に巻き込まれる。

3歳の子供にとって、身近な大人は両親等の家族だ。

未衣子も、大人についていこう。

未衣子は赤髪の女性についていた。

武人兄ちゃんが観た10年前の映像では、女性がずっと未衣子を抱えていた。明るいだけの何もない空間では、10年前の襲撃事件の映像も写真も確認できない。

でも、確信はあった。10年前、俺は4歳で、兄貴は7歳。

自分に降りかかる怖い過去は記憶に残る。

「俺、実はたまたまフラッシュバックするんだ…。爆発する遊園地から必死に逃げていた自分を…思い出して。」

「そうだろうね…。俺も家族総出の遊園地は覚えていた。楽しさも災いもはっきりと。

お婆ちゃんが表情を凶変するから、俺は振り返らなっただけ。ですが…俺達の母親に何の関係が…？」

ぼやけた姿の武人兄ちゃんは、ニヤリと笑った。

遂に未衣子が一生抱えてきた《同じ夢しか見れない現象》の謎を、兄ちゃんが語った。

『君らの母親はな、実は火星人やった。クーランが姉妹で捕らえて、過酷な躰を受けていた。…俺にあてがうつもりやったんやろう。片方だけ直接会ったし。』

「じゃあ、もう片方が地球へ逃亡したんですね？」

『俺に会った女はすぐ息絶えたからなあ…。』

彼女らはHRではなく、ただの火星人。俺らに抗う力は持ってない。だから片方を逃したんやろうな、姉妹同士計画を立てて。』

まだ《夢》の仕組みは語られていないが、俺と兄貴は驚きで喋れなかった。

『彼女らは特殊能力を持っていた。眠っている時に共感・共鳴させる《夢》を見させる能力を。それが未衣子に遺伝したんやろうな。』

「ちょっと待ってください、何で未衣子だけ受け継がれたんですか？」

『その能力は同性同士でしか育まれない、と検証結果も聞かされてな。』

武人兄ちゃんが語った俺達の母親像は、衝撃の連続ばかりだ。

兄貴は質問ができる程度には落ち着いていたけど、俺はずっと動揺し続けた。

『それで、俺が消えた事で…未衣子から俺の《記憶》が飛んだんや。あの姉妹が共有したかった《夢》が俺やから。俺を失って存在を忘れるんや。』

「では…未衣子が今の空間に存在しないのは…」

『王子の推測通り、彼女は俺の《記憶》を忘れた。だからここまで会いに来れないんや。』

王子の質問に俺と兄貴は気づいて、妹を探した。

左右と前後ろをキョロキョロ見渡した程度だったが。

『でもな、もういいんとちゃうか？』

「え…。」

俺と兄貴も、王子もサレンさんも、武人兄ちゃんに視線を向けた。

『もういいんや、俺を思い出さなくても。むしろ、俺の事を忘れてくれた方が幸せやろ。』

「何を…言ってるのだ貴様！」

投げやり発言と捉えたのか、王子が兄ちゃんに突っかった。

俺達の代弁のつもりだろう。

「今までも似た素振りをしていたが、意気消沈のつもりか！ここまで気遣う者がいるのだぞ！私にそう言ったではないか！」

『俺も戦い過ぎて限界が来てたんや。弱気になるのは無理ないやろ。』

「私との対決はどうなる！先にいかれては、私は同朋達の無念を果たせないだろう！」

『お前の使命は、散らばった同朋を探す事や。俺を倒しても無念は晴らせへ

ん。それにお前は普通の異星人で、王子や。慕う民の為にも、命を大事にしいや。』

王子は突っかかるのをやめ、足場のない筈の空間で、泣き崩れた。

サレンさんが側に寄って、背中に軽い温もりを与えた。

王子が先に泣き崩れたけど、俺も兄貴も、泣きたい気持ちでいっぱいだった。

我慢が出来ずに、思いの丈をぶつけた。

「…天国に行きそうな奴が、簡単に命を大切にしろとか言うなよ…。」

『天国やなくて、地獄やろうなあ。俺は星の生命も民の人生を壊してんねんから、罪を背負わなあかんし。』

怒りの表情は、すでに武人兄ちゃんに向けていた。

「お前のその言い方、腹が立つんだよ！いちいち過去を気にしてんじゃねえ！

俺は、俺達兄妹は…あの襲撃事件以降しか、兄ちゃんを知らねえんだ！戦わなくてもいいから…未衣子の…側に、帰って来てくれよ！」

俺の怒りは悲しみに変わった。

言葉の最後で俺は泣き出した。

王子とサレンさん同様、俺も兄貴に支えてもらった。

兄ちゃんへの発言は、兄貴が代弁した。

「お願いします。土星圏の人達が未だに貴方の捜索をしています。1度でもいいので、妹に会ってください。俺からも頼みます。」

『さっきも言うたで、会わん方が幸せやと。』

ここから誰も反論せず、武人兄ちゃんが淡々と話していた。

『笑顔が素敵な子供は、いや大人でも…戦場に行かん方がいい。俺も頭ではわかった。せやけど、あの時は時間も迫ってた。今年襲撃があるやろうと予想していたから。ほんまに、君ら兄妹を巻き込んでしまつてすまない。』

兄ちゃんと向かい合った俺達の口は、閉ざしていた。

『末衣子は俺の《記憶》にずっと縛られていた。せやから俺がいなくなる事で、彼女は俺を忘れる。忌むしい《記憶》をなくして、平和な生活を送ってやる方が、彼女は幸せになる。』

…だから、兄ちゃん達が妹を助けてやってな…。

最後にそれだけ言うと、足の無かった武人兄ちゃんの下半身から、光の泡が上へ舞い上がっていった。

泡はみるみると増えていき、兄ちゃんが蒸発するように、消えていく。

手を伸ばしたくても届かないから、手を出さなかった。

その代わり、俺は大声で叫んだんだ。

「バカヤロオオオ！」って。

★★★

眠気は一瞬で吹き飛んだ。ハッ、と声を出して目を開いたから。

数秒で[ラストコア]の、俺にあてがわれた個室だと分かった。

非常灯以外は電気を消していて、室内は暗かった。

あの明るいだけの空間は…夢だったんだな。

「夢か…。だったら兄ちゃんが生きてる可能性も…。」

手の甲にちょっぴり濡れた感覚がした。

左手だけ、顔に近づけて正体を確かめた。

水滴と同じ透明の雫が落ちていた。

俺は寝ていた時の汗か、夢で流した涙かの区別がついていなかった。

起きてすぐに頭が回らない。

そこで、モノに判断してもらった。ちょうど壁にモニターがあった。

モニターは普段は海底の景色を眺める窓代わりか、作業の為のパソコン代わり

に使われる。

今は睡眠中だったから、電源を落としている。

真っ暗だがモニターの液晶は鏡代わりになる。

俺は今、自分の顔がどんな状態か確認した。

涙がこぼれ落ちた、しんみりとした控えめの泣き顔じゃなかった。

俺の泣き顔は酷かった。

起き上がったから手の甲に落ちただけで、ベッドの中でグズグズ泣いていたのがまるわかりだった。

目下に涙が溢れんばかりに溜まっているし、顔も赤みを帯びていた。

俺はさっきまで見ていた夢に没頭し、儚さと切なさを感じて、泣いていたんだと気付かされた。

「ひょっとして、あれは正夢なのかよ…。」

モニターと顔を合わせていた俺の声だ。

俺以外誰も居ない個室だから、問いかけに応じてくれる人はいなかった。

当然ながら、はっきりとした答えは明確にされなかった。

モニターを見つめるのはやめた。

俯いて、腕を伏せて、俺は泣き続けた。

★★★

起床時刻になり、睡眠不足でも起きざるをえなかった俺は、個室を出て朝食を摂ろうとした。

先に兄貴や未衣子は食べてるだろうと思い、直接食堂に向かおうとすると。

隣の個室の扉が開いた。

兄貴が利用している部屋だから、もちろん出てきたのは兄貴だ。

兄貴の顔も、げっそりしてた。

栄養失調等の衰弱化…まではいかないけど、兄貴も寝不足だって事は一目でわかった。兄貴も顔が赤い。

「兄貴、」

「ああ…お前の泣き声聞いたさ。俺も夢の影響からか、涙が流れていた。」

「兄貴も…まさか。」

「王子とサレンさんも同じ夢を見ていたかもな…。勇希、気分はどうだ？」

「寝不足だけだよ、起きないといけねえんだろ？」

「俺達は一応、今は自由の身だ。未衣子に会いにいった、アレックスさんにノートを渡したら、ゆっくり休ませてもらおう。」

「そうする…。」

普段より声を低くして答えたが、ゆっくり休みたいのは本心だった。

しばらくは、もう何もしたくない。

とりあえずご飯と決まり事だけは守って、あとは兄貴の言葉に甘えてもらおう。今日の予定はそれだけでいい。

まずは食堂へ向かって、歩いていった。

急な用事のない俺達は、慌てずにゆっくりと進んだ。

夢の内容を引きずりすぎて、俺と兄貴の間に、会話が弾む事はなかった。

★★★

食堂に未衣子の姿があった。

妹は朝食のセットを食べ終える頃合だった。

最後の1口を食べ切って、トレーごと食器を戻そうと妹が立ち上がった時、彼女は俺達を見つけた。

未衣子は食器を運んだまま、俺達の前に近づいた。

「おはよう。食器を戻したら、ノートを渡すね。」

俺達と違って、未衣子はすっきりしていて、元気だった。

ぐっすりと眠れたようだ。

スタスタと食器を戻し、再び俺達の前にやってきた。

ノートを渡す為にだ。

「はい、これ。昨日見た夢を綴ったよ。」

未衣子は安物のノートを兄貴に渡した。

兄貴も断る事なく、黙って受け取った。

ここで未衣子はん？と不思議そうに俺達を見てきた。

まじまじと、悲壮な表情の俺達を眺めていた。

「どうしたの兄ちゃん達。暗いし、疲れた顔して。なんか悪い夢でも見たの？」

何で。何でそこは気がついているのに。

どうして、肝心の《記憶》は思い出せないんだよ！

俺は未衣子に手を出しそうなくらいには、怒りが込み上げていた。

隣で冷静さを失ってない兄貴が肩に手を置いてなかったら、俺は妹を叩いていたかもしれない。

「未衣子、今日はどうするんだ？」

「これから勉強するわ。学校の勉強遅れてるから、少しは自分でカバーしていかないと。」

★★★

未衣子とは食堂で別れて、静かに朝食を摂った後は、アレックスさんの研究室

へ向かった。

道中で王子とサレンさんに出くわした。2人の表情は、曇っていた。

声掛け自体は普通にこなしていた。

会話を続けようとして、兄貴が王子達に尋ねた一言。

「悪夢を、見たんですね？」

俯きがちだった王子達が、顔を上げた。

「何故、そう思う。」

「俺達も昨夜、悪夢を見ましたから。」

理由付けには納得いかない回答だけど、王子達は深く追及しなかった。

「あれは…予言なのか。夢から醒めたというのに、涙が既にこぼれ落ちていたのだ。紛れもしない現実だろうか…？」

王子の弱気な問いかけに、俺達もサレンさんは肯定も否定もしなかった。会話が思うように弾まなくて、ぎこちない空気が流れた。

王子達はこれ以上、[ラストコア]に滞在するのをやめて、宇宙へ戻る決心をした。

詳細は言わなかったけど、多分王子達も同じ武人兄ちゃんの《夢》を見たんだろう。

待ってくれ、と留まらせる必要はなかった。

もう存在しないような奴を待ち続けても、疲労が溜まるだけだ。

王子達が旅立つ日、俺達は統制制御室のモニターから見送った。

彼らの記憶は残っているから、未衣子もその場にいた。

「仲間が見つかるといいね。」

未衣子の言葉だった。

★★★

「公園の紅葉が綺麗ねえ。」

俺達が愛嬌市の家に帰れたのは、11月半ばになった。

結局、武人兄ちゃんの安否は不明だった。

捜索も困難だとして、土星圏の人達も切り上げた、アレックスさんから報告があった。

これ以上「ラストコア」にしがみ付く用事は、俺達子供にはなかった。

帰宅の為の整理に取り掛かり、愛嬌市内に戻った。

荷物を運ぶ用のトラックも同時についてきた。

《転送装置》の腕時計やペンダントは、記念にプレゼントすると言ってくれた。

帰宅して数日後、俺達は日程を作って、3人で公園に行った。

半年以上前に襲撃事件の場となった、吉川公園。

俺達兄妹と武人兄ちゃんの、初対面の場所だった。

武人兄ちゃんは自分の消滅で未衣子の記憶から飛んでしまうと、《夢》で言った。

でも、希望を捨てたくなかった。

ドラマでもアニメでもある、記憶喪失の時はその人物の馴染みのある場所へ行くシーン。

小さな事で蘇れば、と願っていた。

だからといって、未衣子が《記憶》を思い出す素振りはなかった。

思い出す前の頭痛を感じる行為でさえ、妹は示さなかった。

ただ、オレンジと茶色という、秋の典型的な景色に見惚れているだけ。

くるくる踊っている未衣子を遠目にして、俺達はひたすら公園の散歩をしていた。

「変わってない、よな。」

「変わってない、ね。」

俺と兄貴が漏らした感想だった。

いつも以上にはしゃいでる未衣子をよそに、俺は兄貴に《夢》にまつわる話を始めた。

「兄貴。」「なんだい？」

「俺達の母さんが火星人って事、父さんやお爺ちゃんやお婆ちゃんは知ってるのか？」

「知らないだろうね…。赤髪とは言っても、茶色に近い色合いなら外国の人と変わらなそうだし。」

「だよなあ。ま、俺達お婆ちゃんに育てられたもんだし。」

「知らない方が幸せだったのかもね。母さんの正体の話は。」

「母さんだけじゃねえ。未衣子もだよ。」

俺達は前へ視線を向けた。未衣子が舞い上がっている先を辿っていくと、敷地内のお花畑に着いた。

寒さが増していく秋の終わりは、咲く花の種類も少なかった。

俺達の心の虚しさを、表しているようだった。

だけど、1本の大木の枝から、薄いピンク色の花が咲かれていた。

桜だった。

笑顔の未衣子の上を飾っていた。

知識の乏しい俺でも、冬の突入前に桜が咲くのはおかしいと思ってた。

兄貴が常識を覆した。

「『十月桜』という花があるんだ。稀にこの近所で見るとあるけども、この公園でも咲いていたんだな…。」

へえ、と俺は小さく言った。

兄貴の知識が別に地味と思ったわけじゃない。

桜の木の下を嬉しそうにぐるぐる回る未衣子とは逆に、俺と兄貴は気持ちが沈んでいたから。

ただ、兄貴の方をチラッと見ると、安堵したかのように、少しだけ笑みの表情が出ていた。

「…幸せなら、それでいいのかもしれないな。」

兄貴は未衣子の喜ぶ姿を見て、これを口にしたんだろう。

俺は兄貴を否定せずに、同調した。

「そうだよな。俺も、未衣子が納得するなら、それでいいよ。」

武人兄ちゃんは俺達が未衣子を見守ってくれと頼んだ。

だったら、彼女の幸福を壊さないように、俺達が守ってやろう。

もう二度と、未衣子を泣かせないように。

エピローグ 再出発の日

温かいカフェラテは、寒い冬の時期には美味しい。

自分の家の部屋で勉強している時に私は思った。

11月半ばに家に帰れるようになってから、私達兄妹は【ラストコア】を訪れていない。

10日に1回程、アレックスさんやジェームスさんからインターネット経由で連絡が来るぐらいだ。

現在の【ラストコア】の運営は、うまくいってるらしい。

平和な今の時期に被害の後処理の対応に追われて大変らしくて。

クーランとの決戦でお世話になった志願兵の皆さんの実力も、メキメキとつけてきたみたいで。

【バステューク】に代わる超強力なロボの開発にも着手したらしかった。

リュート王子達、土星圏の人達は一度だけ連絡があったらしい。

私達にはアレックスさんを通じて、彼らの現在を知った。

どうやら、王子の産まれの故郷の人に会えるチャンスが訪れたらしく、再開する前に地球に挨拶に来たのである。

本当に、喜ばしい出来事だよ。

家に帰ってきてすぐに、吉川公園に行ったんだ。

何でかという、昔を振り返る為だったらしい。

まあ…直近で襲撃事件はあったけどさ…振り返ってしみじみとしたいのかなあ…。

季節外れの桜が綺麗だったから良かったけど。

それ以降、私達の行動はバラバラだった。

和希兄ちゃんが送ったメール、同じ部活の同級生の女の人宛なんだけど。

返信が届いていたんだ。

絵の上手な女の人で、その人に兄ちゃんの描いた絵を褒めてもらったって。

感情を露わにしない和希兄ちゃんだけど、その時はほっこりした笑顔だったよ。

勇気兄ちゃんが久しぶりに空手教室に顔を出した時、同じ稽古仲間の子達が兄ちゃんに群がったって。

特に親しくしていた友達には、泣きつかれたらしい。

服が濡れちゃって、兄ちゃんは道着姿で帰ってきたよ。

もう、洗濯物を増やしちゃって…仕方がないけど。

帰宅してからの私の変化と言えば…[ラストコア]に出入りする事がなくなったぐらいかな。

家事と勉強と読書の時間を、増やしたから。

帰ってきたからと言って、急に友達ができるようにならない。

だから、私はいつも通り生活しているだけ。

この日も午前中に家事の手伝いを済ませた。

お爺ちゃんとお婆ちゃんが1階の喫茶店を切り盛りしている間に、掃除と洗濯をやった。

昼食も残り物の食材で調理して食べた。

勉強もキリの良いところで終わらせて…趣味の読書に没頭する。

読書の合間にホットカフェラテをちょっとずつ飲んでいた。

読書のジャンルは普通の小説だった。

現代の日常生活の風景を描いた、ほのぼのとした小説。

内容が入りやすいので、ページをめくる速度も早かった。

時刻は午後4時頃だろうか。

時計の短針は『4』を指していたから。

1冊の小説の本も読み終えてしまった。

あっさりと読めたからかな。

本を閉じて、棚に仕舞おう。

そう思って、立ち上がった時だった。

木製の学習机に、透明の水滴が1つ、2つ落ちていた。

カフェラテのカップは机の奥に置いていたから、手前に水滴が落ちる事なんてない。

それに、自分の顔の頬に、何か冷たい物が感じられたんだ。

鏡はないので、近くの窓で自分の今の顔を確かめた。

机の上の水滴。頬に冷たい物の感触。

正体は…涙だった。

小学生の時にいじめられて以来、私は涙を流せなくなっていた。

悲しい表情を、作ることはできても。

だから、涙が溢れた時は、驚きで声を発せなかった。

今日の出来事を振り返った。

掃除と洗濯でヘマなんてした記憶はないし、勉強もハードな問題には挑戦していない。

先程の小説の中身だって、涙を誘うような感動シーンの描写は見当たらなかった。

なんでだろう？心当たりなんて、全くない。

でも…訳の分からない虚しさだけは、感じている。

兄達も祖父母も父もいるし、寂しくはないんだけど…。

…そうか。これは誰かがくれた恵みなんだ。

ずっと涙が枯れていた私を後押しするように。

もう一度、普通に暮らしていけるように…。

これは私への励ましなんだ。

私が強くなれるように。

ありがとう。知らない人。

私はもう、自由に生きていけるよ。

本を棚に戻す前に、私は涙を袖で拭った。

本を戻してから、私はカフェラテのカップを持って、部屋を出た。

白井未衣子とロボットの日常《共闘》

おしまい。

☆『ミコロバ』シリーズ一覧☆

○《共闘》ルート ※表記がない分です。

[1・正夢の日]、[2・復讐の日]、[3・糾弾の日]、
[4・暴挙の日]、[5・酔狂の日]

[6・暴露の日]、[7・告白の日]、[8・業火の日]、
[9・協議の日]、[10・誓約の日]

[11・包囲の日]、[12・潜入の日]、[13・奪還の日]、
[14・忘却の日]、[エピローグ・再出発の日]

公園で出会った《武人兄ちゃん》と一緒に、[宇宙犯罪者]のHRや《武人兄ちゃん》の『育ての親』であるクーランに挑むルートです。

《武人兄ちゃん》の過去や、未衣子の兄である和希・勇希の話も含んでいます。

☆『ミコロボ』シリーズ一覧☆

○《反転》ルート

*前巻

[1・捕囚の日]、[2・更改の日]、[3・降下の日]、
[4・翻弄の日]、[5・遭遇の日]、[6・招待の日]
[7・供述の日]、[8・力説の日]、[9・立証の日]、
[10・切替の日]

*後巻

[11・入城の日]、[12・破滅の日]、
[13・集結の日]、[14・解放の日]、[15・譲渡の日]、
[16・対峙の日]、[17・絶縁の日]、[エピローグ・再認識の日]

《武人兄ちゃん》と袂を分つルートになります。

《武人兄ちゃん》の代わりに、《マルロ》が味方になります（言い切った）。
未衣子のトラウマ話も出てきます。『7』だけは人を選びそうな内容なので注意書きがあります。

※先に《共闘》ルートの『1』『2』を読む事をおすすめします。

☆『ミコロボ』シリーズ一覧☆

○短編

『1・調査の日』、『2・奮起の日』、『3・観察の日』、
『4・報告の日』、『5・改名の日』、『6・方言の日』、
『7・説明の日』、『8・救助の日』、『9・同居の日』、
『10・触発の日』

『11・試練の日』、『12・慰留の日』、『13・挑戦の日』、
『14・動悸の日』、『15・天翔の日』、『16・逃走の日』、
『17・伝道の日』、『18・自責の日』、『19・欲望の日』、
『20・成長の日』

8割方、1本で完結するタイプの短編です。

『8』～『9』（白井3兄妹の両親編）、『11』～『15』（華南編）のみ続き物となっております。

大体、本編の補完的な内容になっています。

おくづけ

タイトル 白井未衣子とロボットの日常《共闘》

作者 カレーポーク

メアド ton1200tekisuki★[gmail.com](mailto:ton1200tekisuki@gmail.com)

(★→@に変えてください。)

個人サイト 『お肉のうまい定食屋』

(URL : <https://plus.fm-p.jp/u/meat5rice>)

note ID→curry_pork

pixiv users→87815976

(pixivのURLの後ろに入れるか、『カレーポーク』でユーザー検索してください。)

発行日 2024年10月31日

制作先 製本直送.COM様